

静岡県 富士市

# 天間沢遺跡

D・E・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P 地区  
(4・5・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16 地区)

2024 年 3 月

富士市教育委員会



# 例 言

- 1 本書は、静岡県富士市天間地先において実施した天間沢遺跡 D・E・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P 地区（4・5・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16 地区）の発掘調査に関わる報告である。
- 2 発掘調査は、富士市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査担当者等は各地区の調査経緯にて掲載している。
- 4 整理作業は、令和 4 年（2022 年）11 月に開始し、本書の刊行をもって終了した。
- 5 整理作業は、佐藤祐樹（富士市教育委員会文化財課主幹）・小島利史・笹原芳郎・若林美希（同文化財調査員）が担当した。
- 6 本書の編集は笹原、若林が担当し、調査経緯・遺構については若林、遺物等については笹原が執筆した。
- 7 現地調査における実測図および記録、写真撮影等は各調査担当者による。
- 8 遺物の実測・トレースは、笹原、金田純子、小田貴子、伊藤純子（同文化財整理員）が行い、拓本を井上尚子（同文化財整理員）、渡辺美規子（事務補助）が行った。
- 9 整理作業における遺物写真は、佐藤が撮影した。
- 10 土器の展開写真は、VisualSFM（Changchang Wu）、MeshLab（Paolo Cignoni, Visual Computing Lab）を使用し、笹原が作成した。
- 11 奈良・平安時代以降の土器については、池谷初恵（富士市文化財保護審議会委員）氏のご教示を得た。
- 12 本書で報告した調査に関わる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会で保管している。今後、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）に移管する予定である。
- 13 本書の作成にあたり、次の方々にご協力とご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。（敬称略、五十音順）

池谷初恵    志村 博    西野雅人

# 凡 例

1 本書で示す座標は、平面直角座標第Ⅷ系（JGD2011 / Japan Plane Rectangular CS Ⅷ EPSG:6676）を用いた国土座標、世界測地系（平成 14 年 4 月施行）を使用している。調査は、任意の座標で測量し、世界測地系に合成した。

2 挿図の縮尺は、各図に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺はすべて任意である。

3 土器の実測図では、断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。

縄文土器・弥生土器・土師器  灰釉陶器 

4 土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）のマンセル表色系表記に準拠した。

5 遺構等の略号は、竪穴建物＝SB、土坑＝SK、溝＝SD、小穴＝Pit、炉穴＝FP、埋甕＝SU、配石＝SS、トレンチ＝Tr、グリッド＝Gr、水準高＝L、仮水準点＝KBM とした。

6 遺構・遺物ともに、法量の（ ）は残存値、〔 〕は推定値である。

7 縄文土器は以下のように分類した。

## I 群土器

縄文時代早期の土器を I 群とした。時期としては早期後葉の条痕文系土器群のみである。

I 群 A 類は、胎土に繊維および石英や青灰色の砂粒を多く含み、黒灰褐色を呈す。その多くは内面に条痕を施し、口唇近くの口縁部に 1 段、さらに弱く 2 段の段をもつ。この段部分を文様帯とし、爪形の連続刺突文で三角および斜行文を施文する。口唇の刻みと、口縁内部にも口唇に並行して連続刺突を行うものがほとんどで、波状口縁や二対の注口のような酒坏状把手をもつものがある。出土地点もほぼ Q 地区に限定される。茅山下層式並行の東海系土器であるハツ崎 I 式に比定した。

I 群 B 類は、A 類より厚めで繊維を含むが量は少なく、全体として赤みを帯び A 類に比べて明るい胎土の土器である。棒状工具による斜め刺突と、平行押引き文による直線と弧線文が施文される。この土器にはまだ型式名は付与されていないが、愛鷹山麓のいくつかの遺跡にて検出例が知られており、茅山下層式並行の土器と考えられている。

## II 群土器

縄文時代前期の土器を II 群とした。

II 群 A 類は、器壁が非常に薄く、細線を地文とする土器をあてた。木島式に比定した。



### Ⅲ群土器

縄文時代中期の土器をⅢ群とした。中期中葉から後葉まで、ほぼ連続して続いている。天間沢遺跡の主体となる時期で、特に中期後葉が量・質ともに充実している。

Ⅲ群 A-1 類は、隆帯による立体的な造形を特徴とする、勝坂式の範疇の土器をあてた。時期的には新道式から井戸尻式まで出土している。完形品は無く、把手等の部分的なものが目立つ。

Ⅲ群 A-2 類は、隆帯と条線文によって文様を構成する土器群をあてた。天間沢遺跡で最も多く出土し、その主体となる土器群である。曽利式土器に比定したが、曽利Ⅳ・Ⅴ式が大半を占める。

Ⅲ群 B-2 類は、隆帯と縄文で文様が構成される土器群を充てた。縄文が施文されていても文様構成が A-2 類にあたるものは A-2 類としている。加曽利 E 式に比定した。

Ⅲ群 C-2 類は、薄手で灰白色系の色調を持ち、撚糸文を地文に、並行沈線による弧線文と渦巻文を組み合わせた文様をもつ。咲畑式に比定した。

Ⅲ群 D-2 類は、薄手で灰白色系の色調を持ち、口縁部文様帯に隅丸長方形の楕円文を施文する。北白川 C 式に比定した。

### Ⅳ群土器

縄文時代後期の土器をⅣ群とした。Ⅲ群から断続なく続いていると考えられるが、多くは E 地区に集中している。

Ⅳ群 A-1 類は、器面全体を、並行沈線による弧線や直線で描画し、磨消縄文、あるいは並行沈線内を列点文で充填するものをあてた。称名寺式に比定した。

Ⅳ群 A-2 類は、小型巻貝の殻頂かと思われる刺突と沈線、および細かい縄文で文様を構成し、磨消縄文による帯縄文を多用して、器面を精緻な研磨で整形するものをあてた。堀之内式に比定した。

Ⅳ群 B-2 類は、やや厚めの器壁をもち、太い縄文原体を用いた付加条縄文を表面全体に施文した粗製の深鉢土器およびそれに類似する土器をあてた。

Ⅳ群 A-3 類は、磨消縄文と「の」字文で文様を描き、裏面口縁部に沈線を施文、器面を精緻な研磨で整形する土器をあてた。加曽利 B 式に比定した。

Ⅳ群 C 類は、胎土が灰白色傾向で、器厚が薄く砂粒を多く含む、西日本系と思われるものをあてた。

## 8 縄文土器の編年は、以下の文献を参考基準とした。(年代順)

戸沢充則 編 1994 『縄文時代研究事典』東京堂出版

今福利恵 ほか 1999 「2 縄文時代の編年」『山梨県史 資料編 2 原始古代 2 考古(遺構・遺物)』山梨県

縄文時代文化研究会 編 1999 『縄文時代文化研究の 100 年 -21 世紀における縄文時代文化研究の深化に向けて- 縄文時代 第 10 号』縄文時代文化研究会

小林達雄 編 2008 『総覧 縄文土器』アム・プロモーション



# 目 次

例 言

凡 例

目 次

第 1 章	天間沢遺跡の概要	1
第 2 章	天間沢遺跡 D 地区（第 4 地区）	7
第 3 章	天間沢遺跡 E 地区（第 5 地区）	9
第 4 章	天間沢遺跡 G 地区（第 7 地区）	67
第 5 章	天間沢遺跡 H 地区（第 8 地区）	73
第 6 章	天間沢遺跡 I 地区（第 9 地区）	79
第 7 章	天間沢遺跡 J 地区（第 10 地区）	81
第 8 章	天間沢遺跡 K 地区（第 11 地区）	83
第 9 章	天間沢遺跡 L 地区（第 12 地区）	123
第 10 章	天間沢遺跡 M 地区（第 13 地区）	131
第 11 章	天間沢遺跡 N 地区（第 14 地区）	135
第 12 章	天間沢遺跡 O 地区（第 15 地区）	141
第 13 章	天間沢遺跡 P 地区（第 16 地区）	145
第 14 章	総括	151

写真図版

報告書抄録



## 挿 図 目 次

### 第 1 章 天間沢遺跡の概要

第 1 図 天間沢遺跡 標準土層	1
第 2 図 天間沢遺跡 調査履歴図	2
第 3 図 天間沢遺跡 遺構分布状況図	3

### 第 2 章 天間沢遺跡 D 地区（第 4 地区）

第 4 図 D 地区 位置図	7
第 5 図 D 地区 トレンチ配置図、セクション図	7
第 6 図 D 地区 A-5Tr 平面図、セクション図、エレベーション図	8

### 第 3 章 天間沢遺跡 E 地区（第 5 地区）

#### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

第 7 図 E 地区 位置図	9
第 8 図 E 地区 確認調査トレンチおよび本調査区配置図	10

#### 第 2 節 発掘調査の成果

第 9 図 E 地区 1・2 次調査トレンチ全体図（北部）	11
第 10 図 E 地区 1・2 次調査トレンチ全体図（南部）	12
第 11 図 E 地区 1・2 次調査トレンチセクション図（1）	13
第 12 図 E 地区 1・2 次調査トレンチセクション図（2）	14
第 13 図 E 地区 1 次調査 BTr ビット群	15
第 14 図 E 地区 2 次調査 3Tr SK01	15
第 15 図 E 地区 2 次調査 2Tr SU01	16
第 16 図 E 地区 2 次調査 2Tr SU02	16
第 17 図 E 地区 本調査区（縄文時代）全体図	18
第 18 図 E 地区 本調査区（縄文時代）FP01	19
第 19 図 E 地区 本調査区（縄文時代）FP03・FP04	19
第 20 図 E 地区 本調査区（縄文時代）FP05	20
第 21 図 E 地区 本調査区（縄文時代）SU03	20
第 22 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（1）	21
第 23 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（2）	22
第 24 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（3）	23
第 25 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（4）	24
第 26 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（5）	25
第 27 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（6）	26
第 28 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（7）	27
第 29 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（8）	28
第 30 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（9）	29
第 31 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（10）	30
第 32 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（11）	31
第 33 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（12）	32
第 34 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（13）	33
第 35 図 E 地区 本調査区（縄文時代）土坑・ビット（14）	34
第 36 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（1）	35
第 37 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（2）	36
第 38 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（3）	37
第 39 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（4）	38
第 40 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（5）	39
第 41 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（6）	40
第 42 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（7）	41
第 43 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（8）	42
第 44 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（9）	43
第 45 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（10）	44
第 46 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（11）	45
第 47 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（12）	46
第 48 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（13）	47
第 49 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（14）	48

第 50 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（15）	49
第 51 図 E 地区 本調査区（古墳時代以降）全体図	50
第 52 図 E 地区 本調査区（古墳時代以降）SD02	51
第 53 図 E 地区 本調査区（古墳時代以降）SD01（西半）	52
第 54 図 E 地区 本調査区（古墳時代以降）SK02	53
第 55 図 E 地区 本調査区（古墳時代以降）SD01（東半）	53
第 56 図 E 地区 出土遺物実測図（古墳時代）	54

### 第 4 章 天間沢遺跡 G 地区（第 7 地区）

#### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

第 57 図 G 地区 位置図	67
第 58 図 G 地区 トレンチ全体図	67
第 59 図 G 地区 トレンチセクション図	68

#### 第 2 節 発掘調査の成果

第 60 図 G 地区 SS01・SU01	68
第 61 図 G 地区 出土遺物実測図（1）	69
第 62 図 G 地区 出土遺物実測図（2）	70

### 第 5 章 天間沢遺跡 H 地区（第 8 地区）

#### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

第 63 図 H 地区 位置図	73
-----------------	----

#### 第 2 節 発掘調査の成果

第 64 図 H 地区 トレンチ全体図、セクション図	74
第 65 図 H 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（1）	75
第 66 図 H 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（2）	75
第 67 図 H 地区 SB01 平面図、セクション図	76
第 68 図 H 地区 SB01 セクション図	77
第 69 図 H 地区 出土遺物実測図（古墳時代）	78

### 第 6 章 天間沢遺跡 I 地区（第 9 地区）

第 70 図 I 地区 位置図	79
第 71 図 I 地区 トレンチ配置図、セクション図	79

### 第 7 章 天間沢遺跡 J 地区（第 10 地区）

第 72 図 J 地区 位置図	81
第 73 図 J 地区 トレンチ配置図、セクション図	81

### 第 8 章 天間沢遺跡 K 地区（第 11 地区）

#### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

第 74 図 K 地区 位置図	83
-----------------	----

#### 第 2 節 発掘調査の成果

第 75 図 K 地区 出土遺物実測図（旧石器）	83
第 76 図 K 地区 調査区全体図	84
第 77 図 K 地区 SB22	85
第 78 図 K 地区 SB22 出土遺物実測図（1）	86
第 79 図 K 地区 SB22 出土遺物実測図（2）	87
第 80 図 K 地区 SB23	88
第 81 図 K 地区 SB23 炉	89
第 82 図 K 地区 SB23U1・SB23U2	89
第 83 図 K 地区 SB23 出土遺物実測図（1）	89
第 84 図 K 地区 SB23 出土遺物実測図（2）	90
第 85 図 K 地区 SB23 出土遺物実測図（3）	91
第 86 図 K 地区 SB24	92
第 87 図 K 地区 SB24 出土遺物実測図（1）	93
第 88 図 K 地区 SB24 出土遺物実測図（2）	94
第 89 図 K 地区 SB24 出土遺物実測図（3）	94
第 90 図 K 地区 SB25	96

第 91 図	K 地区	SB25 出土遺物実測図 (1)	97
第 92 図	K 地区	SB25 出土遺物実測図 (2)	98
第 93 図	K 地区	SB26	99
第 94 図	K 地区	SB26 出土遺物実測図 (1)	100
第 95 図	K 地区	SB26 出土遺物実測図 (2)	100
第 96 図	K 地区	SKA	101
第 97 図	K 地区	SKA 出土遺物実測図 (1)	102
第 98 図	K 地区	SKA 出土遺物実測図 (2)	103
第 99 図	K 地区	SKA 出土遺物実測図 (3)	103
第 100 図	K 地区	SKC	104
第 101 図	K 地区	SKC 出土遺物実測図	104
第 102 図	K 地区	SKG	104
第 103 図	K 地区	SKG 出土遺物実測図	104
第 104 図	K 地区	SKB・SKD・SKE・SKF	105
第 105 図	K 地区	出土遺物実測図 (1)	106
第 106 図	K 地区	出土遺物実測図 (2)	107
第 107 図	K 地区	出土遺物実測図 (3)	108
第 108 図	K 地区	出土遺物実測図 (4)	109
第 109 図	K 地区	出土遺物実測図 (5)	110
第 110 図	K 地区	出土遺物実測図 (6)	111
第 111 図	K 地区	出土遺物実測図 (7)	112
第 112 図	K 地区	出土遺物実測図 (8)	113

## 第 9 章 天間沢遺跡 L 地区 (第 12 地区)

### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

第 113 図	L 地区	位置図	123
---------	------	-----	-----

### 第 2 節 発掘調査の成果

第 114 図	L 地区	トレンチ配置図	124
第 115 図	L 地区	トレンチ全体図、セクション図	125
第 116 図	L 地区	SD01	126
第 117 図	L 地区	SK63	126
第 118 図	L 地区	SK64 ～ 67	127
第 119 図	L 地区	SK63 ～ 67 土層注記	128
第 120 図	L 地区	出土遺物実測図 (縄文時代) (1)	128
第 121 図	L 地区	出土遺物実測図 (縄文時代) (2)	129
第 122 図	L 地区	出土遺物実測図 (古墳時代)	129

## 第 10 章 天間沢遺跡 M 地区 (第 13 地区)

### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

第 123 図	M 地区	位置図	131
---------	------	-----	-----

### 第 2 節 発掘調査の成果

第 124 図	M 地区	トレンチ配置図	132
第 125 図	M 地区	トレンチ全体図、セクション図	133
第 126 図	M 地区	SK68 ～ 69	134

## 第 11 章 天間沢遺跡 N 地区 (第 14 地区)

### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

第 127 図	N 地区	位置図	135
---------	------	-----	-----

### 第 2 節 発掘調査の成果

第 128 図	N 地区	トレンチ配置図、セクション図	136
第 129 図	N 地区	SB01	137
第 130 図	N 地区	出土遺物 (縄文時代) (1)	138
第 131 図	N 地区	出土遺物 (縄文時代) (2)	139
第 132 図	N 地区	出土遺物 (古墳時代)	139

## 第 12 章 天間沢遺跡 O 地区 (第 15 地区)

### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

第 133 図	O 地区	位置図	141
第 134 図	O 地区	トレンチ配置図、セクション図	142
第 135 図	O 地区	セクション図	143

### 第 2 節 発掘調査の成果

第 136 図	O 地区	SK01 ～ 02	144
---------	------	-----------	-----

## 第 13 章 天間沢遺跡 P 地区 (第 16 地区)

### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

第 137 図	P 地区	位置図	145
第 138 図	P 地区	トレンチ配置図、セクション図	146

### 第 2 節 発掘調査の成果

第 139 図	P 地区	SB01	147
第 140 図	P 地区	出土遺物実測図 (縄文時代) (1)	148
第 141 図	P 地区	出土遺物実測図 (縄文時代) (2)	149
第 142 図	P 地区	出土遺物実測図 (平安時代)	149

## 第 14 章 総括

第 143 図	縄文時代中期集落全体図	152
---------	-------------	-----

## 挿 表 目 次

第 1 章 天間沢遺跡の概要	
第 1 表 天間沢遺跡調査履歴	4
第 2 章 天間沢遺跡 D 地区（第 4 地区）	
第 2 表 D 地区 遺構一覧表	8
第 3 章 天間沢遺跡 E 地区（第 5 地区）	
第 2 節 発掘調査の成果	
第 3 表 E 地区 遺構一覧表	54
第 4 表 E 地区 出土土器観察表	56
第 5 表 E 地区 出土石器観察表	66
第 4 章 天間沢遺跡 G 地区（第 7 地区）	
第 2 節 発掘調査の成果	
第 6 表 G 地区 遺構一覧表	71
第 7 表 G 地区 出土土器観察表	71
第 8 表 G 地区 出土石器観察表	71
第 5 章 天間沢遺跡 H 地区（第 8 地区）	
第 2 節 発掘調査の成果	
第 9 表 H 地区 出土土器観察表	78
第 10 表 H 地区 出土石器観察表	78
第 8 章 天間沢遺跡 K 地区（第 11 地区）	
第 2 節 発掘調査の成果	
第 11 表 K 地区 遺構一覧表	113
第 12 表 K 地区 出土土器観察表	114
第 13 表 K 地区 出土石器観察表	121
第 9 章 天間沢遺跡 L 地区（第 12 地区）	
第 2 節 発掘調査の成果	
第 14 表 L 地区 遺構一覧表	130
第 15 表 L 地区 出土土器観察表	130
第 16 表 L 地区 出土石器観察表	130
第 10 章 天間沢遺跡 M 地区（第 13 地区）	
第 2 節 発掘調査の成果	
第 17 表 M 地区 遺構一覧表	134
第 11 章 天間沢遺跡 N 地区（第 14 地区）	
第 2 節 発掘調査の成果	
第 18 表 N 地区 出土土器観察表	140
第 19 表 N 地区 出土石器観察表	140
第 13 章 天間沢遺跡 P 地区（第 16 地区）	
第 2 節 発掘調査の成果	
第 20 表 P 地区 出土土器観察表	150
第 21 表 P 地区 出土石器観察表	150

## 写 真 図 版 目 次

PL.1	
1. E 地区（3 次）本調査区全景（古墳時代以降、北から）	
2. E 地区（3 次）本調査区全景（縄文時代、北から）	
PL.2	
1. E 地区（2 次）2Tr 全景（北西から）	
2. E 地区（2 次）2Tr SU01（268）	
3. E 地区（2 次）2Tr SU02（269）	
4. E 地区（2 次）3Tr SK01	
5. E 地区（3 次）SD01 全景（南西から）	
PL.3	
1. E 地区（3 次）SD02 全景（北から）	
2. E 地区（3 次）SD01 北端（南から）	
3. E 地区（3 次）SD01 南端（北東から）	
4. E 地区（3 次）SK02（南西から）	
5. E 地区（3 次）Pit01・Pit02（南西から）	
PL.4	
1. E 地区（3 次）縄文時代遺構全体（E Gr 以北、南から）	
2. E 地区（3 次）縄文時代遺構全体（D Gr 以南、東から）	
PL.5	
1. E 地区（3 次）縄文時代全体（E Gr 以南、南東から）	
2. E 地区（3 次）FP01（南から）	
PL.6	
1. E 地区（3 次）SU03（北から）	
2. E 地区（3 次）FP01 セクション（南西から）	
3. E 地区（3 次）FP03 セクション（南から）	
4. E 地区（3 次）FP03（南西から）	
5. E 地区（3 次）FP04 セクション（西から）	
6. E 地区（3 次）FP04（南西から）	
7. E 地区（3 次）FP05 セクション（東から）	
8. E 地区（3 次）FP05（東から）	
PL.7	
1. E 地区（3 次）縄文時代全体（G Gr、東から）	
2. E 地区（3 次）G-4 Gr 遺物出土状況（北西から）	
3. E 地区（3 次）F-2 Gr 遺物（200）出土状況	
4. E 地区（3 次）F-2 Gr 遺物出土状況	
5. E 地区（3 次）作業の様子（北から）	
PL.8 ～ 12	
E 地区出土遺物	
PL.13	
1. G 地区 1Tr 全景（南西から）	
2. G 地区 SU01 遺物出土状況	
G 地区 出土遺物	
PL.14	
G 地区 出土遺物	
PL.15	
1. H 地区 1Tr SB01（南東から）	
2. H 地区 1Tr 全景（南から）	
3. H 地区 1Tr 東壁セクション BB'（西から）	
4. I 地区 調査地全景（南から）	
5. I 地区 1Tr 全景（南から）	
PL.16	
H 地区 出土遺物	
1. J 地区 調査地全景（南から）	
2. J 地区 1Tr 全景（南から）	
PL.17	
1. K 地区 調査区全景（南西から）	
2. K 地区 調査区南半（東から）	

PL.18

1. K 地区 調査区北半（東から）
2. K 地区 SB22 全景（南東から）

PL.19

1. K 地区 SB22 炉（南から）
2. K 地区 SB22 石器（181・182・184）出土状況
3. K 地区 SB23 全景（東から）
4. K 地区 SB23 炉 セクション（東から）
5. K 地区 SB23 炉（12・13・22）（東から）

PL.20

1. K 地区 SB23U1（14）・SB23U2（15）（北東から）
2. K 地区 SB24 全景（東から）

PL.21

1. K 地区 SB24 遺物（36・38）出土状況（東から）
2. K 地区 SB24 遺物（48）出土状況（南西から）
3. K 地区 SB25 全景（西から）
4. K 地区 SB25 遺物（57）出土状況
5. K 地区 SB25 遺物（65・81）出土状況

PL.22

1. K 地区 SB26 全景（西から）
2. K 地区 SKC（103）
3. K 地区 SKA セクション（南から）
4. K 地区 SKA（東から）
5. K 地区 SKAU2（99）（南西から）
6. K 地区 SKAU3（100）（西から）
7. K 地区 SKG（104）（北から）
8. K 地区 調査地遠景（南西から）

PL.23 ～ 37

K 地区 出土遺物

PL.38

1. L 地区 1Tr・拡張区全景（北東から）
2. L 地区 2Tr SD01 全景（南東から）
3. L 地区 SK63 南北セクション（西から）
4. L 地区 SK63（西から）

PL.39

L 地区 出土遺物

PL.40

1. M 地区 1Tr 全景（南から）
2. M 地区 SK68・69 南北セクション西壁（東から）
3. M 地区 SK68・69（東から）
4. N 地区 調査の様子（東から）
5. N 地区 3Tr 東西セクション北壁（南から）

PL.41

1. N 地区 SB01（東から）
2. N 地区 SB01 セクション（南東から）
3. N 地区 SB01 掘り方（東から）
4. N 地区 SB01Pit6（炉？）（南から）
5. N 地区 SB01 高坏（23）出土状況

PL.42

N 地区 出土遺物

PL.43

1. O 地区 1Tr 全景（南から）
2. O 地区 2Tr 全景（南から）
3. O 地区 5Tr 全景（東から）
4. O 地区 2Tr 南北セクション東壁（西から）
5. O 地区 5Tr 東西セクション北壁（南から）

PL.44

1. P 地区 調査地全景（西から）
2. P 地区 SB01（北東から）

PL.45

1. P 地区 SB01 セクション（東から）
2. P 地区 SB01 完掘（北東から）
3. P 地区 1Tr 全景（北西から）
4. P 地区 1Tr 東西セクション北壁（南から）
5. P 地区 2Tr 全景（北東から）
6. P 地区 3Tr 全景（南東から）
7. P 地区 4Tr 全景（北西から）
8. P 地区 4Tr 東西セクション北壁（西から）

PL.46

P 地区 出土遺物



# 第1章 天間沢遺跡の概要

天間沢遺跡は、世界遺産である富士山の南西山麓域に立地し、開析によって形成された尾根上の丘陵部に営まれた遺跡である。富士山は、数十万年前の更新世に活動を開始し、現在も活動を継続中の成層火山であるが、天間沢遺跡の最下層は古富士泥流と呼ばれる溶岩礫およびその碎屑であり、人類の生活跡が確認されるのは、この泥流より上位に堆積した火山灰土からである。この古富士泥流は、放射性炭素 C14 測定で 約 3 万～1.5 万 yrBP の所産とされているので、ほぼ立川ローム層および愛鷹上部ローム層と同じ、古富士火山の噴火活動による生成と考えられる。天間沢遺跡では、この泥流層直上に黄褐色ローム層が堆積し、その上に富士黒土層 (FB)、栗色土層 (Ku) と、愛鷹上部ローム標準土層に対応する堆積が確認できる。そのため、この黄褐色ローム層は、中位に上層と下層を分けるスコリアが確認される場合もあることから、愛鷹上部ローム層の休場層 (YL) 相当層と考えられる。なお、確定することはできないが、活発な火山活動と関連づけると、この泥流は愛鷹上部ローム第 I スコア層 (ScI) と同じ成因によるものかもしれない。

この黄褐色ローム層からは遺物は出土していないが、K 地区に後期旧石器時代の遺物であるナイフ形石器が確認できるので、天間沢遺跡の最初の住人は後期旧石器時代人と考えられる。

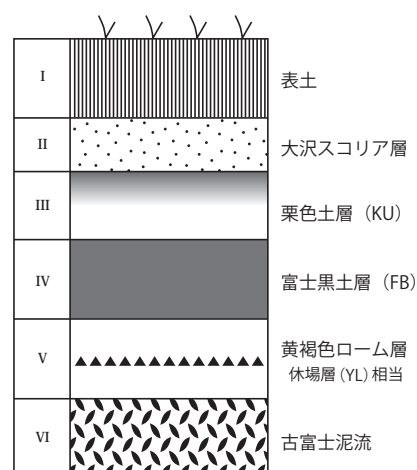
完新世になって、P 地区と Q 地区の富士黒土層からは縄文時代早期後葉の遺物が出土し、天間沢遺跡のほぼ全域で、栗色土層中で縄文時代中期から後期にかけての遺構と遺物が検出される。特に縄文時代中期後葉に最盛期を迎えている。天間沢遺跡は、近隣の縄文時代中期の遺跡として著名な富士宮市の国指定史跡千居遺跡や滝戸遺跡、沼津市の大芝原遺跡などとともに、富士・愛鷹山麓の拠点集落として営まれていたと考えられる。

その後も、栗色土層を切り込む形で、黒色土を覆土とする古墳時代前期の建物などの遺構、遺物が検出され、さらに奈良・平安時代から中世までの遺物

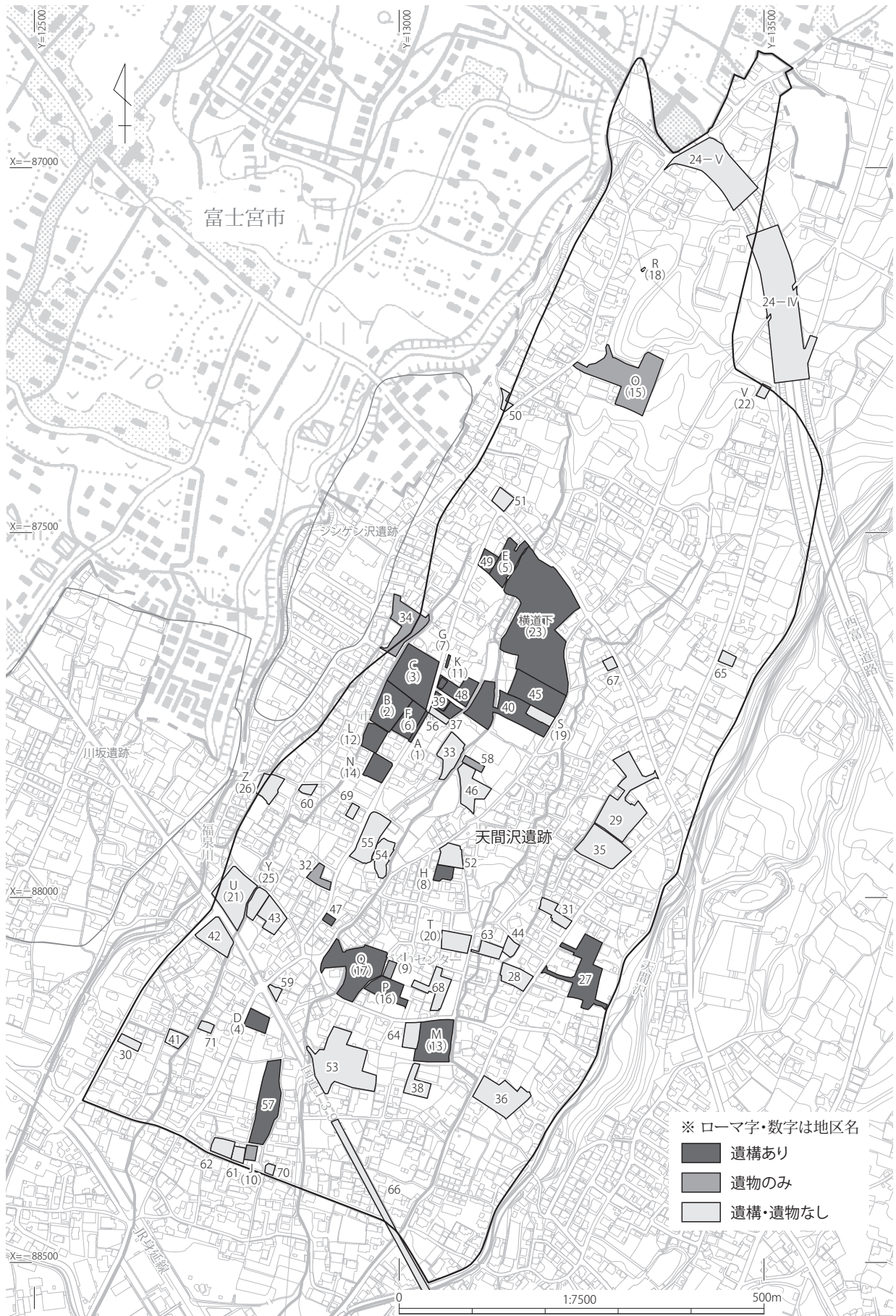
が出土していることから、天間沢遺跡は更新世末期から中世まで、人々の生活が営まれていることがわかってきている。

天間沢遺跡が発見されたのは昭和 2～3 年 (1927～28 年) のことで、富士宮市域を中心に遺跡踏査・遺物採集を行っていた岳南考古学会の佐野武勇氏が、旧鷹岡村天間の畑を踏査し、多数の縄文土器・石器を確認したことによる。その後も多くの研究者や学生により遺跡踏査が行われたが、小規模ながら初めての発掘調査 (第 6 地区 -1 次、旧: 第 1 次調査) が行われたのは、発見から 30 年以上が経過した昭和 35 年のことであった。

開発に伴う発掘調査が相次いだのは、昭和 45 年から昭和 47 年にかけてのことである。道路建設に伴う第 1 地区 (旧: 第 2 次調査 A 地区)、市立幼稚園建設に伴う第 2 地区 (旧: 第 3 次調査 B 地区)、市営団地建設に伴う第 3 地区 (旧: 第 4 次調査 C 地区)、ボーリング場建設に伴う第 23 地区 -1 次 (旧: 第 5 次調査 横道下地区) と、3 年間という短期間に 4 次に渡る緊急発掘調査が実施された。近接した地区で実施されたこれらの調査では、縄文時代中期・後期および古墳時代前期の集落が検出され、とりわけ縄文時代中期の遺物出土量が際立っていたことから、天間沢遺跡は当地域における当該期の中核的な遺跡と捉えられることとなった。



第1図 天間沢遺跡 標準土層



第2図 天間沢遺跡 調査履歴図





第3図 天間沢遺跡 遺構分布状況図

第1表 天間沢遺跡調査履歴

調査年度	調査番号	地区・次 (旧地区名)	調査種類	調査期間	所在地 調査の契機	対象 (㎡) 調査 (㎡)	時代	遺構	遺物	報告書
S35		6地区－1次 (第1次 F地区の一部)	学術調査	1960****	天間 1048－1 学術調査	100	縄文中期	配石遺構		
S44		1地区 (第2次 A地区)	本調査	19700323 ～19700405	天間 1048 外 市道高屋天間沢線建設	300	縄文中期 古墳初頭	配石遺構 建物2	縄文土器・石器 土師器	2
S46		2地区 (第3次 B地区)	本調査	19710910 ～19711028	天間 1047－1 市立天間幼稚園建設	2,600	縄文中期	配石遺構・土坑5・建物1	縄文土器・石器	2
S46		3地区 (第4次 C地区)	本調査	19711224 ～19720627	天間 1045－1 外 市営住宅天間団地建設	3,400	縄文中期 古墳初頭	建物11・土坑15 建物3	縄文土器・石器 土師器	2
S46		23地区－1次 (第5次 横道下地区第1次)	本調査	19711224 ～19720215	天間 995 ボーリング場建設	500	縄文中～後期 古墳初頭	配石遺構・建物1 建物6	縄文土器・石器 土師器	2
S47		4地区 (第6次 D地区)	試掘	19730325 ～19730329	天間 577－1 遺跡範囲確認	100	縄文中期 律令期?	ピット状遺構	縄文土器 土師器	本書
S47		5地区－1次 (第6次 E地区)	試掘	19721224 ～19721229	天間 988－1 遺跡範囲確認	50	縄文中期 古墳初頭	ピット状遺構 溝状遺構	縄文土器	本書
S53		6地区－2次 (第7次 F地区)	試掘	19781002 ～19781202	天間 1048－1 市立天間幼稚園拡張	1,053	縄文中期	土坑30・建物2 集石遺構4	縄文土器・石器	1 2
S54		24地区 (第I～V地点)	試掘	19791006 ～19791116	久沢 外 西富士道路建設		縄文 弥生	なし	縄文土器・石器・有孔磨製 石鏃	3
S58		17地区－1次 (Q地区)	試掘	19830418 ～19830419	天間 1106－1 天間公民館建設	1,142 125		なし	なし	
S58		7地区 (第8次 G地区)	試掘	19831024 ～19831028	天間 1045－5 遺跡範囲確認	50	縄文 古墳	配石遺構1・埋甕1・土坑2 ピット2	縄文土器	本書
S58		8地区 (第8次 H地区)	試掘	19831107 ～19831112	天間 1130－1 遺跡範囲確認	50	古墳	堅穴建物1		本書
S58		9地区 (第8次 I地区)	試掘	19831114 ～19831117	天間 1121 遺跡範囲確認	50	縄文	なし	縄文土器	本書
S58		10地区 (第8次 J地区)	試掘	19831118 ～19831122	天間 528・529 遺跡範囲確認	50	律令期	なし	土師器・須恵器	本書
S59		11地区 (K地区)	試掘	19841015 ～19841031	天間 1011－1 分布確認調査	200	縄文	建物5・土坑	縄文土器	本書
S61		12地区 (L地区)	試掘	19860905 ～19860910	天間 1062－3 宅地造成	750 300	縄文 古墳以降	土坑5 溝状遺構1	縄文土器・黒曜石・打製石 斧	本書
S62		13地区 (M地区)	試掘	19870511 ～19870515	天間 1312－1 外 宅地造成	2,579 150	縄文	土坑2	無し(周辺から縄文土器・ 土師器出土)	本書
S62		23地区－2次 (横道下地区第2次)	試掘	19870907 ～19870921	天間 999 外 宅地造成	7,000 400	縄文	埋甕1・土坑1 ・配石遺構1	縄文土器・石斧	
H01		14地区 (N地区)	試掘	19890605 ～19890622	天間 1061－1 外 宅地造成	968 367	縄文 古墳初頭	堅穴建物1・ピット1	縄文土器・石鏃・石斧 土師器	本書
H01		15地区 (O地区)	試掘	19890905 ～19890913	天間 1896－2 外 農産物集出荷場住宅建設	4,758 660	縄文 中・近世	土坑2	縄文土器片	本書
H03		16地区 (P地区)	試掘	19911202 ～19911211	天間 1120－4 天間沢遺跡公園整備	1,329 495	縄文 古墳	堅穴建物	縄文土器・黒曜石 土師器	本書
H03		17地区－2次 (Q地区)	試掘	19911219	天間 1115－1 外 天間公民館駐車場造成	648		なし	なし	
H03		18地区 (R地区)	試掘	19920316 ～19920319	天間 1943－1 送電線鉄塔建設	144 22		なし	なし	
H04		19地区 (S地区)	試掘	19920708 ～19920710	天間 1001－4 共同住宅建設	905 65		なし	なし	
H04		20地区 (T地区)	試掘	19911013 ～19921026	天間 1127－1 外 共同住宅建設	960 312		なし	なし	
H04		21地区 (U地区)	試掘	19921020 ～19921027	天間 591－1 倉庫・事務所建設	2,915 194		なし	なし	
H04		22地区 (V地区)	試掘	19930225	天間 1785－21 送電線鉄塔建設	144 40		なし	なし	
H05		5地区－2次 (E－2地区)	試掘	19930420 ～19930428	天間 988－8 外 共同住宅敷地造成	1,274 170	縄文 古墳	土坑・ピット 溝状遺構	縄文土器	本書
H05		5地区－3次 (E－2地区)	本調査	19930524 ～19930705	天間 988－8 外 共同住宅敷地造成	1,274 300	縄文 古墳	土坑・炉跡・埋甕 ピット状遺構・溝状遺構	縄文土器・石器	本書
H14		17地区－3次 (Q地区－1次)	試掘	20020508 ～20020520	天間 1117－1 外 天間公民館増築	1,633 365	縄文 古墳	埋甕	縄文土器・石器 土師器	4
H14		17地区－4次 (Q地区－2次)	本調査	20020527 ～20020701	天間 1117－1 外 天間公民館増築	800 683	縄文 古墳	土坑	縄文土器 土師器	
H14		25地区 (Y地区)	試掘	20020823	天間 590－1 外 共同住宅建設	635 90		なし	なし	4
H17		26地区 (Z地区)	試掘	20060302	天間 937－1 宅地造成	839 26		なし	なし	5
H19	H19-22	27地区－1次	試掘	20080318 ～20080326	天間 1238－1 外 宅地造成	3,266 87	古墳	堅穴建物2・溝状遺構1	土師器	6
H20	H20-09	27地区－2次	試掘	20081107	天間 1238－1 外 宅地造成	2,665 27		なし	なし	4
H20	H20-02	28地区	試掘	20080521 ～20080522	天間 1167－1 外 集合住宅建設	995 56		なし	なし	4
H20	H20-11	29地区	試掘	20081215 ～20081222	天間 1189－1 外 宅地造成	4,000 209		なし	なし	4
H21	H21-01	27地区－3次	試掘	20090406	天間 1242 外 集合住宅建設	1,866 13		なし	なし	7
H22	H22-27	30地区	試掘	20110126	天間 625－10 外 不動産売買	342 8		なし	なし	8
H23	H23-02	31地区	試掘	20110411	天間 1168－6 外 集合住宅建設	635 14		なし	なし	8
H23	H23-08	32地区	試掘	20110603	天間 1096－1 外 集合住宅建設	628 19	縄文	なし	土器	8
H24	H24-15	33地区	確認	20121129	天間 1050－1の一部 集合住宅新築	896 12		なし	なし	9
H24	H24-16	34地区	確認	20121205 ～20121206	天間 964－1 外及び官有地 宅地造成	2,158 72	縄文	なし	縄文土器	9

調査 年度	調査 番号	地区・次 (旧地区名)	調査 種類	調査期間	所在地 調査の契機	対象 (㎡) 調査 (㎡)	時代	遺構	遺物	報告書
H25	H25-03	35 地区	確認	20130418	天間 1174 - 3 外 宅地造成	1,985 38		なし	なし	9
H25	H25-17	36 地区	確認	20130909 ～ 20130911	天間 1263 外 宅地造成	2,178 82		なし	なし	9
H25	H25-20	37 地区	確認	20131001 ～ 20131004	天間 1010 - 5 個人住宅建設	398 46	縄文	堅穴建物・ピット	縄文土器、石器	9
H25	H25-23	38 地区	確認	20131029	天間 1317 - 1 外 共同住宅建設	965 9		なし	なし	9
H25	H25-31	39 地区	確認	20140117 ～ 20140110	天間 1010 - 6 個人住宅建設	353 53	縄文	土坑・ピット	縄文土器、石器	9
H26	H26-12	40 地区 - 1 次	確認	20140722 ～ 20140728	天間 1001-1 外 長屋住宅新築	3,517 99	縄文	堅穴建物・ピット	縄文土器	10
H26	H26-15	40 地区 - 2 次	確認	20140818 ～ 20140821	天間 1001-1 外 長屋住宅新築	3,517 65	縄文	ピット	縄文土器	10
H26	H26-39	41 地区	確認	20150126	天間 615-1 外 不動産売買	507 9		なし	なし	11
H27	H27-03	42 地区	確認	20150417	天間 600 番 1 外 店舗建設	1,510 23		なし	なし	11
H27	H27-101	40 地区 - 3 次	本 調査	20150511 ～ 20150717	天間 1001 番 1 外 長屋新築	3,517 892	縄文	堅穴建物・溝 ・土坑・ピット	縄文土器・石器	10
H28	H28-25	43 地区	確認	20161114	天間 590 番 1 外 個人住宅及び集合住宅建設	996 7		なし	なし	12
H28	H28-27	44 地区	確認	20161121	天間 1159 番 1 外 集合住宅建設	454 12		なし	なし	12
H29	H29-05	45 地区 - 1 次	確認	20170509 ～ 20170510	天間 1000-1 宅地分譲	2,437 47	縄文	堅穴建物・土坑・ピット	縄文土器・石器	13
H29	H29-102	45 地区 - 2 次	本 調査	20170619 ～ 20170810	天間 1000-1 宅地分譲	272	縄文	堅穴建物・埋土 ・土坑・ピット	縄文土器・石器	13
H29	H29-09	46 地区	確認	20170628 ～ 20170629	天間 1137-1 農地改良	1,415 25	なし	なし	なし	14
H29	H29-12	47 地区	確認	20170703	天間 1098-12 不動産売買	165 6	縄文	ピット	縄文土器・黒曜石	14
H29	H29-15	48 地区	確認	20170720 ～ 20170721	天間 1011-1 外 宅地造成	1,455 30	縄文	ピット	縄文土器	14
H29	H29-16	49 地区	確認	20170817 ～ 20170818	天間 988-15 宅地造成	489 23	縄文	ピット・溝・不明遺構	縄文土器	14
H30	H30-24	50 地区 - 1 次	確認	20180724	天間 1889-14 個人住宅新築	276,000 4,429		なし	なし	15
H30	H30-25	51 地区 - 1 次	確認	20180725	天間 1884-1-1 建売住宅新築	485,120 13,530		なし	なし	15
H30	H30-35	52 地区 - 1 次	確認	20180830	天間 1130-2 個人住宅新築	263,000 4,845		なし	なし	15
H30	H30-39	53 地区 - 1 次	確認	20180906	天間 569 番 1 ほか 店舗建設	4,801,740 56,246		なし	なし	15
H30	H30-60	54 地区 - 1 次	確認	20190108	天間 1079 ほか 不動産売買	872,410 5,143		なし	なし	15
H31	H31-31	40 地区 - 4 次	確認	20190826	天間 1001-6 個人住宅新築	321,000 12,693		なし	なし	16
H31	H31-48	52 地区 - 2 次	確認	20191105	天間 1130-2 個人住宅新築	263,000 5,687		なし	なし	16
H31	H31-03	55 地区 - 1 次	確認	20190417 ～ 20190418	天間 1075-1 外 宅地分譲造成	1,804,000 91,819		なし	なし	16
H31	H31-11	56 地区 - 1 次	確認	20190520	天間 1010-1 宅地分譲	280,000 10,552		なし	なし	16
H31	H31-34	57 地区 - 1 次	確認	20190909 ～ 20190912	天間 529-1 ほか 宅地分譲	4,200,000 173,008	縄文 奈良	土坑・ピット 堅穴建物・溝・土坑 ・ピット	土器・石器	16
H31	H31-39	58 地区 - 1 次	確認	20190919	天間 1137-1 個人農地改良	350,000 26,279	縄文	なし	土器	16
H31	H31-52	59 地区 - 1 次	確認	20191212	天間 584-13 不動産売買	227,090 4,078		なし	なし	16
H31	H31-54	60 地区 - 1 次	確認	20191216 ～ 20191217	天間 1069-2 個人住宅新築	198,340 4,781		なし	なし	16
R02	R02-09	17 地区 - 5 次	確認	20200422 ～ 20200423	天間 1115-1 耐震性貯水槽築造	100,000 10,531		なし	なし	17
R02	R02-25	61 地区 - 1 次	確認	20200722	天間 529-1 公会堂建設	345,000 15,035		なし	なし	17
R02	R02-31	62 地区 - 1 次	確認	20200805	天間 528 不動産売買	593,000 17,113		なし	なし	17
R02	R02-33	63 地区 - 1 次	確認	20200827	天間 1157-3 不動産売買	562,150 5,541		なし	なし	17
R02	R02-49	64 地区 - 1 次	確認	20201014 ～ 20201016	天間 1320-5 個人住宅建設	702,000 16,998		なし	なし	17
R03	R03-32	65 地区 - 1 次	確認	20211014	天間 1812-8 店舗建設	297,830 3,144		なし	なし	18
R03	R03-15	66 地区 - 1 次	確認	20210820	天間地先 下水道建設	56,280 8,000		なし	なし	18
R03	R03-33	67 地区 - 1 次	確認	20211115	天間 1208-1 個人住宅建設	205,410 6,314		なし	なし	18
R03	R03-39	68 地区 - 1 次	確認	20211124 ～ 20211125	天間 1124-1 不動産売買	1,286.14 25.875		なし	なし	18
R03	R03-52	69 地区 - 1 次	確認	20220203	天間 1072-7 ほか 土地売買	230,000 8,719		なし	なし	18
R04	R04-17	45 地区 - 3 次	確認	20220616	天間 1000 番 1 個人住宅建設	204,790 3,372		なし	なし	19
R04	R04-101	48 地区 - 2 次	本発 掘	20220801	天間 1011-7 個人住宅合併浄化槽設置	4,643	縄文	なし	土器・石器	19
R04	R04-01	70 地区 - 1 次	確認	20220405	天間 522-18 外 不動産売買	69,020 6,330		なし	なし	19
R04	R04-40	71 地区 - 1 次	確認	20221121	天間 550 番 3 個人住宅建設	195,820 22,030		なし	なし	19

報告書 1 『天間沢遺跡第7次（F地区）発掘調査概報』（1979）  
2 『天間沢遺跡Ⅰ 遺構編』（1984）・『天間沢遺跡Ⅱ 遺物・考察編』（1985）  
3 『西富士道路（富士地区）・岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』『天間地区』（1981）  
4 『平成14・20年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』（2010）  
5 『平成17・18年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』富教委（2008）  
6 『平成15・19年度富士市内遺跡発掘調査報告書』（2009）  
7 『平成21年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』（2011）  
8 『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成22・23年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第54集（2013）  
9 『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成24・25年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第57集（2015）  
10 『天間沢遺跡』富士市埋蔵文化財調査報告 第58集（2016）  
11 『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成26・27年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第60集（2017）  
12 『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成28年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第62集（2017）  
13 『天間沢遺跡 第45地区』富士市埋蔵文化財調査報告 第65集（2019）  
14 『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成29年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第66集（2019）  
15 『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成30年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第67集（2019）  
16 『富士市内遺跡発掘調査報告書－令和元年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第70集（2021）  
17 『富士市内遺跡発掘調査報告書－令和2年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第73集（2022）  
18 『富士市内遺跡発掘調査報告書－令和3年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第76集（2023）  
19 『富士市内遺跡発掘調査報告書－令和4年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第79集（2024）



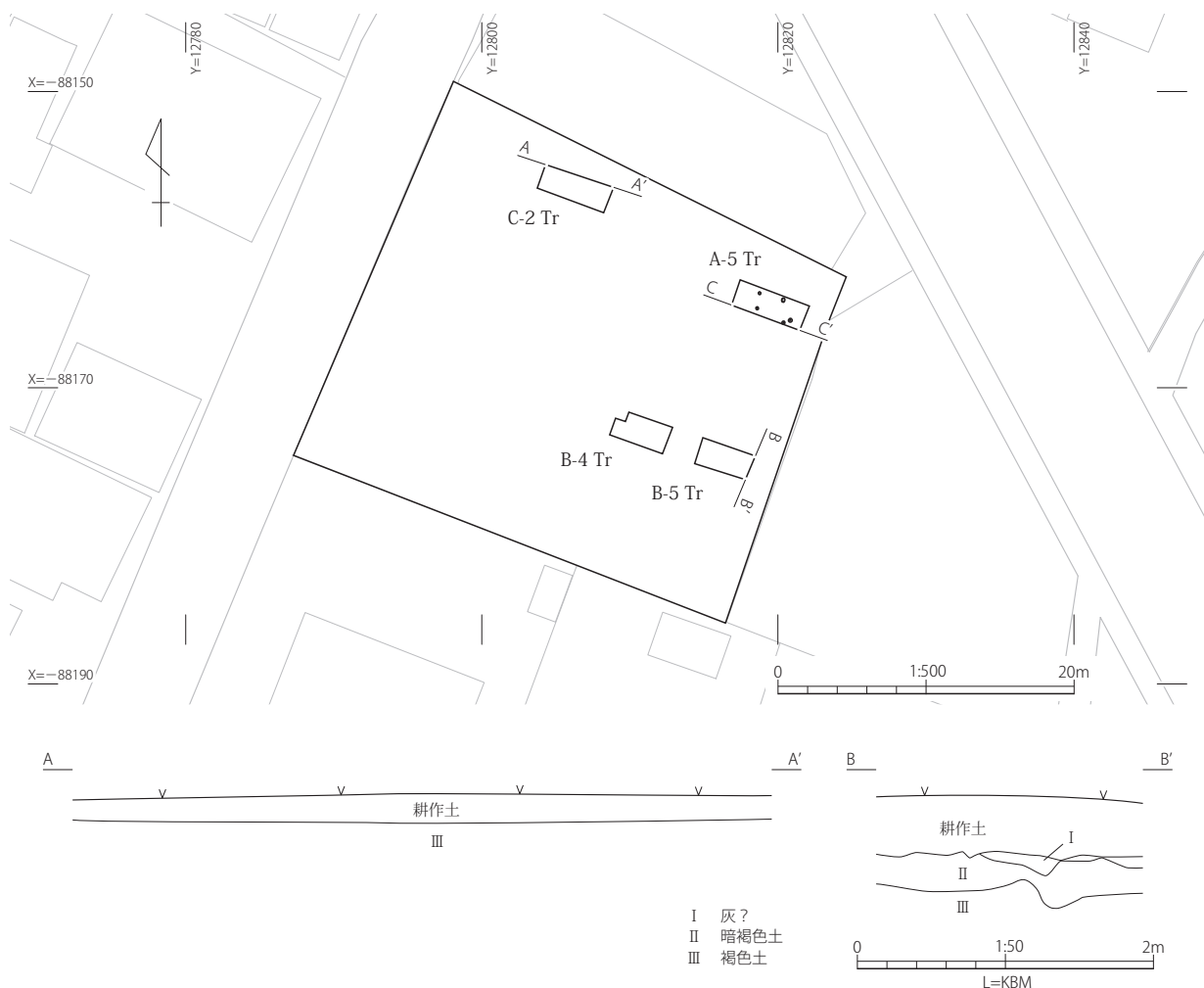
## 第2章 天間沢遺跡D地区(第4地区)

昭和47年度、富士市教育委員会では、天間沢遺跡の保護のために遺跡範囲の確認が急務となったことから、第1地区から南へ450mほどの第4地区(天間577-1、旧:第6次調査D地区)と北へ250mほどの第5地区(天間988-1、旧:第6次調査E地区)において遺跡範囲確認のための調査を実施することとなった。

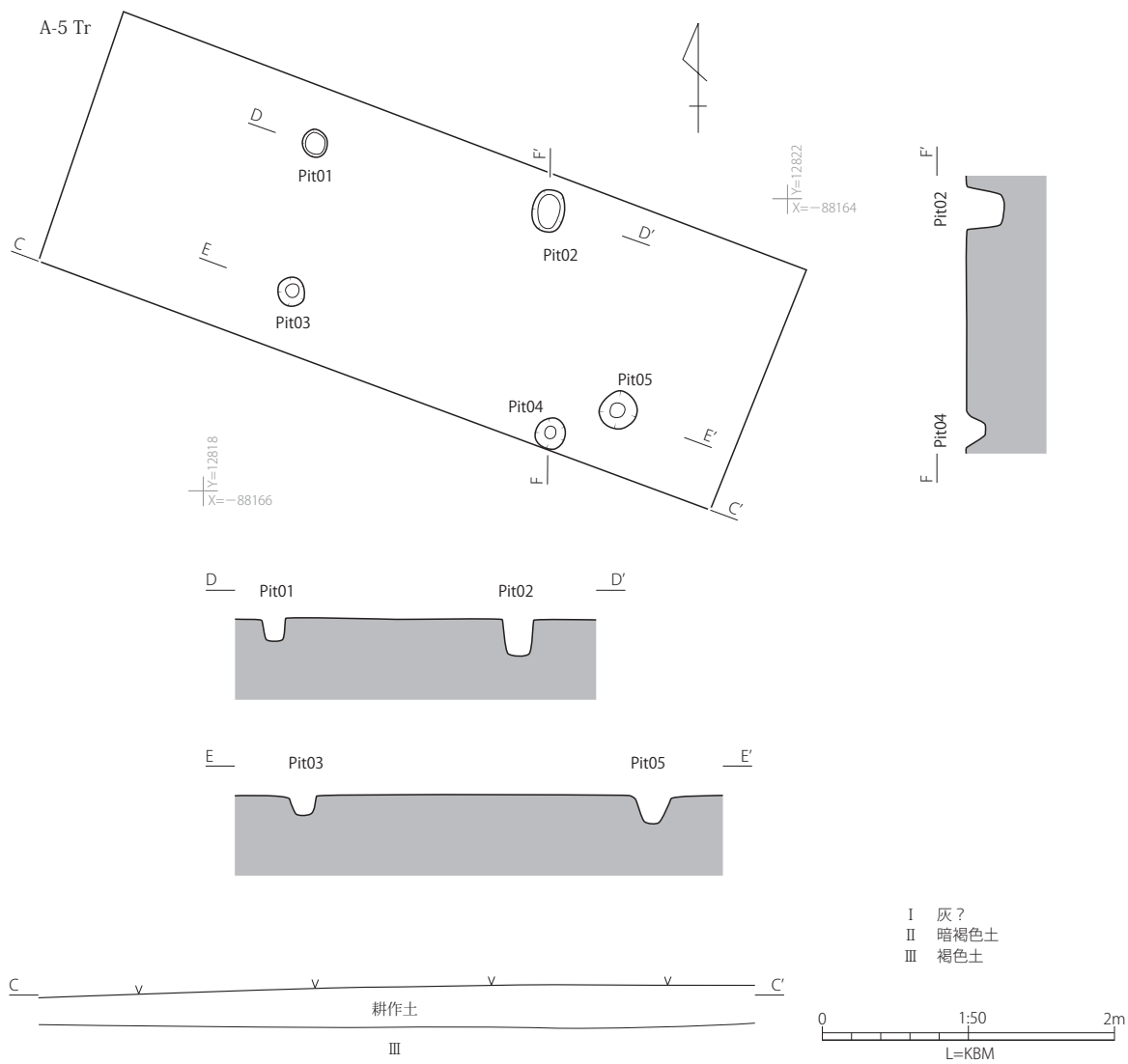
D地区の調査は昭和48年3月25日から同年3月29日にかけて行われた。調査地に4箇所のトレンチを掘削したところ、調査地南西に設定したA-5Trにおいて、地表下25cm前後から律令期と見られるピット5基(Pit01～05)を検出した。図化できる出土遺物はなかった。



第4図 D地区 位置図



第5図 D地区 トレンチ配置図、セクション図



第 6 図 D 地区 A-5Tr 平面図、セクション図、エレベーション図

第 2 表 D 地区 遺構一覧表

遺構種別	遺構名	検出位置	時代	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	土層	切り合い (古→新)	遺物の出土	備考
Pit	Pit01	A-5Tr	律令期	19	17	15	正円形	平底	-	-	-	
Pit	Pit02	A-5Tr	律令期	29	22	24	楕円形	平底	-	-	-	
Pit	Pit03	A-5Tr	律令期	19	19	12	正円形	平底	-	-	-	
Pit	Pit04	A-5Tr	律令期	21	20	9	正円形	平底	-	-	-	
Pit	Pit05	A-5Tr	律令期	26	26	15	正円形	平底	-	-	-	



## 第3章 天間沢遺跡 E 地区（第5地区）

### 第1節 調査に至る経緯と経過

#### 1 次調査に至る経緯

昭和47年度、富士市教育委員会では、天間沢遺跡の保護のために遺跡範囲の確認が急務となったことから、第1地区から南へ450 mほどの第4地区（天間577-1、旧：第6次調査D地区）と北へ250 mほどの第5地区（天間988-1、旧：第6次調査E地区）において遺跡範囲確認のための調査を実施することとなった。

#### 1 次調査の経過

E地区の調査（1次調査と位置づける）は昭和47年12月24日から同年12月29日にかけて行われた。

尾根方向に長い調査地に2本のトレンチ（ATr・BTr）を設定し掘削したところ、尾根を斜めに走る古墳時代の溝状遺構（SD）と縄文時代とみられるピット群を検出した。

#### 2 次調査に至る経緯

平成5年、事業者（個人）は富士市天間988番地8外（1,274 m<sup>2</sup>）において、共同住宅敷地造成工事を計画した。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置し、昭和47年に遺跡範囲確認のための調査が実施されたE地区にあたる。平成5年3月4日、事業者から文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。富士市教育委員会文化振興課は3月8日、届出を静岡県教育委員会に進達し（富教文発第337号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった（平成5年3月26日付け、教文第3-144号）。

富士市教育委員会は文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出し（平成5年4月15日付け、富教文第13号）、富士市教育委員会



第7図 E地区 位置図

文化振興課職員による確認調査を実施することとなった。昭和47年度の調査を1次調査とし、今回の調査を2次調査と位置づける。

#### 2 次調査の経過

2次調査は平成5年4月20日から4月28日にかけて実施した。調査地の南側に東西方向のトレンチを3本（1～3Tr）、北側に南北方向のトレンチを1本（4Tr）設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

その結果、1Trで溝状遺構（SD）1条、2Trで埋甕土坑2基（SU01（A）～02（B））と覆土に焼土が入る土坑1基（FP1）、3Trで土坑1基（SK01）を検出した。調査地の南側には縄文時代中期・後期の包含層が良く残存しているとみられるが、北側部分では表土下が黄褐色ローム層であり、古墳時代および縄文時代の包含層がすでに削平されている状況が確認された。

調査の結果について、「発掘調査終了報告書」を静岡県教育委員会に提出した（平成5年5月25日付け、富教文第45号）。

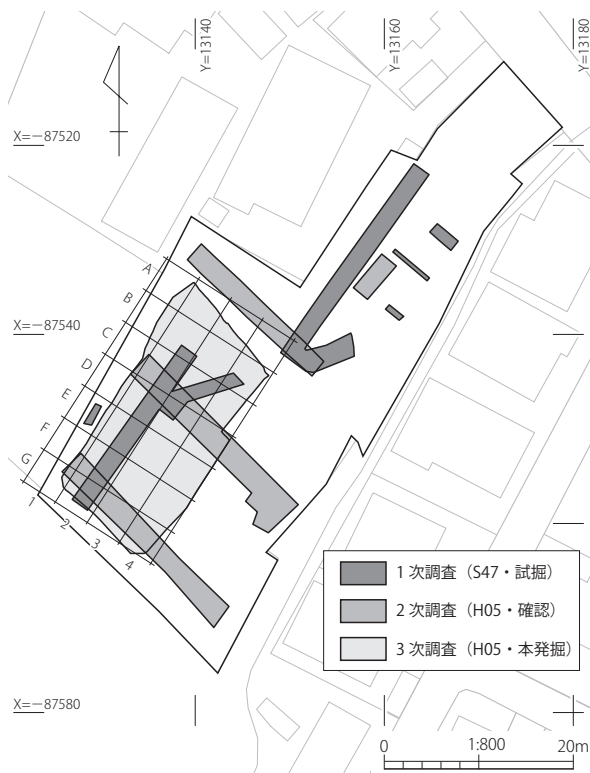
### 3 次調査に至る経緯

2 次調査の結果を受けて、共同住宅建物建設予定地である調査地南側部分について本発掘調査（3 次調査）を実施することとなり、富士市教育委員会は文化財保護法第 98 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出した。また、平成 5 年 5 月 21 日、事業者と富士市教育委員会との間で「天間沢遺跡（E-2）埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」を取り交わした。

### 3 次調査の経過

3 次調査は平成 5 年 5 月 24 日から 7 月 5 日にかけて実施した。調査地南側の建物建設予定地を本調査区（約 300 m<sup>2</sup>）とし、任意の 4 m グリッドを設定した。グリッドの軸は座標北に対して 32.7° 東に傾き（N-32.7° -E）、北から南へ A ～ G、西から東へ 1 ～ 4 の区画記号を振っている。

重機により表土を除去した後、栗色土層から黄褐色ローム上層まで人力により徐々に掘り下げて、遺構・遺物の検出につとめた。



第 8 図 E 地区  
確認調査トレンチおよび本調査区配置図

その結果、古墳時代以降の遺構として溝状遺構 2 条（SD01 ～ 02）とピット 2 基（Pit01 ～ 02）、土坑 1 基（SK02）を、縄文時代中期・後期の遺構として炉跡 4 基（FP01・03 ～ 05）、埋甕土坑 1 基（SU03）、ピット 93 基（Pit03 ～ 97）、土坑 31 基（SK03 ～ 34）を検出・完掘し、記録保存を行った。

遺物はコンテナ 5 箱分の土器・石器が出土した。遺物については、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」（平成 5 年 7 月 9 日付け、富教文第 112 号）を、静岡県教育委員会宛に「埋蔵文化財保管証」（平成 5 年 7 月 9 日付け、富教文第 113 号）を提出し、静岡県教育委員会から埋蔵物の文化財認定を受けている（平成 5 年 9 月 24 日付け、教文第 7-14 号）。

発掘業務の完了について、事業者に「業務完了報告」を提出し（平成 5 年 7 月 7 日付け、富教文第 106 号）、発掘調査の結果について、「発掘調査終了報告書」を静岡県教育委員会に提出した（平成 5 年 7 月 9 日付け、富教文第 114 号）。

### 調査の体制

2・3 次調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	山本 厚
		教育次長	小山 哲雄
	文化振興課	課長	小長谷秀夫
		課長補佐	若林 富彦
調査担当	文化財係	係長	佐野 誠一
		主査	渡井 義彦
		主事	久松 義昭

## 第2節 発掘調査の成果

### 1 次調査の成果

溝状遺構（SD）は、北東から南西に延びる方向にあわせてトレンチを拡張・追加した結果、ATr 西から BTr 南東まで、少なくとも約 34.5 m の長さの溝となることが推定される。この SD は 3 次調査で検出された SD01 と同一遺構である。

BTr 北東では多くの礫が出土したようである。

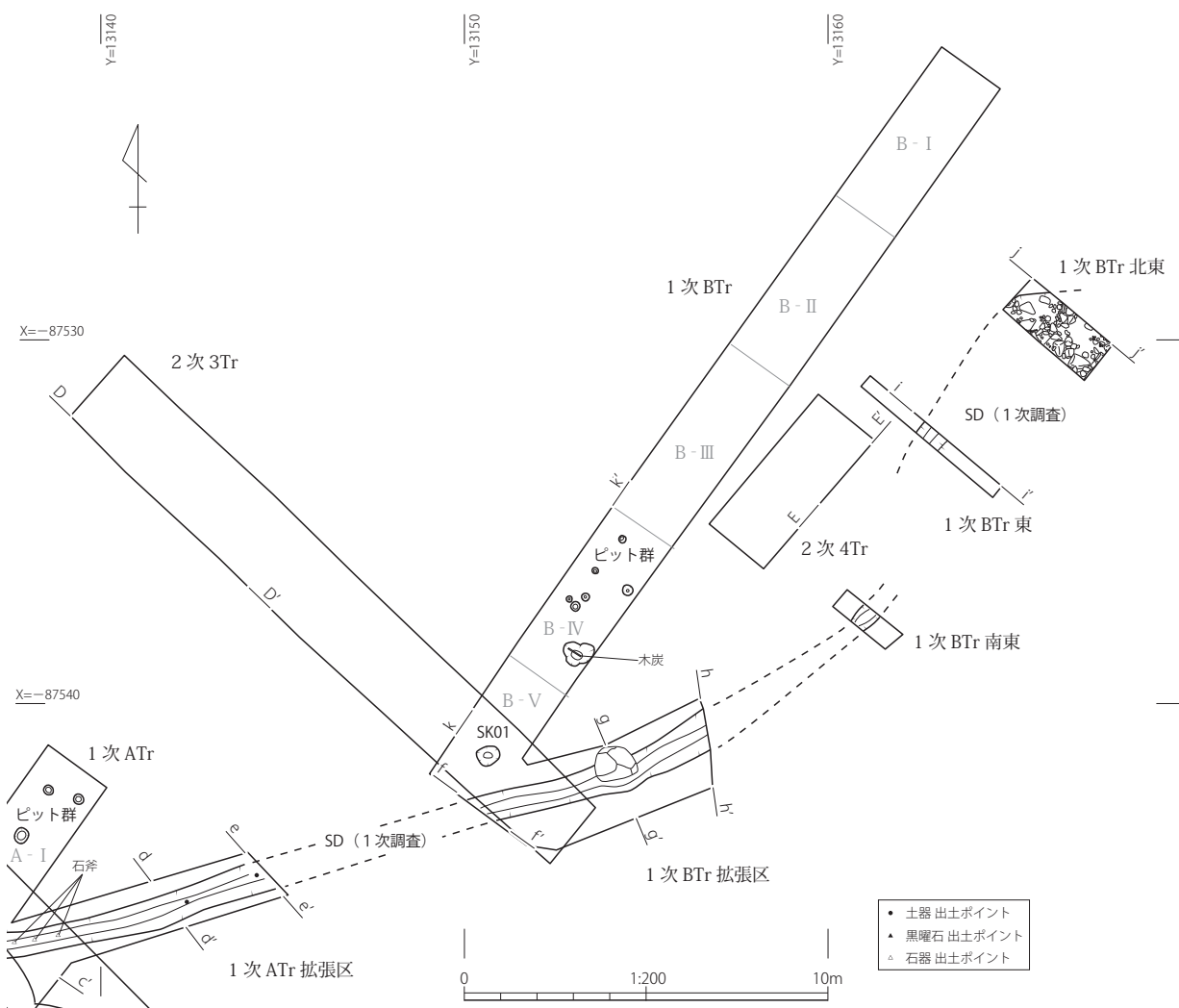
BTr-IV区で検出されたピット群は径 17～30cm の正円形を呈するものが多く、そのうち 3 基は 110cm ほどの間隔で 1 列に並んでいるが、それ以外に規則的な配置を成すものはない。これらのピットの南に位置する径 80cm ほどの不整形のピットでは、底から棒状の木炭が出土している。

### 2 次調査の成果

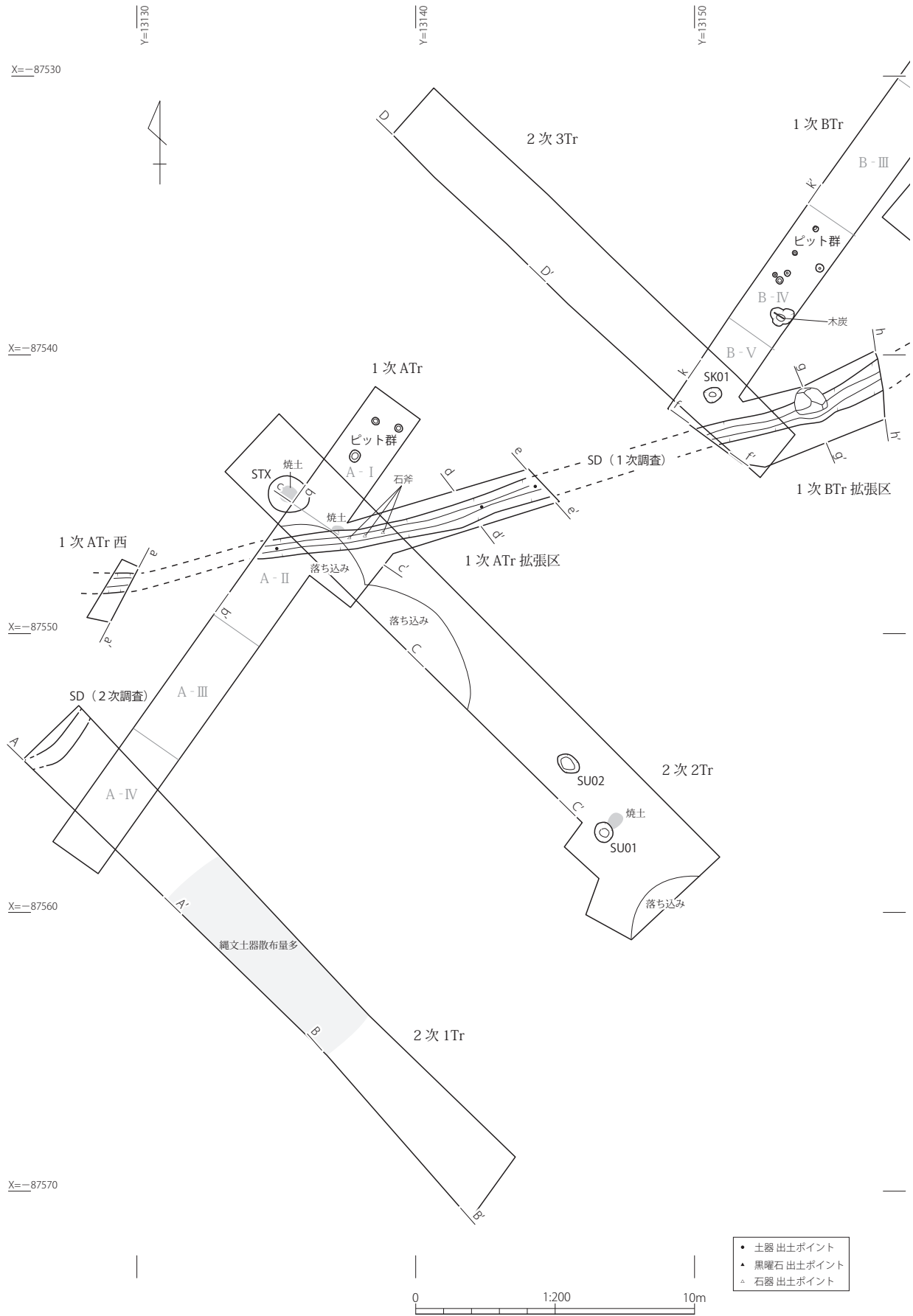
1Tr 西端において溝状遺構（SD）1 条を検出した。この溝状遺構はこの後実施される本発掘調査（3 次調査）で検出される SD02 と同一遺構である。また、1Tr 中央付近では縄文土器が多く出土する範囲が認められた。

2Tr では埋甕土坑 2 基（SU01～02）を検出・完掘した。SU01（SUA）は、堀之内式期の粗製深鉢 268 の土器が伴っている。SU02（SUB）は、堀之内式期の粗製深鉢 269 の土器が伴っている。

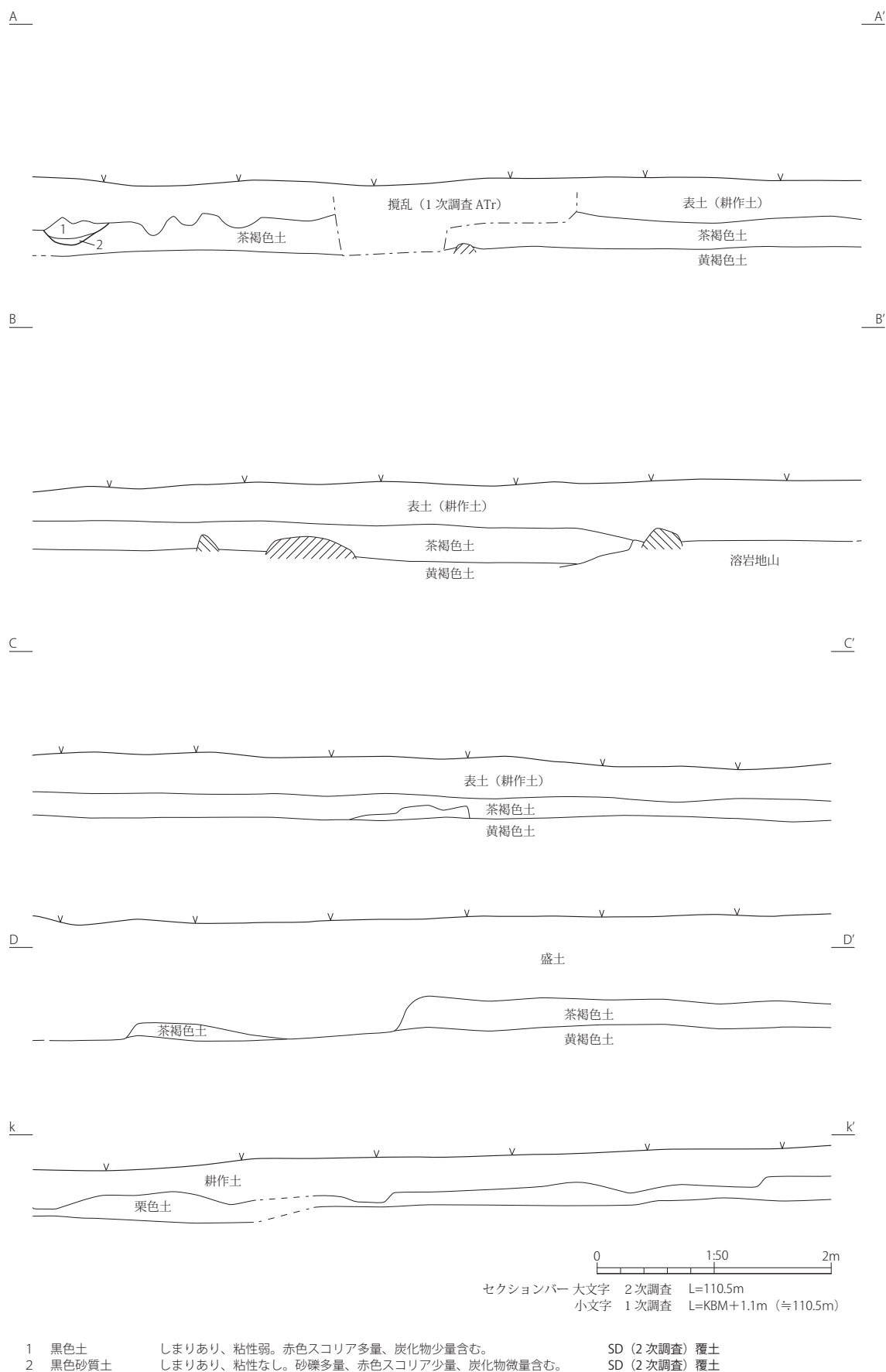
SU01 は長軸 72cm、短軸 65cm、検出面からの深さ 35cm の正円形の土坑に、底部のない縄文土器深鉢が正位置で埋納されていた。断面観察によれば、



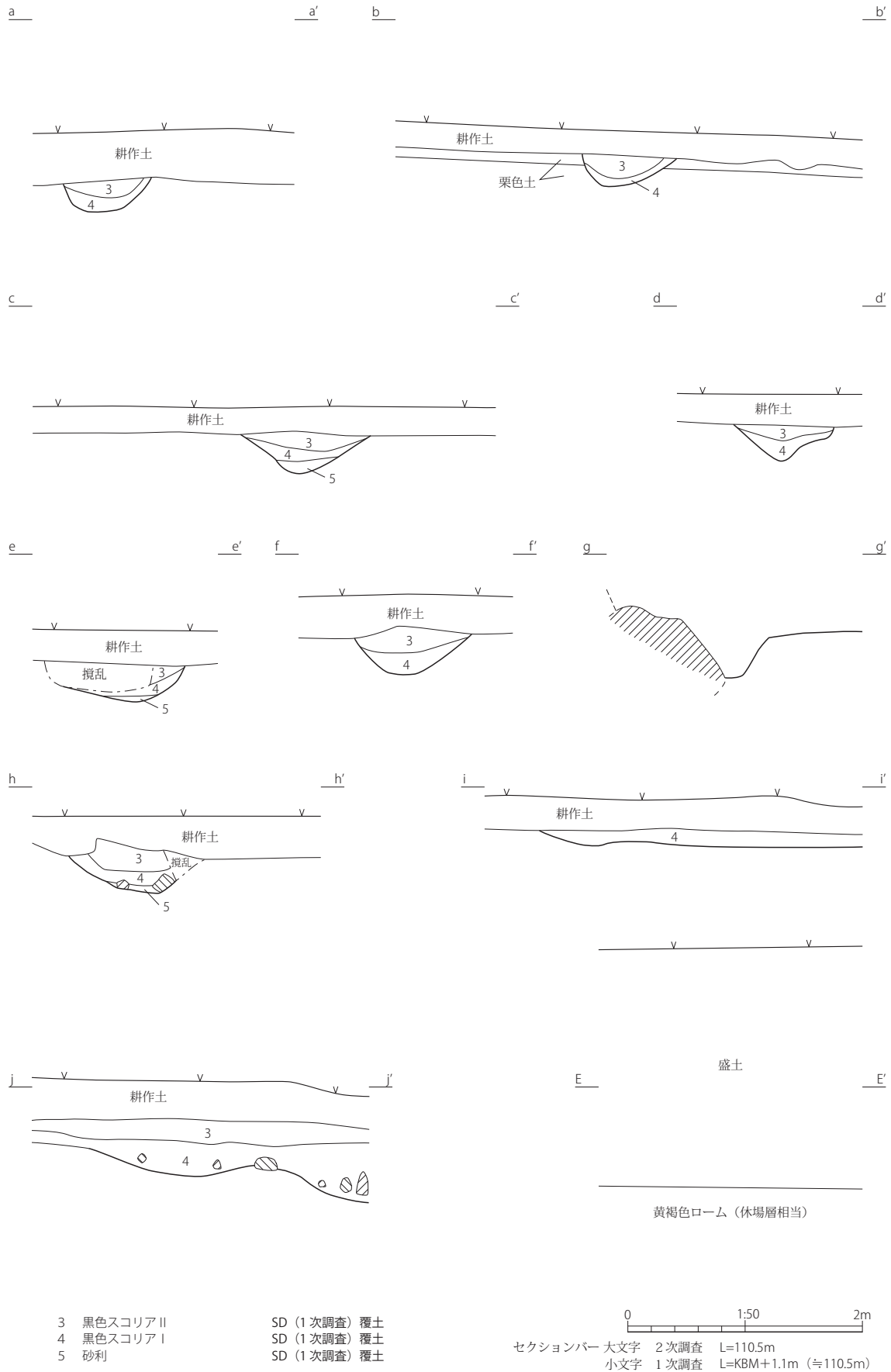
第9図 E地区 1・2次調査トレンチ全体図（北部）



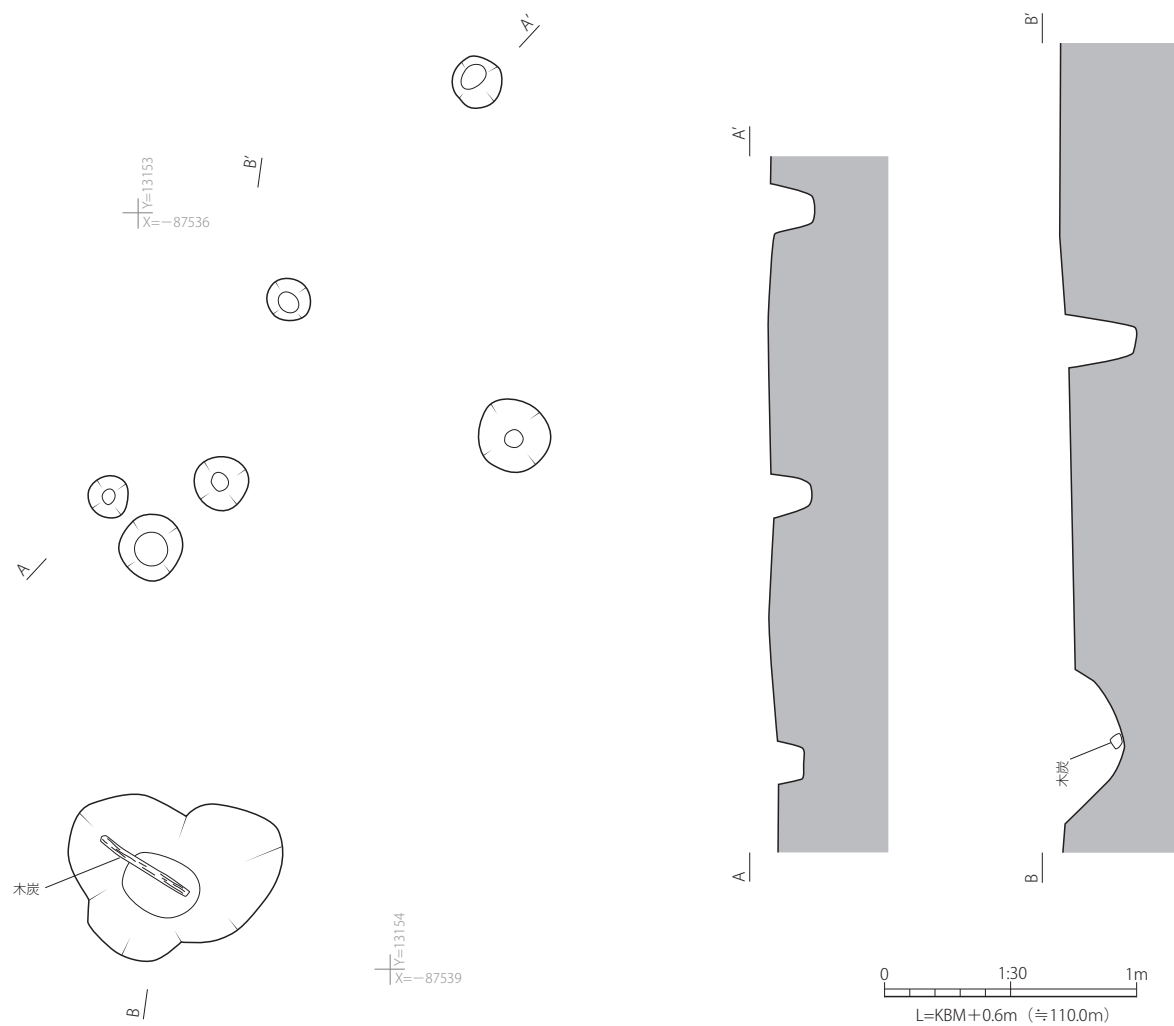
第10図 E地区 1・2次調査トレンチ全体図(南部)



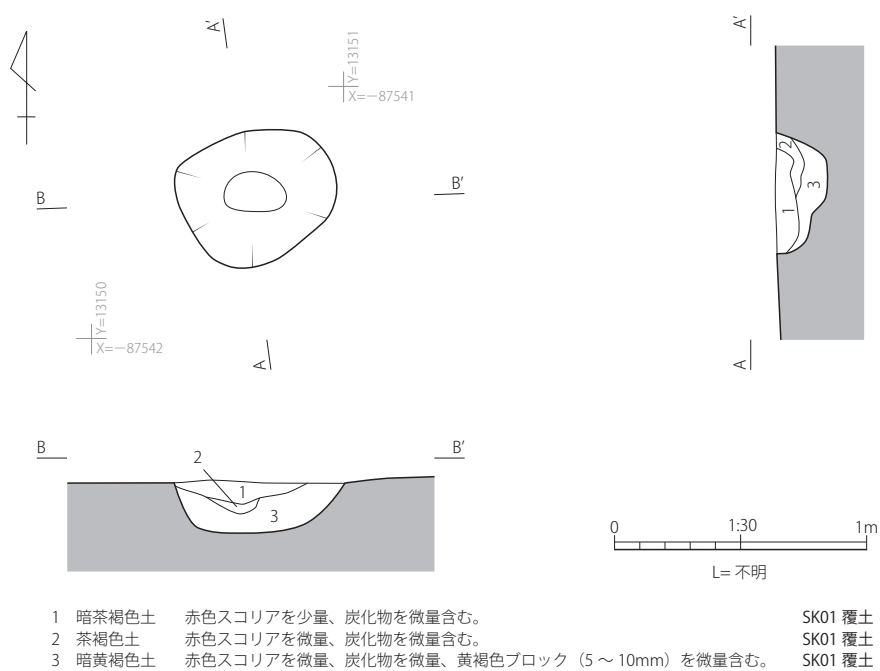
第11図 E地区 1・2次調査トレンチセクション図(1)



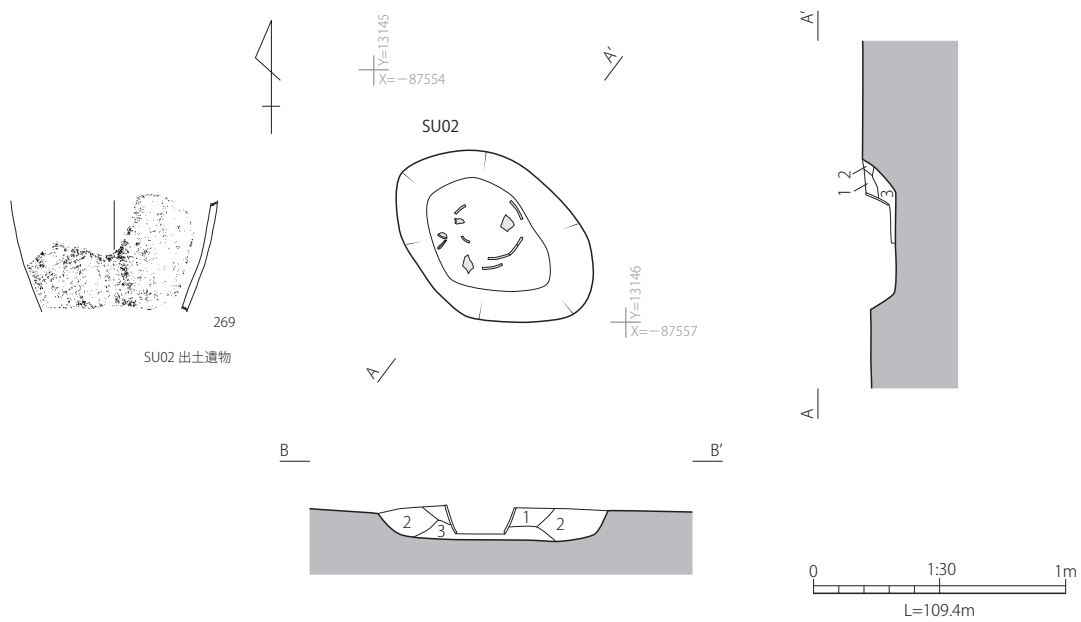
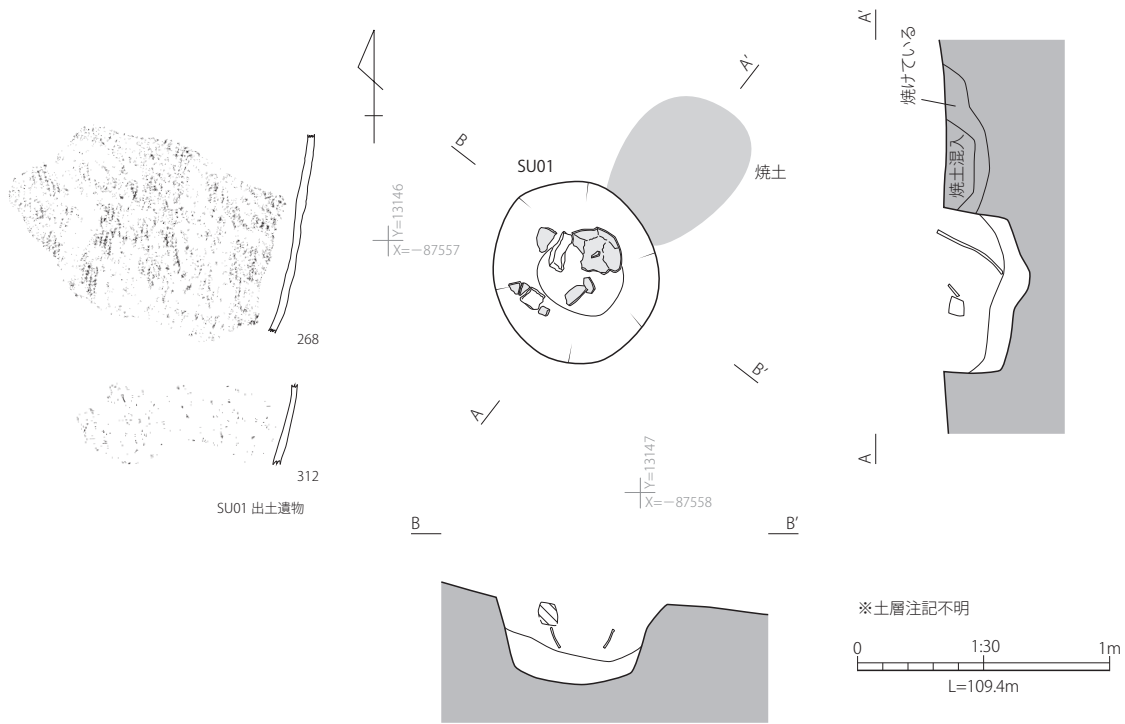
第12図 E地区 1・2次調査トレンチセクション図(2)



第13図 E地区 1次調査BTrピット群



第14図 E地区 2次調査3Tr SK01



- |         |                                 |         |
|---------|---------------------------------|---------|
| 1 黒褐色土  | しまり良好、粘性あり。赤色スコリアを微量、炭化物粒を微量含む。 | SU02 覆土 |
| 2 暗茶褐色土 | しまり良好、粘性あり。赤色スコリアを少量、炭化物粒を微量含む。 | SU02 覆土 |
| 3 茶褐色土  | しまり良好、粘性あり。赤色スコリアを微量、黄褐色土を少量含む。 | SU02 覆土 |



SU01の北東に覆土に焼土を含む何らかのくぼみがあったようだが、詳細は不明である。SU02は長軸90cm、短軸61cmの楕円形の土坑から深鉢の下部が正位置で出土した。残存する深さが13cmであり、上半部分は削平されて失われたものとみられる。2Tr西端で検出された覆土に焼土が入る土坑(STX)は、3次調査の「第1号炉跡(FP01)」と同一遺構である。

3Trでは覆土に微量の炭化物を含む土坑1基(SK01)を検出・完掘した。楕円形・平底で、長軸62cm、短軸52cm、深さ20cmを測る。

### 3次調査の成果

#### ・縄文時代の遺構

炉跡4基(FP01・03～05)、埋甕土坑1基(SU03)、ピット93基(Pit03～97)、土坑31基(SK03～34)を検出・完掘した。ピット・土坑の規模等は第3表に示す。

#### 炉跡

FP01は本調査区C-2・D-2グリッドに位置する。2次調査2Tr西端で検出された覆土に焼土が入る土坑(STX)と同一遺構である。平面形は一部が隅丸の方形を呈し、平底で、火を受けた土が全面に堆積している。長軸133cm、短軸120cm、深さ24cmを測る。

FP03は本調査区E-2グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、平底で、長径85cm、短径74cm、深さ15cmを測る。

FP04も本調査区E-2グリッド、FP03の西側に位置する。平面形は円形を呈し、丸底で、長径60cm、短径57cm、深さ14cmを測る。

FP05も本調査区E-2グリッド、FP03の東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、平底で、長径90cm、短径67cm、深さ15cmを測る。伴う土器は曾利Ⅰ式の籠目文土器なので、縄文時代中期後葉の遺構と考えられる。

#### 埋甕土坑

SU03は本調査区F-4グリッドに位置する。浅鉢の口縁部が逆位で出土し、その下部に径34cm、深

さ14cmの正円形の土坑が検出された。浅鉢は土坑の底面より14cm浮いていた。出土している土器は同一個体の81・82・83で、堀之内2式の浅鉢形土器である。

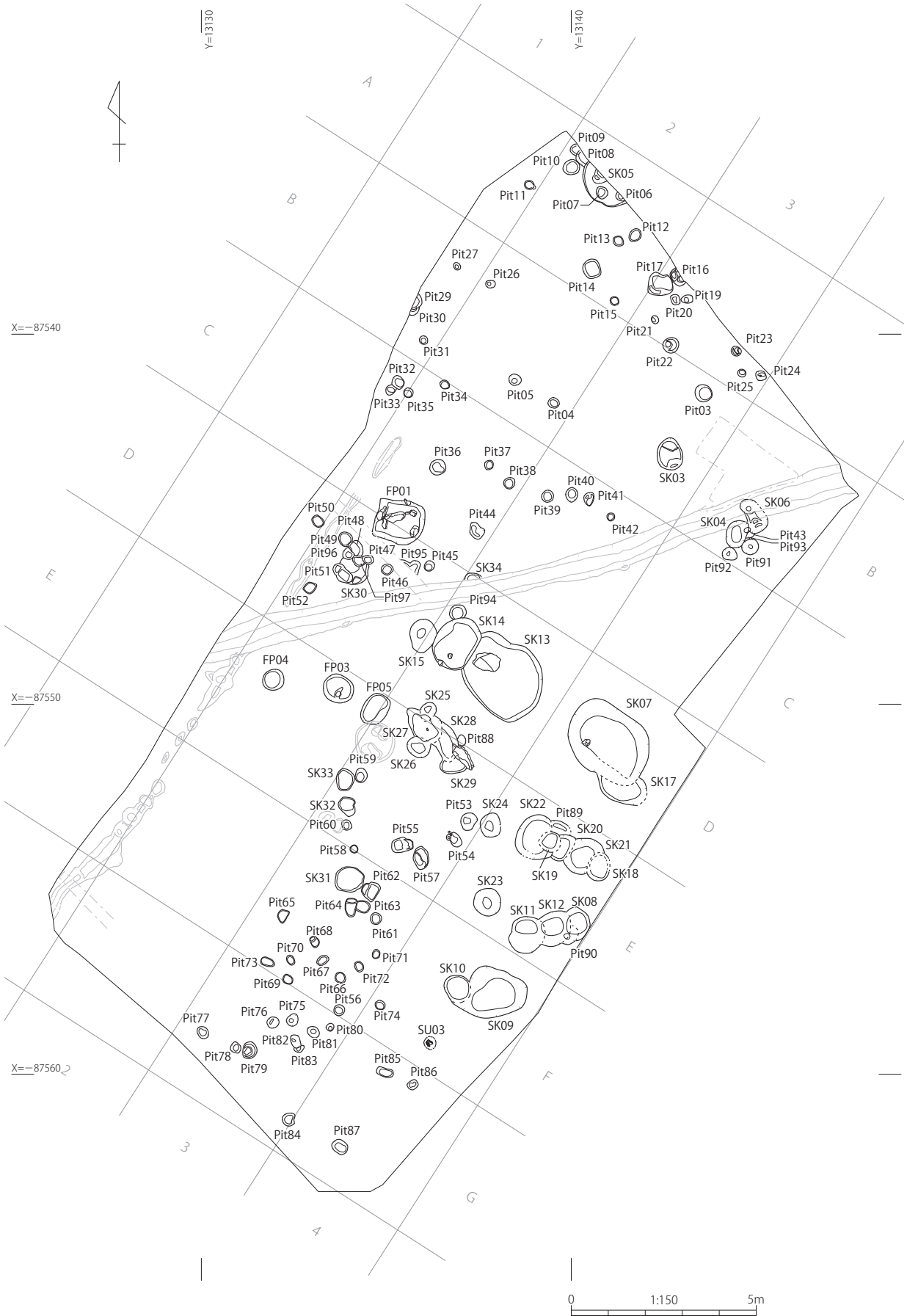
#### ・縄文時代の遺物

出土した遺物は後期前葉の堀之内2式の時期を中心とする。土器は、少量の縄文時代中期中葉のⅢ群A-1類とした1の藤内式、2の井戸尻式以外はⅢ群A-2類とした曾利式(3～36)とⅢ群B-2類とした加曾利E式系(37～52)と西日本系と思われるもの(53・54)の中期後葉の土器である。また、中期と考えられる底部(55～58)を図示した。

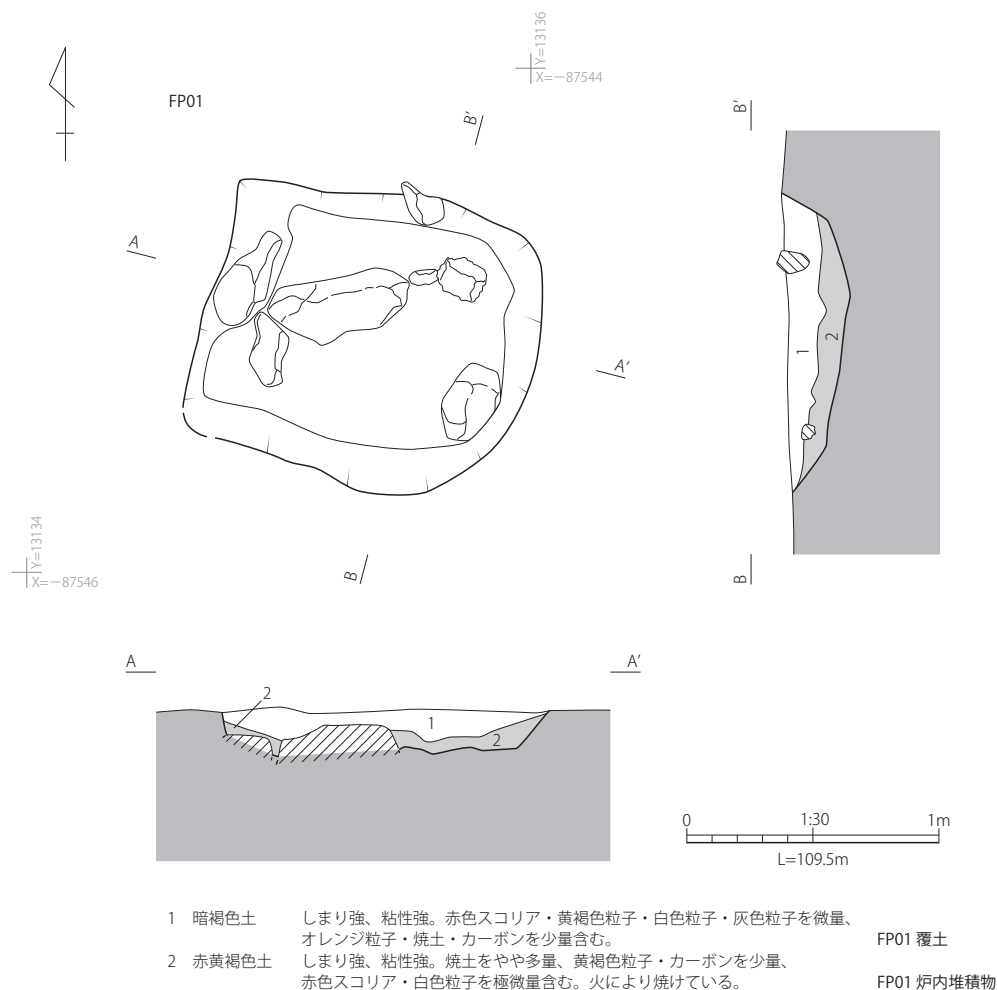
後期は、Ⅳ群A-2類、B-2類とした堀之内式がほとんどで、堀之内1式からの過渡期にあたる堀之内2式の古い時期に納まると考えられる。多くは頸部がくびれる深鉢形土器で、朝顔形の深鉢形土器は少なく、当地域の特色かもしれない。また浅鉢形土器と考えられるもの(69・72・76・81・82・83・84・85・87・145・175・176・184・187等)も高い比率で組成されるものと思われる。さらにE地区では、精製の注口土器(188～201)が多く出土していることが特筆され、通常の生活の場とは違う空間として利用された可能性が高い。

時期的には堀之内式期であるが、当地域に限定された土器群として、Ⅳ群B-2類(210～249)を区分した。やや厚めの器壁をもち、太い縄文原体を用いた付加条縄文を表面全体に施文した粗製の深鉢形土器で、この土器は三島市北山遺跡などで、静岡県東部地域で主体的に出土する土器として注意されていたもの(瀬川1990)であったが、明確に検討されたのは馬飼野行雄氏によってである(馬飼野1997)。それによれば、堀之内2式に伴出する状況が顕著であり、本遺跡でもそれを裏付けている。このことから、静岡県東部地域の堀之内2式を構成する粗製土器と位置づけられるものと考えられる。分布範囲は、東は神奈川県西部に、西では静岡県中部の川根本町で確認されている。なお、設楽博己氏は『沼津市史 資料編 考古』「29 鳥沢遺跡」にて堀之内1式の粗製土器としている。

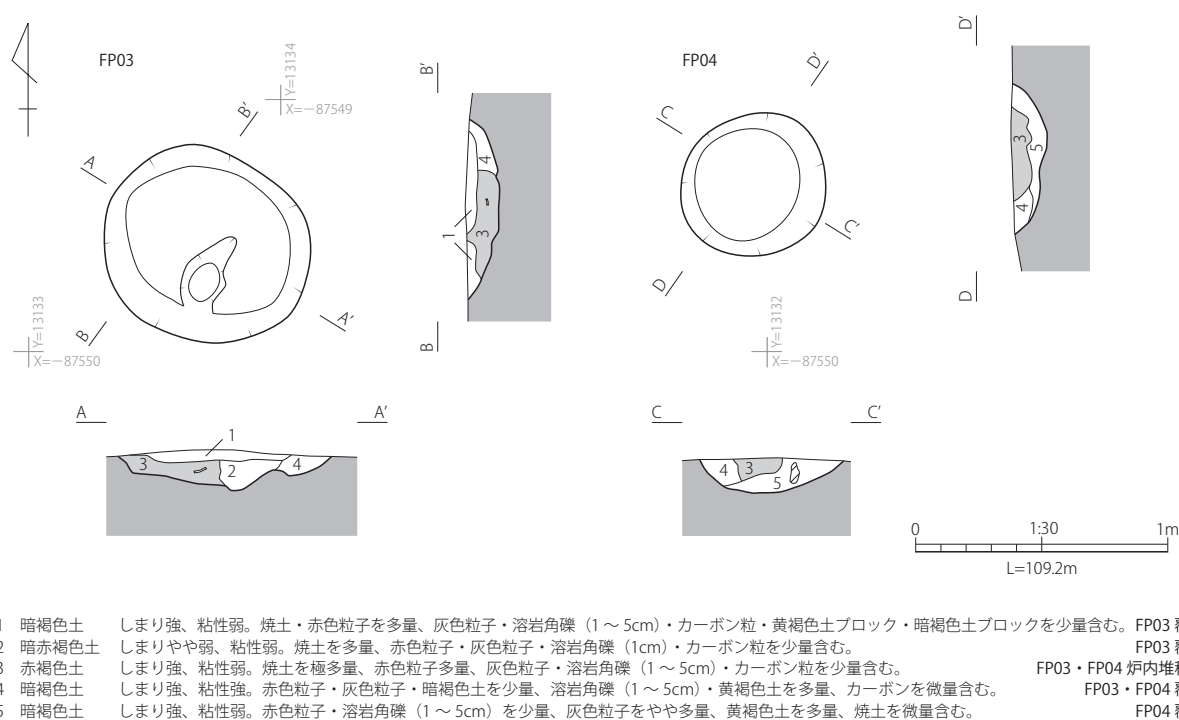
E地区の縄文時代で最も新しい時期はⅣ群A-3類



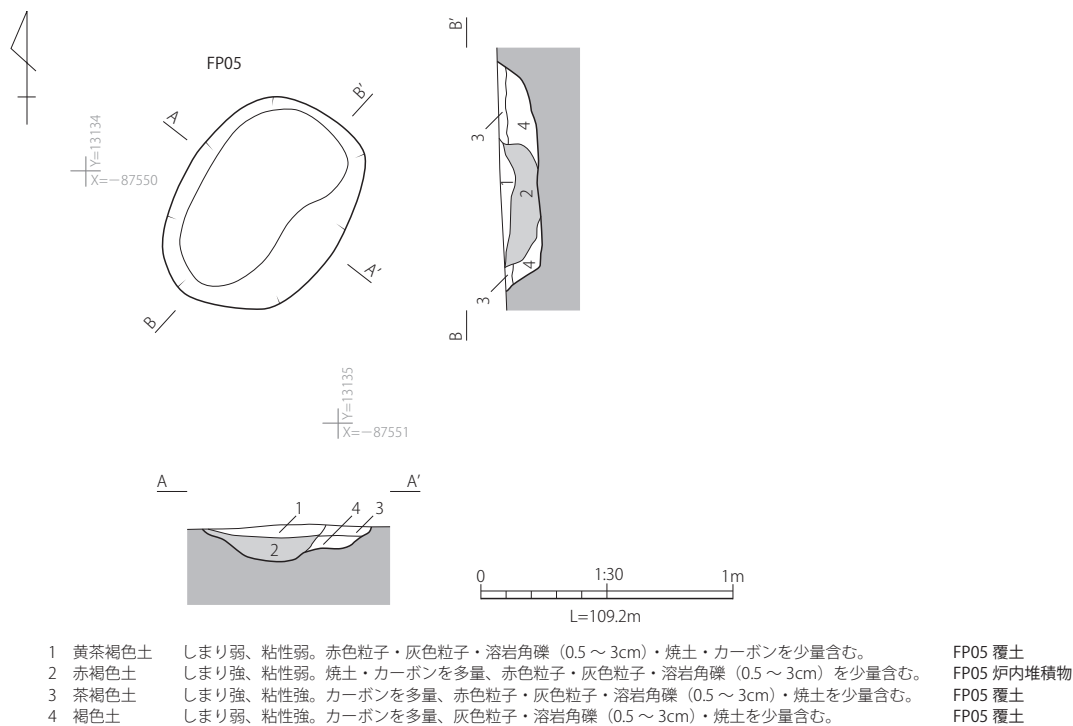
第 17 図 E 地区 本調査区（縄文時代）全体図



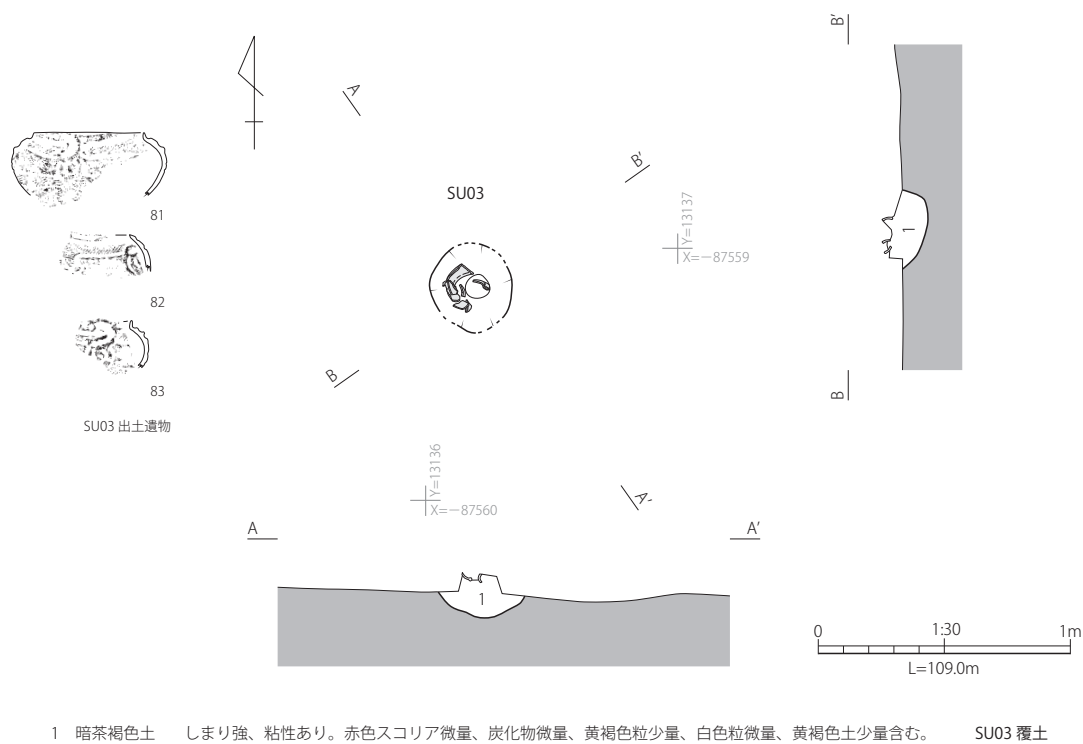
第18図 E地区 本調査区（縄文時代）FP01



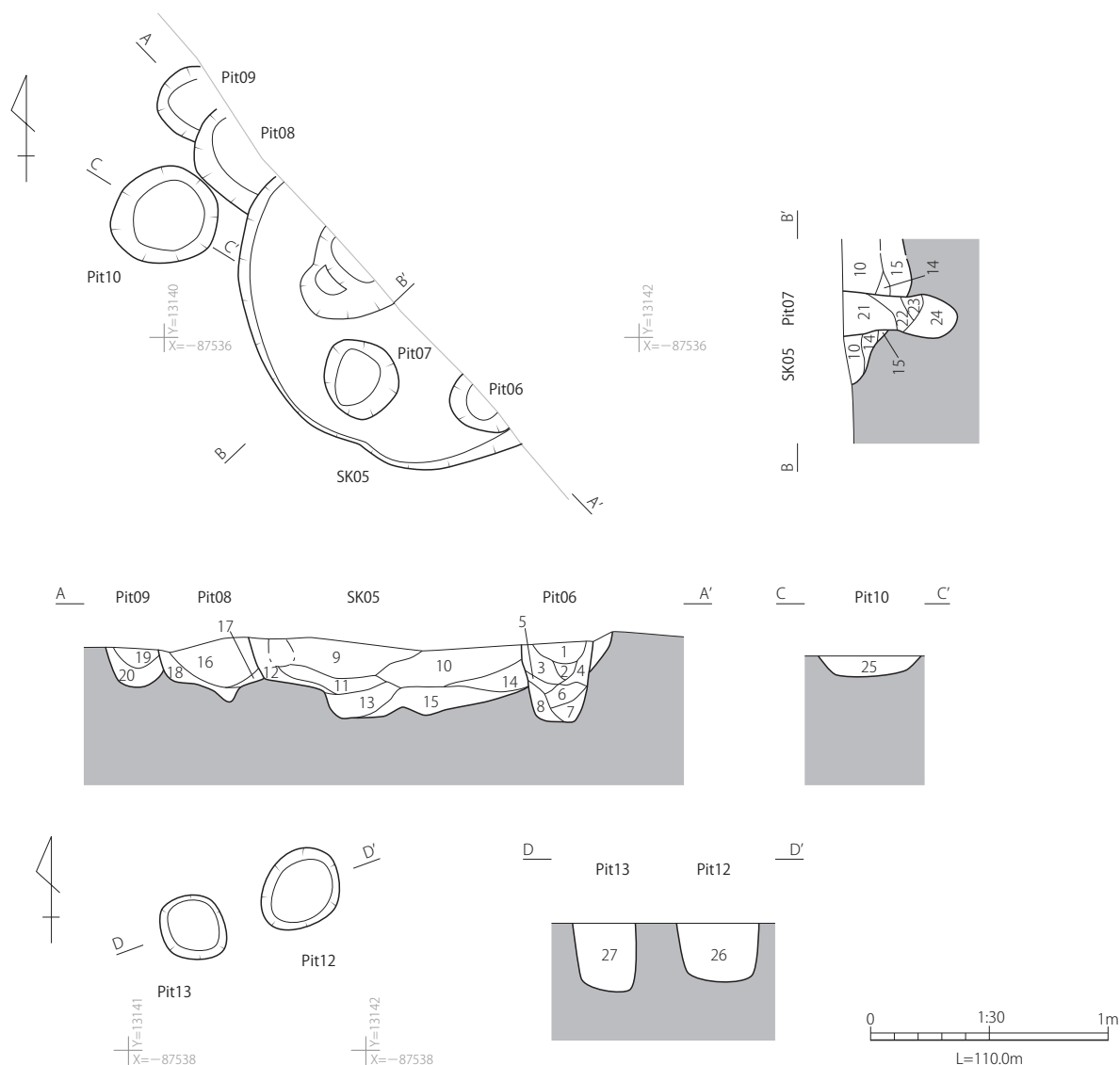
第19図 E地区 本調査区（縄文時代）FP03・FP04



第20図 E地区 本調査区（縄文時代）FP05

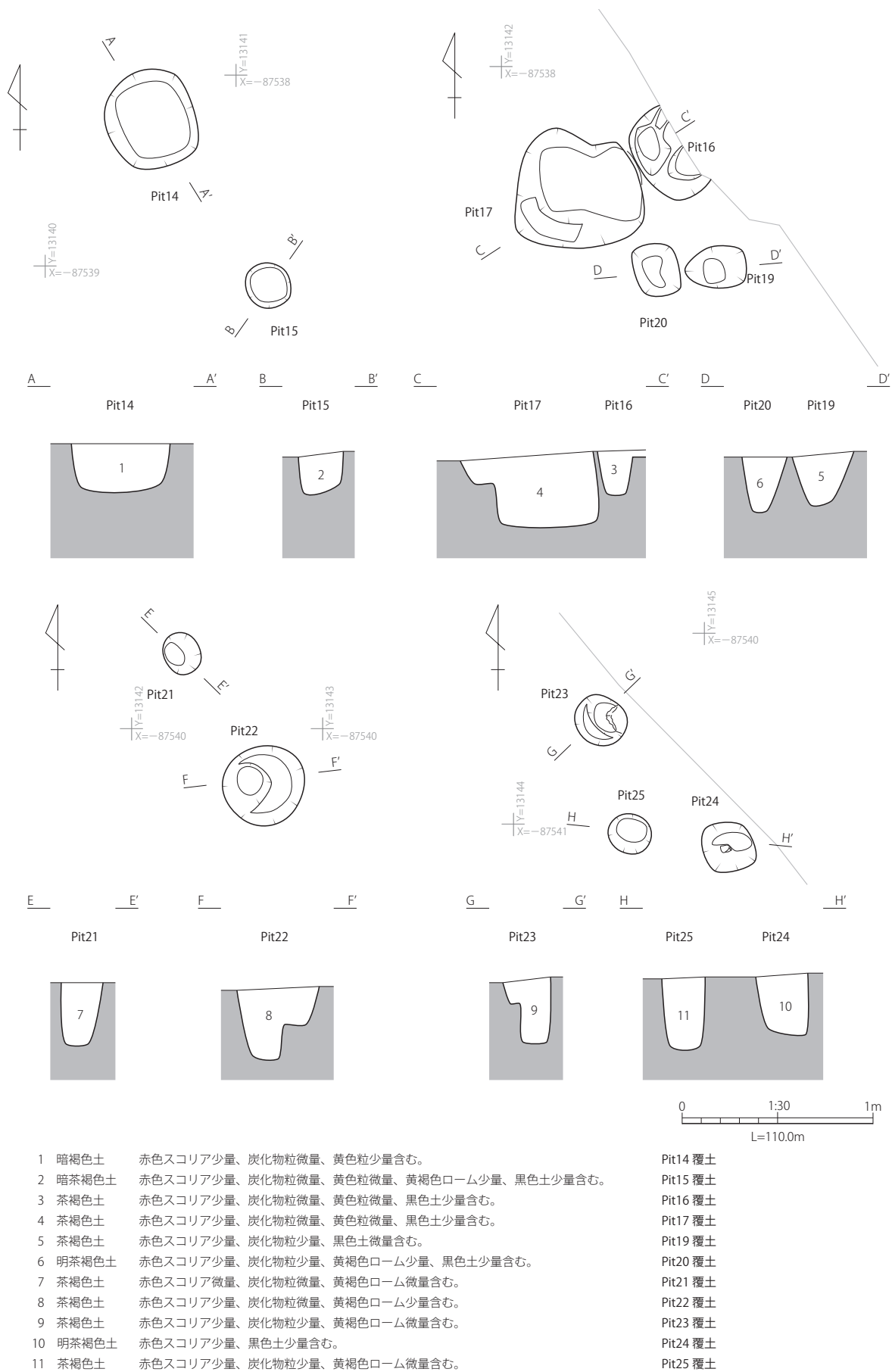


第21図 E地区 本調査区（縄文時代）SU03

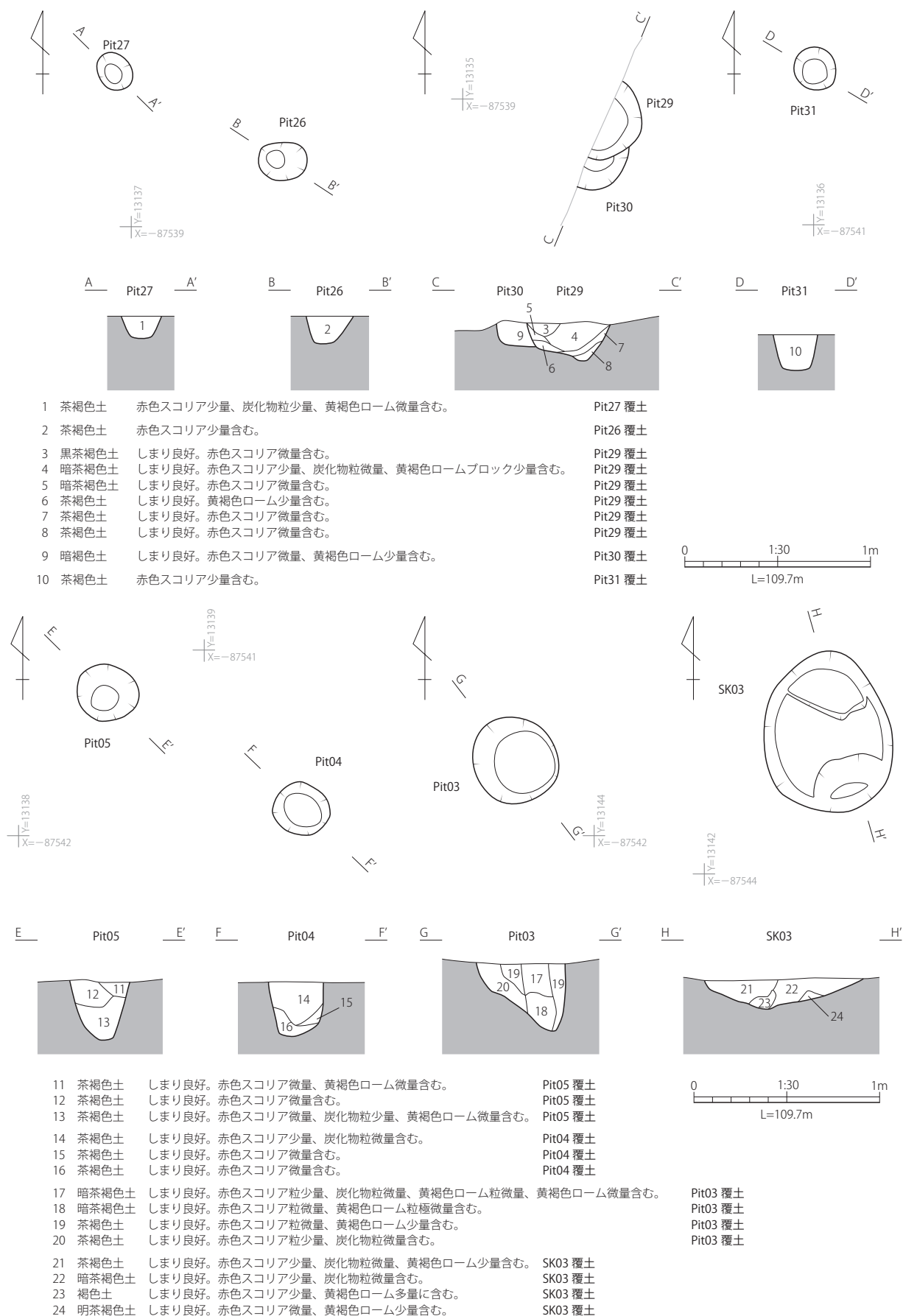


- |          |   |          |
|----------|---|----------|
| 1 茶褐色土   | しまり良好。赤色スコリア・黄褐色土を少量、黄色粒を微量含む。                      | Pit06 覆土 |
| 2 茶褐色土   | しまり良好。赤色スコリア・黄褐色土を微量含む。                             | Pit06 覆土 |
| 3 黒茶褐色土  | しまり良好。赤色スコリアを少量、炭化物粒・黄褐色土を微量含む。                     | Pit06 覆土 |
| 4 黒茶褐色土  | しまり良好。赤色スコリアを微量、炭化物粒を極微量含む。                         | Pit06 覆土 |
| 5 茶褐色土   | しまり良好。赤色スコリア・炭化物粒を極微量、黄褐色土小ブロックを微量含む。               | Pit06 覆土 |
| 6 暗茶褐色土  | しまり良好。赤色スコリアを微量、炭化物粒を極微量含む。                         | Pit06 覆土 |
| 7 暗茶褐色土  | しまり良好。赤色スコリアを微量、炭化物粒を極微量含む。                         | Pit06 覆土 |
| 8 褐色土    | しまり良好。赤色スコリアを極微量、黄褐色土小ブロックを少量、黄色粒を微量含む。             | Pit06 覆土 |
| 9 黒茶褐色土  | しまり良好。赤色スコリア・黄褐色粒を少量、炭化物粒・黄褐色土を微量含む。                | SK05 覆土  |
| 10 暗茶褐色土 | しまり良好。赤色スコリア・黄褐色土を少量、炭化物粒・黄褐色粒を微量含む。                | SK05 覆土  |
| 11 黒茶褐色土 | しまり良好。赤色スコリア・黄褐色土を少量、炭化物粒・黄褐色粒を微量含む。                | SK05 覆土  |
| 12 暗茶褐色土 | しまり良好。赤色スコリア・黄褐色土を少量、炭化物粒を微量、黄褐色粒を多量に含む。            | SK05 覆土  |
| 13 黒褐色土  | しまり良好。赤色スコリア・黄褐色土を少量、炭化物粒を微量、黄褐色粒を少量含む。             | SK05 覆土  |
| 14 茶褐色土  | しまり良好。赤色スコリアを微量、黄褐色土を少量含む。                          | SK05 覆土  |
| 15 茶褐色土  | しまり良好。赤色スコリアを微量、黄褐色土ブロックを少量、炭化物粒を極微量含む。             | SK05 覆土  |
| 16 黒褐色土  | しまり良好。赤色スコリア・炭化物粒・黄褐色粒・溶岩礫を少量含む。                    | Pit08 覆土 |
| 17 暗茶褐色土 | しまり良好。赤色スコリア・炭化物粒を微量、黄褐色土を少量含む。                     | Pit08 覆土 |
| 18 暗褐色土  | しまり良好。赤色スコリア・炭化物粒・黄褐色粒を微量、黄褐色土を多量に含む。               | Pit08 覆土 |
| 19 黒褐色土  | しまり良好。赤色スコリア・炭化物粒を少量含む。                             | Pit09 覆土 |
| 20 褐色土   | しまり良好。赤色スコリア・炭化物粒・黄褐色土を微量、溶岩礫を少量含む。                 | Pit09 覆土 |
| 21 暗茶褐色土 | しまり良好。赤色スコリア・黄褐色粒を微量含む。                             | Pit07 覆土 |
| 22 茶褐色土  | しまり良好。赤色スコリアを極微量、黄褐色粒を微量、黄褐色土を少量含む。                 | Pit07 覆土 |
| 23 褐色土   | しまり良好。黄褐色土を多量に含む。                                   | Pit07 覆土 |
| 24 暗褐色土  | しまり良好。炭化物粒を微量、黄褐色土を多量に含む。                           | Pit07 覆土 |
| 25 暗茶褐色土 | しまり良好、粘性強。赤色スコリア少量、炭化物粒少量、黄褐色土少量、黄褐色ブロック少量、黒色土微量含む。 | Pit10 覆土 |
| 26 暗茶褐色土 | 赤色スコリア少量、炭化物粒少量含む。                                  | Pit12 覆土 |
| 27 茶褐色土  | 赤色スコリア少量含む。   | Pit13 覆土 |

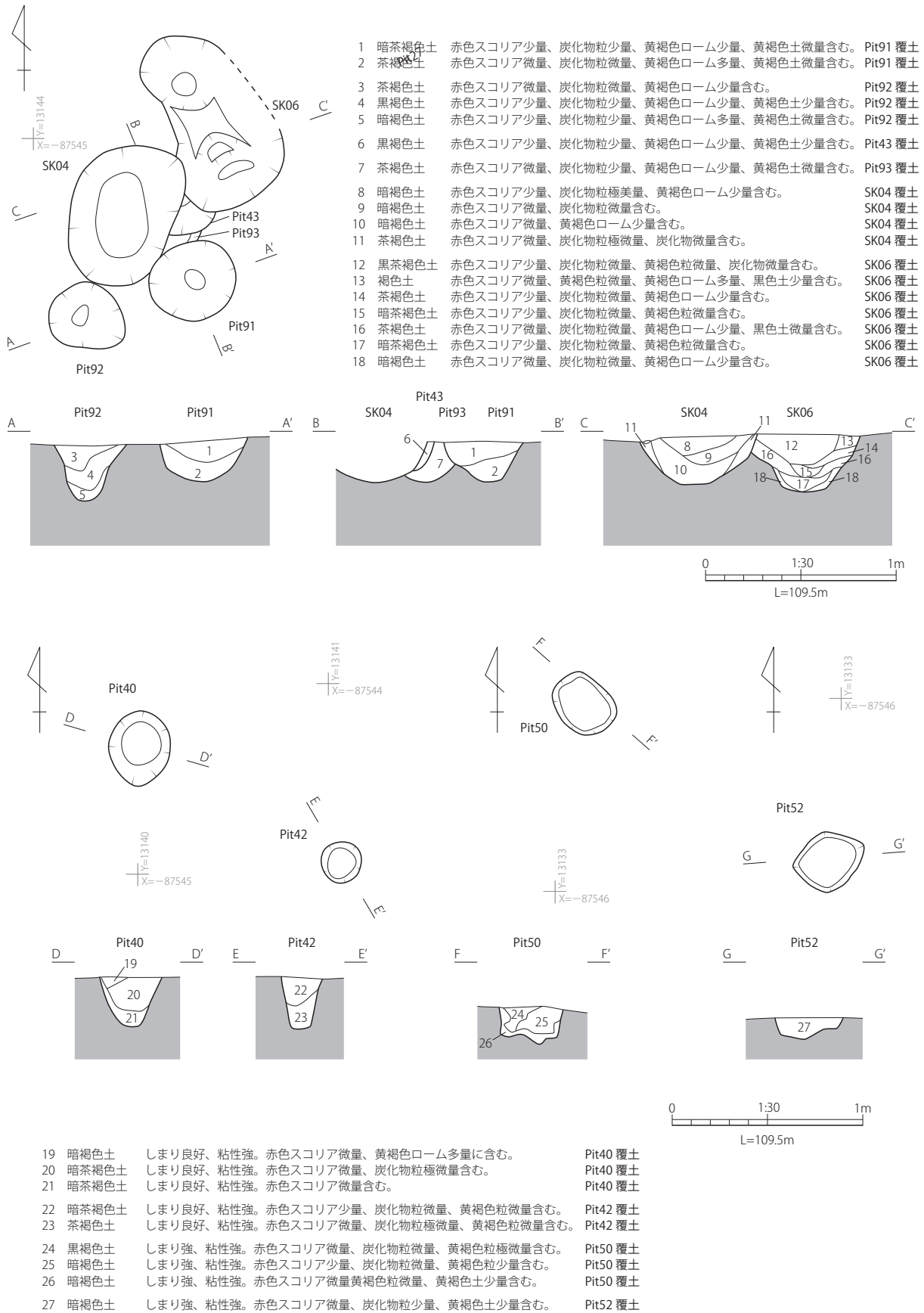
第22図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット(1)



第23図 E地区 本調査区（縄文時代）土坑・ピット（2）

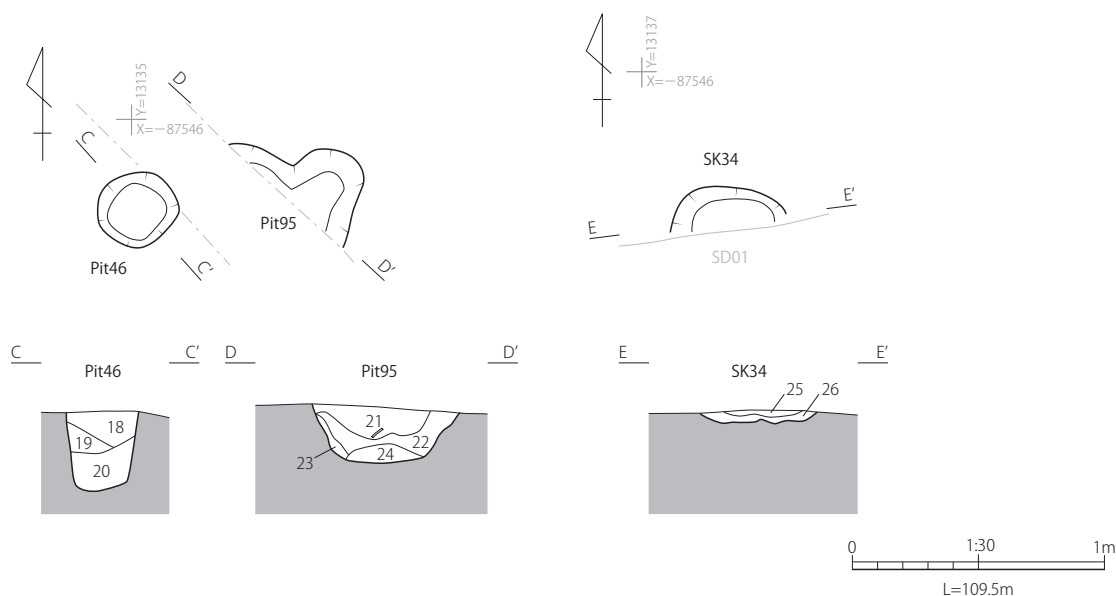
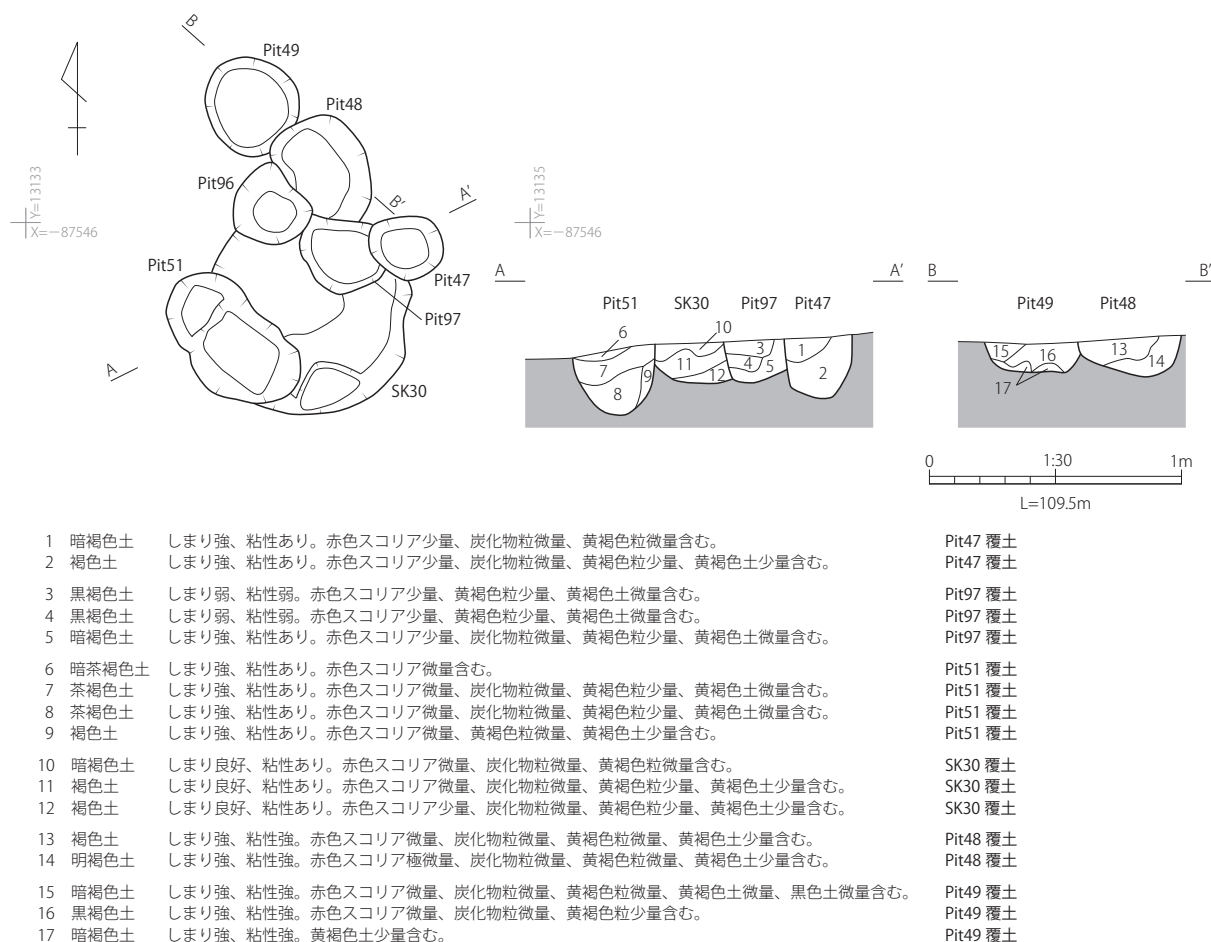


第24図 E地区 本調査区（縄文時代）土坑・ピット（3）

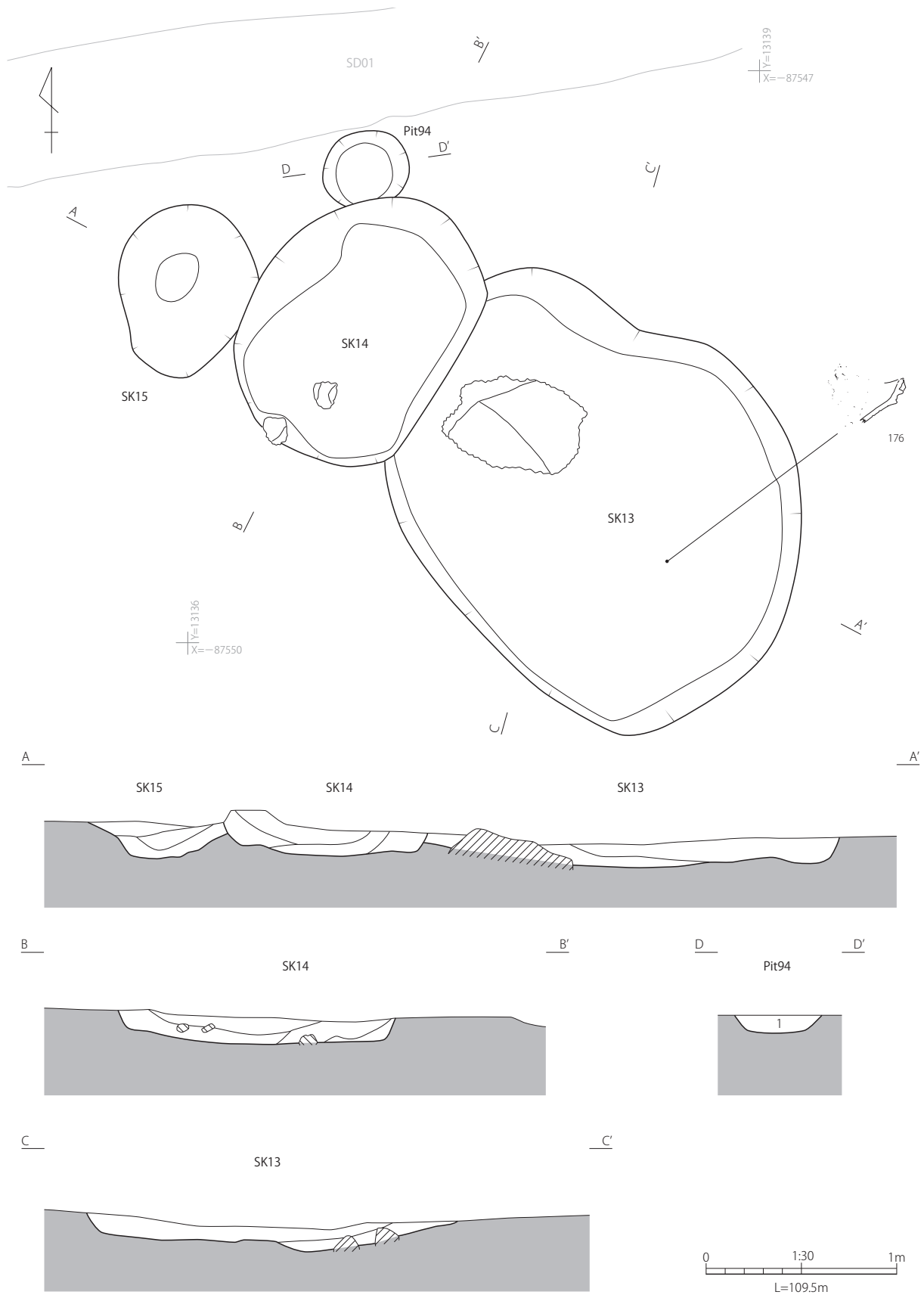


第25図 E地区 本調査区（縄文時代）土坑・ピット（4）





第 26 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ピット (5)

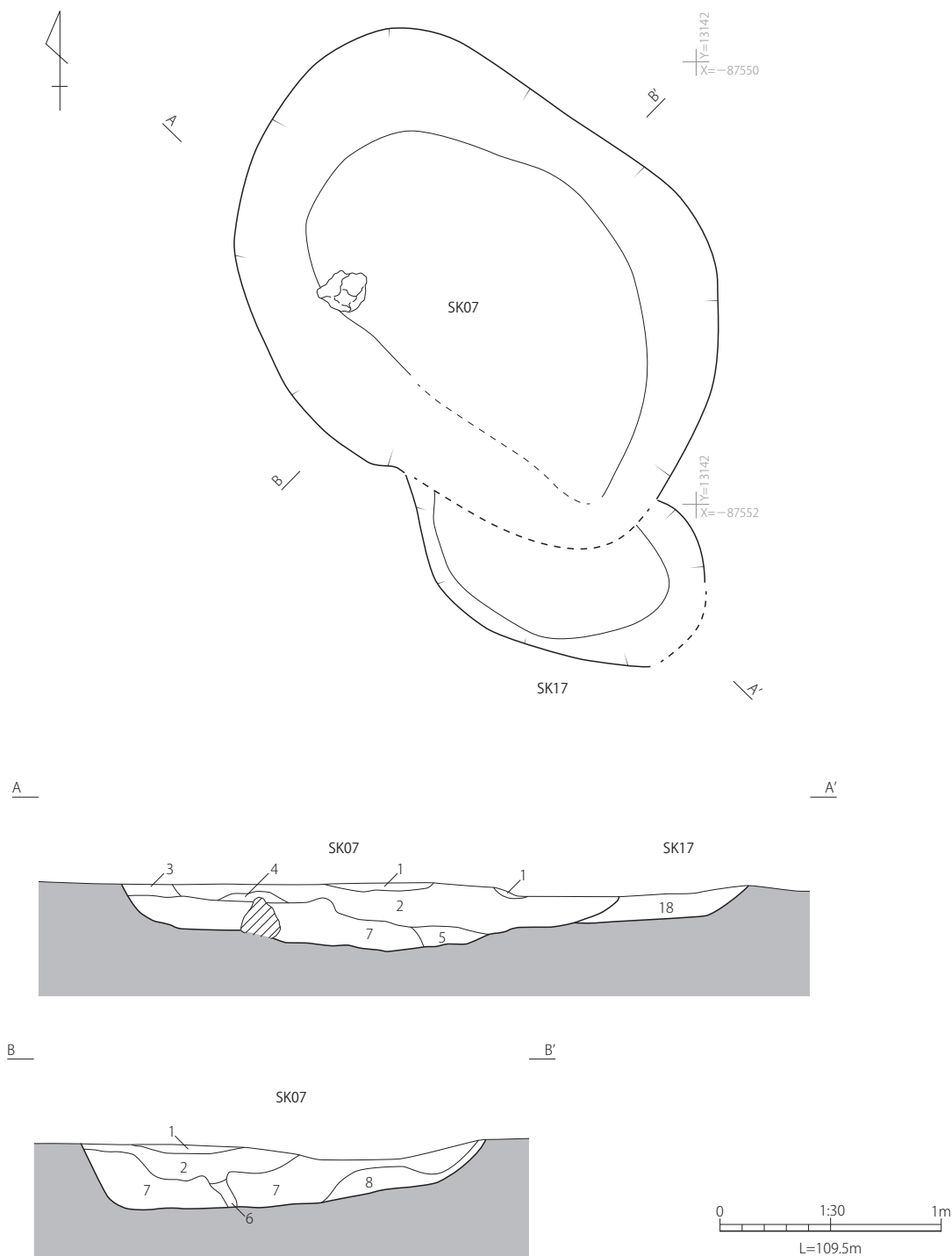


1 茶褐色土 しまり強、粘性強。赤色スコリア少量、炭化物粒少量、黄褐色粒微量、白色粒極微量、黄褐色土少量含む。

Pit94 覆土

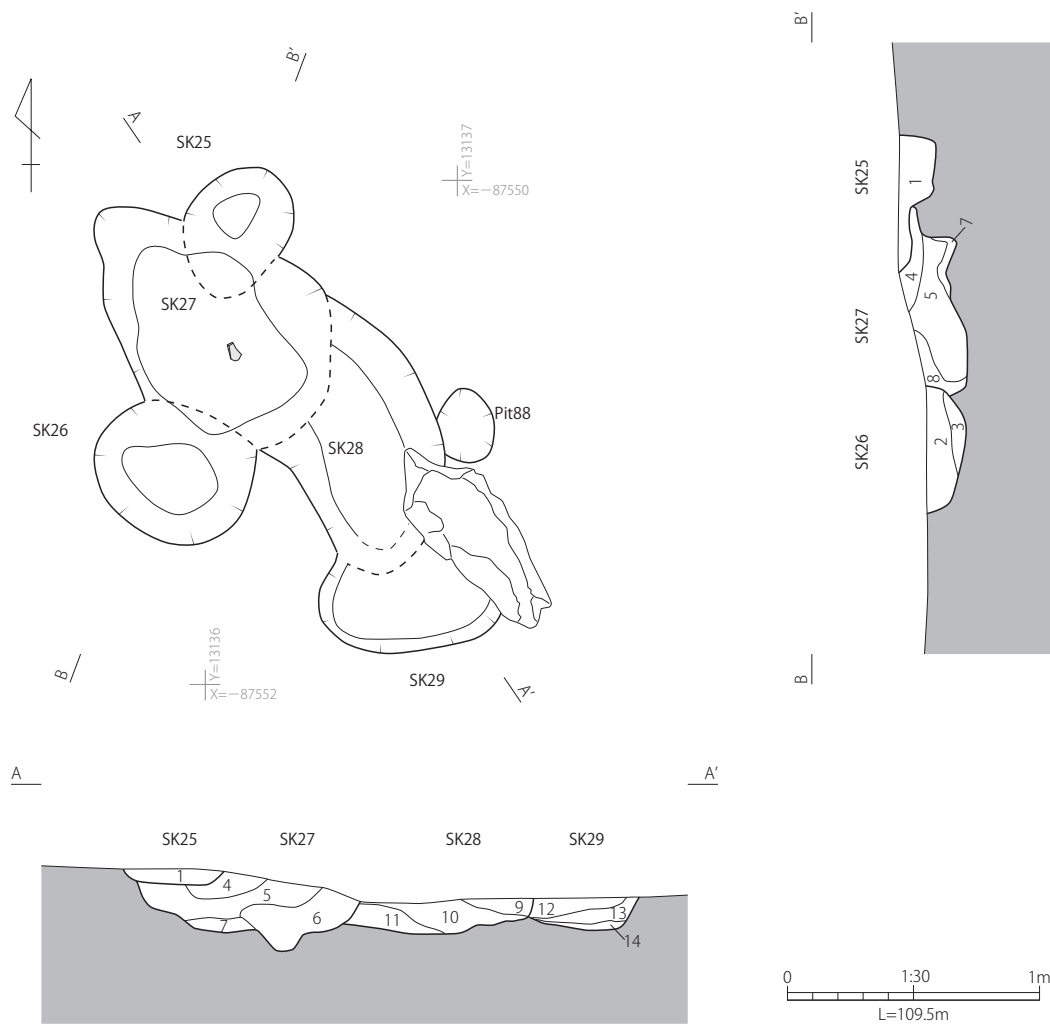
※ SK13～15の土層注記は不明

第27図 E地区 本調査区（縄文時代）土坑・ピット（6）



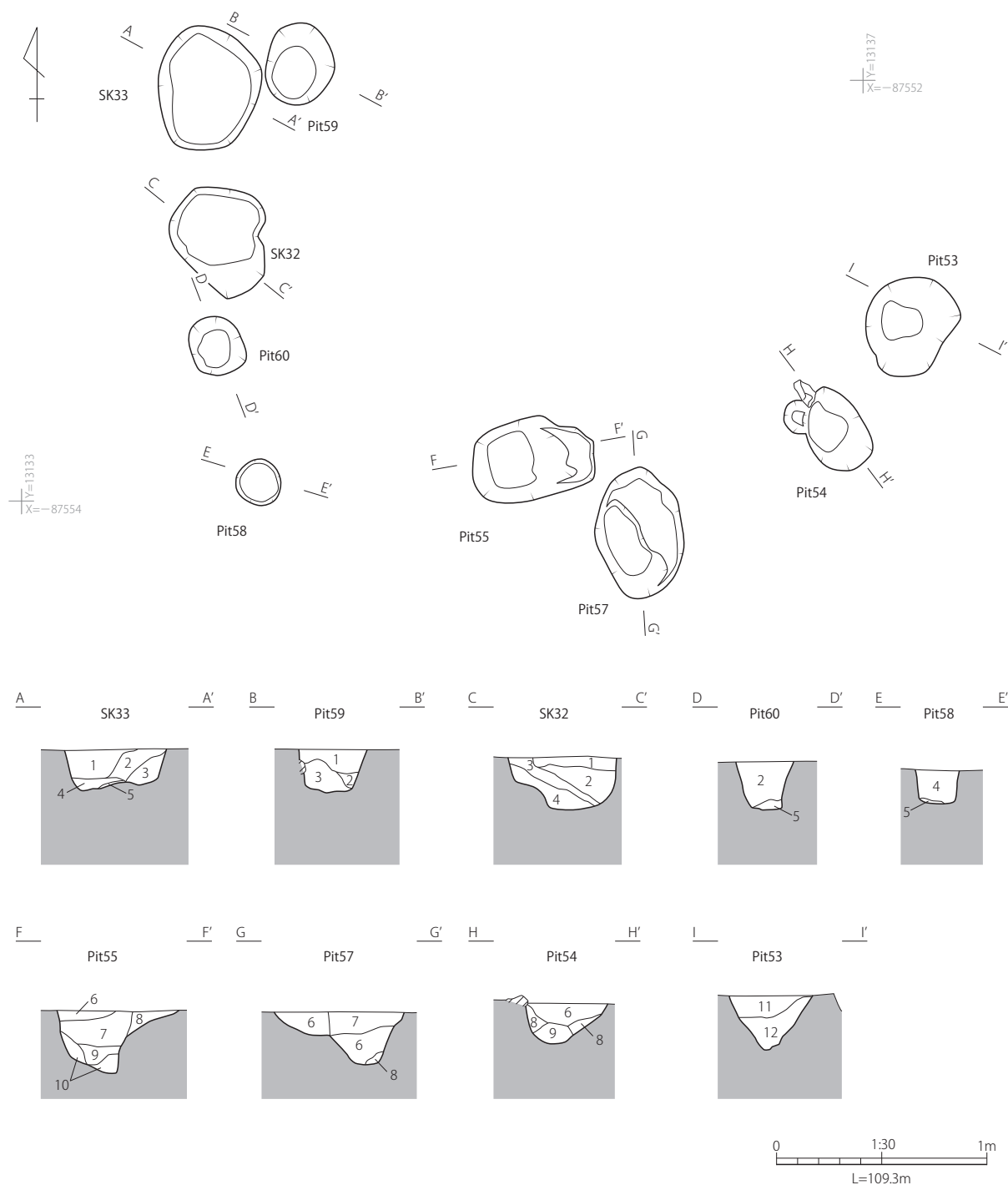
- |   |       |   |         |
|---|-------|---|---------|
| 1 | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性弱。赤色粒子微量、白色粒子極微量、溶岩角礫（2~10mm）微量、カーボン極微量含む。                 | SK07 覆土 |
| 2 | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性弱。赤色粒子微量、灰色粒子極微量、溶岩角礫（2~10mm）微量、黄褐色粒子微量、カーボン極微量含む。         | SK07 覆土 |
| 3 | 茶褐色土  | しまりやや強、粘性強。赤色粒子極微量、白色粒子極微量、黄褐色粒子少量、黄褐色土極多量、カーボン微量含む。              | SK07 覆土 |
| 4 | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性弱。赤色粒子微量、白色粒子極微量、溶岩角礫（2~10mm）微量、黄褐色粒子少量含む。                 | SK07 覆土 |
| 5 | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性弱。赤色粒子微量、白色粒子極微量、溶岩角礫（2~10mm）微量、黄褐色粒子極微量含む。                | SK07 覆土 |
| 6 | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性弱。赤色粒子微量、白色粒子極微量、溶岩角礫（2~10mm）微量含む。                         | SK07 覆土 |
| 7 | 暗茶褐色土 | しまりやや強、粘性やや強。赤色粒子極微量、白色粒子微量、溶岩角礫（2~10mm）微量、黄褐色粒子微量、黄褐色土ブロック多量に含む。 | SK07 覆土 |
| 8 | 茶褐色土  | しまりやや強、粘性強。赤色粒子極微量、白色粒子極微量、黄褐色粒子少量、黄褐色土極多量、カーボン微量含む。              | SK07 覆土 |
| 9 | 茶褐色土  | しまりやや強、粘性強。赤色粒子極微量、白色粒子極微量、黄褐色粒子少量、黄褐色土極多量、カーボン微量含む。              | SK17 覆土 |

第28図 E地区 本調査区（縄文時代）土坑・ピット（7）



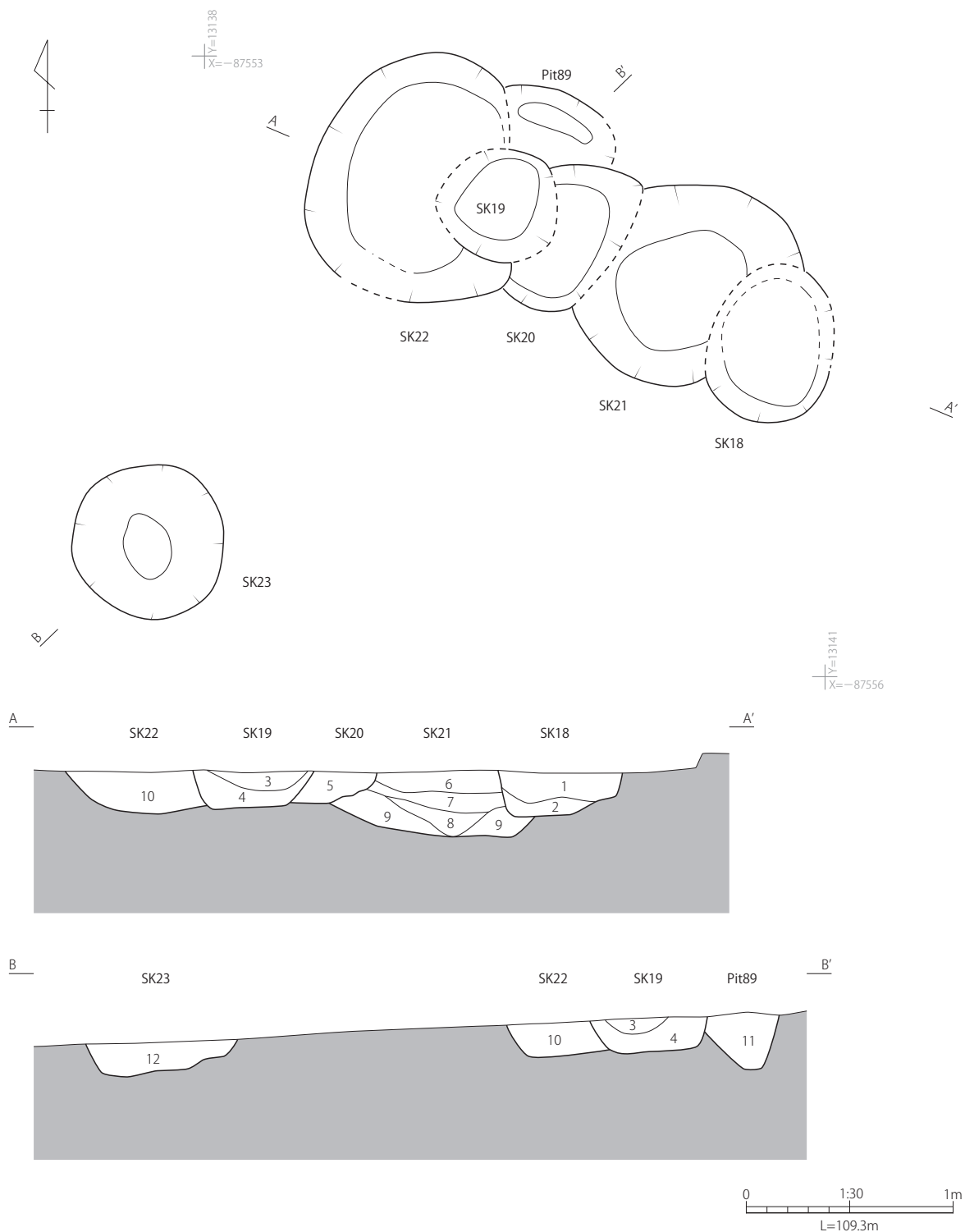
- |    |       |  |         |
|----|-------|--|---------|
| 1  | 暗褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子極微量、灰色粒子極微量、カーボン極微量、暗黄褐色土ブロック微量含む。                                  | SK25 覆土 |
| 2  | 暗褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子微量、黄褐色粒子微量、灰色粒子極微量、溶岩角礫（1cm）やや多量、カーボン極微量、暗黄褐色土ブロック微量含む。             | SK26 覆土 |
| 3  | 茶褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子微量、黄褐色粒子微量、灰色粒子微量、カーボン極微量含む。  | SK26 覆土 |
| 4  | 暗褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子極微量、黄褐色粒子微量、灰色粒子極微量、溶岩角礫（1~3cm）少量、カーボン極微量、暗黄褐色土ブロック微量含む。            | SK27 覆土 |
| 5  | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子微量、黄褐色粒子微量、灰色粒子極微量、溶岩角礫（1~3cm）少量、カーボン極微量、暗黄褐色土ブロック微量、褐色土シミ状に少量含む。   | SK27 覆土 |
| 6  | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子微量、黄褐色粒子微量、灰色粒子極微量、溶岩角礫（1~3cm）やや多量、カーボン極微量、暗黄褐色土ブロック微量、褐色土シミ状に少量含む。 | SK27 覆土 |
| 7  | 茶褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子微量、黄褐色粒子やや多量、灰色粒子やや多量、黄褐色土ブロックやや多量に含む。                              | SK27 覆土 |
| 8  | 暗褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子微量、黄褐色粒子少量、灰色粒子少量、溶岩角礫（1cm）やや多量に含む。                                 | SK27 覆土 |
| 9  | 暗褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子微量、黄褐色粒子微量、灰色粒子極微量、溶岩角礫（1cm）やや多量、カーボン極微量、暗黄褐色土ブロック微量含む。             | SK28 覆土 |
| 10 | 暗褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子微量、黄褐色粒子微量、灰色粒子極微量、溶岩角礫（1cm）やや多量、カーボン極微量、暗黄褐色土ブロック微量含む。             | SK28 覆土 |
| 11 | 茶褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子微量、黄褐色粒子やや多量、灰色粒子微量、溶岩角礫（1cm）少量、暗黄褐色土ブロック少量含む。                      | SK28 覆土 |
| 12 | 暗褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子少量、黄褐色粒子微量、灰色粒子極微量、溶岩角礫（1cm）やや多量、カーボン極微量、暗黄褐色土ブロック微量、褐色土ブロック極微量含む。  | SK29 覆土 |
| 13 | 暗褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子微量、黄褐色粒子少量、灰色粒子少量、溶岩角礫（1cm）やや多量に含む。                                 | SK29 覆土 |
| 14 | 黄褐色土  | しまり強、粘性やや弱。赤色粒子極微量、黄褐色粒子微量、灰色粒子微量、溶岩角礫（5mm）微量、暗黄褐色土ブロック少量、褐色土ブロック少量含む。             | SK29 覆土 |

第29図 E地区 本調査区（縄文時代）土坑・ピット（8）



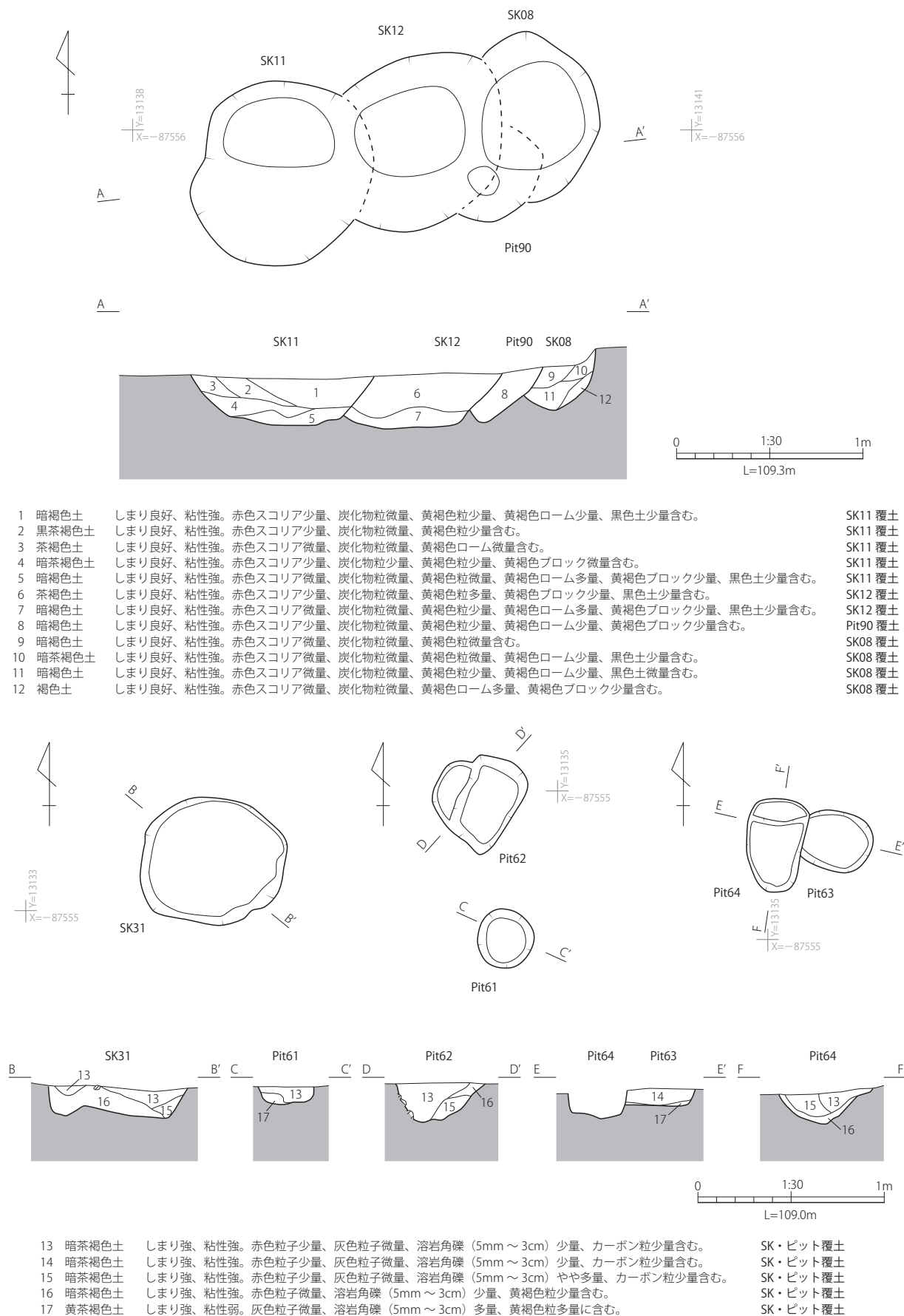
- |    |       |   |          |
|----|-------|---|----------|
| 1  | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性強。赤色粒子少量、灰色粒子微量、溶岩角礫（5mm～3cm）少量、カーボン粒少量含む。   | SK・ビット覆土 |
| 2  | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性強。赤色粒子少量、灰色粒子微量、溶岩角礫（5mm～3cm）少量、カーボン粒少量含む。   | SK・ビット覆土 |
| 3  | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性強。赤色粒子少量、灰色粒子微量、溶岩角礫（5mm～3cm）やや多量、カーボン粒少量含む。 | SK・ビット覆土 |
| 4  | 暗茶褐色土 | しまり強、粘性強。赤色粒子微量、溶岩角礫（5mm～3cm）少量、黄褐色粒少量含む。           | SK・ビット覆土 |
| 5  | 黄茶褐色土 | しまり強、粘性弱。灰色粒子微量、溶岩角礫（5mm～3cm）多量、黄褐色粒多量に含む。          | SK・ビット覆土 |
| 6  | 暗褐色土  | しまりやや強、粘性強。赤色スコリア少量、炭化物粒微量、黄褐色粒少量含む。                | SK・ビット覆土 |
| 7  | 暗褐色土  | しまりやや強、粘性強。赤色スコリアやや多量、炭化物粒微量、黄褐色粒少量含む。              | SK・ビット覆土 |
| 8  | 暗褐色土  | しまりやや弱、粘性強。炭化物粒少量、黄褐色粒やや多量、黄褐色土やや多量に含む。             | SK・ビット覆土 |
| 9  | 暗褐色土  | しまりやや弱、粘性強。炭化物粒やや多量、黄褐色粒やや多量に含む。                    | SK・ビット覆土 |
| 10 | 暗褐色土  | しまりやや弱、粘性強。炭化物粒少量、黄褐色粒多量、黄褐色土やや多量に含む。               | SK・ビット覆土 |
| 11 | 暗褐色土  | しまり強、粘性強。赤色スコリア微量、炭化物粒やや多量、黄褐色粒微量、黄褐色土やや多量に含む。      | SK・ビット覆土 |
| 12 | 暗褐色土  | しまりやや弱、粘性強。赤色スコリアやや多量、炭化物粒微量、黄褐色粒やや多量に含む。           | SK・ビット覆土 |

第30図 E地区 本調査区（縄文時代）土坑・ピット（9）

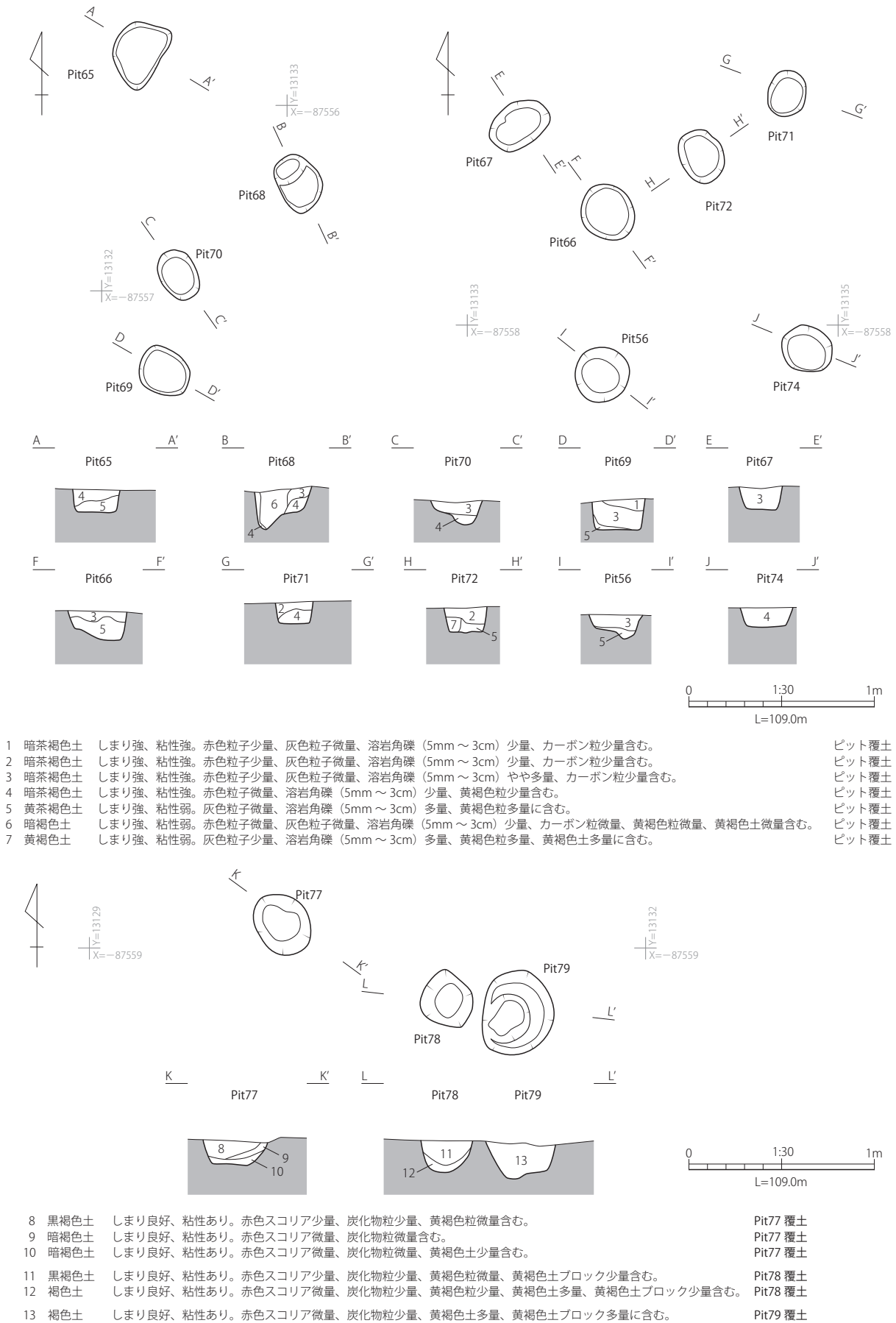


- |         |   |          |
|---------|---|----------|
| 1 暗褐色土  | 赤色スコリア少量、炭化物粒微量、黄褐色粒少量、黄褐色土少量含む。            | SK18 覆土  |
| 2 黒褐色土  | 赤色スコリア少量、炭化物粒少量、黄褐色粒少量、黄褐色ブロック少量含む。         | SK18 覆土  |
| 3 褐色土   | 赤色スコリア微量、炭化物粒微量、黄褐色粒微量、溶岩礫少量含む。             | SK19 覆土  |
| 4 暗褐色土  | 赤色スコリア微量、炭化物粒少量、黄褐色粒微量、黄褐色土少量含む。            | SK19 覆土  |
| 5 暗褐色土  | 赤色スコリア微量、炭化物粒微量、黄褐色粒微量、黄褐色土微量含む。            | SK20 覆土  |
| 6 褐色土   | 赤色スコリア微量、炭化物粒微量、黄褐色粒微量含む。                   | SK21 覆土  |
| 7 暗褐色土  | 赤色スコリア微量、炭化物粒微量、黄褐色粒微量、黄褐色ブロック微量含む。         | SK21 覆土  |
| 8 黒褐色土  | 赤色スコリア少量、炭化物粒微量、黄褐色粒少量、黄褐色ブロック少量含む。         | SK21 覆土  |
| 9 暗褐色土  | 赤色スコリア微量、炭化物粒微量、黄褐色粒少量、黄褐色土少量、黄褐色ブロック多量に含む。 | SK21 覆土  |
| 10 暗褐色土 | 赤色スコリア微量、炭化物粒微量、黄褐色粒少量、黄褐色土少量含む。            | SK22 覆土  |
| 11 暗褐色土 | 赤色スコリア少量、炭化物粒少量、黄褐色粒少量、黄褐色土少量含む。            | Pit89 覆土 |
| 12 暗褐色土 | 赤色スコリア微量、炭化物粒微量、黄褐色粒少量、黄褐色土少量、黒色土少量含む。      | SK23 覆土  |

第31図 E地区 本調査区（縄文時代）土坑・ピット（10）

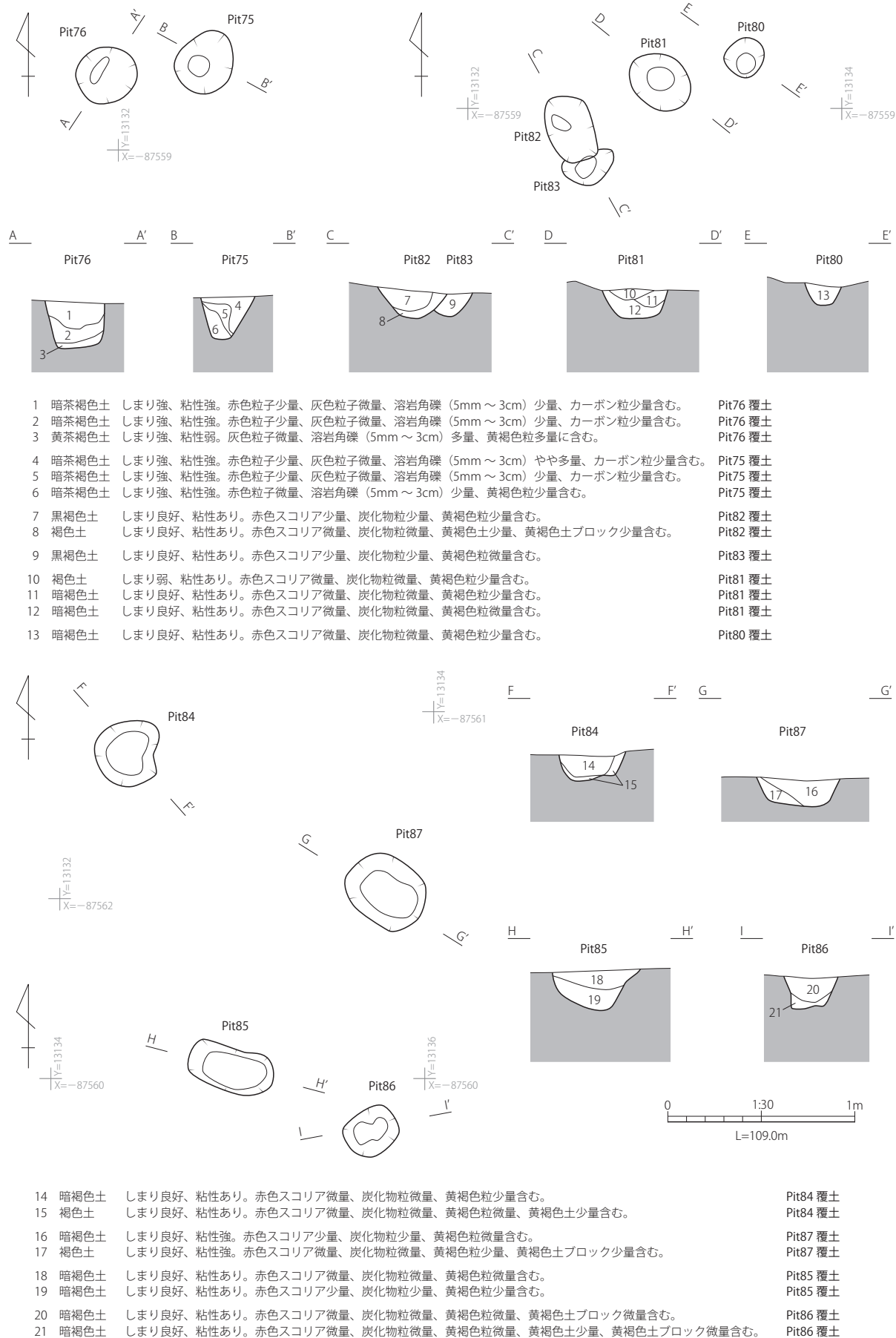


第 32 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ピット (11)



第33図 E地区 本調査区（縄文時代）土坑・ピット（12）





第34図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット (13)

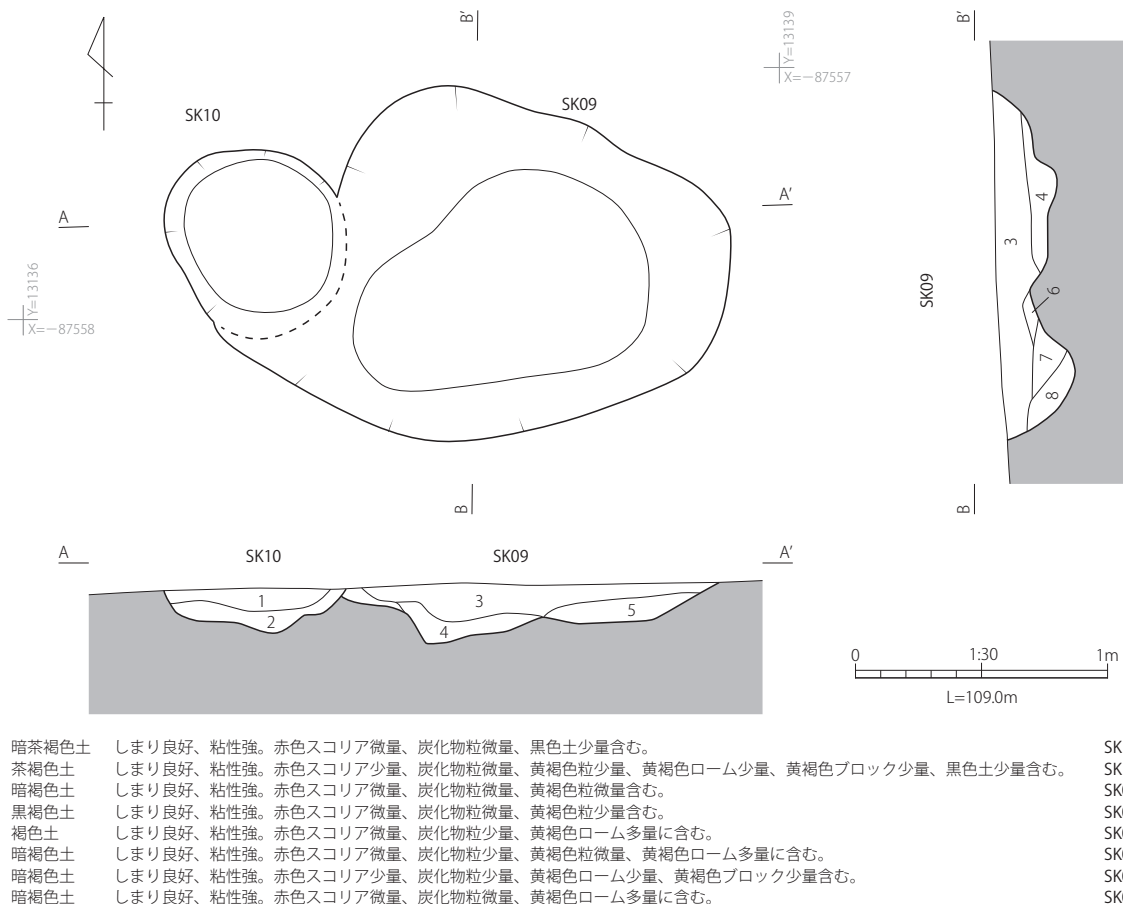
(296・297)で、加曽利B1式と考えられる。なお、中期のものも含まれている可能性があるが、311～325に後期と思われる底部を図示した。

石器は、小型の剥片石器類は、ほぼ黒曜石製で、石鏃(326～329)はすべて無茎凹基の小型なものである。330は原石に近い石塊の一部に刃部を形成した削器で、あるいは両極石核のブランクかもしれない。319～334は楔形石器で、331や332は両極石核の残核である可能性が高い。335は、緑色の軟玉(ネフライト)の剥片で、3～5cm程度の小円礫を両極打撃で剥離したもので、336のような玉斧や玉類の素材と考えられる。336は、非実用的な極小型の緑色軟玉(ネフライト)製定角式磨製石斧で、いわゆる玉斧である。精製の注口土器群の出土とあわせて、E地区が特別な空間であることを示す遺物である。

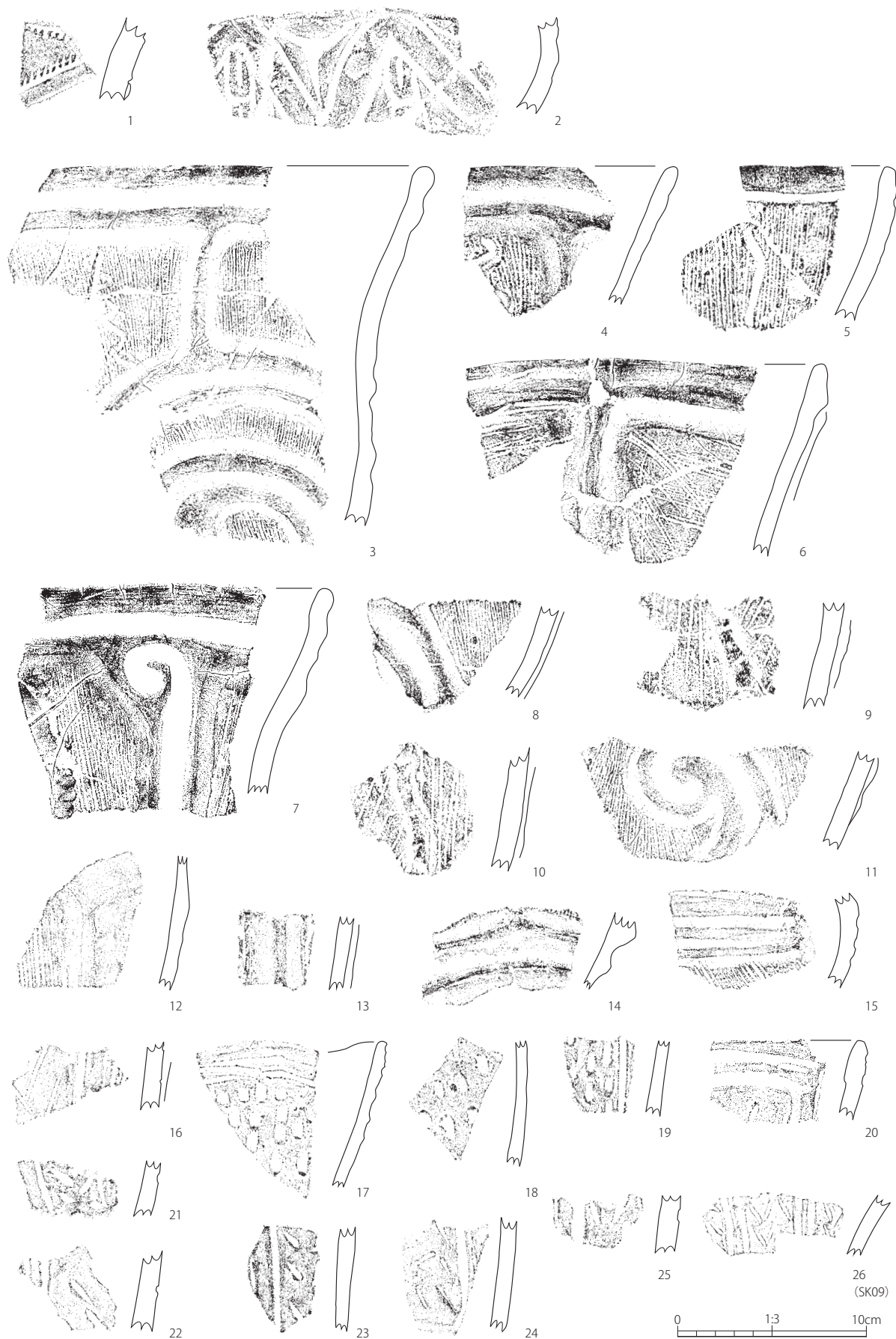
337は、上下が欠損している定角式磨製石斧で、強い被熱によって変質しているが、珪質な石材を素材としている。338～351は打製石斧で、基本形

態は短冊形であるが、338・342・344・351のようにバチ形に近いものや345・3473・346のように挟りが入り、分銅形といえるものがある。また340・341・343のように、リダクションでなく剥片素材そのまま、短い短冊形を呈すものも多く存在する。また、352は礫器としたが、製作技法は打製石斧と同様のため、打製石斧として使用された可能性が高い。

353と354は小円礫素材の石錘で、353は十字に縄を掛ける上下左右に打欠きを行った礫石錘である。354は両端に切れ目を入れた切目石錘で、使用によるものか、楔形石器にリダクションしたか不明だが、両端に打撃痕がみられる。355は敲石で、敲打成形痕が顕著にみられることから、乳棒状磨製石斧からの転用の可能性がある。356・357は敲・磨石で、357は、後期の小型石棒の頭部の可能性がある。358・359は磨・凹石の欠損品である。360・361は、中期の大型石棒の一部と考えられる。



第35図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット(14)

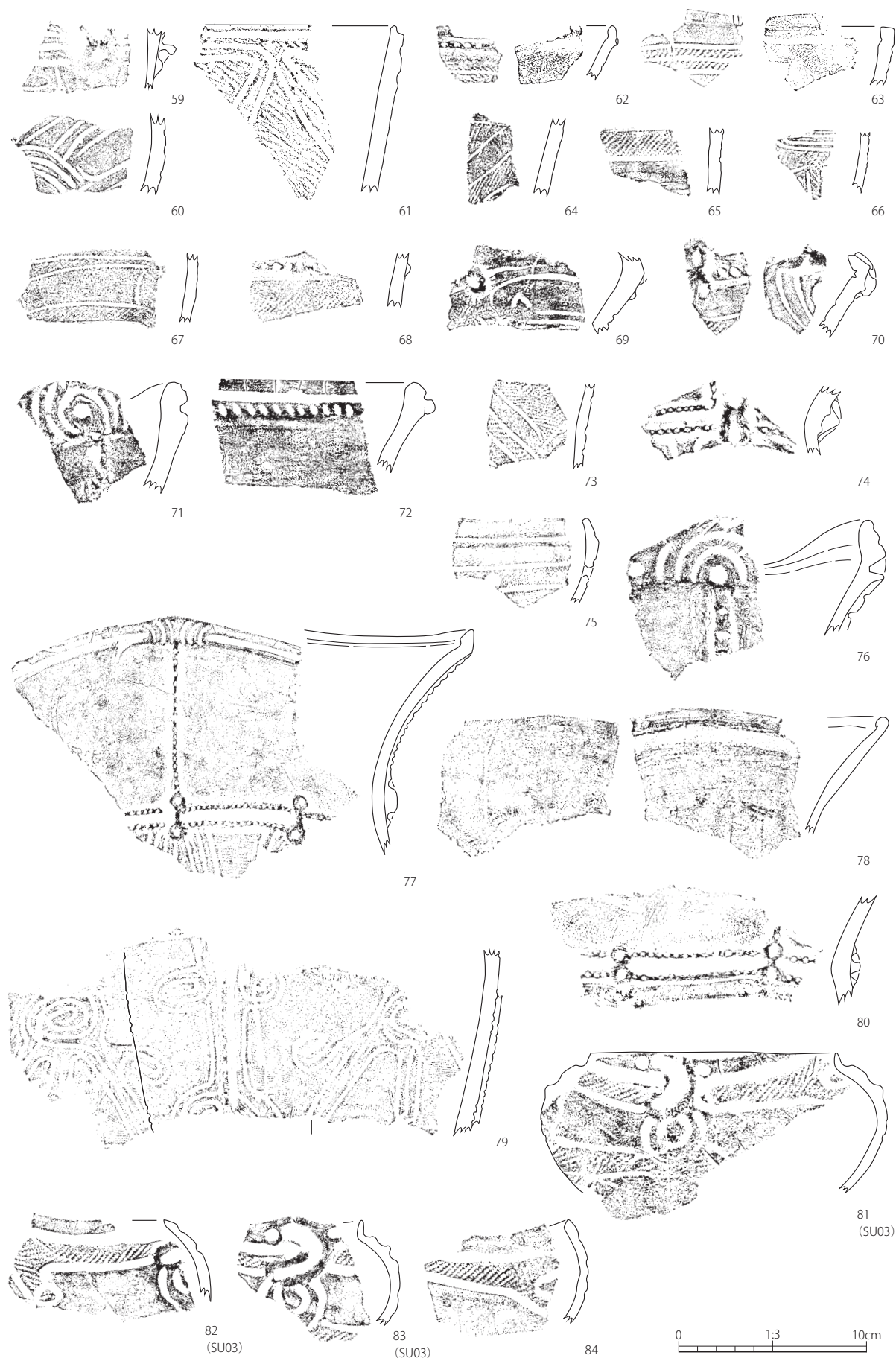


第36図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（1）



第37図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（2）





第38図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（3）

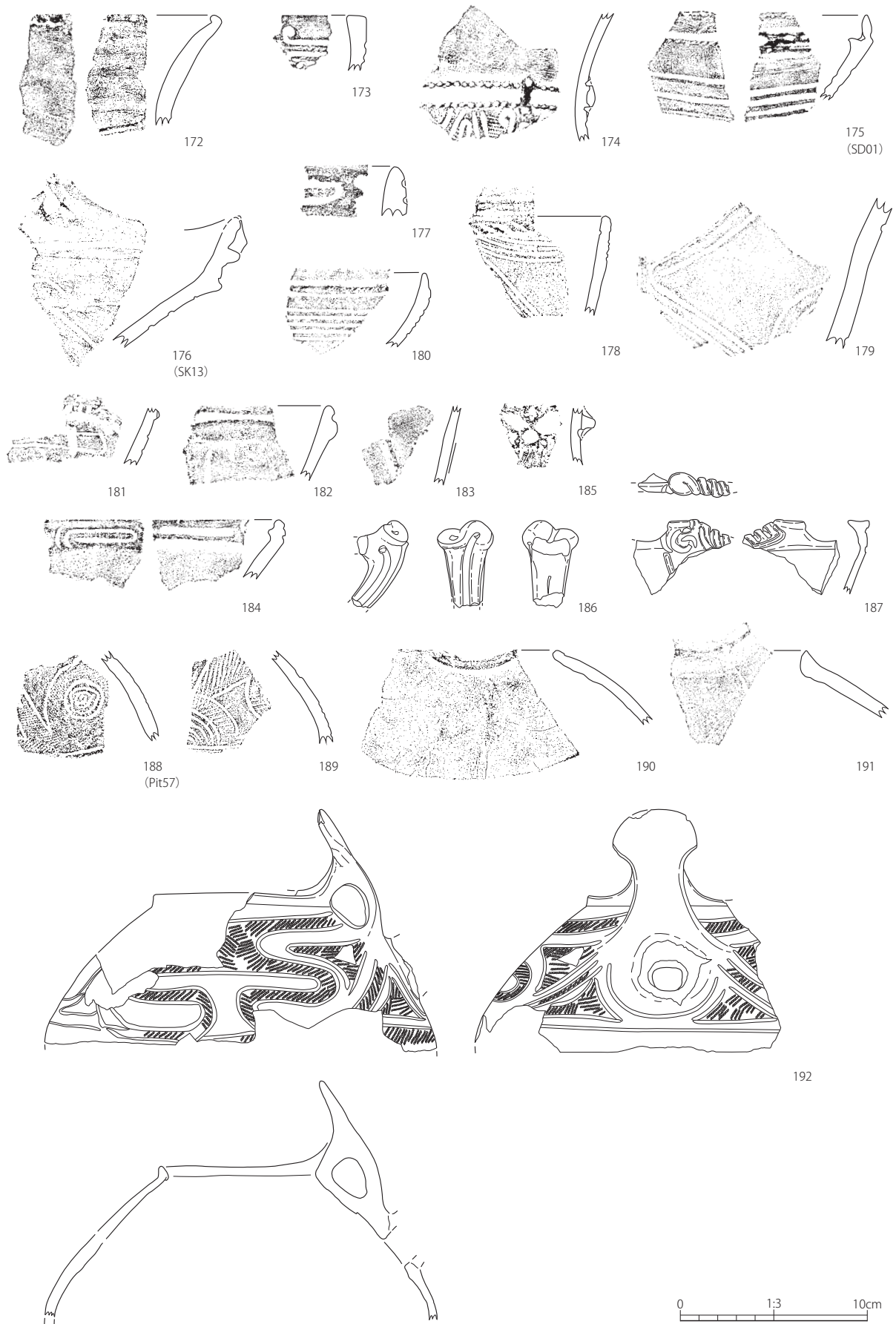


第39図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(4)



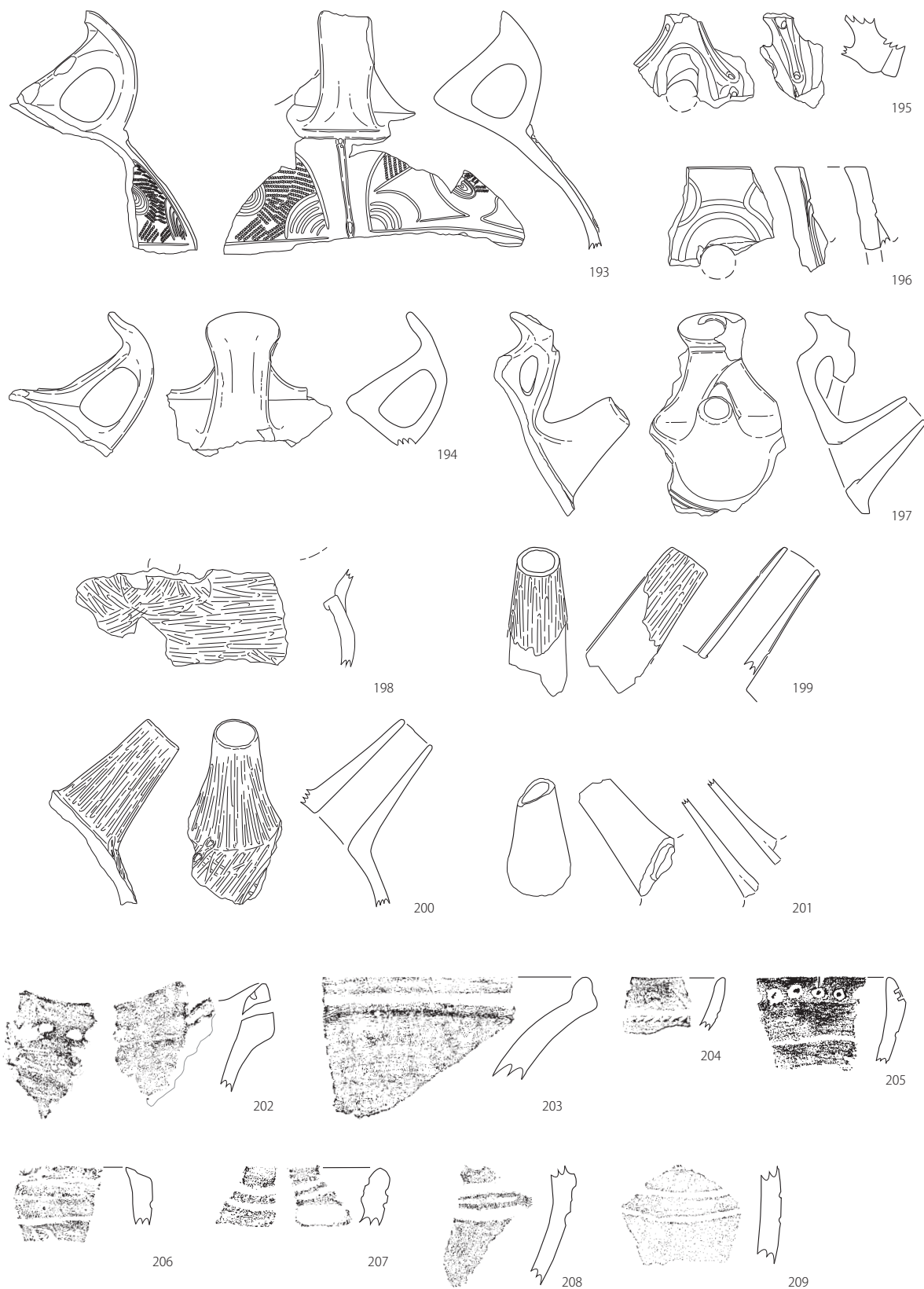
第40図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(5)



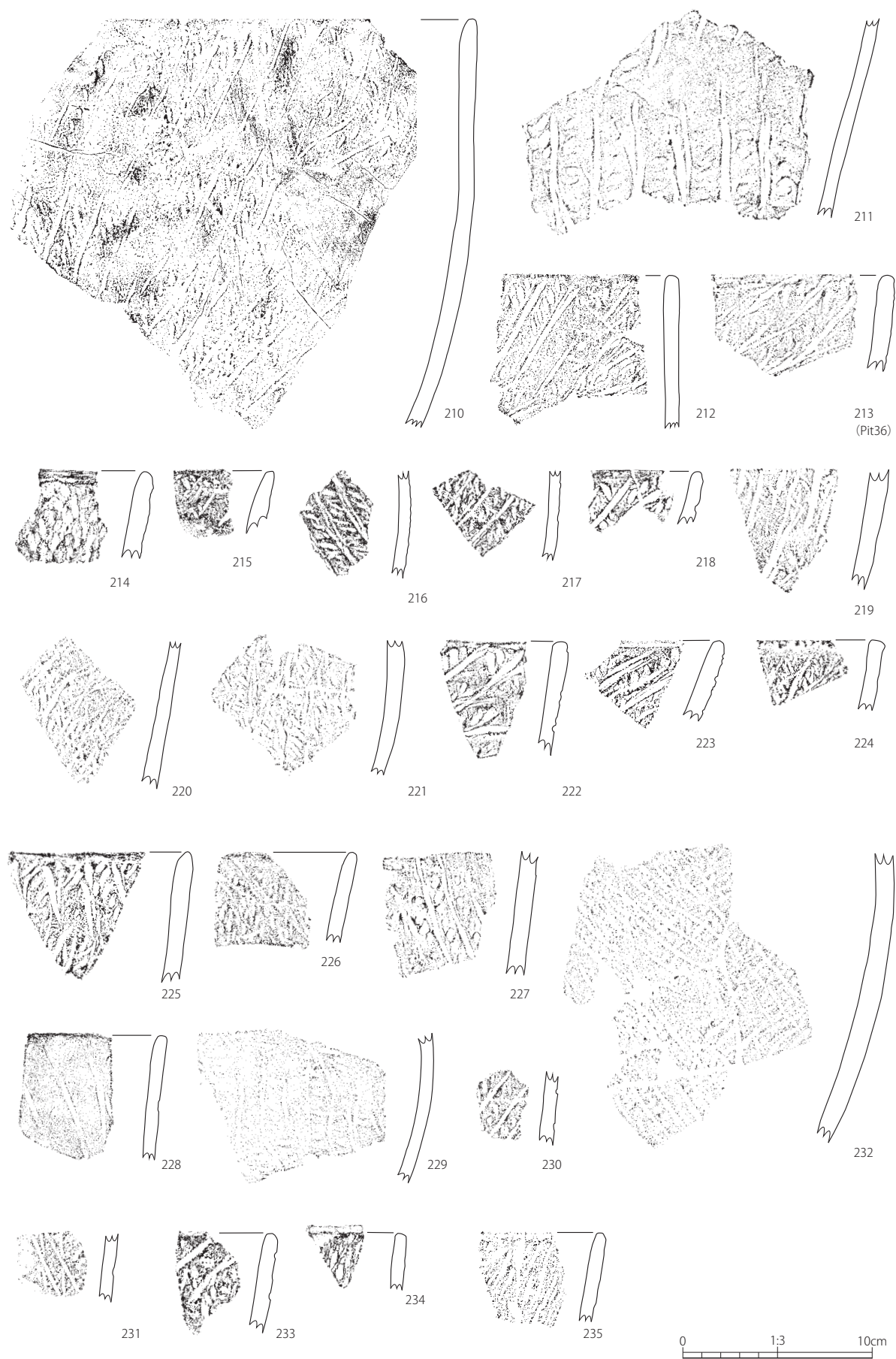


第41図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（6）

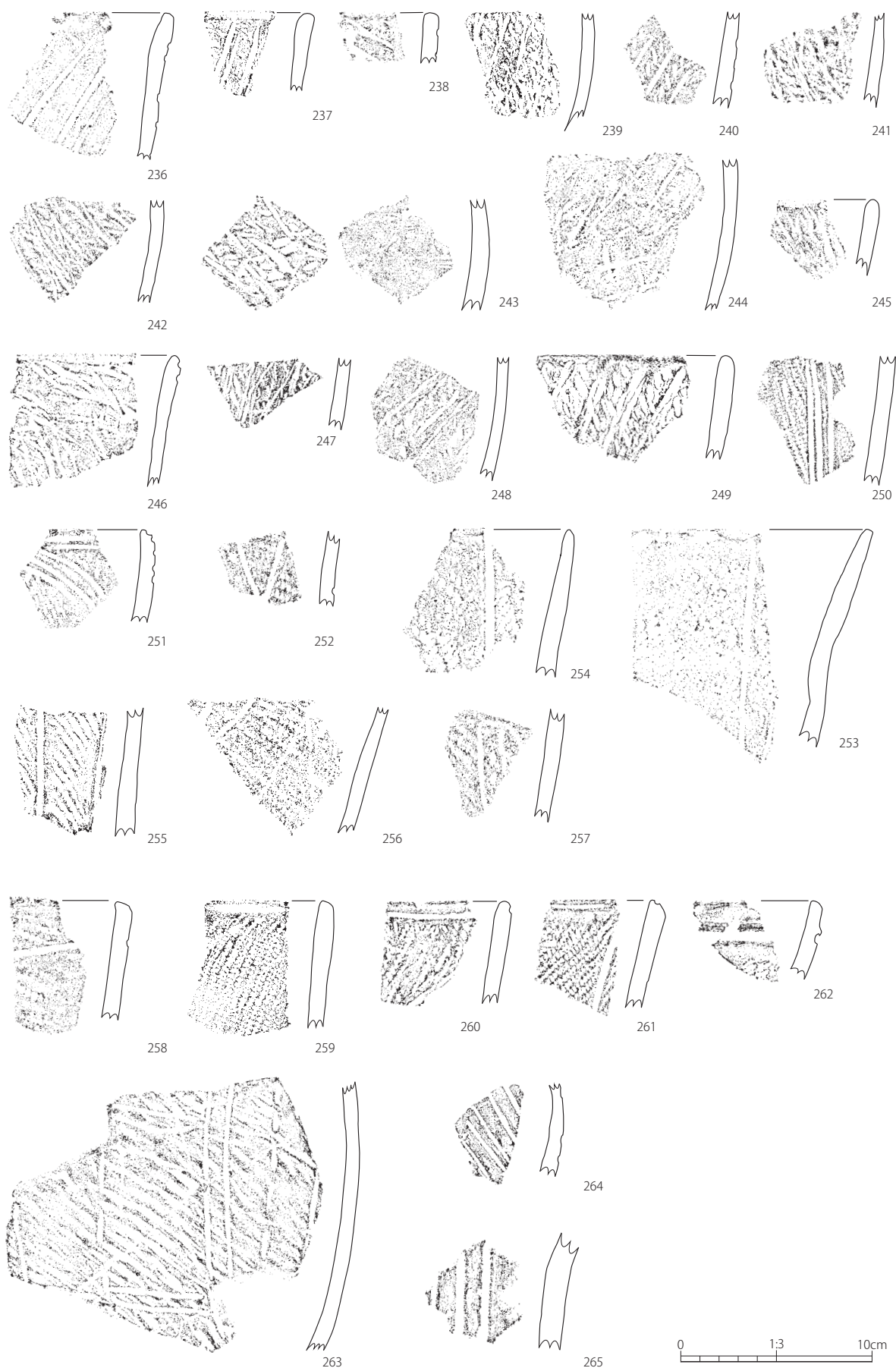




第42図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（7）

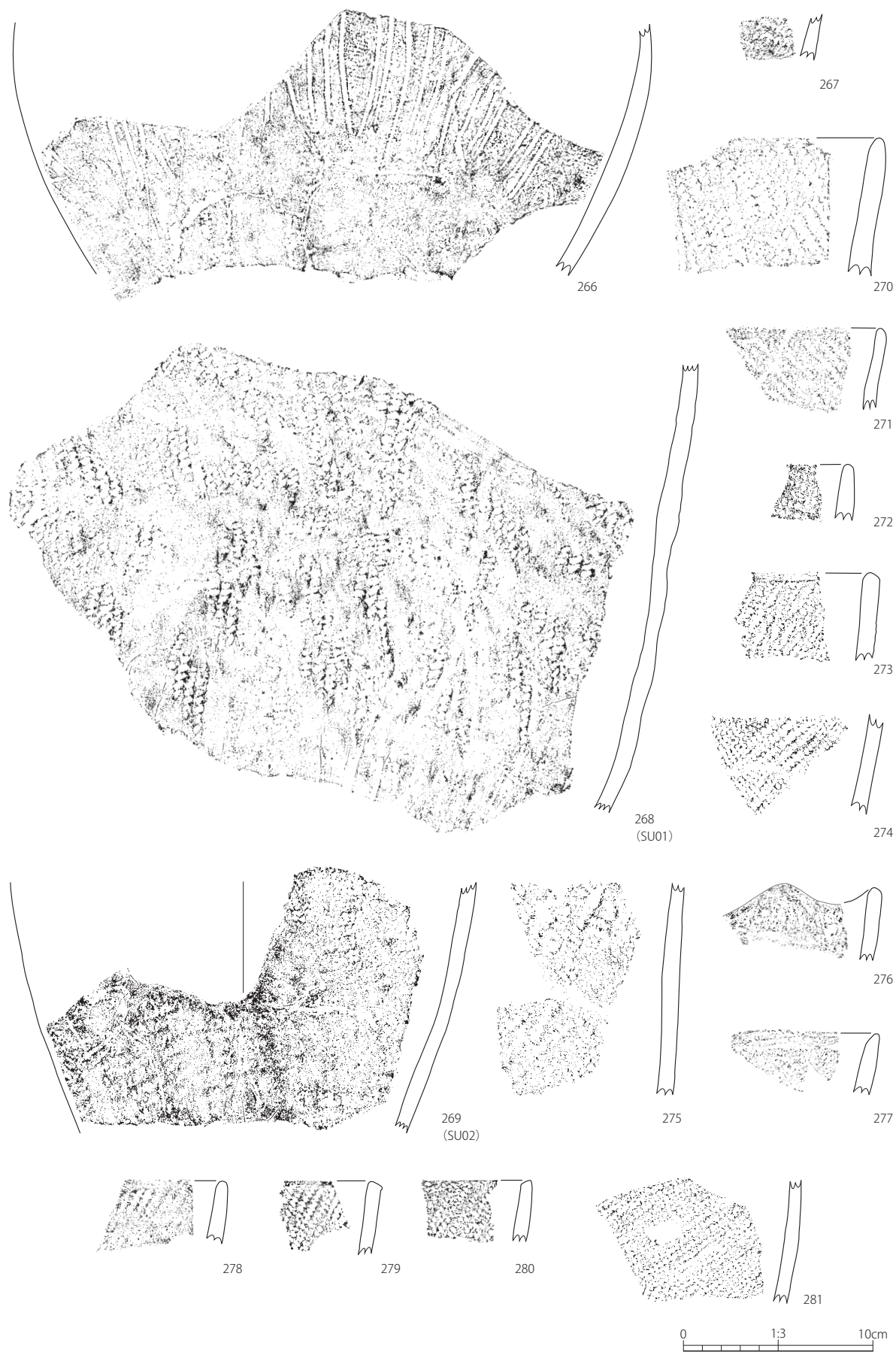


第43図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（8）

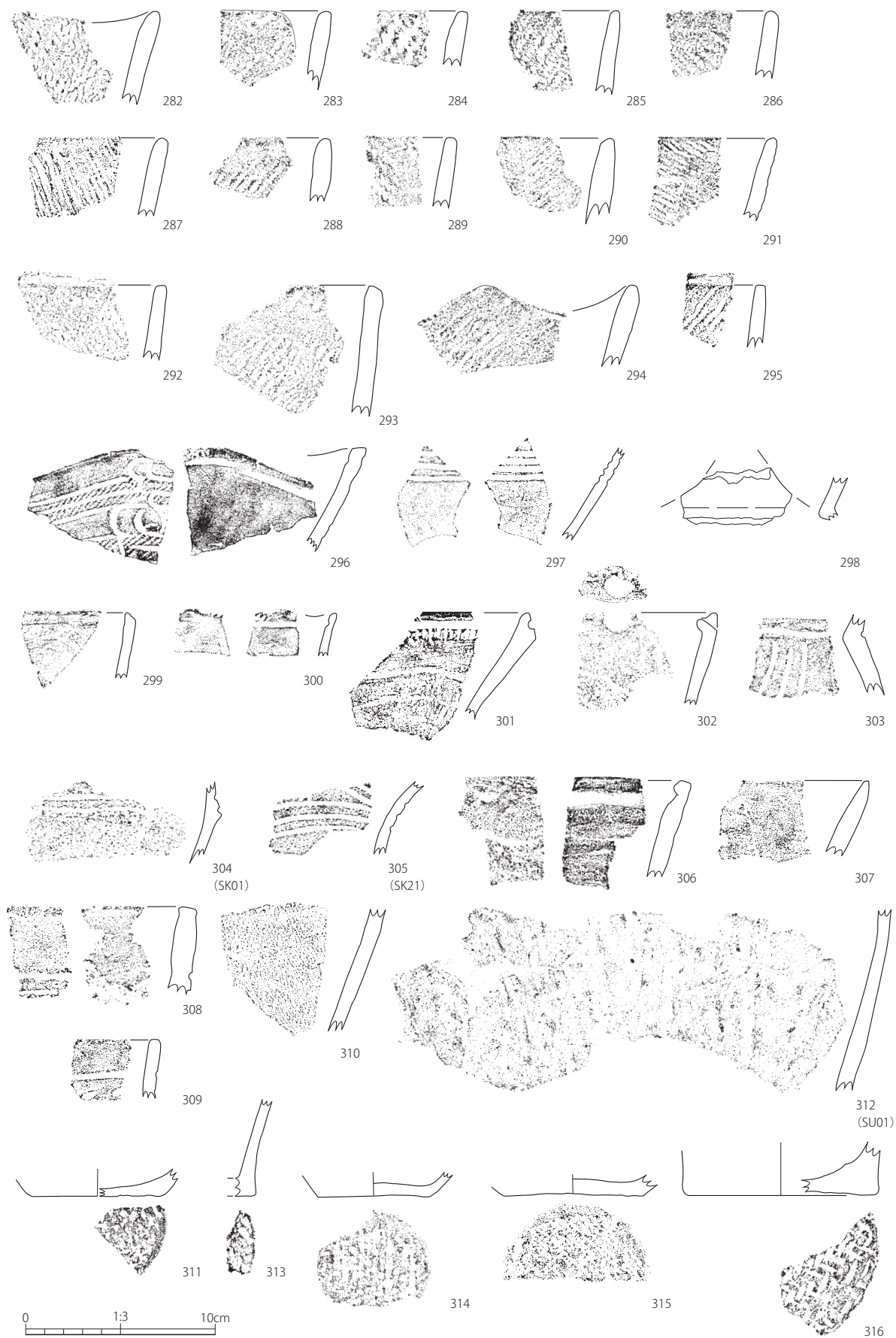


第44図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(9)

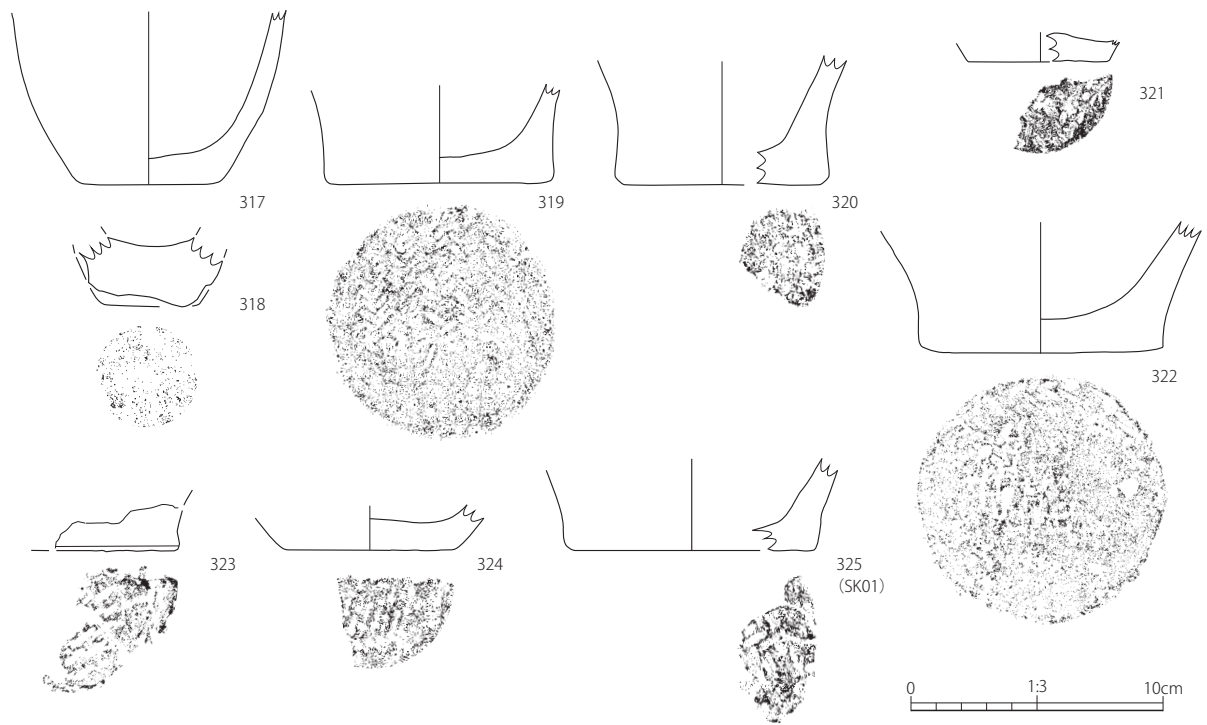




第45図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（10）



第46図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（11）

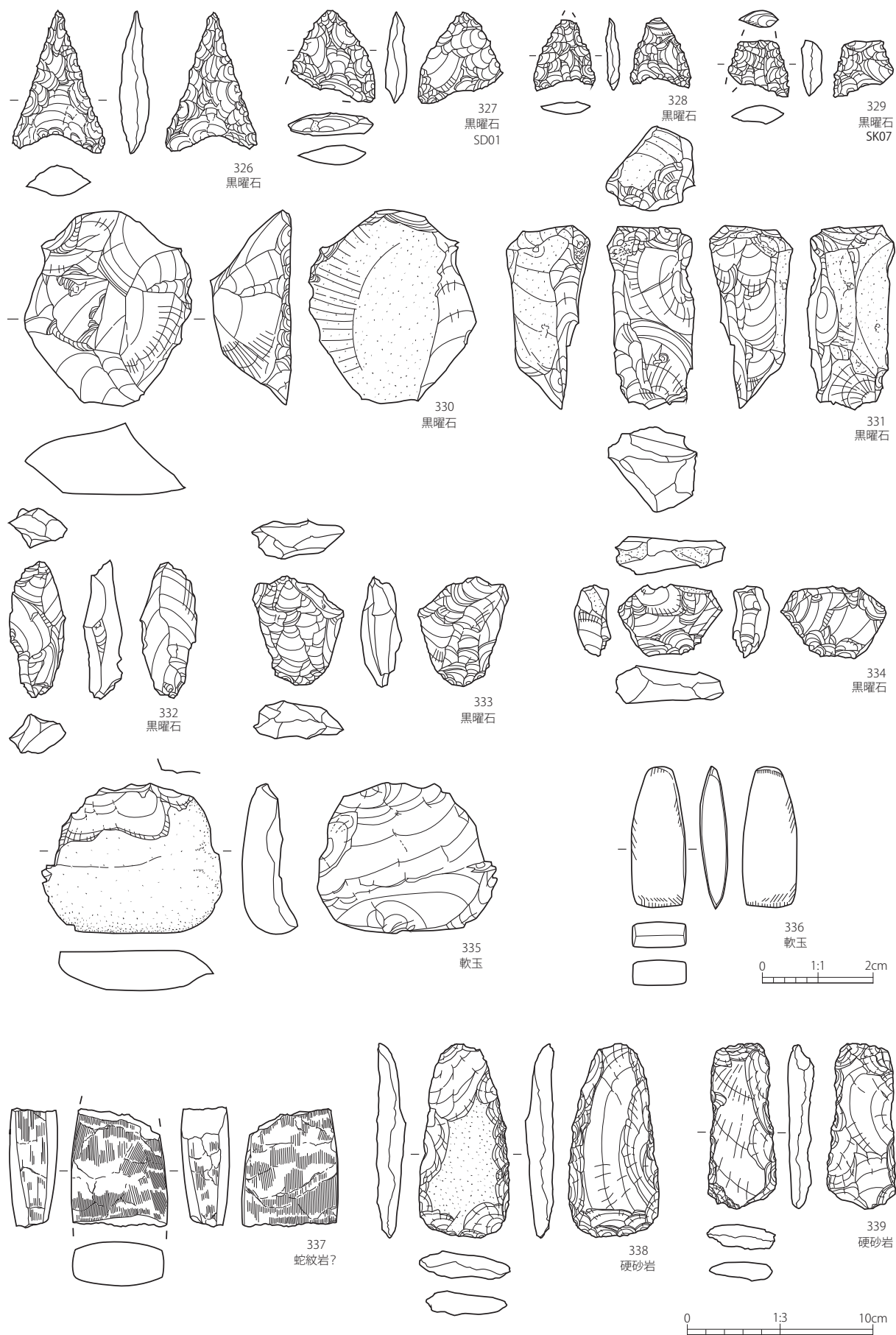


第 47 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（12）

参考文献（年代順）

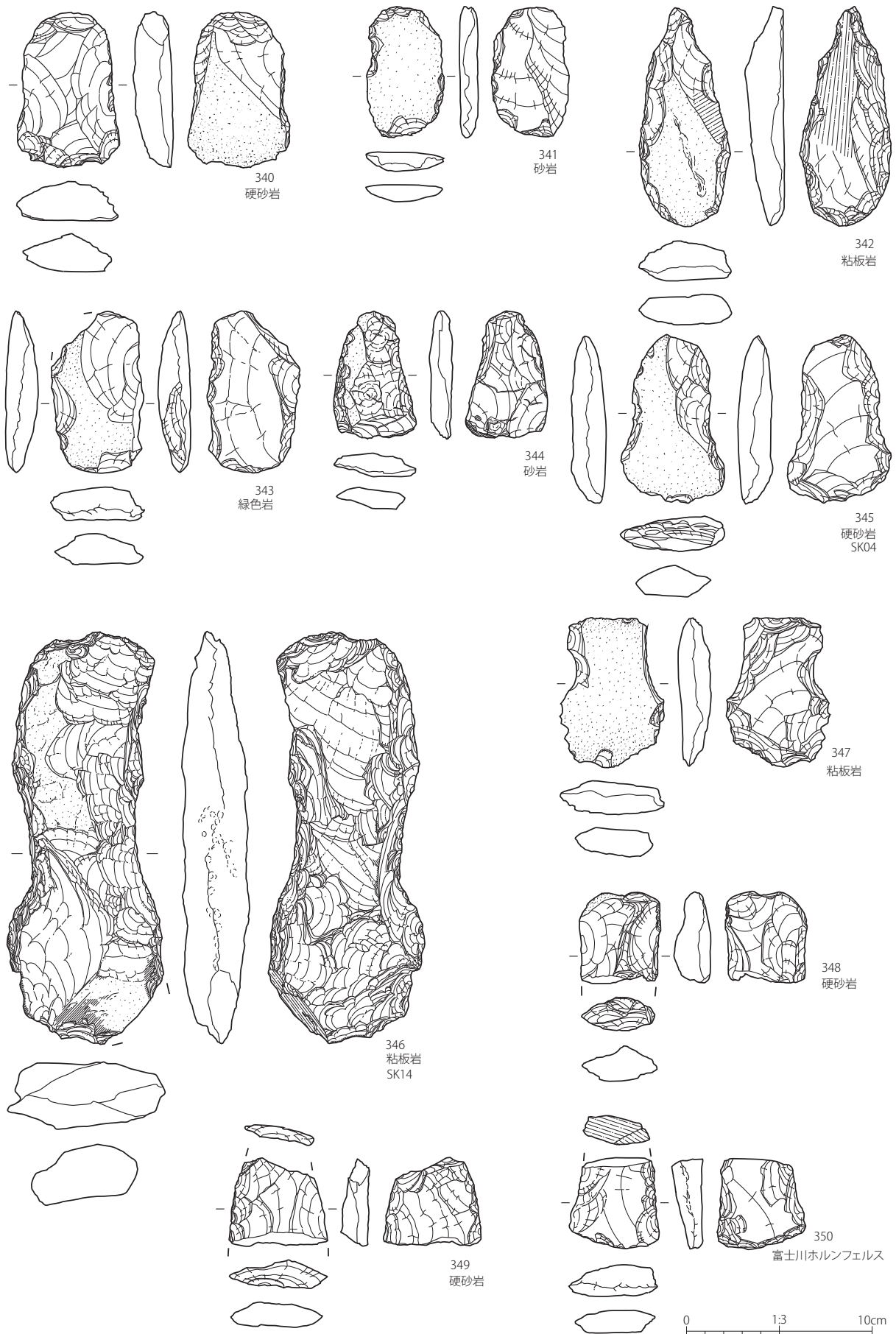
- 池田 純 1977 「IV . 1. 土器」『上長尾遺跡 I』中川根町教育委員会 P27・P29
- 鈴木敏中 1986 『北山遺跡 農免農道建設用地内埋蔵文化財発掘調査概報』三島市教育委員会
- 瀬川裕市郎 1990 「縄文土器 - 東海地方 (3) - 連載◎入門講座◎」『考古学ジャーナル No.326』ニューサイエンス社 P31～P34
- 河合 修 1994 「第IV章 第4節 3群」『下開土遺跡』本川根町教育委員会 P43・P48
- 馬飼野行雄 1997 「17. 付加条縄文が施される土器 縄文時代編」『滝戸遺跡』富士宮市教育委員会 P178-p180
- 鶴田晴徳 1998 「第5章 総括」『鳥沢遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会 P92
- 設楽博己 2002 「29 鳥沢遺跡」『沼津市史 資料編 考古』P211～P212



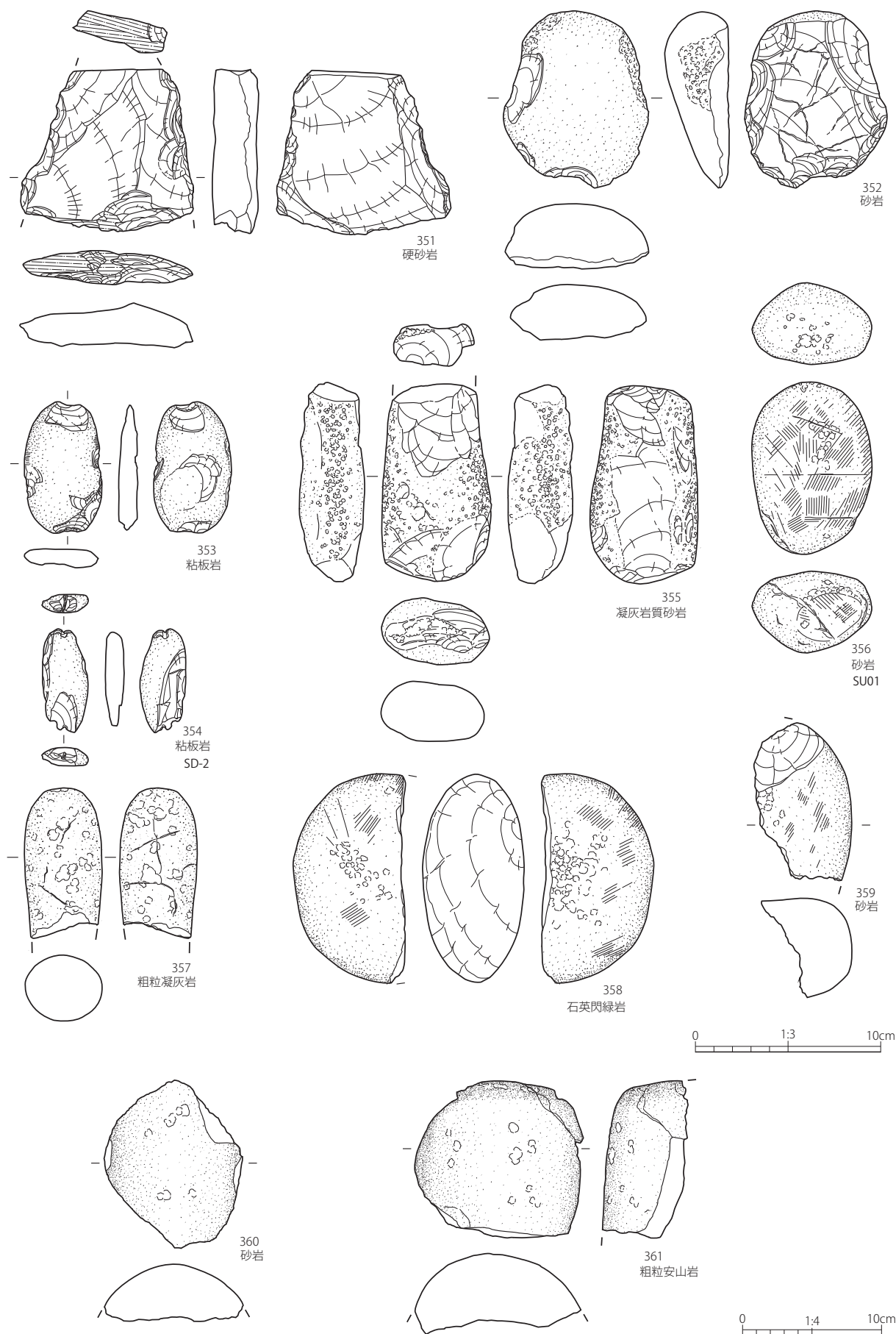


第48図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（13）





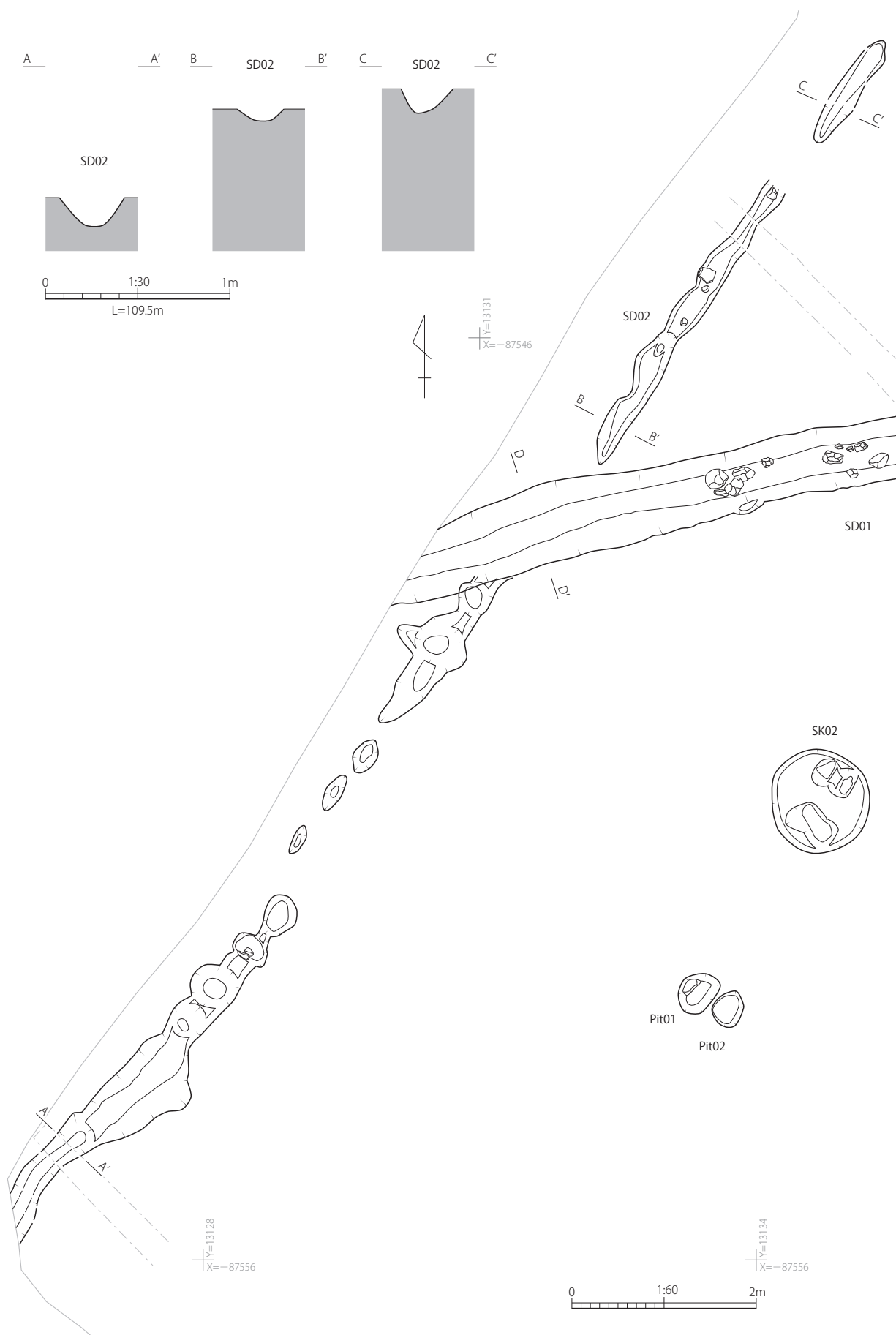
第49図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（14）



第50図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(15)



第 51 図 E 地区 本調査区（古墳時代以降）全体図



第52図 E地区 本調査区（古墳時代以降）SD02

・古墳時代以降の遺構

溝状遺構2条（SD01～02）とピット2基（Pit01～02）、土坑1基（SK02）を検出・完掘した。ピット・土坑の規模等は第3表に示す。

溝状遺構

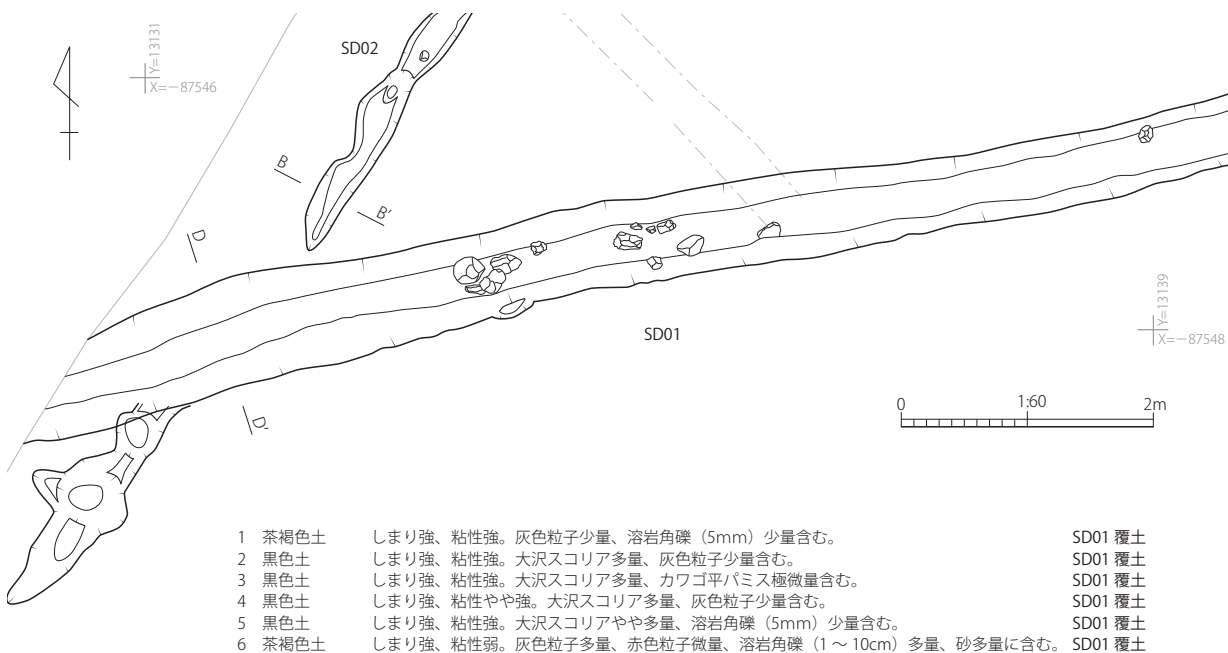
SD01は1次調査で検出された溝状遺構（SD）と同一遺構である。東から西へ向けて下る傾斜をもち、検出部分での落差は約35cm、全長17.70m、幅55～90cm、深さ22～48cmを測る。主軸方位はおおむねN-75°-Eである。SD02を切る。伴出遺物は、366・367の土師器なので、古墳時代前期の遺構であると考えられる。

SD02は2次調査1Tr西端において検出された溝状遺構（SD）と同一遺構である。途中が寸断されるが、1条の溝となるものと判断した。北から南へ向けて下る傾斜をもち、検出部分での落差は約60cm、全長15.85m、幅15～80cm、深さ15cm前後を測る。主軸方位はおおむねN-36.5°-Eである。SD01に切られる。

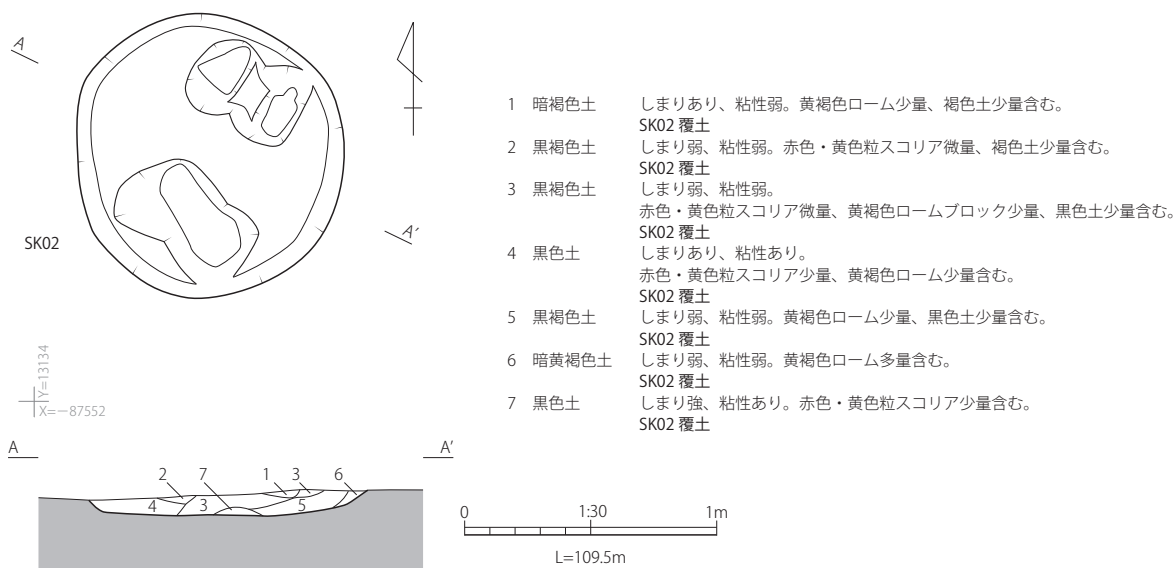
・古墳時代の遺物

362は、コップ状の小型壺形土器で、全体に縦位の研ぎをかけて、基部に沈線を一条廻らし、高台状にしている。胎土は縄文土器に近い砂粒を含み、やや脆弱なので、縄文時代後期の土器の可能性もある。

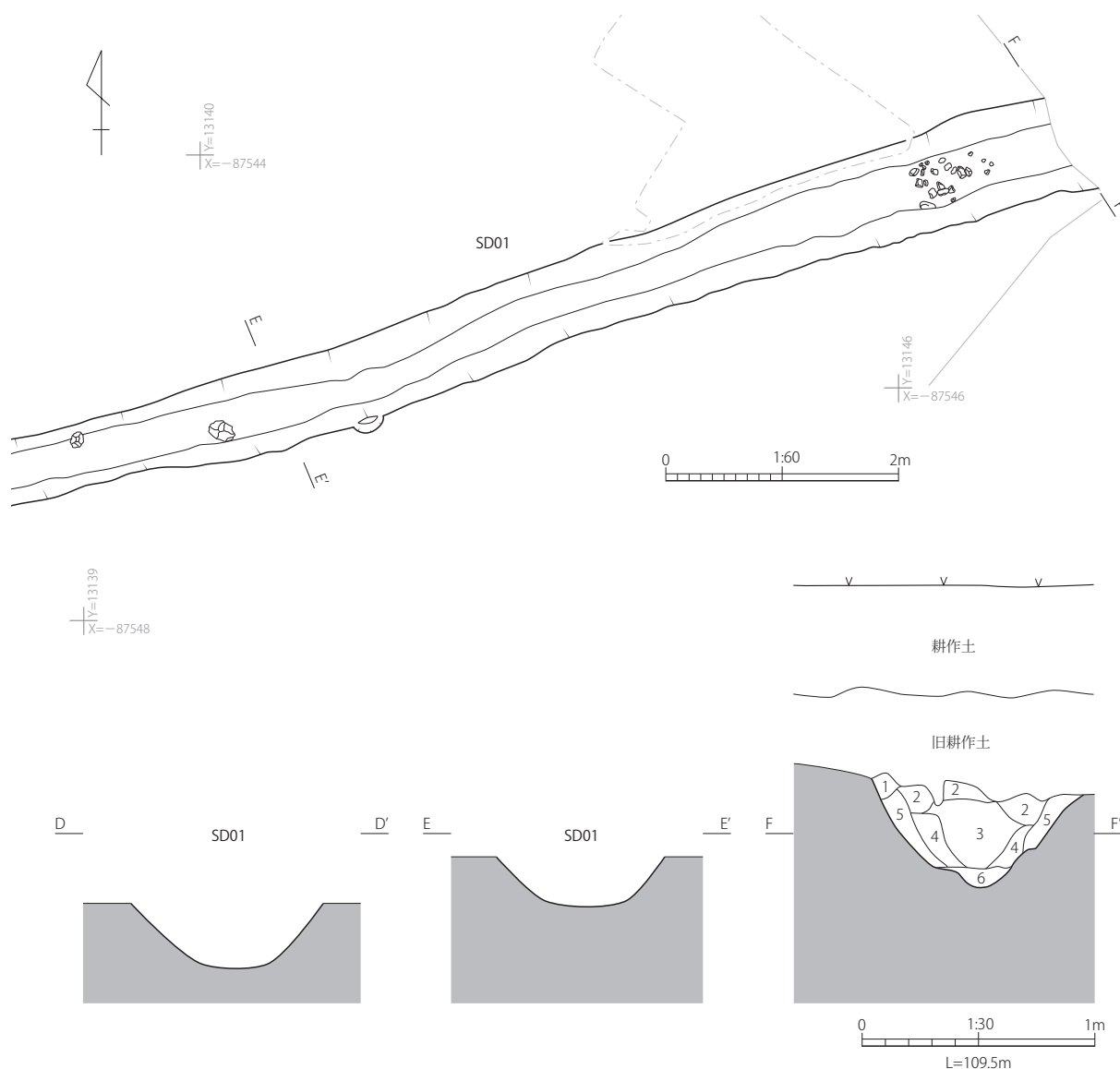
363は手捏状の小型壺胴部で、口縁部は失われている。364は壺の胴部の破片で、表面にはヨコミガキ、内面にはヨコハケが観察される。365と366は表裏にミガキがみられる高坏の坏部で、366は内部にケズリ痕が観察される。367は円形透しのある高坏脚部の破片で、SD01より出土している。



第53図 E地区 本調査区（古墳時代以降） SD01（西半）

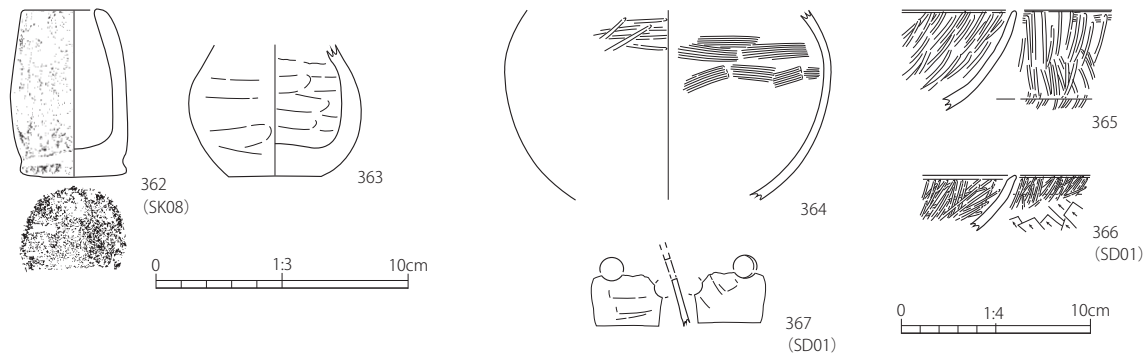


第54図 E地区 本調査区（古墳時代以降）SK02



第55図 E地区 本調査区（古墳時代以降）SD01（東半）





第56図 E地区 出土遺物実測図（古墳時代）

第3表 E地区 遺構一覧表

遺構種別	遺構名	遺構名 (調査時)	時代	調査	位置	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い (古→新)	備考
炉跡	(FP01)	STX		2次	2Tr								FP01と同一遺構
炉跡	FP01	第1号炉跡	縄文	3次	本調査区	C-2・D-2	133	120	24	隅丸方形	平底	—	
炉跡	FP03	第3号炉跡	縄文	3次	本調査区	E-2	85	74	15	正円形	平底	—	
炉跡	FP04	第4号炉跡	縄文	3次	本調査区	E-2	60	57	14	正円形	丸底	—	
炉跡	FP05	第5号炉跡	縄文	3次	本調査区	E-2	90	67	15	楕円形	平底	—	
埋甕土坑	SU01	埋甕A	縄文	2次	2Tr		72	65	35	正円形	平底	—	
埋甕土坑	SU02	埋甕B	縄文	2次	2Tr		90	61	13	楕円形	平底	—	
埋甕土坑	SU03	埋甕3	縄文	3次	本調査区	F-4	34	32	14	正円形	丸底	—	
溝状遺構	(SD01)	SD		1次	A・BTr								SD01と同一遺構
溝状遺構	(SD02)	SD		2次	1Tr								SD02と同一遺構
溝状遺構	SD01	SD1	古墳以降	3次	本調査区		1770	55～90	22～48	—	丸底	SD02・SK07→SD01	
溝状遺構	SD02	SD2	古墳以降	3次	本調査区		1585	15～80	13～15	—	丸底	SD02→SD01	
ビット				1次	ATr								ビット3基
ビット				1次	BTr								ビット7基
ビット	Pit01	Pit1	古墳以降	3次	本調査区	E-3	51	37	25	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit02	Pit2	古墳以降	3次	本調査区	E-3	40	33	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pit03	Pit3	縄文	3次	本調査区	B-3	48	44	35	正円形	丸底	—	
ビット	Pit04	Pit4	縄文	3次	本調査区	B-2	30	27	29	正円形	平底	—	
ビット	Pit05	Pit5	縄文	3次	本調査区	B-2	34	30	32	正円形	丸底	—	
ビット	Pit06	Pit6	縄文	3次	本調査区	A-2	30	(14)	18	(正円形)	平底	SK05→Pit06	
ビット	Pit07	Pit7	縄文	3次	本調査区	A-2	33	31	29	正円形	丸底	SK05→Pit07	
ビット	Pit08	Pit8	縄文	3次	本調査区	A-2	(37)	(24)	19	(楕円形)	平底	Pit09→Pit08→SK05	
ビット	Pit09	Pit9	縄文	3次	本調査区	A-2	(29)	(23)	16	(正円形)	丸底	Pit09→Pit08	
ビット	Pit10	Pit10	縄文	3次	本調査区	A-2	46	40	8	正円形	平底	—	
ビット	Pit11	Pit11	縄文	3次	本調査区	A-1	26	24	21	正円形	(平底)	—	
ビット	Pit12	Pit12	縄文	3次	本調査区	A-2	37	31	25	楕円形	平底	—	
ビット	Pit13	Pit13	縄文	3次	本調査区	A-2	31	27	28	楕円形	平底	—	
ビット	Pit14	Pit14	縄文	3次	本調査区	A-2	51	46	24	楕円形	平底	—	
ビット	Pit15	Pit15	縄文	3次	本調査区	A-2	25	23	18	正円形	平底	—	
ビット	Pit16	Pit16	縄文	3次	本調査区	A-3	49	(25)	22	(楕円形)	平底	—	
ビット	Pit17	Pit17	縄文	3次	本調査区	A-3	69	63	35	楕円形	平底	—	
ビット	Pit19	Pit19	縄文	3次	本調査区	A-3	32	22	24	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit20	Pit20	縄文	3次	本調査区	A-3	28	23	28	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit21	Pit21	縄文	3次	本調査区	A-3	21	19	32	楕円形	平底	—	
ビット	Pit22	Pit22	縄文	3次	本調査区	A-3	44	41	34	正円形	平底	—	
ビット	Pit23	Pit23	縄文	3次	本調査区	A-3	28	25	30	正円形	平底	—	
ビット	Pit24	Pit24	縄文	3次	本調査区	A-3	31	28	33	楕円形	平底	—	
ビット	Pit25	Pit25	縄文	3次	本調査区	A-3	23	20	37	正円形	平底	—	
ビット	Pit26	Pit26	縄文	3次	本調査区	B-2	26	20	15	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit27	Pit27	縄文	3次	本調査区	B-1	22	18	12	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit29	Pit29	縄文	3次	本調査区	B-1	45	(20)	19	(正円形)	平底	Pit30→Pit29	
ビット	Pit30	Pit30	縄文	3次	本調査区	B-1	27	(20)	13	(正円形)	平底	Pit30→Pit29	
ビット	Pit31	Pit31	縄文	3次	本調査区	B-1	24	22	18	正円形	平底	—	
ビット	Pit32	Pit32	縄文	3次	本調査区	C-1	37	30	17	楕円形	(平底)	Pit33→Pit32	
ビット	Pit33	Pit33	縄文	3次	本調査区	C-1	(28)	24	17	楕円形	(平底)	Pit33→Pit32	
ビット	Pit34	Pit34	縄文	3次	本調査区	C-2	27	23	23	楕円形	(平底)	—	
ビット	Pit35	Pit35	縄文	3次	本調査区	C-2	26	26	16	正円形	(平底)	—	
ビット	Pit36	Pit36	縄文	3次	本調査区	C-2	44	43	31	正円形	(平底)	—	
ビット	Pit37	Pit37	縄文	3次	本調査区	C-2	27	24	14	楕円形	(平底)	—	
ビット	Pit38	Pit38	縄文	3次	本調査区	C-2	32	30	22	正円形	(平底)	—	
ビット	Pit39	Pit39	縄文	3次	本調査区	C-3	33	31	28	正円形	(平底)	—	



遺構種別	遺構名	遺構名 (調査時)	時代	調査	位置	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い (古→新)	備考
ビット	Pit40	Pit40	縄文	3次	本調査区	C-3	39	32	33	正円形	丸底	—	
ビット	Pit41	Pit41	縄文	3次	本調査区	C-3	37	27	14	楕円形	(丸底)	—	
ビット	Pit42	Pit42	縄文	3次	本調査区	C-3	21	21	25	正円形	平底	—	
ビット	Pit43	Pit43	縄文	3次	本調査区	B-4	—	—	15	(正円形)	(丸底)	Pit93 → Pit43 → SK06 → SK04	
ビット	Pit44	Pit44	縄文	3次	本調査区	C-2	49	33	23	不整形	(丸底)	—	遺構名重複 (イキ)
ビット	Pit45	Pit45	縄文	3次	本調査区	D-2	29	25	25	楕円形	(平底)	—	遺構名重複 (イキ)
ビット	Pit46	Pit46	縄文	3次	本調査区	D-2	32	29	32	正円形	平底	—	遺構名重複 (イキ)
ビット	Pit47	Pit47	縄文	3次	本調査区	D-2	30	25	29	楕円形	丸底	SK30 → Pit97 → Pit47	
ビット	Pit48	Pit48	縄文	3次	本調査区	D-2	(45)	(33)	21	楕円形	丸底	Pit49 → Pit48 → Pit97 → Pit96	
ビット	Pit49	Pit49	縄文	3次	本調査区	D-2	40	36	13	正円形	平底	Pit49 → Pit48	
ビット	Pit50	Pit50	縄文	3次	本調査区	D-1	35	27	17	楕円形	平底	—	
ビット	Pit51	Pit51	縄文	3次	本調査区	D-2	63	36	27	楕円形	丸底	SK30 → Pit51	
ビット	Pit52	Pit52	縄文	3次	本調査区	D-2	35	28	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pit53	Pit53	縄文	3次	本調査区	E-3	49	40	28	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit54	Pit54	縄文	3次	本調査区	E-3	45	28	21	不整形	丸底	—	
ビット	Pit55	Pit55	縄文	3次	本調査区	E-3	59	38	29	楕円形	平底	—	
ビット	Pit56	Pit56	縄文	3次	本調査区	F-3	30	30	25	正円形	丸底	—	
ビット	Pit57	Pit57	縄文	3次	本調査区	E-3	61	41	26	楕円形	平底	—	
ビット	Pit58	Pit58	縄文	3次	本調査区	E-3	22	21	17	正円形	平底	—	
ビット	Pit59	Pit59	縄文	3次	本調査区	E-3	39	32	34	正円形	平底	—	
ビット	Pit60	Pit60	縄文	3次	本調査区	E-3	28	24	18	楕円形	平底	—	
ビット	Pit61	Pit61	縄文	3次	本調査区	F-3	32	30	17	正円形	平底	—	
ビット	Pit62	Pit62	縄文	3次	本調査区	F-3	49	44	21	不整形	丸底	—	
ビット	Pit63	Pit63	縄文	3次	本調査区	F-3	(36)	32	12	楕円形	平底	Pit63 → Pit64	
ビット	Pit64	Pit64	縄文	3次	本調査区	F-3	50	29	16	楕円形	丸底	Pit63 → Pit64	
ビット	Pit65	Pit65	縄文	3次	本調査区	F-3	37	26	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pit66	Pit66	縄文	3次	本調査区	F-3	32	28	15	楕円形	平底	—	
ビット	Pit67	Pit67	縄文	3次	本調査区	F-3	34	23	14	楕円形	平底	—	
ビット	Pit68	Pit68	縄文	3次	本調査区	F-3	31	23	24	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit69	Pit69	縄文	3次	本調査区	F-3	28	24	17	楕円形	平底	—	
ビット	Pit70	Pit70	縄文	3次	本調査区	F-3	28	20	11	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit71	Pit71	縄文	3次	本調査区	F-3	25	20	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pit72	Pit72	縄文	3次	本調査区	F-3	29	23	15	楕円形	平底	—	
ビット	Pit73	Pit73	縄文	3次	本調査区	F-3	39	22	16	楕円形	(平底)	—	
ビット	Pit74	Pit74	縄文	3次	本調査区	F-4	28	25	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pit75	Pit75	縄文	3次	本調査区	G-3	35	30	26	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit76	Pit76	縄文	3次	本調査区	G-3	32	30	27	正円形	平底	—	
ビット	Pit77	Pit77	縄文	3次	本調査区	G-3	36	28	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pit78	Pit78	縄文	3次	本調査区	G-3	32	29	19	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit79	Pit79	縄文	3次	本調査区	G-3	46	38	21	楕円形	平底	—	遺構名重複 (イキ)
ビット	Pit80	Pit80	縄文	3次	本調査区	G-3	21	19	13	正円形	丸底	—	
ビット	Pit81	Pit81	縄文	3次	本調査区	G-3	36	28	19	楕円形	平底	—	
ビット	Pit82	Pit82	縄文	3次	本調査区	G-3	36	25	16	楕円形	丸底	Pit83 → Pit82	
ビット	Pit83	Pit83	縄文	3次	本調査区	G-3	29	(18)	12	楕円形	丸底	Pit83 → Pit82	
ビット	Pit84	Pit84	縄文	3次	本調査区	G-3	38	37	16	楕円形	平底	—	
ビット	Pit85	Pit85	縄文	3次	本調査区	G-4	46	23	23	楕円形	丸底	—	
ビット	Pit86	Pit86	縄文	3次	本調査区	G-4	29	24	19	楕円形	平底	—	
ビット	Pit87	Pit87	縄文	3次	本調査区	G-4	44	35	20	楕円形	平底	—	
ビット	Pit88	Pit88	縄文	3次	本調査区	D-3	29	(23)	—	楕円形	—	Pit88 → SK28	
ビット	Pit89	Pit89	縄文	3次	本調査区	E-4	62	(33)	26	楕円形	丸底	Pit89 → SK20 → SK22 → SK19	
ビット	Pit90	Pit90	縄文	3次	本調査区	E-4	(55)	(45)	23	(楕円形)	丸底	SK08 → Pit90 → SK12	
ビット	Pit91	Pit44	縄文	3次	本調査区	B-4	46	42	33	正円形	丸底	Pit93 → SK04 → Pit91	遺構名重複 (変更)
ビット	Pit92	Pit45	縄文	3次	本調査区	B-4	41	33	30	楕円形	丸底	—	遺構名重複 (変更)
ビット	Pit93	Pit46	縄文	3次	本調査区	B-4	—	—	21	—	丸底	Pit93 → Pit43 → SK06 → SK04 → Pit91	遺構名重複 (変更)
ビット	Pit94	Pit79	縄文	3次	本調査区	D-3	46	(35)	10	(正円形)	—	Pit94 → SK14	遺構名重複 (変更)
ビット	Pit95	サブトレ内 追加ビット	縄文	3次	本調査区	D-2	(60)	(30)	22	不整形	平底	—	
ビット	Pit96	番号なし	縄文	3次	本調査区	D-2	31	25	28	楕円形	—	SK30・Pit48 → Pit97 → Pit96	
ビット	Pit97	番号なし	縄文	3次	本調査区	D-2	(33)	29	17	楕円形	平底	SK30・Pit48 → Pit97 → Pit47・Pit96	
土坑	SK01	土坑		2次	3Tr		62	52	20	楕円形	平底	—	
土坑	SK02	ST2	古墳以降	3次	本調査区	E-3	112	109	10	正円形	平底	—	
土坑	SK03	ST3	縄文	3次	本調査区	B-3	87	69	17	楕円形	浅い平底	—	
土坑	SK04	ST4	縄文	3次	本調査区	B-4	75	54	25	楕円形	丸底	Pit93 → Pit43 → SK06 → SK04	
土坑	SK05	ST5	縄文	3次	本調査区	A-2	152	(60)	31	(正円形)	平底	Pit08 → SK05 → Pit06・Pit07	
土坑	SK06	ST6	縄文	3次	本調査区	B-4	96	56	30	楕円形	丸底	Pit43 → SK06 → SK04	

遺構種別	遺構名	遺構名 (調査時)	時代	調査	位置	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い (古→新)	備考
土坑	SK07	ST7	縄文	3次	本調査区	D-4	237	180	30	楕円形	平底	SK17 → SK07	遺構名重複 (イキ)
土坑	SK08	ST8	縄文	3次	本調査区	E-4	91	(63)	30	楕円形	丸底	SK08 → Pit90 → SK12	
土坑	SK09	ST9	縄文	3次	本調査区	F-4	158	140	20	楕円形	平底	SK09 → SK10	
土坑	SK10	ST10	縄文	3次	本調査区	F-4	77	68	19	楕円形	平底	SK09 → SK10	
土坑	SK11	ST11	縄文	3次	本調査区	E-4	99	97	33	楕円形	丸底	SK12 → SK11	
土坑	SK12	ST12	縄文	3次	本調査区	E-4	109	89	33	楕円形	平底	SK08 → Pit90 → SK12 → SK11	
土坑	SK13	ST13	縄文	3次	本調査区	D-3	(240)	194	13	楕円形	平底	SK13 → SK14	
土坑	SK14	ST14	縄文	3次	本調査区	D-3	147	110	14	楕円形	平底	SK13・SK15・Pit94 → SK14	
土坑	SK15	ST15	縄文	3次	本調査区	D-2	90	72	19	楕円形	平底	SK15 → SK14	
土坑	SK17	ST17	縄文	3次	本調査区	D-4	144	81	25	(楕円形)	平底	SK17 → SK34	
土坑	SK18	ST18	縄文	3次	本調査区	E-4	77	60	23	楕円形	平底	SK21 → SK18	
土坑	SK19	ST19	縄文	3次	本調査区	E-4	59	55	17	楕円形	平底	Pit89 → SK20 → SK22 → SK19	
土坑	SK20	ST20	縄文	3次	本調査区	E-4	84	(47)	15	楕円形	平底	Pit89・SK21 → SK20 → SK22 → SK19	
土坑	SK21	ST21	縄文	3次	本調査区	E-4	112	97	25	楕円形	平底	SK21 → SK18・SK20	
土坑	SK22	ST22	縄文	3次	本調査区	E-4	121	102	20	楕円形	平底	Pit89 → SK20 → SK22 → SK19	
土坑	SK23	ST23	縄文	3次	本調査区	E-4	74	74	19	正円形	平底	—	
土坑	SK24	ST24	縄文	3次	本調査区	E-4	65	54	25	楕円形	丸底	—	
土坑	SK25	ST25	縄文	3次	本調査区	D-3	54	41	17	楕円形	平底	SK27 → SK25	
土坑	SK26	ST26	縄文	3次	本調査区	E-3	64	53	17	楕円形	丸底	SK27 → SK26	
土坑	SK27	ST27	縄文	3次	本調査区	E-3	117	82	24	楕円形	平底	SK28 → SK27 → SK25・SK26	
土坑	SK28	ST28	縄文	3次	本調査区	E-3	(111)	62	18	楕円形	平底	SK29・Pit88 → SK28 → SK27	
土坑	SK29	ST29	縄文	3次	本調査区	E-3	(70)	(40)	16	楕円形	平底	SK29 → SK28	
土坑	SK30	ST30	縄文	3次	本調査区	D-2	85	(77)	22	楕円形	平底	SK30 → Pit51・Pit48 → Pit97 → Pit47・Pit96	
土坑	SK31	ST31	縄文	3次	本調査区	F-3	80	70	19	楕円形	平底	—	
土坑	SK32	ST32	縄文	3次	本調査区	E-3	55	45	25	不整形	平底	—	
土坑	SK33	ST33	縄文	3次	本調査区	E-3	59	49	19	楕円形	平底	—	
土坑	SK34	ST7	縄文	3次	本調査区	D-3	45	(18)	5	(正円形)	平底	SK34 → SD01	遺構名重複 (変更)

第4表 E地区 出土土器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第36図 PL.8	1		7.5YR4/3 褐	5YR4/5 赤褐	Ⅲ群 A-1 類	藤内 2	隆帯による区画の隆帯に沿ってヘラ状工具による連続刺突を施す。	R19
第36図 PL.8	2		5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 1・2	三叉文と楕円文の組み合わせた文様を配置した、口縁部近くの膨らみ部分。	R19
第36図 PL.8	3	BTr-5	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/2 灰褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	太く薄い隆帯で区画された内部を縦位条線で充填、区画中央部に薄い波状の沈線を施文。	R7
第36図 -	4	BTr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR4/6 赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	太く薄い隆帯で区画された内部を縦位条線で充填、区画中央部に薄い波状の沈線を施文。	R12
第36図 -	5	BTr-5	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	太く薄い隆帯で区画された内部を縦位条線で充填、区画中央部に薄い波状の沈線を施文。	R4
第36図 PL.8	6	BTr- IV	7.5YR4/4 褐	7.5YR3/3 暗褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	太く薄い隆帯で区画された内部を横位条線で充填後、多方位に条線を施す。	R10
第36図 PL.8	7	2Tr	10YR5/2 灰黄褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	口縁部の渦巻文から垂線を下ろして縦の区画をつくり、その内部を細かい条線で充填する。	R16
第36図	8	BTr-5	5YR5/6 明赤褐	5YR3/2 暗赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	太く薄い隆帯で区画された内部を縦位条線で充填。渦巻文。	R4
第36図	9	BTr-5	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	隆帯と縦位、綾杉状の条線。	R4
第36図 PL.8	10	BTr-5	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	隆帯と縦位、綾杉状の条線。	R4
第36図	11	BTr-V	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	隆帯による渦巻文、区画内を細い縦位条線で充填。	R11
第36図	12	1Tr	5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	幅広く薄い隆帯で区画された内部を縦位の条線で充填する。南側表土中央部分出土。	R31
第36図	13	2Tr	10YR6/3 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	低い幅広い隆帯の両側に凹線を伴う懸垂文の区画内を縦条線で埋める。	R3
第36図	14	G4Gr	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	大型の浅鉢の肩部。断面三角形の隆帯による楕円形区画内を縦条線で充填する。	R233 ・ R269
第36図	15	F4Gr	10YR3/3 暗褐	2.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV?	浅く太い平行沈線の下を斜めの条線で埋めている。	R166
第36図	16		10YR5/3 にぶい黄橙	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	太く低い隆帯に区画された内部を八の字文を連続して施文。	確 R1

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第36図 PL.8	17	G3Gr	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V ?	口縁に平行して茎状の工具で二本の沈線を施文し、その下を同じ工具で押引きのような刺突で充填する。器体は薄く後期、あるいは西日本系の可能性がある。18 と同一個体。	R171
第36図	18	G4Gr	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V ?	茎状の工具で押引きのような刺突を全体に施す。器体は薄く後期、あるいは西日本系の可能性がある。17 と同一個体。	R173
第36図	19	1Tr	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V ?	垂線の区画内に斜め列点状に刺突文を施文。	R8
第36図 PL.8	20	G4Gr	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	二本の太く浅い沈線で口縁に平行、懸垂し長方形区画を形成。連続八の字文の一部がある。	R172
第36図	21	2Tr	10YR8/3 浅黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	底部付近。二本の平行沈線による懸垂線で区画された内部を連続した八の字文で埋める。	R3
第36図	22	D4Gr	7.5YR7/6 橙	2.5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	二本の平行沈線による懸垂線で区画された内部を連続した八の字文で埋める。	R110
第36図 PL.8	23		7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	二本の平行沈線による懸垂線で区画された内部を連続した八の字文で埋める。	確 R1
第36図	24	G4Gr	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR4/2 灰褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	沈線による懸垂文に区画された中を八の字文を施文する。	R271
第36図	25	E2Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	二本の平行沈線による懸垂線で区画された内部を連続した八の字文で埋める。	R135
第36図	26	SK09	10YR4/1 褐灰	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	平行沈線による懸垂線に区画された内部を八の字文で充填する。	R178
第37図	27	ATr-1	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	太く薄い隆帯で区画。	R8
第37図	28	BTr-5	5YR5/6 明赤褐	5YR3/2 暗赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	口縁部に平行する太く浅い沈線を引く。	R4
第37図	29	BTr-5	7.5YR6/6 橙	7.5YR4/4 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	口縁部に平行する太く浅い沈線を引き、縦位に薄く太い隆帯を施文する。	R7
第37図	30	1Tr	5YR5/4 にぶい赤褐	10YR3/2 黒褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	口縁部無文帯。	R5
第37図	31	1Tr	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	無文の口縁部。	R6
第37図 PL.8	32	1Tr	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	深鉢胴部下部。垂下した刻みのある隆帯と沈線による渦巻文。	R6
第37図	33	SD02・D2Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/4 浅黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	頸部に平行する半隆帯文の集合沈線に波状の粘土紐を貼付。SD-2 出土。	R40
第37図	34	F3Gr	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 ?	断面三角の隆帯を弧状に施文。	R161
第37図	35		5YR5/4 にぶい赤褐	10YR4/2 灰黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 ?	狭い間隔で隆帯による懸垂線を垂下する。	確 R1
第37図 PL.8	36	FP05	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-3 類	曾利	半隆帯文の集合沈線を地文とし、その上に粘土紐をクロスして貼付する深鉢の頸部。第5号炉跡出土。	R255
第37図 PL.8	37	2Tr	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	沈線に区画された内部を斜めの RL で充填する。東側拡張区出土。	R12
第37図	38	2Tr	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口縁部二本の浅い平行沈線の下に縦位に LR の縄文を施文。東側拡張区出土。	R12
第37図 PL.8	39	E2Gr	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口唇部の文様帯状の区画に連続した楕円文を描画し、その下に太めの LR の縄文を全体に施文する。E-2 グリッド出土。	R142
第37図	40	G3Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	浅い沈線で区画された内部を LR の縄文で充填。	R189
第37図	41	2Tr	10YR4/1 褐灰	5YR6/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	弧を描く、浅く幅広の沈線を両側とする薄い隆帯に区画された内部を LR の縄文で充填する。	R12
第37図	42	3Tr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	太い隆帯で区画された内部を縦位の RL の縄文で充填する。	R4
第37図	43	1Tr	5YR6/4 にぶい橙	5YR4/1 褐灰	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4 ?	RL の縄文を横位に施文。	R5
第37図	44	1Tr	2.5YR6/8 橙	5YR7/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4 ?	口縁に平行する沈線の下に RL の横位縄文。南側サブトレ東部分出土。	R9
第37図	45	1Tr	5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4 ?	口縁に平行する沈線の下に RL の横位縄文。南側サブトレ東部分出土。	R9
第37図	46	1Tr	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/4 褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4 ?	口縁に平行して LR の縄文。南側サブトレ東部分出土。	R9
第37図	47	1Tr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4 ?	口縁に平行して LR の縄文。	R8
第37図 PL.8	48	1Tr	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4 ?	口縁に U 字形弧の太い隆帯を施し、その間に非常に薄く LR の縄文で充填する。	R8
第37図	49	BTr	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E ?	LR 横位を地文とし、縦位隆帯の両側に沈線を施文。	R13
第37図	50	ATr-1	5YR2/2 黒褐	2.5YR4/8 赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E ?	縦位 RL の縄文を地文に、縦位平行沈線による区画を描く。	R8
第37図	51	1Tr	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群	中期 ?	キャリバー形深鉢くびれ部に横位 RL の縄文。南側サブトレ西部分出土。	R7
第37図 PL.8	52	E2Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E ?	浅めの平行沈線で三角形に区画された内部を、RL の縄文でややランダムに充填する。器体中央部に渦巻文。後期西日本系（松ノ木式のモチーフに相似）？。E-2 グリッド出土。	R142
第37図 PL.8	53	ATr	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	Ⅲ群	中期	口縁に平行する二本の沈線を引く。	R17
第37図 PL.8	54		7.5YR3/2 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	Ⅲ群	中期 ?	口唇直下の沈線に沿う隆帯の上に、太い R の縄を斜めに連続して押圧し刻みとしている。薄手で、胎土が白く荒い粒子を多く含む。西日本系あるいは後期の縁帯文の可能性はある。	R1
第37図	55	BTr-V	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群	中期 ?	網代痕のある深鉢底部。	R11
第37図	56	1Tr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群	中期 ?	底部。南側サブトレ西部分出土。	R7
第37図	57	1Tr	7.5YR4/2 灰褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群	中期 ?	網代痕のある底部。	R8

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第37図 第38図 PL.8	58	1Tr	10YR6/4 にぶい黄橙	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群	中期?	網代痕底部。	R6
第38図 PL.8	59	G4Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 1	頸部に大型の 8 字形浮点文を貼付し、平行や楕円に沈線を引く。	R197
第38図 PL.8	60	1Tr	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 1 ?	球胴部に三本の平行沈線で弧、直線を描く。四ッ池式?。南側サブトレ出土。	R10
第38図 PL.8	61	G4Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 1	単節 R の縄文を横位に施文したものを地文とし、その上から平行沈線で三角形の幾何学文を描く。	R196
第38図	62	BTr-V	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR3/3 暗褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	RL の磨消縄文の施文後、口縁に平行する刻みのある隆帯とそれに平行する沈線を施す。	R10
第38図	63	ATr-Ⅳ	7.5YR5/6 明褐	7.5YR4/6 褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	口縁に 3 本の平行沈線内に LR の磨消縄文を施す。	R9
第38図	64	ATr1Gr	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	沈線で区画された帯状部に LR の細い磨消縄文を施す。	R2
第38図	65	ATr	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	沈線で区画された帯状部に LR の細い磨消縄文を施す。	R17
第38図	66	ATr	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	平行沈線、沈線で区画された帯状部に LR の細い磨消縄文を施す。	R17
第38図	67	ATr-Ⅳ	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	沈線で区画された帯状部に LR の細い磨消縄文を施す。	R9
第38図	68		7.5YR5/6 明褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	刻みのある細い隆帯の下に横位の LR の縄文を施文。	R1
第38図 PL.8	69	2Tr	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	平行沈線で施文後、8 字形浮点文を貼付。2 トレンチ出土。	R23
第38図 PL.8	70	2Tr	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	口縁表面に斜め刻みのある隆帯、その下に沈線で区画された LR の縄文を施文し、8 字形浮点文を置く。裏面にも同心円状の沈線を施文。B 土坑埋壙の近くから出土。	R18
第38図	71	E4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内?	口縁部に沈線による同心円を描く。同心円中央部には螺旋状の圧痕となる工具で刺突している。同心円より細隆帯を垂下する。縁帯文土器?。E-4 グリッド出土。	R102
第38図 PL.8	72	D2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	口唇部に刻みのある隆帯を貼付し、接合部上部を沈線で押さえる。D-2 グリッド出土。	R234
第38図	73	D4Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR6/4 にぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	三角形の帯状区画内部に LR の磨消縄文。D-4 グリッド出土。	R110
第38図	74	E4Gr	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y3/2 黒褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	刻みのある細い隆帯を頸部に二本平行して貼付、直交した形で隆帯を垂下する。その交差部に 8 字形浮点文を貼付。上部には LR の磨消縄文。(上下逆?)	R97
第38図	75	C3Gr	10YR7/2 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	口縁に平行する沈線に LR の磨消縄文。表面に丁寧な研ぎ。C-3 グリッド出土。	R35
第38図 PL.8	76	G4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内?	波状口縁の突起部に半同心円を描き、その中心部と口唇表に巻貝先端部と思われる円錐状の刺突がなされる。同心円文から刻みのある隆帯で懸垂文を垂下する。縁帯文土器?。G-4 グリッド出土。	R193
第38図 PL.9	77	F3・G3Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	ラッパ状に広がる口縁部の突起部分より刻みのある細い隆帯が垂下され、頸部に至る部分で同じ隆帯が二本平行で直角につながる。その交差部に、8 字形浮点文が貼付される。垂線は 4 単位と考えられるが、8 字形浮点文は頸部隆帯上に 8 単位ある。頸部より下は平行沈線で区画された逆三角形内に磨消縄文。	R164 ・R188
第38図 PL.8	78	G4Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	裏面に折り返し状の口縁、表面は無文だが繊維状のものが縦位に押圧される。表裏とも丁寧な研ぎ。G-4 グリッド出土。	R212
第38図 PL.9	79	1Tr ・E3・F4Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR6/8 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	頸部に水平に刻みのある細い隆帯を施し、そこから 4 単位と思われる同じ隆帯を垂下させる。それを区画として内部に沈線で渦巻と直線で構成される文様を施し、その内部を LR の細かい縄文で充填する。	R31 ・R45 ・R72
第38図 PL.9	80	F4Gr	5YR4/6 赤褐	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	頸部に平行する刻みのある二本の隆帯上に 8 単位と思われる 8 字形浮点文をおく。F-2 グリッド、F-4 グリッド出土。	R58 ・R72
第38図 PL.9	81	SU03 ・F4Gr	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR7/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	内湾した口縁部の上半に、太い隆帯上に逆 C 状の沈線と両側に同じ工具の末端による刺突を施し、その下に沈線で同心円状の U 形を描く。そのまわりは LR の磨消縄文で文様を埋める。SU3 出土。	R170
第38図	82	SU03 ・F4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	内湾した口縁部の上半に、太い隆帯上に逆 C 状の沈線と同心円状の U 形を描く。そのまわりは LR の磨消縄文で文様を埋める。丁寧な研ぎ。83 と同一個体。埋壙 3 で取り上げ。	R168 ・R170
第38図 PL.9	83	SU03 ・F4Gr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	内湾した口縁部の上半に、太い隆帯上に逆 C 状の沈線と両側に同じ工具の末端による刺突を施し、その下に沈線で同心円状の U 形を描く。そのまわりは LR の磨消縄文で文様を埋める。丁寧な研ぎ。82 と同一個体。埋壙 3 で取り上げ。	R170
第38図	84	F4Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	球胴状になる波状口縁部。入組み文状に LR の磨消縄文で文様を構成する。埋壙 3 出土。	R170



挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第39図 PL.9	85	E2Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇部近くに平行して刻みのある細い隆帯、内側に折返し口縁状の成形。SD-1 出土。	R35
第39図	86	E2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	波状口縁突起部、口唇上縁中央に円錐形の刺突をし、それを中心に同心円状の刻みを施す。SD-1 出土。	R42
第39図 PL.9	87	Pit05	7.5Y6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇部近くに平行して刻みのある隆帯とその下に帯状三角形になると思われる LR の磨消縄文。内側に折返し口縁状の成形。Pit5 出土。	R104
第39図	88	Pit04	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇部近くに平行して刻みのある隆帯とその下に LR の磨消縄文。Pit4 出土。	R162
第39図 PL.9	89	SD01 ・C3Gr	10YR4/2 灰黄褐	5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	半裁竹管による平行沈線の内側を同じ工具で刻みを入れる。丁寧な研ぎ。SD-1 出土。	R35
第39図	90	1Tr	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	IV群 A-2 類	堀之内 2	屈曲する深鉢上部の無文部で、胴部よりやや放射状に広げて刻みのある細隆帯が貼付される。表裏に丁寧な研ぎ。	R2
第39図	91	1Tr	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球胴部に沈線による楕円と直線の施文。南側サブトレ西部分出土。	R7
第39図	92	1Tr	2.5YR5/1 黄灰	10YR6/4 にぶい黄橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球胴部に沈線による楕円と直線の施文。	R8
第39図	93	1Tr	5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	肥厚し稜をもつ口縁に円錐状の工具による刺突を施す。	R8
第39図	94	1Tr	10YR5/3 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラップ状に開く折返し口縁。表口唇に平行して沈線、裏面に丁寧な研ぎ。南側サブトレ出土。	R10
第39図	95	1Tr	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラップ状に開く折返し口縁部分。口唇より垂下する刻みある細隆帯。南側サブトレ西部分出土。	R7
第39図 PL.9	96	G4Gr	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇より斜め刻みの隆帯を垂下し、その間を平行沈線で三角形の幾何学文を描く。	R228
第39図	97	1Tr	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	裏面に斜め刻みの細隆帯と丁寧な研ぎ。	R8
第39図 PL.9	98	G4Gr	2.5YR6/6 橙	2.5YR7/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球胴部の中心に同心円の沈線の周囲に帯状の LR の磨消縄文を施す。	R241
第39図	99	F3Gr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	弧状に膨らんだ器体部に平行沈線による半同心円文を描き、間の空間部に非常に細い円管状工具で X 字状の列点文を描く。	R161
第39図	100	F3Gr	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	横位帯状に磨消縄文。	R161
第39図	101	F3Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラップ状に開く口縁部。裏面に丁寧な研ぎ。	R154
第39図 PL.9	102	E2Gr	10YR5/1 褐灰	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球胴部の中心に同心円の沈線の周囲に帯状の LR の磨消縄文を施す。	R156
第39図	103	F4Gr	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	IV群 A-2 類	堀之内 2	3本の平行沈線の下に、非常に細かい LR を条が垂直になるように右斜めで充填する。	R166
第39図	104	F3Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部に横位帯状の磨消縄文。	R148
第39図 PL.9	105	E2Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球胴中央部、LR の帯状磨消縄文の間を同心円状の集合沈線で埋められている。	R157
第39図	106	F4Gr	5YR5/3 にぶい赤褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	沈線間を LR の縄文で埋めている。	R169
第39図	107	E2Gr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR4/3 褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	同心円？に集合沈線を施文。裏面に丁寧な研ぎ。	R169
第39図 PL.9	108	F4Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラップ状にひろがる受け口状の口縁部近くの文様帯。連続した正三角形の幾何学文を帯状に細かい LR の縄文で充填する。	R169
第39図	109	F3Gr	5YR4/1 褐灰	2.5YR6/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	横位に刻みのある隆帯とそれに平行する LR の磨消縄文。裏面は丁寧な研ぎ。	R153
第39図	110	SK14	2.5YR6/8 橙	5YR5/3 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	水平に刻みのある隆帯と LR の磨消縄文。	R180
第39図	111	G4Gr	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇に近接して水平の沈線とそこからつづく肩部の隆帯上に複節 LRL の縄文を施文。	R172
第39図	112	G3Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	刻みのある隆帯の両側に平行する沈線で略三角形になる区画を形成する。	R171
第39図	113	G4Gr	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR5/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラップ状にひらく無文口縁部。折返し口縁状の成形と表裏に丁寧な研ぎ。	R172
第39図	114	F4Gr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部に水平の刻みのある隆帯を施文し、その上に 8 字形浮点文？を貼付、それを中心に半同心円の集合沈線を描く。	R167
第39図	115	F4Gr	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	折返し状の口縁に、横位に刻みのある隆帯とそれに平行する沈線、表裏に丁寧な研ぎ。	R167
第39図	116	F4Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	くびれ部に沈線による楕円の半同心円の文様を施文。	R167
第39図	117	G4Gr	5YR4/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	沈線による半同心円の文様で RL の磨消縄文を施す。	R176
第39図	118	G4Gr	5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	断面三角形の隆帯の上に半裁竹管による押引きの平行沈線で弧状の文様を描く。	R175
第39図	119	G4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラップ状にひらく無文口縁部。折返し口縁状の成形。	R175
第39図	120	F4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR5/3 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	弧状の平行沈線内を RL の磨消縄文で充填する。	R83
第39図	121	1Tr	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR5/6 明褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	垂下する刻みのある隆帯をもつラップ状にひらく口縁部。折返し口縁状の成形。	R14
第39図 PL.9	122	1Tr	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	くの字に内湾する口縁部の口唇外側に円錐形工具による上下の刺突と、沈線による楕円文の中に、棒状工具による斜め刺突文が施文される。	R21
第39図 PL.9	123	F4Gr	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部に平行する刻みのある隆帯の下に、三本の弧状になる集合沈線を引き、その間に細かい LR の縄文を施文する。	R76

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第39図	124	F4Gr	10YR3/2 黒褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	折返し口縁状の口唇に平行して細い隆帯と沈線が施文される。	R58
第39図	125	F4Gr	2.5YR3/2 黒褐	10YR5/3 にぶい黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	二本の斜行する沈線の結合点に「つ」状の楕円文を描画する。この区画内を細かいLRの縄文を縦位で充填する。	R75
第39図	126	G4Gr	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	刻みのある隆帯の下に沈線による同心円と弧線を引き、その間を細かいLRの縄文で充填する。	R173
第39図	127	G3Gr	5YR4/2 灰褐	5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	沈線による帯状磨消縄文で三角形幾何学文を描く。	R190
第39図 PL.9	128	G3Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部に平行した二本の隆帯を貼付、その上に8字形浮点文を置き、そこを中心に下部に二本の沈線による三角形の幾何学文を描き、内部を細かいRLの縄文で充填する。上部は研ぎ、無文でラップ状、やや放射状にひろく二本の隆帯を貼付する。	R188
第39図	129	G3Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	鉢形土器のラップ状にひろく上半部。口縁部に平行する斜め刻みのある隆帯と垂下する隆帯を施文する。	R190
第40図	130	G4Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	沈線による帯状磨消縄文で三角形幾何学文を描く。	R174
第40図	131	D4Gr	7.5YR6/6 橙	2.5YR6/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	体部に水平に沈線を引き、その下にLRの縄文を横位に施文、その上に斜め沈線を引く。	R69
第40図	132	D4Gr	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	二本の沈線で区画された中をLの擦糸で充填する。	R69
第40図	133	E2Gr	2.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口縁に平行して刻みのある隆帯を貼付、裏面に折返し口縁状の成形と橙色彩色、丁寧な研ぎ。	R157
第40図	134	G4Gr	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	小型鉢形土器の頸部に平行して二本の隆帯を貼付、上の隆帯のみ斜め刻みを入れるが、その隆帯上に8字形浮点文を置く。	R241
第40図	135		5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	体部に平行に貼付された隆帯に接続した、先端渦巻き状の棒状工具による刺突のある円形浮点を基点に放射状に沈線、刻み隆帯を直線、U字形に描く。	確 R1
第40図	136		10YR7/4 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラップ状にひろがる口縁に頸部からやや放射状にひろがる斜め刻みのある二本の隆帯。	確 R1
第40図	137		7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部のくびれ部に二本の沈線を横U字形に結合する。	確 R1
第40図	138		7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	肥厚した口唇に棒状工具による連続刺突文。	確 R1
第40図	139	F2Gr	2.5YR5/6 明赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラップ状にひろがる無文口縁部。刻みのある隆帯が貼付される。	確 R1 ・ R123
第40図	140	D4Gr	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	平行沈線による細かいLRの帯縄文。	R110
第40図	141	D4Gr	5YR4/6 赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	方形区画の帯縄文。	R110
第40図	142	D4Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR7/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	沈線による渦巻文と区画内を埋める非常に細かいLRの縄文。	R110
第40図 PL.9	143	D4Gr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	平行沈線による三角形の幾何学文の内側を細かいLRの縄文で充填する。	R260
第40図	144	D2Gr	10YR5/3 にぶい黄橙	2.5Y3/2 黒褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	細かいLRの縄文を地文として施文した後、平行沈線を施文する。	R37
第40図	145		7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	口縁に渦巻状の浮点文を貼付し、その下にやや弧状に帯縄文を施文する。	R55
第40図	146	F4Gr	2.5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	くびれをもつ鉢形土器の無文口縁部。くの字状に内向する口唇に平行する沈線が施文される。	R72
第40図 PL.9	147	1Tr	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部くびれ部の上部に二本の刻みのある隆帯より蔵手状の文様を起点に垂直、斜線を組み合わせた沈線による、細かいLRの磨消縄文を施す。174と同一個体？	R31
第40図 PL.9	148	G4Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラップ状にひろく、折返し状の口唇をもつ口縁部。LRの縄文を密接して全体に施文する。	R203
第40図 PL.9	149	G4Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	朝顔形深鉢胴部。沈線による楕円と弧、直線による文様の中を細かいRLで充填して帯縄文としている。	R227
第40図	150	G4Gr	10YR4/1 褐灰	7.5YR5/3 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	やや直線的な弧の沈線で区切られた細かいLRの磨消縄文。	R204
第40図	151	G4Gr	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	沈線による区画内に細いL？で磨消縄文を施す。	R202
第40図	152	G4Gr	5YR7/8 橙	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	くの字に内向する口縁部の上面に沈線と、円錐の頂点に凹みのある工具による刺突文を施文。	R204
第40図	153	F2Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部から張り出した胴部上半に、二本の沈線で縦位弧状に器面を区分し、その内部を縦位LRで充填する。	R213
第40図 PL.9	154	F2Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	2.5Y3/2 黒褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	太い沈線による同心円文の中央部と上部左右に半球に近い円錐状の先端をもつ工具で刺突文を施す。縁帯文土器か。	R213
第40図	155	G4Gr	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部に平行して刻みのある隆帯を二本貼付する。	R228
第40図	156	G4Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラップ状にひろく無文口縁部。内側に折返し口縁状の成形をする。補修孔あり。	R228
第40図	157	G4Gr	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	横に平行する集合沈線。	R212
第40図	158	G4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	くの字形に内湾する口縁部。外側上面に細線文で文様を描く。	R212
第40図 PL.9	159	G4Gr	10YR4/2 灰黄褐	5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	単節Rの縄文を横位に施文し地文とし、円錐状の工具による刺突から放射状に沈線を配する。	R241

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第40図 PL.9	160	G4Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口縁部下に LR の縄文を充填する沈線区画文。	R200
第40図	161	G4Gr	5YR5/3 にぶい赤褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	無文口縁部に、くの字形に内湾する形で口唇を成形し、その上面に平行する沈線を引いて肩状にしている。	R200
第40図 PL.9	162	1Tr	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	朝顔形深鉢口縁部。折返口縁状に内側を肥厚し、把手部分？に円孔を空け注口状にしている。細かい LR の帯縄文で逆三角形の幾何学文を描画している。	R2
第40図	163	SD01 ・ D2-3Gr	7.5YR6/3 にぶい褐	5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	無文口縁部の内側、折返し口縁状の口唇内側に斜め列点状の連続刺突文を施文。	R42
第40図 PL.9	164	Pit46	5YR7/6 橙	10YR3/1 黒褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	波状口縁の突起部。表面に入組みで渦巻文を施し、裏面は粘土で肥厚した部分に先端ドーム状の工具による連続刺突文を施文する。	R246
第40図	165	SK01	5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	大きくひらく折返口縁状の口縁部で、表面に平行する集合沈線。	R112
第40図 PL.9	166	SD01 ・ C3Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	細かい RL の帯縄文で幾何学文を描画し、その区画内を集合沈線で充填する。	R35
第40図	167	SK01	10YR4/1 褐灰	7.5YR4/1 褐灰	IV群 A-2 類	堀之内 2	細かい LR の帯縄文による逆三角形の幾何学文を施文。	R112
第40図	168	SK01	5YR4/2 灰褐	5YR4/3 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラッパ状にひらくが、口唇を折返口縁状に内向する成形を行い、その上面に平行する沈線を引く、無文口縁部。	R112
第40図 PL.9	169	SK01	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	鉢形土器の口縁部近くで、くの字状に内湾する肩部。LR の帯縄文による入組文状の施文。	R112
第40図	170	SK27	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	朝顔形深鉢の胴部に沈線による幾何学文で区画し、その内部に LR の縄文を充填する。	R221
第40図	171	SK21	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	弧状の集合沈線を交互に組み合わせた文様を施文。	R182
第41図	172	3Tr	2.5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラッパ状にひらく、折返し口縁状の成形をする無文口縁部。	R4
第41図	173	3Tr	10YR6/3 にぶい黄橙	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇部を平坦に肥厚し、丸い刺突を起点に口縁に平行して細い帯縄文を横に引き、横位の蕨手の文様を施す。	R4
第41図 PL.10	174	G4Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部くびれ部の上部に二本の刻みのある隆帯の上に 8 字文を貼付し、その下に蕨手状の文様を起点に垂直、斜線を組み合わせた沈線による細かい LR の磨消縄文を施す。147 と同一個体？	R174
第41図 PL.10	175	SD1 ・ B4-C4Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	くの字形に大きく屈曲する口縁部。表面に平行沈線による磨消縄文、裏面は内部突帯の上に棒状工具による連続刺突と間を開けて平行沈線を施す。丁寧な研ぎで、表面は肌色で内部は還元して黒灰色を呈す。SD-1 出土	R34
第41図 PL.10	176	SK13	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	波状口縁突起部に円錐状の状具による刺突を施し、くの字状に屈曲した部分の上部に平行した沈線を引く。屈曲部の下には三角形を成すように平行沈線を引く。(四ツ池式の可能性あり)。SK-13-P-1 出土。	R215
第41図	177	1Tr	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	口縁に沈線と円錐形工具による刺突文。南側サブトレ東部分出土。	R9
第41図 PL.10	178	F3Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	3 本の平行沈線でやや弧状に三角形の幾何学文を描き、口縁部に粘土紐一本上乗せする形で形成。その裏面部接合部に沈線を引き、表はそのまま接合痕をのこし、斜めの連続した沈線を刻む。	R161
第41図 PL.10	179	F4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	平行沈線によって菱形の区画文が描かれ、その交点に竹管による刺突文が施文される。	R75
第41図	180		10YR5/2 灰黄褐	7.5YR5/3 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	薄く成形された口唇部に肩をつくるように、沈線を両側に斜め刻みのある隆帯を施文し、平行してその下に集合沈線を施文する。	R55
第41図	181	E3Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR3/1 黒褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	刻みのある隆帯の下に沈線で横 U 字の文様を描く。	R45
第41図	182	G4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	口唇部に平行した沈線の下に太い隆帯をつけて肩を形成し、その下に浅い平行沈線の懸垂文を施文する。	R204
第41図	183	G4Gr	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	無文口縁部に細い隆帯を垂下する。器壁が薄く、西日本系の土器かもしれない。	R209
第41図 PL.10	184	G3Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	口唇上部に粘土紐を乗せ、その内側接合部にさらに粘土紐を貼り付けるようにして肥厚した口唇の内外両面に、横 U 字形に巻く沈線文を描く。	R214
第41図	185	G4Gr	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ？	くびれをもつ鉢形土器の頸部に 8 字形浮点文を置き、それを起点に下部に直線的に広がる沈線を施文。器壁が薄く、文様も鋭角的で、西日本系の土器かもしれない。	R209
第41図 PL.10	186	F4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	環状？把手部分。	R72
第41図 PL.10	187	G4Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラッパ状にひらく口縁部の把手部分。細い粘土紐を巻きつけるように貼付けた隆帯から渦巻文につづき、接続する形で垂下させる。	R202

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第41図	188	Pit57	10YR4/2 灰黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球胴中央部に細い沈線で4本の同心円を描き、それを取り囲む形で細いLRの磨消縄文を施す。Pit57出土。	R249
第41図	189	1Tr	10YR4/2 灰黄褐	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球胴部の中心に半同心円の沈線の周囲に帯状のLRの磨消縄文を施す。	R2
第41図 PL.10	190	F2Gr	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/1 褐灰	IV群 A-2 類	堀之内 2	無文の注口土器上半部。	R118
第41図	191	1Tr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口土器の口縁部。	R15
第41図 PL.10	192	1Tr・G4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口土器。細かいLRの磨消縄文。	R5 ・ R20 ・ R172 ・ R200 ・ R202
第42図 PL.10	193	F2Gr	2.5YR4/1 黄灰	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口土器。LRの磨消縄文、刻みのある細い隆帯の文様の交差点に形の崩れた8字形浮点文を形成する。	R116 ・ R213 ・ R238
第42図 PL.10	194	F2Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口土器の板状把手。	R238
第42図 PL.10	195	G3Gr	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR4/3 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口接合部。G-3 グリッド出土。	R190
第42図 PL.10	196	G4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR7/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口接合部。G-4 グリッド出土。	R230
第42図 PL.10	197	G4Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口土器の注口と把手の部分。	R176
第42図 PL.10	198	G4Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口接合部。G-4 グリッド出土。	R1 ・ R231
第42図	199	F2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内	注口部。F-2 グリッド出土。	R213 ・ R240
第42図 PL.10	200	F2Gr	2.5YR4/1 黄灰	5YR5/3 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内	注口部。	R237
第42図	201	F4Gr	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y6/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内	注口部。F-4 グリッド出土。	R52
第42図	202		7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内？	表側に「く」の字に肥厚した波状口縁の上部に円錐形工具による連続刺突を施す。波状口縁の突出部に円孔を穿つ。	確 R1
第42図	203	G3Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内？	ラッパ条にひらく大型鉢の無文口縁部。口唇部が、くの字形に内湾し、その上面に浅い沈線を引く。	R223
第42図	204	BTr-5	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内？	口縁に平行する沈線の下縁に斜めの刻みを入れる。	R4
第42図 PL.10	205	2Tr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内？	口唇部表面に洋梨形の円管状工具による連続刺突文を施し、口縁に平行して沈線を施文する。	R22
第42図	206	F4Gr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内？	平行沈線が施文されている、鋭角に角をもつ口縁部。疑似口縁？	R166
第42図	207	F2Gr	10YR4/2 灰黄褐	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内？	波状口縁の表裏に平行沈線を弧状に施文。	R49
第42図	208	1Tr	7.5YR6/6 橙	10YR5/3 にぶい黄褐	IV群 A-2 類	堀之内？	二本の太く浅い沈線。	R8
第42図	209	F4Gr	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内？	やや弧を描く平行沈線。	R84
第43図 PL.10	210	E2Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。ゆるく燃った太いRの縄に撚りと逆方向に1を付加条にした原体を横位に器面全体に施文。	R132
第43図	211	F2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。ゆるく燃った太いLの縄に撚りと逆方向に1を付加条にした原体を横位に器面全体に施文。	R49 ・ R121
第43図 PL.10	212	G4Gr	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR6/3 にぶい褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向に1を付加条にした原体を口縁に平行して横位施文。G-4 グリッド出土。	R212
第43図	213	Pit36	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太くゆるいRの縄に撚りと逆方向に1、あるいは撚り戻したRを付加条にした原体を口縁に平行して横位施文。Pit36出土。	R107
第43図	214	1Tr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	太いLRの縄文を横位施文する。	R2
第43図	215	1Tr	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrを付加条にした原体を口縁に平行して横位施文。	R2
第43図	216	1Tr	10YR6/4 にぶい黄橙	5YR5/6 明赤褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrを付加条にした原体を口縁に平行して横位施文。	R5
第43図	217	1Tr	10YR8/4 浅黄橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrを付加条にした原体を口縁に平行して横位施文。	R5
第43図	218	A2Gr	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	IV群 A-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRLに1を付加条した原体の縄文を縦位に施文。	R3
第43図	219	1Tr	10YR5/3 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrを付加条にした原体を横位施文。	R8
第43図	220	1Tr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrを付加条にした原体を横位施文。	R8
第43図	221	2Tr	10YR6/3 にぶい黄褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄文に撚りと逆方向に、撚戻されたRの縄文を付加して横位に施文。	R3
第43図	222	1Tr	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。無節Lの縄文を口縁に横位に施文。	R6
第43図	223	F3Gr	2.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrあるいはLの撚戻しを付加条にした原体を口縁に平行して横位施文。	R153



挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第43図	224	F3Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrあるいはLの撚戻しを付加条にした原体を口縁に平行して横位施文。	R161
第43図	225	F3Gr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いLの縄に撚っていない繊維を付加し、横位に施文。裏面は研いている。	R148
第43図	226	E2Gr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Lの縄に撚りと逆方向にlを付加条にした原体を口縁に平行して横位施文。	R169
第43図	227	G4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR4/2 灰褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にlを付加条にした原体を斜めに施文。	R176
第43図	228	G4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR4/4 褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にlを付加条にした原体を口縁に沿って横位に施文。	R175
第43図	229	1Tr	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrを付加条にした原体を斜めに回転させ、付加した撚紐が垂下線になるように施文。	R20
第43図	230	1Tr	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrを付加条にした原体を横位に施文。	R14
第43図	231	G4Gr	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いLの縄に撚りと逆方向にlを付加条にした原体を横位に施文。	R174
第43図 PL.11	232	F4Gr	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いLの縄に撚りと逆方向にlを付加条にした原体を横位に施文。	R165
第43図	233	G4Gr	5YR7/6 橙	10YR6/3 にぶい黄橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrを付加条にした原体を口縁と平行に横位に施文。	R174
第43図	234	G4Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。口縁に平行して太いLRの縄文を施文。	R174
第43図	235		10YR5/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。無節LもしくはRLの撚戻しの縄文を口縁に平行して横位に施文。	確 R1
第44図	236	D4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。条線と斜め刺突によって、付加条による施文を模倣している。	R110
第44図	237	D3Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に、撚りと逆方向にrの撚紐を付加条にして口縁に沿って横位に施文。	R109
第44図	238	E3Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。L?の縄に、撚りと逆方向にlの撚紐を付加条にして口縁に沿って横位に施文。	R45
第44図	239	F4Gr	10YR6/3 にぶい黄橙	5YR5/3 にぶい赤褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Rの縄に、撚りと逆方向にrの撚紐を付加条にして横位に施文。	R74
第44図	240	G4Gr	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Lの縄にrの撚紐を付加条にして横位に施文。	R227
第44図	241	F4Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Lの縄にLの縄の撚戻しを付加して縦位に施文。E-2	R58
第44図	242	F4Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Lの縄にLの縄の撚戻しを付加して縦位に施文。	R74
第44図	243	G4Gr	10YR5/1 褐灰	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrの撚紐を付加条にして、縦位に施文。内面に擦痕状の調整。	R211
第44図	244	G4Gr	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いR?の縄に撚りと逆方向にrの撚紐を付加条にして、縦位に施文。	R211
第44図	245	G4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Rあるいは撚り戻したLRの縄を口縁に沿って横位に施文。	R204
第44図 PL.11	246	F2Gr	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄にlの撚紐を付加条にして、ややラフに横位に施文している。	R213
第44図	247	G4Gr	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrの撚紐を付加条にして横位に施文。	R202
第44図	248	G4Gr	10YR8/4 浅黄橙	10YR4/2 灰黄褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄に撚りと逆方向にrの撚紐を付加条にして横位に施文。	R228
第44図	249	3Tr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。口縁部に沿って、太いRの縄に撚りと逆方向に、撚戻したLRの縄文を付加条にして横位に施文。	R30
第44図	250	F4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内1?	右下がりに施文されたRLの縄文を地文に、三本の平行沈線が垂下される。	R58
第44図 PL.11	251	F4Gr	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内1?	LRの地文に平行沈線と三本の集合沈線による半同心円文が施文される。	R83
第44図	252	F4Gr	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内1?	RLの縄文を地文に、その上に沈線で米字状の幾何学文様を描く。	R167
第44図 PL.11	253	F4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR4/3 褐	IV群 A-2 類	堀之内	複節RLRを横位に施文し地文とし、平行沈線あるいは撚紐を平行して圧痕し、縦に区画している。254,270と同一個体?。	R84
第44図	254	F4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR4/3 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	複節RLRを横位に施文し地文とし、平行沈線あるいは撚紐を平行して圧痕し、縦に区画している。253,170と同一個体?。	R58
第44図	255	E1Gr	7.5YR4/4 褐	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内	沈線による垂下線で縦に区分された内部に、縦位にLRの縄文を充填する。	R186
第44図	256	F4Gr	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。横位のRLを地文に、縦に二本の平行沈線を垂下して区画する。	R74
第44図	257	G4Gr	10YR3/2 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。角をもつ棒状工具で平行沈線を引き、その内部を同じ工具で連続刺突文を施した区画の内部をRL?の縄文で埋める。	R203
第44図	258	2Tr	5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 B-2 類	堀之内	粗製土器。太いRLの縄文を口縁に沿って横位に施文後、口縁と平行して沈線を引く。	R23
第44図	259	G4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内	粗製土器。LRの縄文を口縁に沿って横位に施文。	R230

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第44図	260	G3Gr	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内 1 ?	粗製土器。口唇に沿う沈線の下に LR の縄文を横位で全面に施文し、単節 L の撚戻した原体を斜めに押し付けている。	R268
第44図 PL.11	261	G4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内 1 ?	粗製土器。口唇上面に沈線を施文、地文として LR の縄文を横位に施文した後、沈線による垂下線で縦の区画を形成する。	R232
第44図	262	2Tr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 B-2 類	堀之内	口縁に平行する沈線の下に三条?の RL の太い縄文を施文。A 土坑近くで出土。	R26
第44図 PL.11	263	G4Gr	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR7/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行?	粗製土器。太い無節 R の縄文を地文とし、その後に二本の平行する I を押圧して長方形区画のように施文。さらにその間に縦位に沈線か繊維の側面圧痕で破線状の沈線文を施す。	R210
第44図	264	F4Gr	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内	やや雑に平行する集合沈線文を施文。	R167
第44図	265	G4Gr	7.5YR6/6 橙	5YR7/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内	断面三角形のための沈線で斜行文を描く。	R174
第45図 PL.11	266	F4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製?深鉢底部付近。地文に細かい LR の縄文を縦位施文した後、磨いている。その後、条線状の沈線を描くが、沈線間の縄文を磨消している。	R76 ・ R79 ・ R166
第45図	267	G4Gr	2.5Y4/1 黄灰	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内	LR の縦位施文?	R271
第45図 PL.11	268	2Tr・SU01	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。大きな RL の原体を右下がり斜めに器面全体にランダムに施文し、地文としている。	R25
第45図	269	2Tr・SU02	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR7/8 黄橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。深鉢下半部、LR の縄文を全体に施文した後、縦に帯状に磨り消している。	R28
第45図	270	F4Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。複節 RLR の縄文を横位に施文し地文とし、平行沈線あるいは撚紐を平行して圧痕し、縦に区画している。253,254 と同一個体。	R84
第45図	271	E2Gr	10YR3/2 黒褐	7.5YR4/3 褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。ゆるやかなに波状になる口縁。RL の縄文を横位に施文。	R193
第45図	272	1Tr	5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に対し右斜め上に RL の縄文が施文される。	R14
第45図	273	G3Gr	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して LR の縄文を横位に施文。	R189
第45図	274		7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。LR の縄文を横位に施文。	確 R1
第45図	275	E2Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。太い LR の縄文を横位に施文。	R160
第45図	276	D4Gr	5YR7/8 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。波状口縁の突起部分。細かい RL の縄文をラフに施文。	R110
第45図	277	E1Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR5/3 にぶい黄褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して薄く RL の縄文を横位に施文。	R186
第45図	278	E3Gr	7.5YR7/6 橙	5YR6/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器?。口縁に平行して LR ? の縄文を横位に施文。	R45
第45図	279	G4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。角ばった口縁に横位の LR の縄文を施文する。	R227
第45図	280	G4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に横位の LR の縄文を施文する。	R206
第45図	281	G4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。LR の縄文を横位に施文。	R226
第46図	282	G4Gr	7.5YR7/6 橙	10YR5/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して太い LR の縄文を施文。	R174
第46図	283	G4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して太い LR の縄文を施文。	R174
第46図	284	2Tr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して太い LR の縄文を施文。南側サブトレ出土。	R13
第46図	285	G4Gr	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して LR の縄文を横位に施文。	R187
第46図	286	G4Gr	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して RL の縄文を横位に施文。	R172
第46図	287	F4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して、R を撚り戻した原体を横位に施文?	R165
第46図	288	E2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/3 にぶい黄褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して LR の縄文を施文。	R157
第46図	289	F4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR4/3 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁部に平行して RL の縄文をゆるく施文する。	R74
第46図	290	F2Gr	5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に対して縦位に R の縄文を施文後、斜めに重ねることやや縦の羽状にみえる。	R213
第46図	291	ATr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。無節 R を横位に施文。	R17
第46図	292	1Tr	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	IV群 B-2 類	堀之内	粗製土器。荒い LR の縄文を横位に施文。	R8
第46図	293	F4Gr	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に沿って LR の縄文が横位施文される。	R83
第46図	294	1Tr	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/3 にぶい褐	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。波状口縁に無節 L の縄文を横位に施文。	R8
第46図	295	F3Gr	2.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。太い無節 R の縄に撚りと逆方向に r を付加条にした原体を口縁に平行して横位施文。	R164
第46図 PL.11	296	E1Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群 A-3 類	加曽利 B1	平行沈線内に LR の磨消縄文を施文し、「の」字文で区分する。裏面口縁部に平行する沈線。E-1 グリッド出土。	R186
第46図 PL.11	297	D4Gr	7.5YR4/2 灰褐	10YR5/2 灰黄褐	IV群 A-3 類	加曽利 B ?	表に三本の平行沈線、裏に集合沈線を横位に施文。丁寧な研ぎ。	R69
第46図	298	ATr1Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群	後期	波状口縁部。	R2
第46図	299	BTr	10YR5/3 にぶい黄橙	5YR4/2 灰褐	IV群	後期	口縁部。	R18
第46図	300		5YR5/6 明赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	IV群	後期	小さな突起部のある口縁部。口唇上縁に斜め刻み、裏面に口縁に平行する沈線を施す。	R19
第46図 PL.11	301	2Tr	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	IV群	後期	口唇に平行する沈線の直下に薄い角のあるへら状の工具で連続刺突文を施文する。表裏に丁寧な研ぎがみられるが、胎土は浮石状の粒子を多く含む荒い。西日本系（四ッ池式）。	R23

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第46図	302	E1Gr	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群	後期?	大きくひらく口縁部に、外側より受け口状の圧えを加えた成形を施す。	R186
第46図 PL.11	303	G4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR4/4 褐	IV群	後期?	鉢頸部の屈曲部に平行する沈線と、そこからやや斜めに弧状に下垂する3本の集合沈線。四ッ池式か。	R230
第46図	304	SK1	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	IV群C類	縁帯文系?	鉢形土器の肩部。薄く、多量の砂粒を含む灰白色の胎土で、肩の屈曲部に粘土で肥厚した後、平行沈線を施して鋭角状に成形する。平行沈線内は細かいLの単節縄文で充填する。	R112
第46図	305	SK21	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	IV群C類	縁帯文系?	頸部。薄く、多量の砂粒を含む肌灰色の胎土で、横位の平行沈線による施文。	R182
第46図	306	BTr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	口縁裏に浅い沈線。	R13
第46図	307		5YR6/6 橙	7.5YR4/2 灰褐	不明	後期?	無文の口縁部。	R55
第46図	308	2Tr	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	IV群C類	後期?	角のある口唇に平行して二本の沈線を施す。多量の砂粒を混入し、表面が白肌色を呈す。西日本系の土器か。南側サブトレ出土。	R13
第46図	309	G4Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい褐	不明	後期?	口縁に平行して沈線が引かれ、その下にダッシュ状の刺突文が施文される。	R211
第46図	310	1Tr	5YR5/6 明赤褐	7.5YR4/3 褐色	不明	後期?	縦位R撚糸で器体全域に施文。胎土は白色砂粒を多く含み荒いが焼成は良好。南側サブトレ東部分出土。	R9
第46図	311	1Tr	10YR5/3 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	底部、網代痕。	R15
第46図	312	SKA・2Tr	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/4 にぶい黄橙	不明	後期?	粗製土器。無文の深鉢底部近くの下半部。	R25
第46図	313	ATr-1	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	底部。	R8
第46図	314	E2Gr	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/6 橙	不明	後期?	網代痕のある薄い底部。	R160
第46図	315	F4・G4Gr	2.5Y3/2 黒褐	2.5YR6/8 橙	不明	後期?	網代痕のある底部。	R167 ・R212
第46図	316	G4Gr	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	IV群C類	後期?	はっきりとした網代痕の底部。胎土が灰白色で砂粒を多く含んでおり西日本系の土器と思われる。	R200
第47図	317	1Tr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	不明	後期?	底部。1トレンチ出土。	R20
第47図	318	F3Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR5/6 明赤褐	不明	後期?	尖底に近い平底の底部。	R163
第47図	319	G4Gr	10YR5/2 灰黄褐	5YR7/6 橙	不明	後期?	底部、網代痕のある底部。G-4グリッド出土。	R207
第47図	320	BTr-5	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	底部、網代痕のある底部。	R4
第47図	321	1Tr	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	不明	後期?	網代痕のある底部。	R2
第47図	322	G4Gr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	不明	後期?	網代痕のある底部、種子痕。G-4グリッド出土。	R227
第47図	323	2Tr	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	網代痕のある底部。	R3
第47図	324	G4Gr	10YR8/4 浅黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	不明	後期?	網代痕のある底部。	R231
第47図	325	SK1	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	網代痕のある底部。	R112
第56図 PL.12	362	SK8	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	不明	不明	コップ状のミニチュア土器。全体に縦位の研ぎをかけ、底部に沿って沈線を引き高台状に整形している。SK-8出土。	R144
第56図 PL.12	363	1Tr	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	不明	不明	壺のミニチュア土器。1トレンチ出土。	R2
第56図	364	1Tr	2.5Y5/2 暗灰黄	10YR7/2 にぶい黄橙	土師器		小型の球胴の壺胴部。1トレンチ出土。	R20
第56図	365	ATr-1	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	土師器		高坏口縁。	R8
第56図	366	SD01・D2Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	土師器		高坏口縁部。SD-1出土。	R39
第56図	367	SD01・D2Gr	5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	土師器		円孔透しのある高坏脚部。SD-1出土。	R39

第5表 E地区 出土石器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第48図 PL.12	326	ATr1Gr 延長部	石鏃	黒曜石	2.48	1.6	0.47	1.01	凹基無茎鏃。	R2
第48図 PL.12	327	SD01	石鏃	黒曜石	1.67	1.47	0.36	0.68	左脚部欠損。SD-1 出土。	R64
第48図 PL.12	328	E2Gr	石鏃	黒曜石	(1.2)	1.03	0.23	0.24	先端部に衝撃剥離がある凹基無茎鏃。	R262
第48図 PL.12	329	SK07	石鏃	黒曜石	0.69	1.04	0.31	0.26	上部、左脚部欠損の凹基無茎鏃。SK-7 出土。	R112
第48図 PL.12	330	F4Gr	削器	黒曜石	3.47	2.98	1.48	12.77	刃部の角度が大きいため、搔器としても良い。	R92
第48図 PL.12	331		楔形石器	黒曜石	3.26	1.54	1.46	6.49	両極石核の可能性もある。攪乱土より出土。	R256
第48図 PL.12	332	3Tr	楔形石器	黒曜石	2.4	0.96	0.64	1.11		R19
第48図 PL.12	333	D4Gr	楔形石器	黒曜石	1.89	1.59	0.66	1.69		R69
第48図 PL.12	334	F4Gr	楔形石器	黒曜石	1.23	1.85	0.58	1.2		R166
第48図 PL.12	335		剥片	軟玉 (ネフライト)	2.7	3.25	0.69	8.71	両極打法によって剥離された剥片。玉斧の素材剥片と考えられる。	R274
第48図 PL.12	336	F2Gr	玉斧	軟玉 (ネフライト)	2.54	9.98	0.52	2.32	非常に小さな定角式磨製石斧。全面鏡面仕上げ。	R216
第48図 PL.12	337		磨製石斧	蛇紋岩?	(6.4)	5.2	2.6	162.63	定角式磨製石斧。焼石として再利用されたのか被熱による亀裂が全面におよぶ。	R217
第48図 PL.12	338		打製石斧	硬砂岩	10.45	4.91	1.56	88.98	バチ形に近い短冊形。表採品。	R273
第48図 PL.12	339		打製石斧	硬砂岩	8.9	3.6	1.4	53.18	小型の短冊形。	R20
第49図 PL.12	340	2Tr 南側サブトレ	打製石斧	硬砂岩	8.32	5.48	2.12	115.22	リダクションで短くなった短冊形。	R13
第49図 PL.12	341	F4Gr	打製石斧	砂岩	7.12	4.28	1	41.75	円礫面をもつ剥片素材の小型短冊形石斧。	R52
第49図 PL.12	342	ATr-1 拡張区	打製石斧	粘板岩	11.86	4.95	2.05	124.58	アーモンド形状だが短冊形に分類可能。	R8
第49図 PL.12	343	ATr-1 拡張区	打製石斧	緑色岩	8.72	4.88	1.74	90.85	短い短冊形。	R8
第49図 PL.12	344	1Tr	打製石斧	砂岩	6.92	4.4	1.28	30.88	バチ形に近い短冊形。台石的に再利用されている。	R2
第49図 PL.12	345	F4Gr	打製石斧	硬砂岩	9.12	5.53	1.85	103.97	分銅形に近い短冊形。	R68
第49図 PL.12	346	SK14	打製石斧	粘板岩	22.26	8.41	3.61	764.63	分銅形に近い短冊形。SK14 出土。	R180
第49図 PL.12	347	B4Gr	打製石斧	粘板岩	8.11	5.58	1.81	92.78	分銅形?	R1
第49図 PL.12	348		打製石斧	硬砂岩	(4.91)	4.38	1.97	48.18	短冊形の頭部。表採品。	R60
第49図 PL.12	349	ATr	打製石斧	硬砂岩	(4.72)	5.31	2.45	40.62	短冊形の刃部と頭部欠損。	R17
第49図 PL.12	350	BTr・SD01	打製石斧	富士川ホルン フェルス	(4.92)	4.71	1.68	45.7	短冊形のリダクションの進んだ刃部部分。	R12
第50図	351	2Tr	打製石斧	硬砂岩	8.82	9.38	2.41	243.1	石鏃に近い大型のバチ形。	R3
第50図	352		礫器	砂岩	9.52	7.88	3.51	306.39	円礫を分割し、その主要剥離面に平坦剥離を施す。打製石斧としても良い。表採品。	R272
第50図	353		石錘	粘板岩	7.15	4.21	0.98	44.11	上下左右に打ち欠きのある礫石錘。	R20
第50図	354	D2Gr・SD02	石錘	粘板岩	5.59	2.42	1	18.31	長軸両端に切れ目を入れた円礫石錘。SD-2 出土。	R38
第50図	355	1Tr	敲石	凝灰岩質砂岩	10.72	5.89	4.48	393.36	全体を敲打整形していることから、欠損した乳棒状磨製石斧の転用品の可能性が高い。	R14
第50図	356	2Tr・SKA	磨・敲石	砂岩	9.33	6.45	4.32	370.4	SKA の埋甕に伴出。	R24
第50図	357	F4Gr	敲石	粗粒凝灰岩	(8.03)	4.11	3.55	149.69	小型の石棒の可能性もあり。	R94
第50図	358	BTr・SD01 北端	磨・敲石	砂岩	11.78	5.81	5.41	553.12		R13
第50図	359	BTr・SD01 北端	磨・敲石	石英閃緑岩	(8.38)	(5.28)	(5.31)	285		R13
第50図	360	G4Gr	石棒	砂岩	(12.13)	(9.98)	(3.86)	346.37	大型石棒の角部分。	R225
第50図	361	G4Gr	石棒	粗粒安山岩	(11.35)	(11.92)	(6.1)	1009.5	大型石棒の頭部。	R224



## 第4章 天間沢遺跡 G 地区（第7地区）

### 第1節 調査に至る経緯と経過

#### 調査に至る経緯

天間地区内において個人住宅建設等に伴う小規模開発が増加し、遺跡保護のために緻密な遺跡範囲確認が急務であると判断されたことから、昭和58年秋、富士市教育委員会は遺跡範囲確認のための調査（旧：第8次調査）を実施することとなった。

第3地区の北東に位置する第7地区（天間1045-5、旧：第8次G地区）、第1地区から南へ200mほどの第8地区（天間1130-1、旧：第8次H地区）、同じく南へ330mほどの第9地区（天間1121、旧：第8次I地区）、第4地区から南へ180mほどの第10地区（天間529、旧：第8次J地区）の4地点に調査地区を設定した。

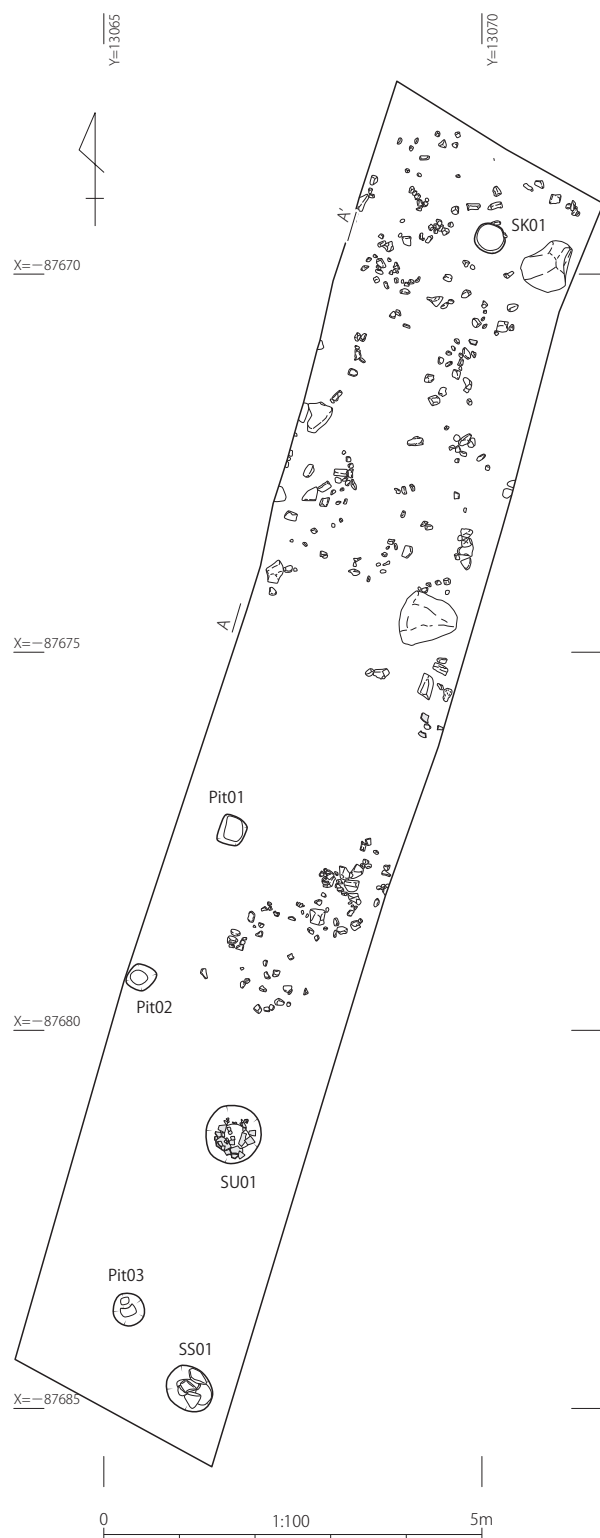
#### 発掘調査の経過

G地区の調査は昭和58年10月20日から24日にかけて行われた。

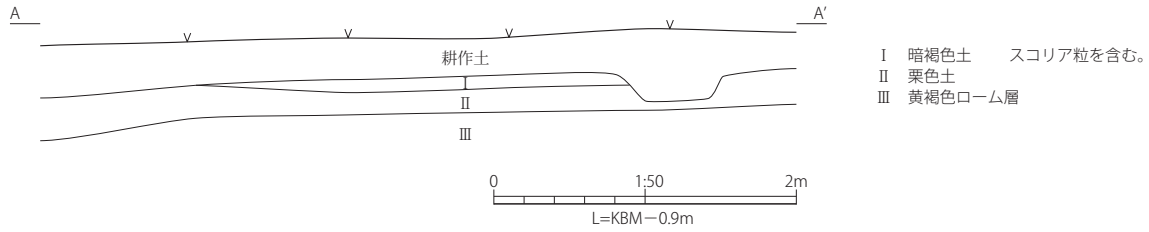
南北方向に、幅3m、長さ17.5mのトレンチを設定し掘削したところ、トレンチ北半で縄文時代の配石と土坑1基（SK01）が、南半で縄文時代の配石土坑1基（SS01）、埋甕土坑1基（SU01）、古墳時代と思われるピット3基（Pit01～03）が検出された。



第57図 G地区 位置図



第58図 G地区 トレンチ全体図



第59図 G地区 トレンチセクション図

## 第2節 発掘調査の成果

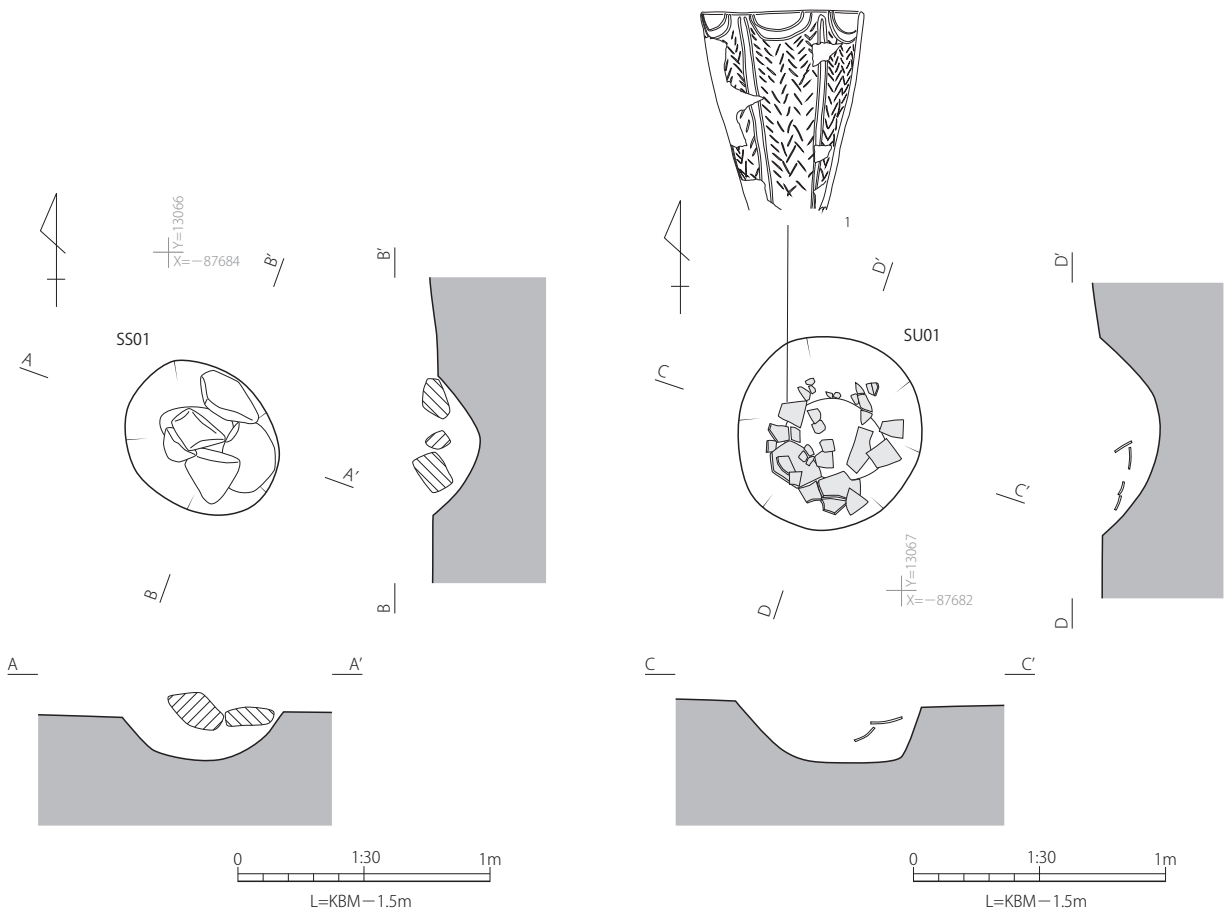
### 遺構

配石土坑 SS01 は、長軸 64cm、短軸 55cm、深さ 19cm で丸底の円形土坑で、中から長さ 15 ～ 30cm ほどの石が 5 つ出土した。

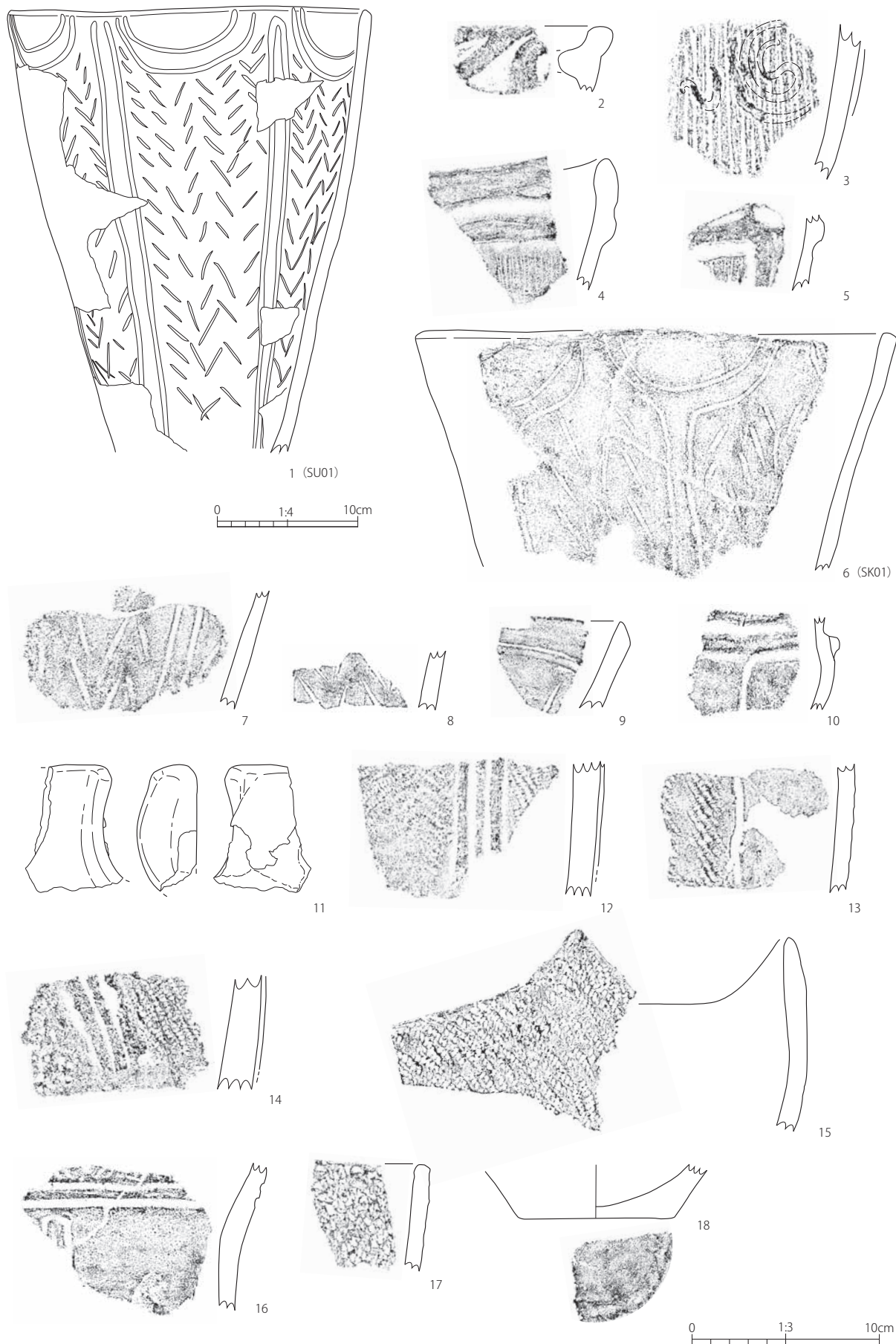
埋甕土坑 SU01 は、長軸 77cm、短軸 72cm、深さ 25cm で丸底の円形土坑で、中から縄文土器 (1) の破片が多数出土した。

土坑 SK01 は径 40cm の正円形を呈する。

Pit01・02 は長軸 40cm ほどの隅丸方形、Pit03 は径 45cm ほどの正円形である。



第60図 G地区 SS01・SU01



第61図 G地区 出土遺物実測図(1)

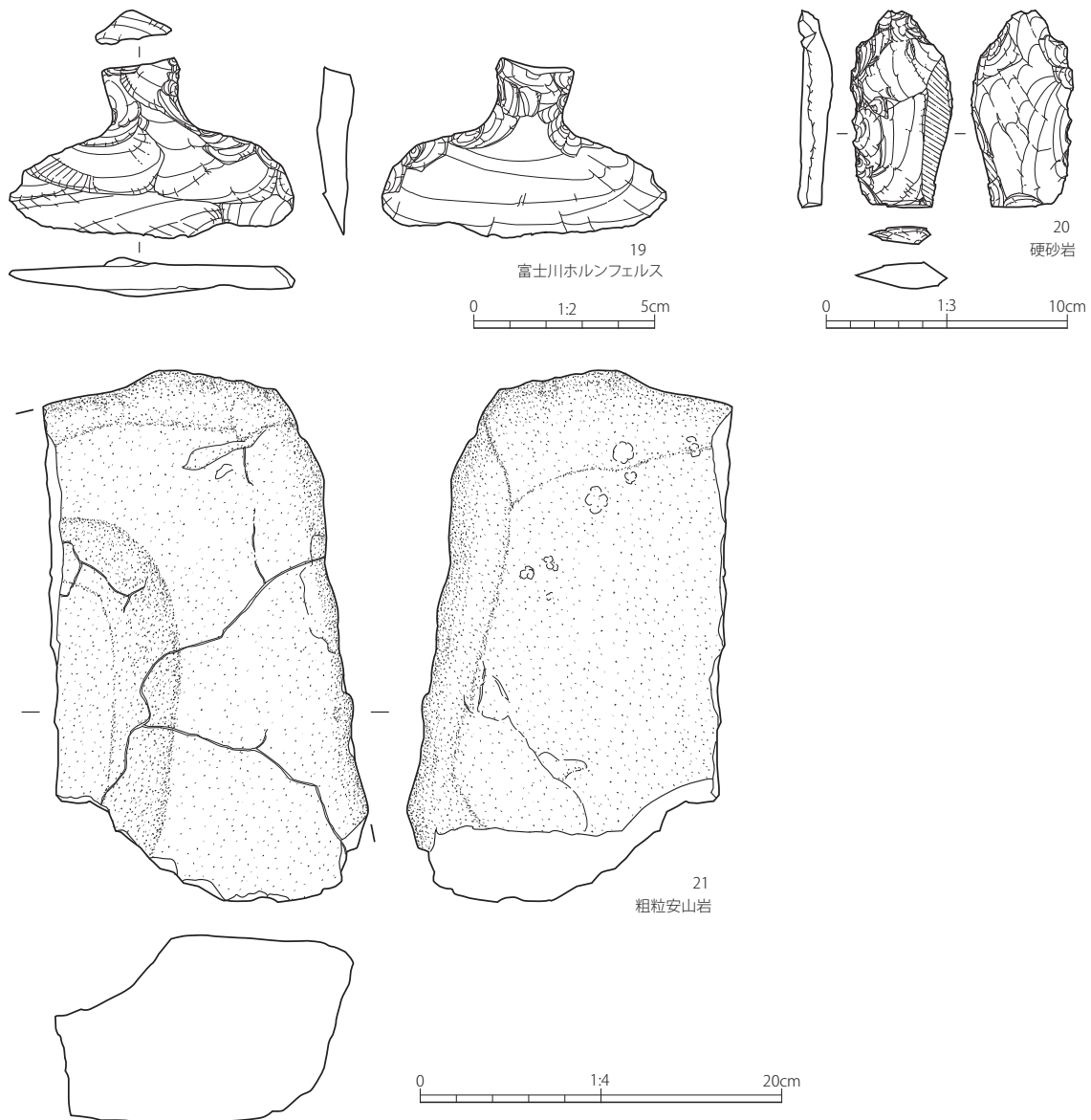


## 遺物

出土遺物は縄文時代中・後期の遺物のみで、最も古いものは2の中期中葉、Ⅲ群A-1類（井戸尻式）と3のⅢ群A-2類（曾利Ⅱ式）のみ、最も新しいものが16の後期のⅣ群A-2類（堀之内1式）のみで、それ以外はⅢ群A-2類の曾利Ⅳ・Ⅴ式とⅢ群B-2類の加曾利E式に比定される。遺構から出土する土器も、埋甕土坑SUからは1の曾利Ⅴ式の深鉢、土坑SKからも6の曾利Ⅴ式の深鉢の大型破片が

出土していることから、G地区の主な活動期は、縄文時代中期末の短い期間といえる。法量は1が口径（最大径）25.9cm、残存高31.5cmで、6が推定口径25.8cm、残存高12.6cmである。

石器は、19の横形石ヒと、打製石斧の再生剥片を削器とした20、そして全体を4分の1に分割し、焼礫として再利用している21の石皿が出土している。



第62図 G地区 出土遺物実測図（2）

第6表 G地区 遺構一覧表

遺構種別	報告遺構名	調査時遺構名	位置	時代	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い (古→新)	備考
土坑	SK01	土坑	1Tr	縄文	40	40	-	正円形	-	-	
土坑	SS01	配石土坑	1Tr	縄文	64	55	19	正円形	丸底	-	
土坑	SU01	埋甕土坑	1Tr	縄文	77	72	25	正円形	丸底	-	
ピット	Pit01	P1	1Tr	古墳	38	35	-	隅丸方形	-	-	
ピット	Pit02	P2	1Tr	古墳	40	35	-	隅丸方形	-	-	
ピット	Pit03	P3	1Tr	古墳	45	41	-	正円形	-	-	

第7表 G地区 出土土器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第61図 PL.13	1	SU	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	口縁部に7単位の連弧の文様を配し、その間を口縁から口字を起点に平行沈線による懸垂文を下ろす。それによる区画内を八の字文で埋める。	R99
第61図	2	SK	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻?	口縁部内側に受口状の突帯を持つ。口縁部文様帯に斜位の隆帯と渦巻文を連結した文様を施す。	R2
第61図 PL.14	3		10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	大型籠目文土器の胴部。縦位の条線を地文に、粘土紐の平行浮線文による懸垂文と渦巻文を貼付する。	R5
第61図 PL.14	4	SK	7.5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による区画内を縦位条線で埋める。	R2
第61図	5	SK	5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による区画内を縦位条線で埋める。	R2
第61図 PL.14	6		5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	凹形の連続弧線文の沈線を、そのまま懸垂文として垂下し、それによる区画内を八の字文で埋める。	R1
第61図 PL.14	7	土坑一括	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	平行沈線の懸垂文に区画された中を八の字文で埋める。	R1
第61図	8	土坑一括	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	八の字文を全体に施文。	R1
第61図	9	SK	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	口縁部に平行する沈線と、そこから垂下される懸垂文による区画内を八の字文で埋める。	R2
第61図 PL.14	10	SK	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	小型鐔付土器の口縁部。鐔部分から沈線による懸垂文?が垂下される。	R2
第61図 PL.14	11	SK	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利?	外反する板状の把手部分。	R2
第61図 PL.14	12		7.5YR4/3 褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利E	三本の半隆帯による懸垂文の区画内を、LRの縄文で縦・横位を組み合わせて縦位の羽状縄文として施文する。	R5
第61図 PL.14	13	SK	10YR5/2 灰黄褐	5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利E	沈線によって区画された内部を多条のLRの縄文で充填する。	R2
第61図 PL.14	14		7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利E	三本の半隆帯による懸垂文による区画内をRLの縄文で横位に施文する。	R5
第61図 PL.14	15		7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利E?	板状三角形の把手をもつ口縁部。地文としてRLの縄文をラフに横位施文する。	R2
第61図 PL.14	16	SK	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR7/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内Ⅰ?	深鉢の頸部に平行沈線による文様を描き、凸状の文様内に刺突?を施す。頸部から口縁部の文様帯?には同心円文状の沈線が観察される。	R2
第61図 PL.14	17	SK 一括	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	不明	不明	口縁に平行して、太くラフなLRの縄文を横位に密接施文する。	R1
第61図	18	SK	10YR5/2 灰黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群	中期	高台のような張出しがある底部。	R2

第8表 G地区 出土石器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第62図 PL.14	19		石ヒ	富士川ホルンフェルス	4.93	7.8	0.93	25.92	横形石ヒ。	R5
第62図 PL.14	20		削器	硬砂岩	5.23	4.09	1.28	52.06	打製石斧製作時の剥片を素材としている。	R4
第62図 PL.14	21		石皿	粗粒安山岩	29.43	17.48	10.9	7780	全体にうすくピンク色に赤化している。	R6



## 第5章 天間沢遺跡 H 地区（第8地区）

### 第1節 調査に至る経緯と経過

#### 調査に至る経緯

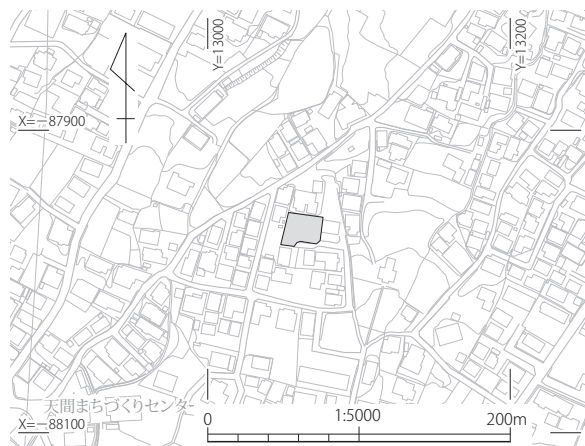
天間地区内において個人住宅建設等に伴う小規模開発が増加し、遺跡保護のために緻密な遺跡範囲確認が急務であると判断されたことから、昭和58年秋、富士市教育委員会は遺跡範囲確認のための調査（旧：第8次調査）を実施することとなった。

第3地区の北東に位置する第7地区（天間1045-5、旧：第8次G地区）、第1地区から南へ200mほどの第8地区（天間1130-1、旧：第8次H地区）、同じく南へ330mほどの第9地区（天間1121、旧：第8次I地区）、第4地区から南へ180mほどの第10地区（天間529、旧：第8次J地区）の4地点に調査地区を設定した。

#### 発掘調査の経過

H地区の調査は昭和58年11月7日から11日にかけて行われた。

南北方向に、幅3m、長さ15.2mのトレンチを設定し掘削したところ、トレンチ南端で2基のピットが検出され、トレンチ北半で古墳時代前期の建物（SB01）が検出された。SB01 検出部分のみトレンチを東西に拡張して、可能な範囲で完掘した。



第63図 H地区 位置図

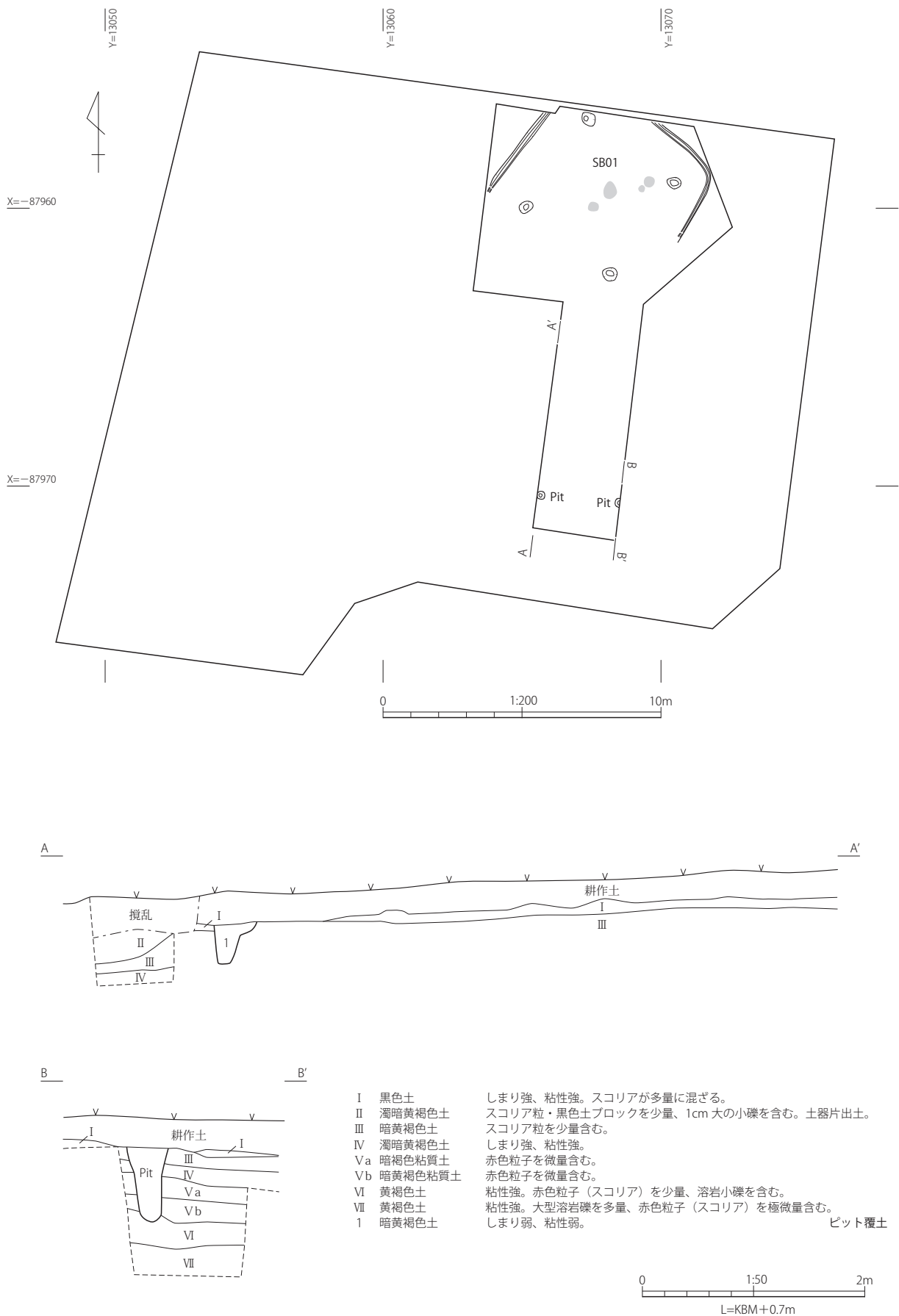
### 第2節 発掘調査の成果

#### 縄文時代

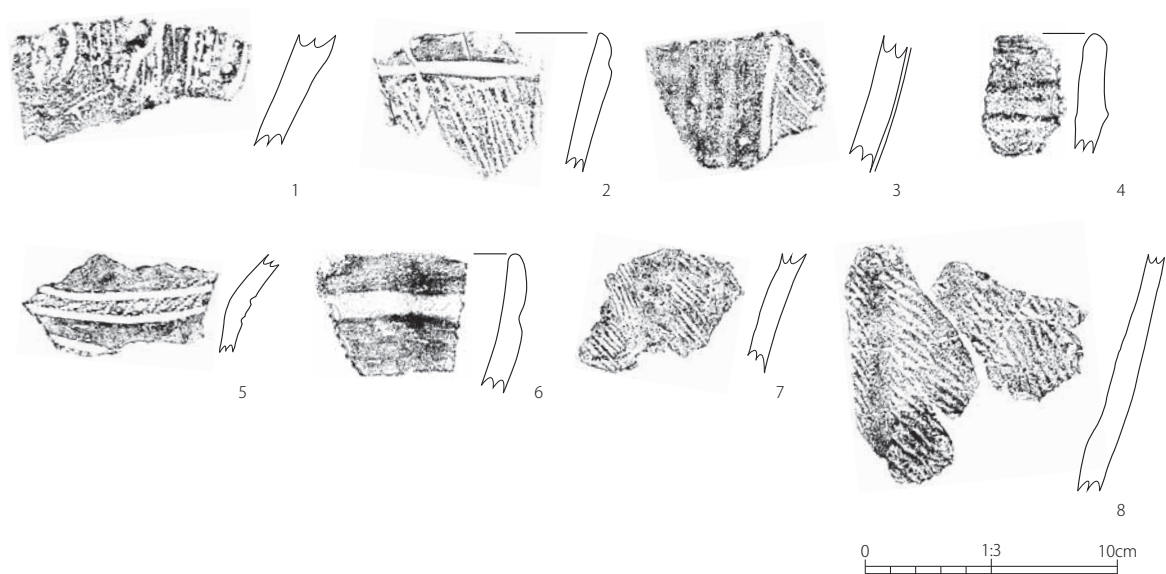
調査区内より、縄文時代中期～後期の土器片および、それに伴うと考えられる石器が出土した。遺構は検出されなかった。

縄文時代の遺物は、1～4がⅢ群A-2類の曽利Ⅳ式の土器で、5がⅣ群A-2類の堀之内2式の土器である。6～8は時期不明土器であるが、7は胎土から西日本系の土器かもしれない。

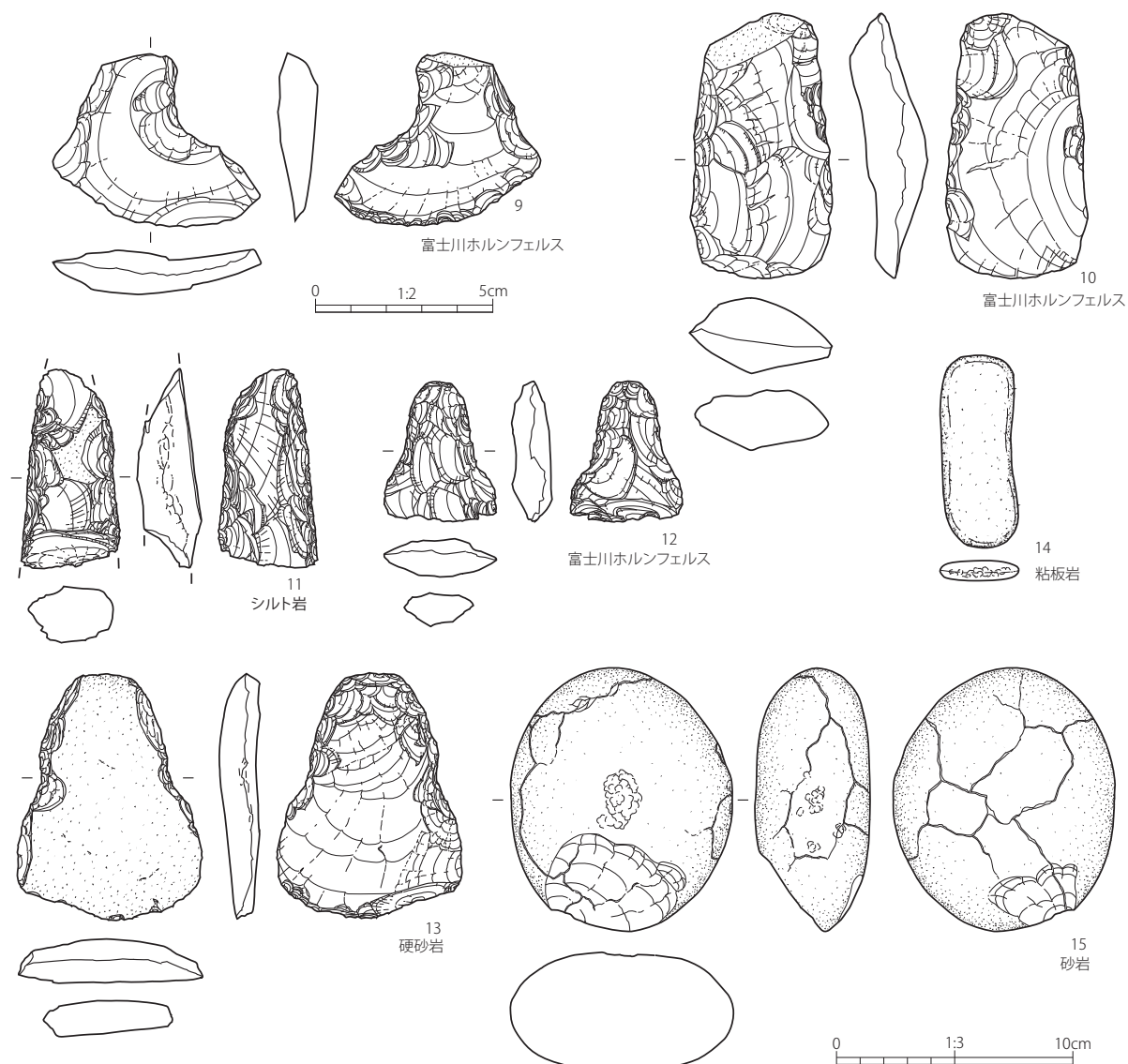
石器では、9の横形石匕と10・11のバチ形に近い短冊形の打製石斧、12はバチ形の小型打製石斧、13はバチ形の打製石斧であるが、11と12は緻密な石材を素材としており、筥形石器的な利器としての機能をもつ石器として別分類すべきかもしれない。14は石器製作用の小型の敲石で、15は敲・凹石を焼石として再利用している。



第64図 H地区 トレンチ全体図、セクション図

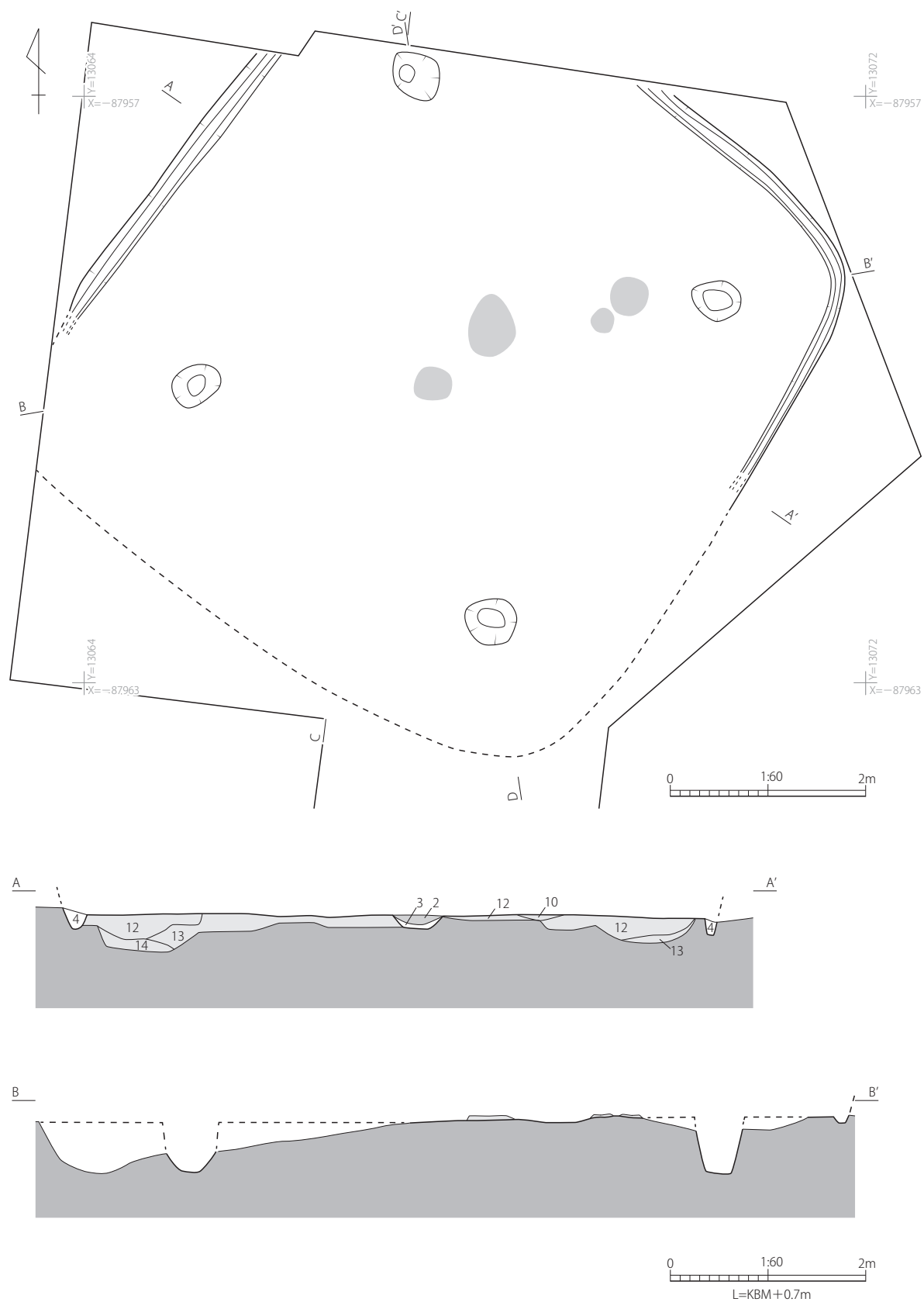


第65図 H地区 出土遺物実測図（縄文時代）（1）



第66図 H地区 出土遺物実測図（縄文時代）（2）





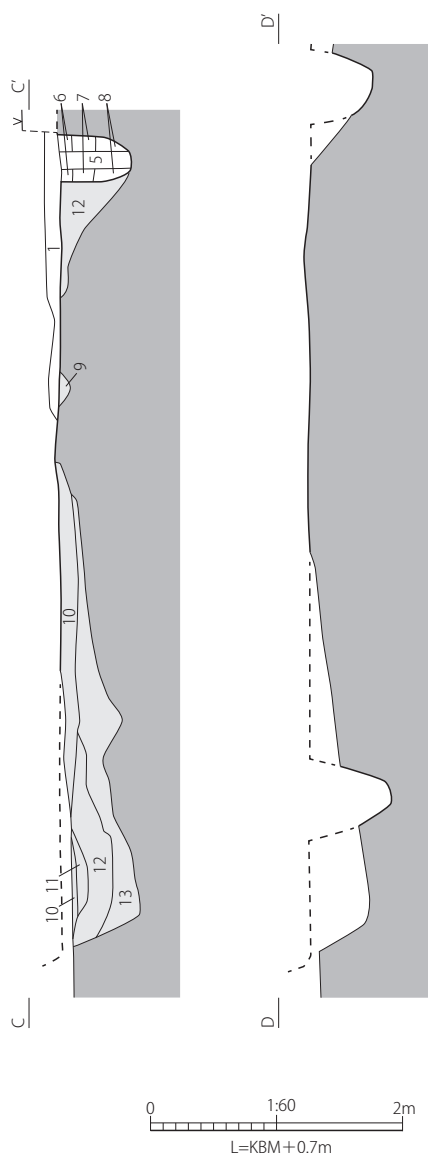
第67図 H地区 SB01 平面図、セクション図

## 古墳時代

建物 SB01 は、北の角が調査区外にあり、南半は上面を削られて掘方だけの検出であるが、主軸方位を N-34.6°-E にとり、南北幅 6.90 m、東西幅 6.70 m を測る方形の建物と推定できる。建物中央付近に焼土を覆土とする浅い掘り込みが認められ、炉の可能性はある。壁の残存部分には、幅 25cm、深さ 15cm ほどの壁溝が巡る。4 基の柱穴が検出され、南北・東西とも柱間寸法 3.90 m、床面からの深さは 50 ～ 60cm と推定される。掘方は壁際を溝状に深く掘削しており、特に東・南・西は掘削幅が広い。

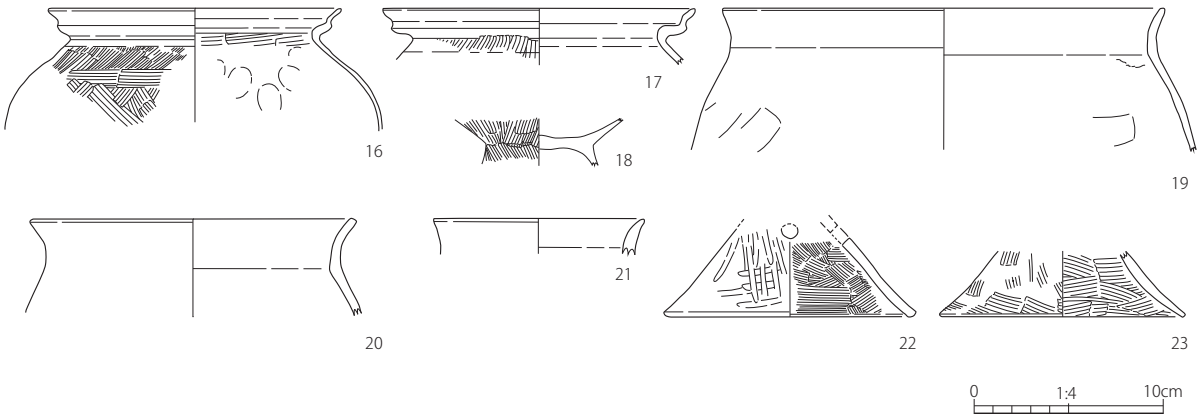
トレンチ南端の西壁際と東壁際で検出された 2 基のピットは、いずれも平面形は径 30cm ほどの正円形を呈するとみられる。深さは西が 35cm、東は 66cm を測り、断面形は U 字形を呈する。

古墳時代の遺物は、16 ～ 18 が S 字状口縁甕で、肩部にヨコハケが施されている。19 ～ 21 は在地の台付甕の口縁部分である。22・23 は高坏あるいは器台の脚部で、円形透しが確認できる。SB01 に伴う遺物と考えられることから、SB01 も古墳時代前期の所産であろう。



1 黒色土	スコリアが混ざる。	SB01 覆土
2 焼土		SB01 炉? 覆土
3 暗茶褐色土	スコリアが混ざる。	SB01 炉? 覆土
4 暗褐色土	スコリアを多量に含む。	SB01 壁溝? 覆土
5 暗褐色土	黄褐色ブロックが混ざる。	SB01 柱穴柱痕
6 黄褐色土		SB01 柱穴覆土
7 暗褐色土	スコリアを少量含む。	SB01 柱穴覆土
8 濁暗褐色土	スコリアを少量含む。	SB01 柱穴覆土
9 黒色土	スコリアがブロック状に混ざる。	SB01 掘方埋土
10 暗褐色土	スコリアが混ざる。	SB01 掘方埋土
11 暗黄褐色土	スコリアを多量に含む。	SB01 掘方埋土
12 黒色土	スコリアを多量に含む。	SB01 掘方埋土
13 暗褐色土	スコリアを多量に含む。	SB01 掘方埋土
14 暗褐色土	スコリアを微量含む。 黄褐色ブロックが混ざる。	SB01 掘方埋土

第 68 図 H 地区 SB01 セクション図



第 69 図 H 地区 出土遺物実測図（古墳時代）

第 9 表 H 地区 出土土器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第 65 図 PL.16	1		10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	縦位の粗い条線を地文に、粘土紐の浮線による蛇行懸垂文を貼付けている。	R1
第 65 図 PL.16	2		7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	斜め条線を地文とし、口縁に沿った沈線を口唇近くに引く。	R1
第 65 図 PL.16	3		7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	沈線を伴う低い幅広の隆帯で弧状文を描き、その区画内を半裁竹管による斜め条線で埋める。	R1
第 65 図 PL.16	4		7.5YR7/4 にぶい橙	10YR6/2 灰黄褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口縁に沿って低い断面三角形の隆帯を施文し、その下に単節 L の縄文を施文する。	R1
第 65 図 PL.16	5		10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	LR の帯縄文を頸部に平行して施文。	R1
第 65 図 PL.16	6		10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	不明	不明	表面に粗い擦痕を横に撫でるように施し、口縁に沿って凹線を引く。	R1
第 65 図 PL.16	7		7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	不明	不明	単節 L の縄文を縦位に帯状施文している。胎土に多くの砂粒を含む。西日本系か？	R3
第 65 図 PL.16	8		7.5YR6/4 にぶい橙	10YR4/1 褐灰	不明	不明	単節 L の縄文を縦位に密接施文する。	R2
第 69 図 PL.16	16		5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR4/2 灰褐	土師器		S 字甕の口縁部。	R2
第 69 図 PL.16	17		7.5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	土師器		S 字甕の口縁部。	R2
第 69 図 PL.16	18		7.5YR4/2 灰褐	7.5YR6/4 にぶい橙	土師器		S 字甕の脚部。	R2
第 69 図 PL.16	19		7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	土師器		台付甕口縁部。	R1・R2
第 69 図	20		7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	土師器		台付甕口縁部。	R1
第 69 図	21		7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	土師器		碗の口縁部。	R3
第 69 図	22		7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	土師器		高坏脚部。	R3
第 69 図	23		7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	土師器		高坏脚部。	R1

第 10 表 H 地区 出土石器観察表

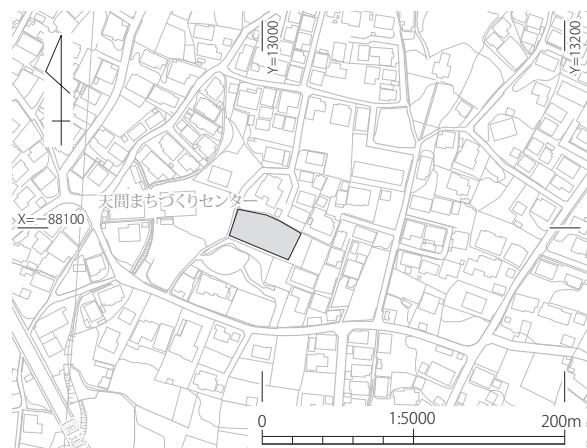
挿図 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第 66 図 PL.16	9		石ヒ	富士川ホルンフェルス	4.75	5.68	1.09	24.66	両面ボジ面の等比な大型剥片を素材とする横形石ヒ。	R3
第 66 図 PL.16	10		打製石斧	富士川ホルンフェルス	11.18	5.87	2.89	208.19	短冊形。	R4
第 66 図 PL.16	11		打製石斧	シルト岩	(8.33)	4.2	2.63	96.42	刃部と頭部欠損の短冊形。	R4
第 66 図 PL.16	12		打製石斧	富士川ホルンフェルス	5.87	4.7	1.44	43.78	刃部再生の進行により小型バチ形の形態となっている。	R1
第 66 図 PL.16	13		打製石斧	硬砂岩	10.38	7.82	1.64	157.11	バチ形。	R4
第 66 図	14		敲石	粘板岩	8.15	3.31	0.87	34.37	石器製作用ハンマー。	R3
第 66 図	15		磨・敲石	砂岩	11.5	9.42	4.89	659.18	比熱を受け全体に亀裂が入る。	R4

## 第6章 天間沢遺跡Ⅰ地区（第9地区）

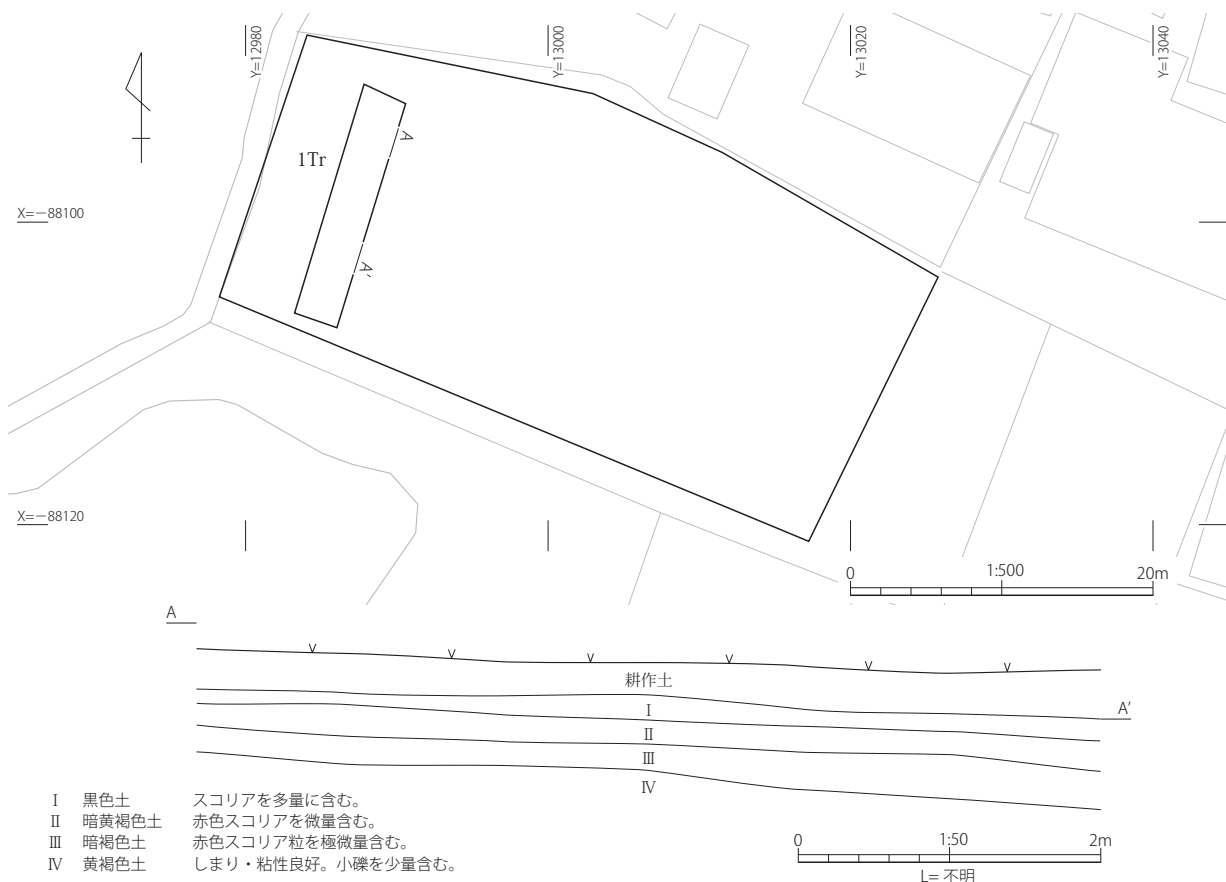
天間地区内において個人住宅建設等に伴う小規模開発が増加し、遺跡保護のために緻密な遺跡範囲確認が急務であると判断されたことから、昭和58年秋、富士市教育委員会は遺跡範囲確認のための調査（旧：第8次調査）を実施することとなった。

第3地区の北東に位置する第7地区（天間1045-5、旧：第8次G地区）、第1地区から南へ200mほどの第8地区（天間1130-1、旧：第8次H地区）、同じく南へ330mほどの第9地区（天間1121、旧：第8次I地区）、第4地区から南へ180mほどの第10地区（天間529、旧：第8次J地区）の4地点に調査地区を設定した。

I地区の調査は昭和58年11月12日から17日にかけて行われた。南北方向に1本のトレンチ（1Tr）を設定し掘削したが、図化不能な縄文土器片が数点出土したのみで、遺構は検出されなかった。



第70図 I地区 位置図



第71図 I地区 トレンチ配置図、セクション図



## 第7章 天間沢遺跡J地区（第10地区）

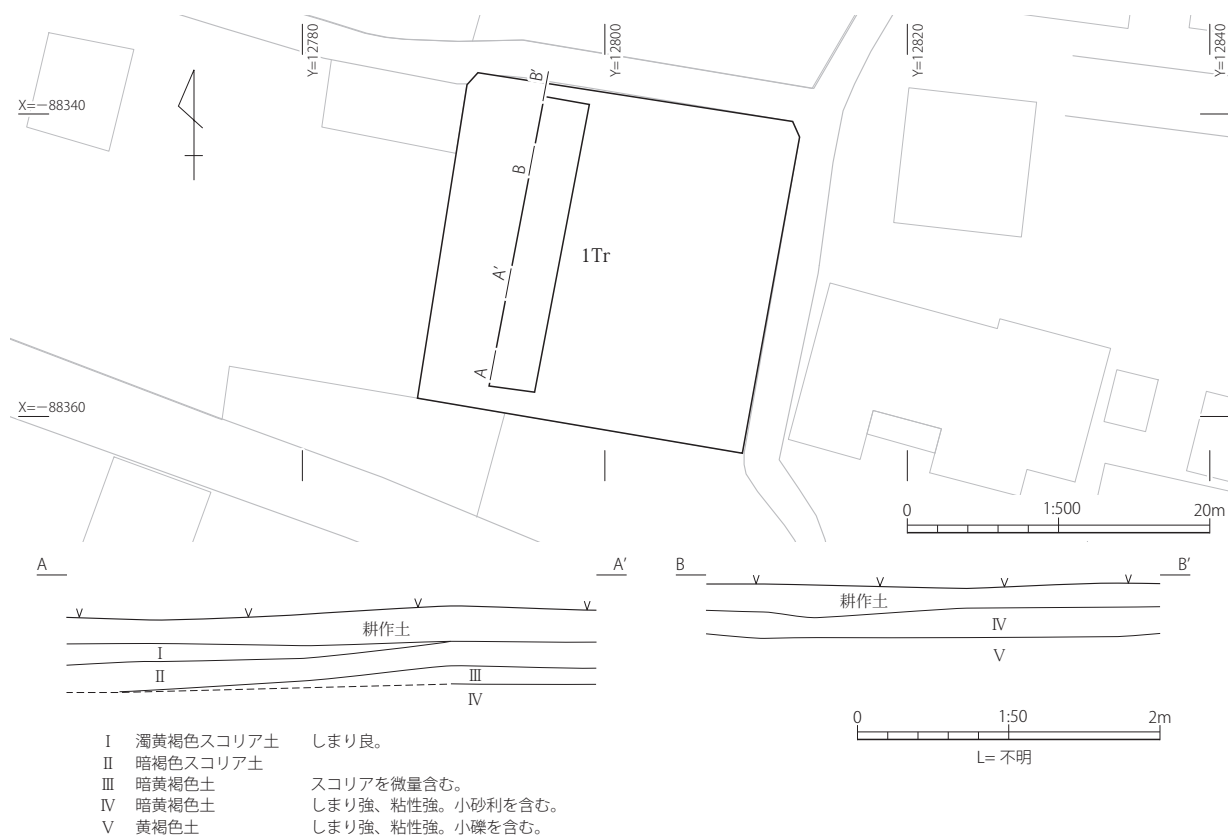
天間地区内において個人住宅建設等に伴う小規模開発が増加し、遺跡保護のために緻密な遺跡範囲確認が急務であると判断されたことから、昭和58年秋、富士市教育委員会は遺跡範囲確認のための調査（旧：第8次調査）を実施することとなった。

第3地区の北東に位置する第7地区（天間1045-5、旧：第8次G地区）、第1地区から南へ200mほどの第8地区（天間1130-1、旧：第8次H地区）、同じく南へ330mほどの第9地区（天間1121、旧：第8次I地区）、第4地区から南へ180mほどの第10地区（天間529、旧：第8次J地区）の4地点に調査地区を設定した。

J地区の調査は昭和58年11月18日から22日にかけて行われた。本地区は天間沢遺跡範囲の南端に位置する。南北方向に1本のトレンチ（1Tr）を設定し掘削した。数十点の土師器片・須恵器片が採集されたものの、遺構は検出されなかった。



第72図 J地区 位置図



第73図 J地区 トレンチ配置図、セクション図





## 第8章 天間沢遺跡 K 地区（第11地区）

### 第1節 調査に至る経緯と経過

#### 調査に至る経緯

昭和59年、埋蔵文化財保護事業の一環として富士市内の埋蔵文化財分布地図・地名表を作成することとなった。そこで、規模・出土遺物量において市内最大の遺跡である天間沢遺跡の範囲・性格等をより詳細に把握するために、分布確認調査を行うこととなった。

調査地（天間1011-1、旧：K地区）は、市営団地建設に伴って発掘調査が行われた第3地区（旧：第4次調査C地区）の東に位置する。

#### 発掘調査の経過

K地区の調査は昭和59年10月15日から10月31日にかけて行われた。

南北13.9m、東西9.5mの調査区を掘削し、縄文時代の建物5軒（SB22～26）、埋葬土坑4基（SB23U1～2・SKAU2～U3）、土坑7基（SKA～SKG）を調査・完掘した。



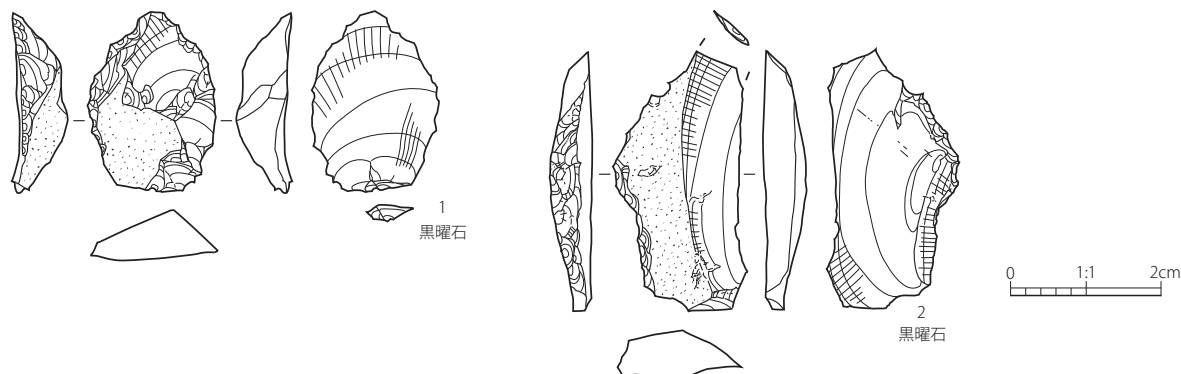
第74図 K地区 位置図

### 第2節 発掘調査の成果

#### 後期旧石器時代

黄褐色ローム層（休場ローム相当）からではないが、1と2の2点のナイフ形石器が出土しており、天間沢遺跡が旧石器時代からの遺跡であることが確認された。資料数が少ないので明確な時期決定はで

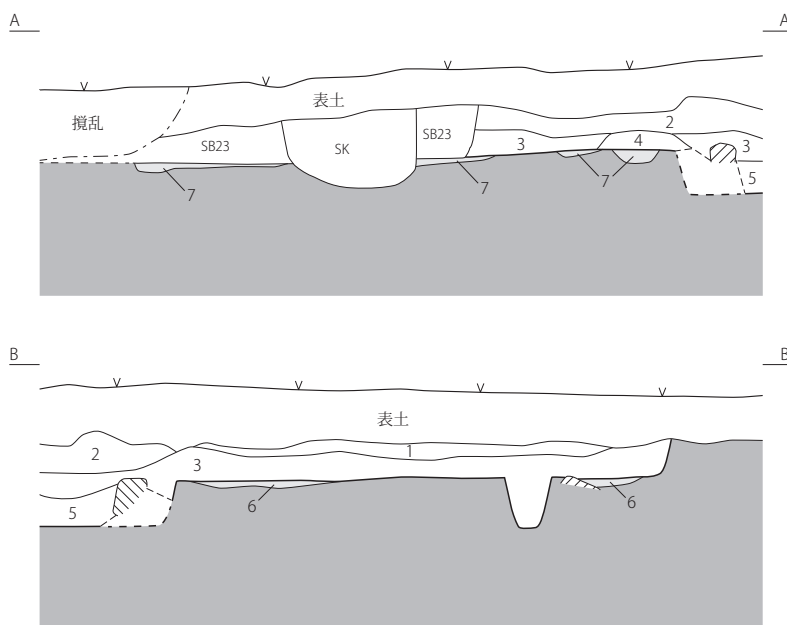
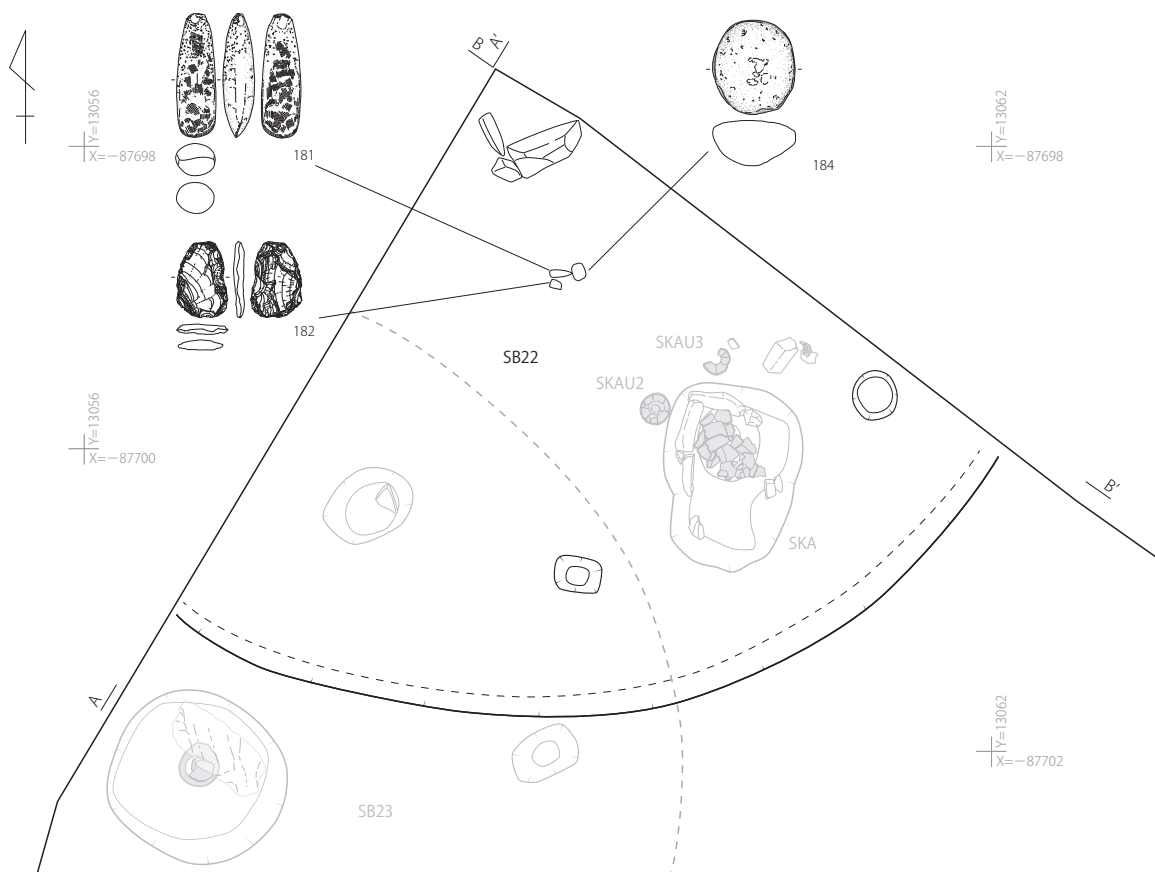
きないが、1の小型ナイフ形石器の形態は、片面・半両面加工の小型槍先形尖頭器を伴う時期、愛鷹・箱根第4期後半のナイフ形石器終末期のものに相似する。



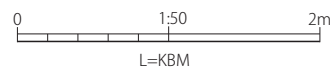
第75図 K地区 出土遺物実測図（旧石器）



第76図 K地区 調査区全体図



- |          |                             |           |
|----------|-----------------------------|-----------|
| 1 暗褐色土   | やや黄色がかる。小砂利を含む。             | SB22 覆土   |
| 2 暗黄褐色土  | 砂利を多量、カーボン・赤色粒子を少量含む。       | SB22 覆土   |
| 3 暗褐色土   | やや黒色がかる。砂利・カーボン・赤色粒子を多量に含む。 | SB22 覆土   |
| 4 焼土     |                             | SB22 覆土   |
| 5 暗褐色土   | 焼土・赤色粒子・小砂利・カーボンを少量含む。      | SB22 炉覆土  |
| 6 濁暗黄褐色土 | 黄褐色土ブロックを含む。                | SB22 掘方埋土 |
| 7 黄褐色土   | 黒色土を含む。                     | SB22 掘方埋土 |



第77図 K地区 SB22

## 縄文時代

### ・建物

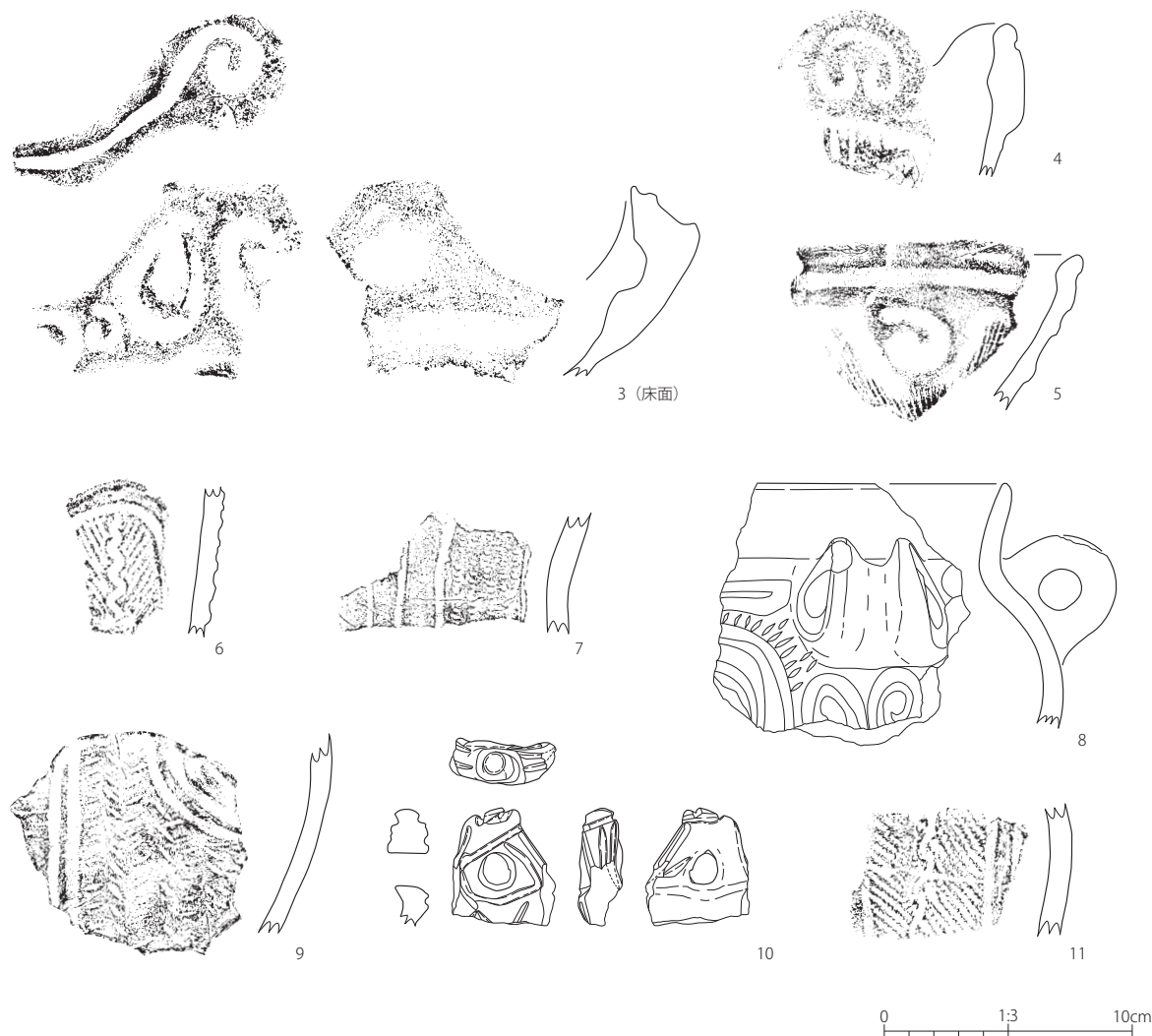
#### SB22

調査区の北西で、円形の建物の4分の1が検出された。建物の北半・西半は調査区外にあり、南側はSB23に切られている。調査区北西隅に石組みの炉が検出され、調査区西壁の土層で確認できる建物の立ち上がり、北壁の土層に見える建物掘方の残存から、炉を中心とした径8.0mの円形の平面プランが復元できる。

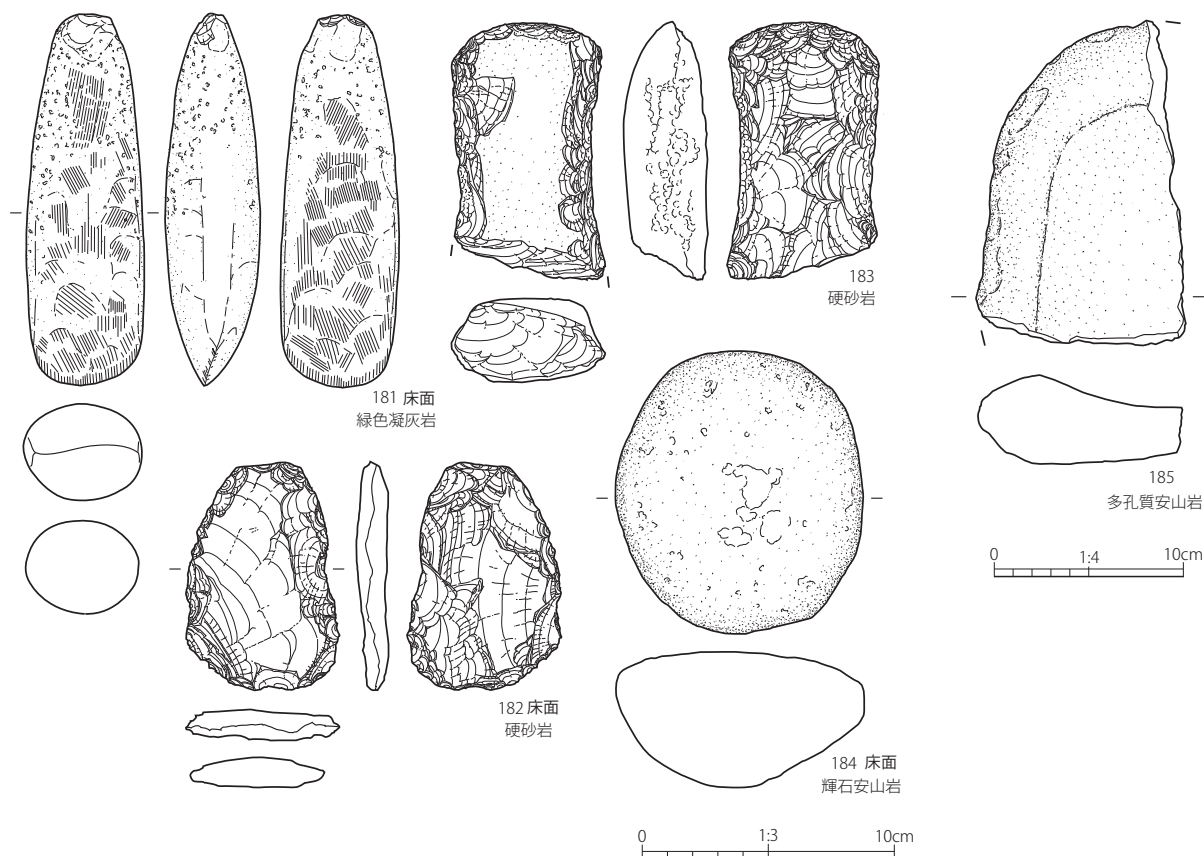
炉は床面から30cmほど掘り下げており、石組みには長さ50cm、幅23cm、厚さ25cmの大型のものが含まれる。柱穴とみられるピットは東と南に2基確認され、いずれも径は30cmほど、深さは東が35cm、南が21cmを測る。

出土遺物は、土器ではⅢ群A-2類の曾利Ⅲ式（3・4）、曾利Ⅳ式（5・6）、曾利式（7～9）、曾利式の把手部分（10）、加曾利E式の胴部（11）を覆土内から検出している。石器は、181の完形の乳棒状石斧、ややバチ形を呈する182の打製石斧、分銅形の183の打製石斧、磨・凹石の184、全体の4分の1にされた石皿が出土している。

SB22の出土土器の型式は曾利Ⅲ～Ⅴ式まで幅をもっているが、SB23よりも古いことを考えると、曾利Ⅲ式期の所産と考えてもよいかもしれない。



第78図 K地区 SB22 出土遺物実測図（1）



第79図 K地区 SB22出土遺物実測図(2)

### SB23

調査区の北西で円形の建物の2分の1ほどが検出された。西半は調査区外にあり、北側でSB22を、南側でSB24を切っている。平面プランは明確ではないが、炉と調査区西壁の土層で確認できる建物の立ち上がりから、炉を中心とした径6.2mの平面プランを復元した。

炉の掘方は径約120cmの円形で、深さは床面から約30cmを測る。丸底の掘方の中央から、別個体であるが、曾利Ⅳ式のキャリパー形深鉢の下半部(13)と上半部(12)が入れ子状に正位置で出土した。その上に長さ75cm、幅30cm、厚さ6cmの板状の石が残存している。土層観察では炉石の抜き取り痕が確認でき、深鉢の口縁部まで土で埋めて固定し、その周囲を石で囲んだ石組みの炉であったとみられる。

柱穴とみられるピットは4基検出され、北の1基がやや大きく長径60cm、南と北東の2基は長径約50cm、南東の1基は径33cmを測る。

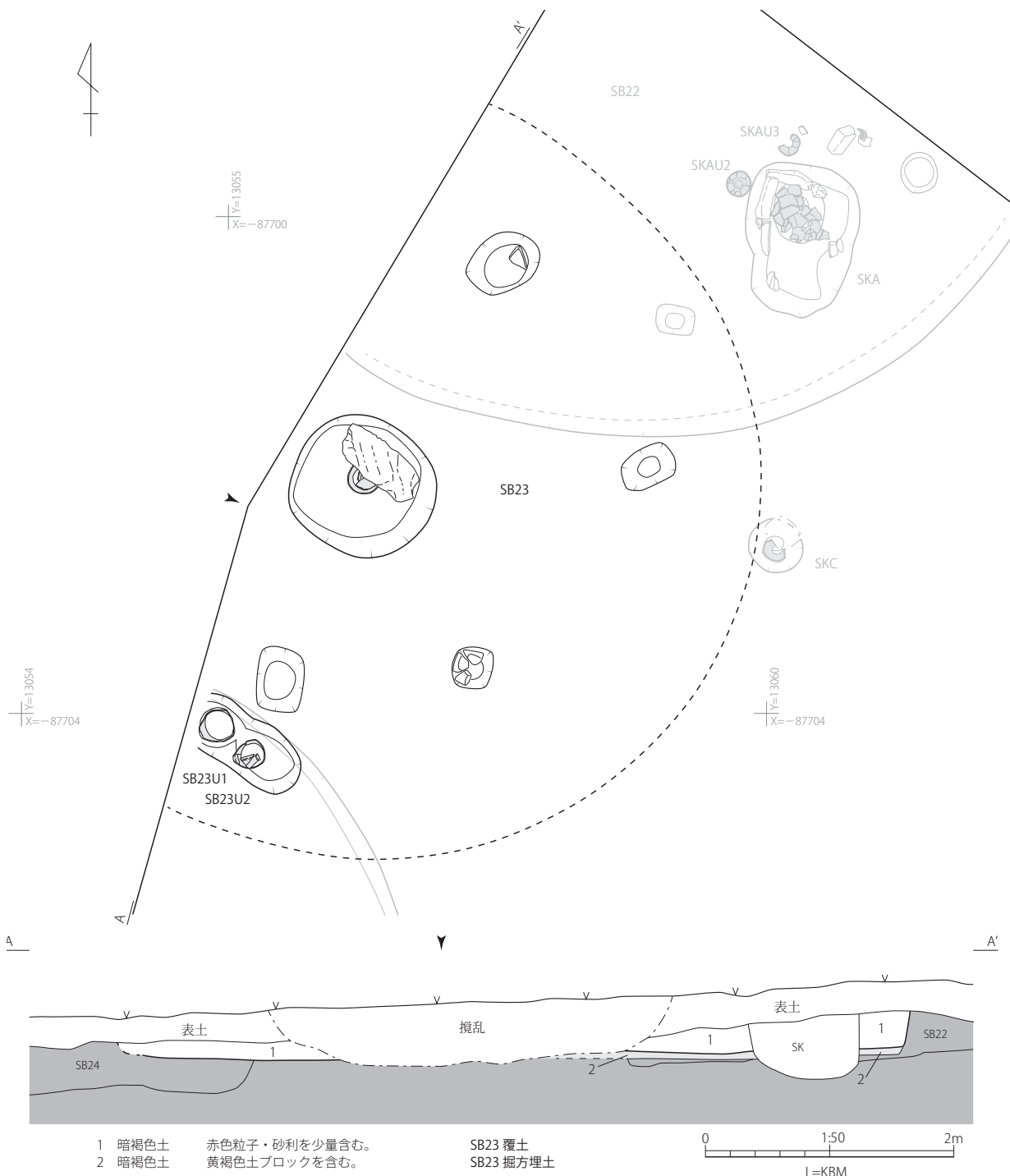
出土土器は、ほぼすべてⅢ群A-2類の曾利Ⅳ式なので、建物の所属時期は曾利Ⅳ式期としてよいと考えられる。中央炉内には炉体土器(12・13)が出土したが、12の残存最大径は29.1cm、残存高は21.7cm、13の底部径は9.2cm、残存高は10.6cm、残存最大径は18.2cmである。器体を全周する状態で遺存しているものが多く、建物内からも16の推定径34.6cm、残存高16.9cmなど、大型の破片が多数出土している。土器の出土量に比して、石器は186のやや分銅形を呈する短冊形打製石斧が出土しているのみである。



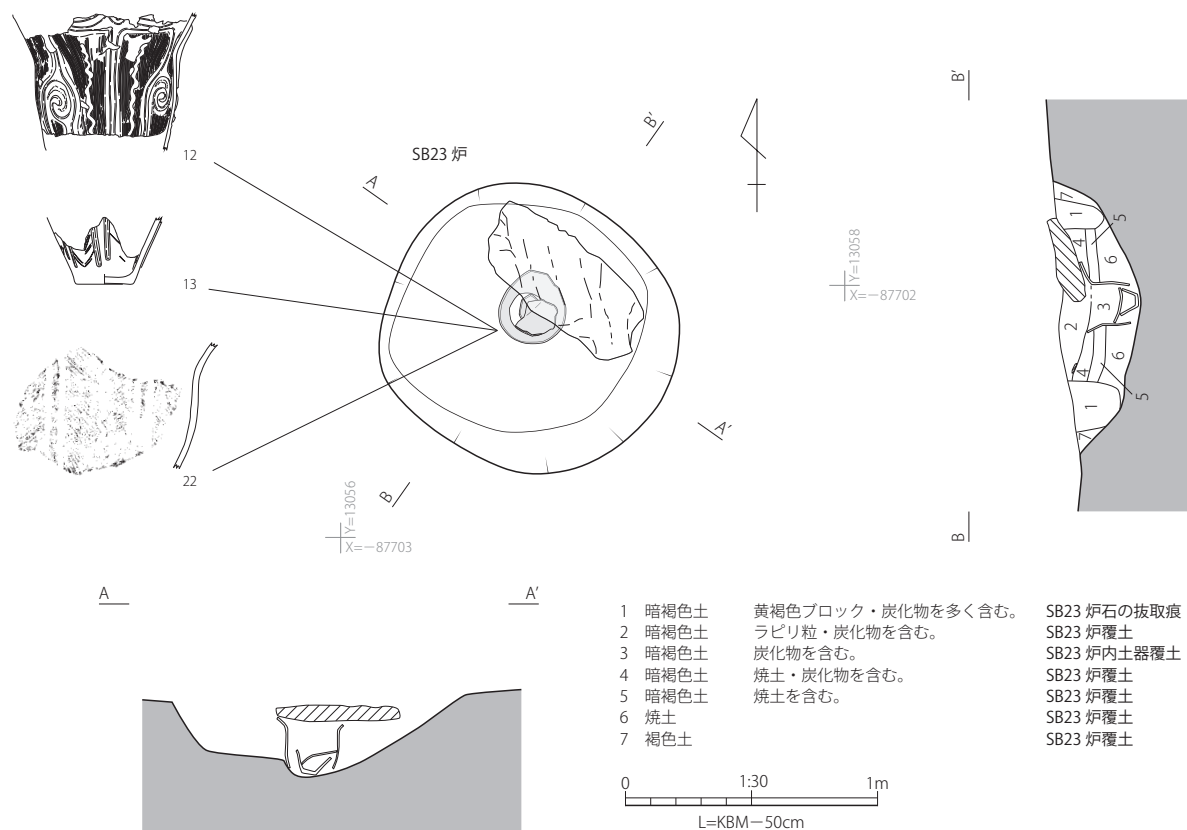
## SB23U1・SB23U2

SB23 南柱穴の南側で検出された埋甕土坑である。長軸 95cm 以上、短軸 45cm、深さ約 30cm の楕円形の土坑内に 2 個体（東側 SB23U1・西側 SB23U2）の深鉢胴部が正位置で並んでいる。土坑底面の様子からは、本来はそれぞれの深鉢に対して土坑が掘られていたとみられるが、その境は確認されず、切り合い関係は不明である。ごく近接して掘られてい

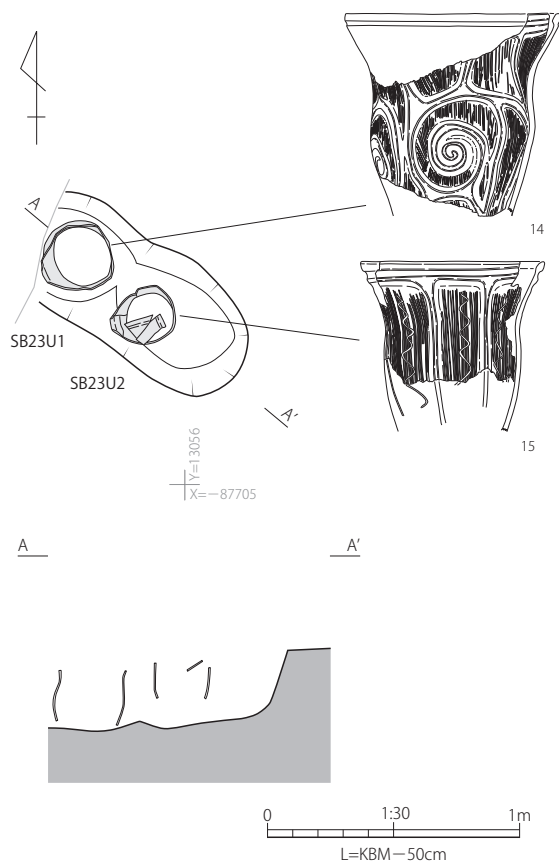
ながら土器の残存状況が良い様子から既に埋甕があることを承知のうえ、もうひとつを埋納したとも思われる。どちらも曾利Ⅳ式のキャリパー形深鉢である。SB23U1 の埋甕 14 は、推定口径 34.1cm、残存高 32.1cm であり、SB23U2 の埋甕 15 は、推定口径 29cm、残存高 27cm になる。



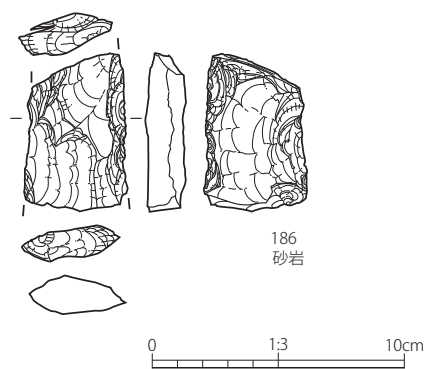
第 80 図 K 地区 SB23



第81図 K地区 SB23 炉



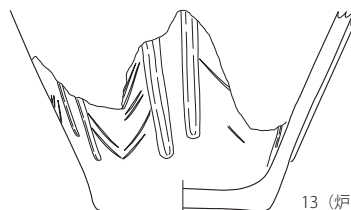
第82図 K地区 SB23U1・SB23U2



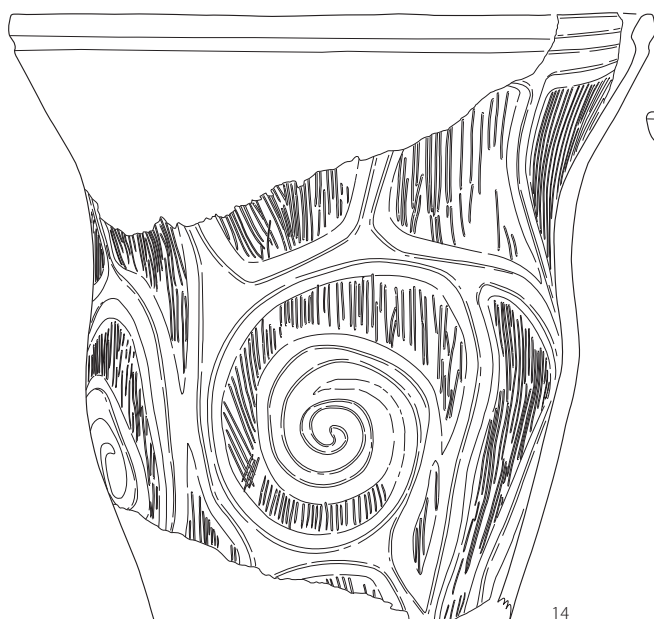
第83図 K地区 SB23 出土遺物実測図 (1)



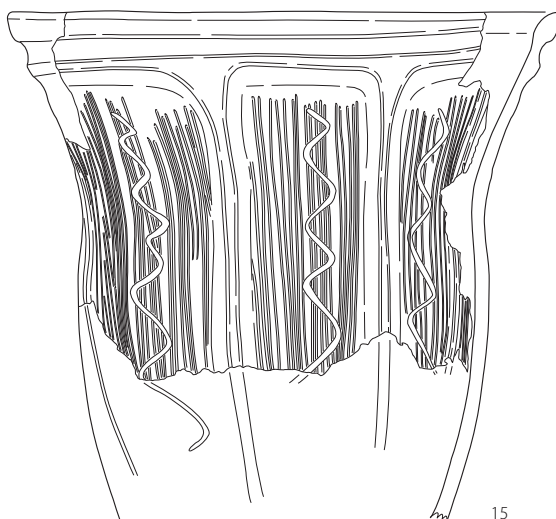
12 (炉内)



13 (炉内)



14  
(SB23U1)



15  
(SB23U2)

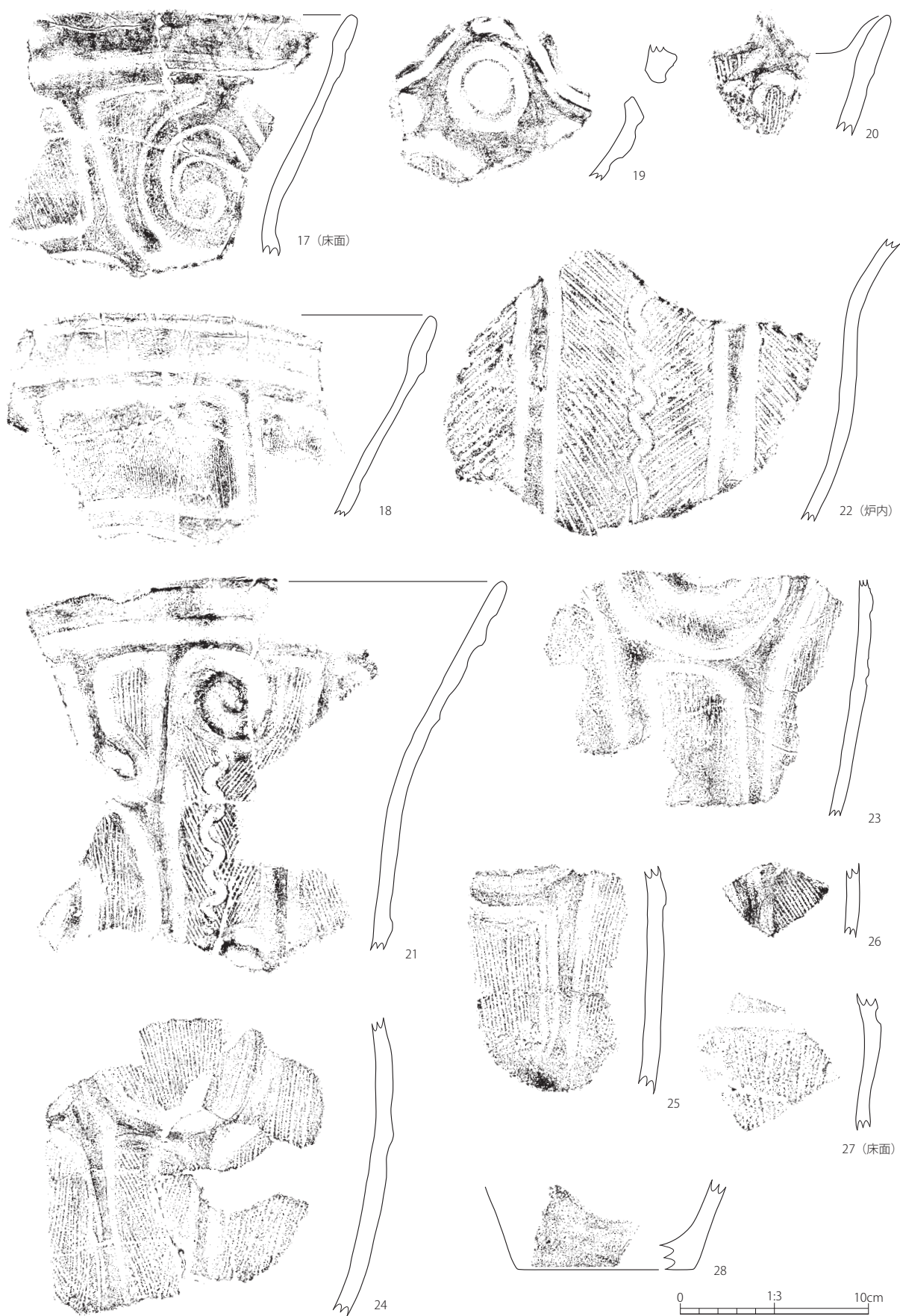
0 1:4 10cm



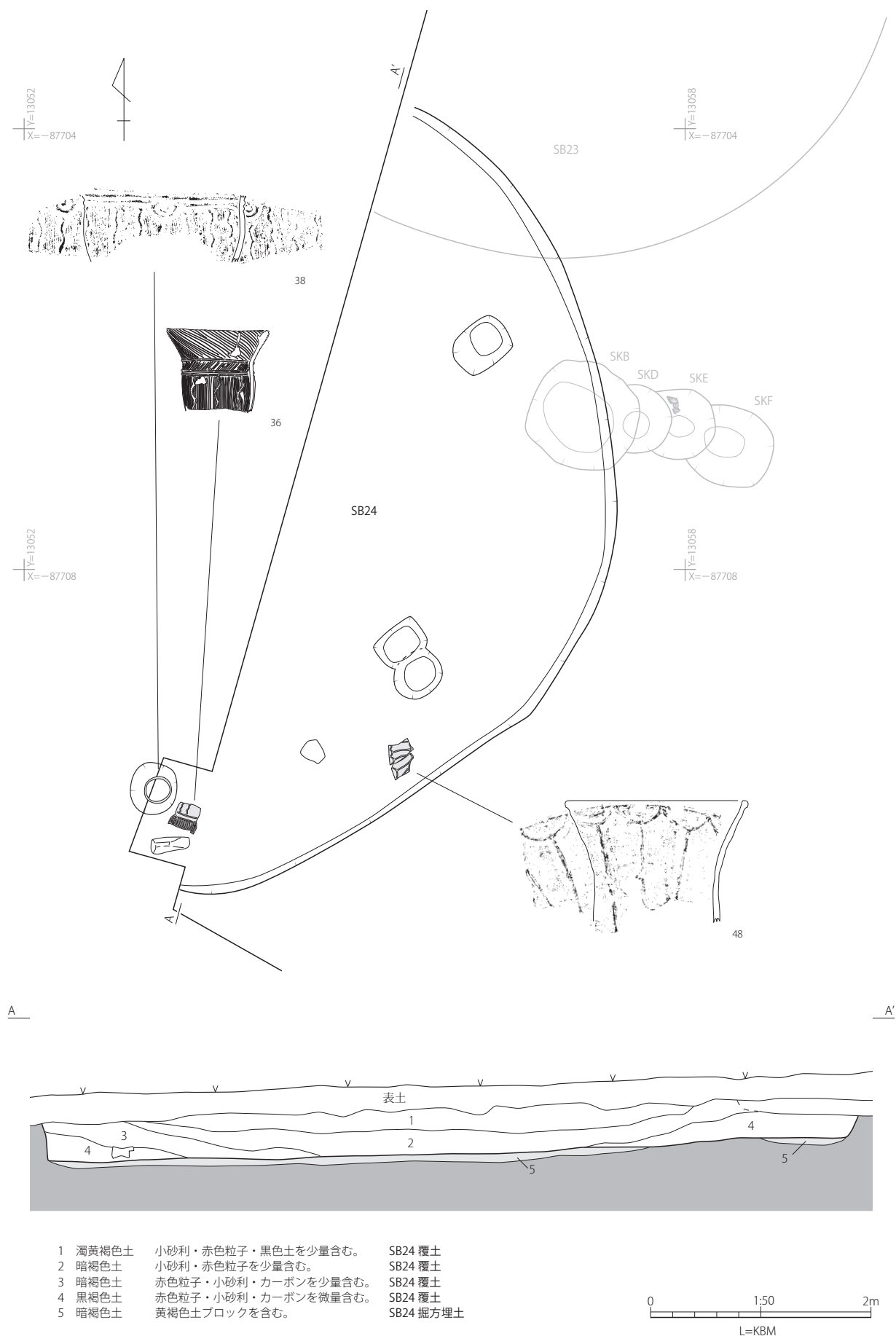
16 (床面)

0 1:3 10cm

第84図 K地区 SB23 出土遺物実測図(2)

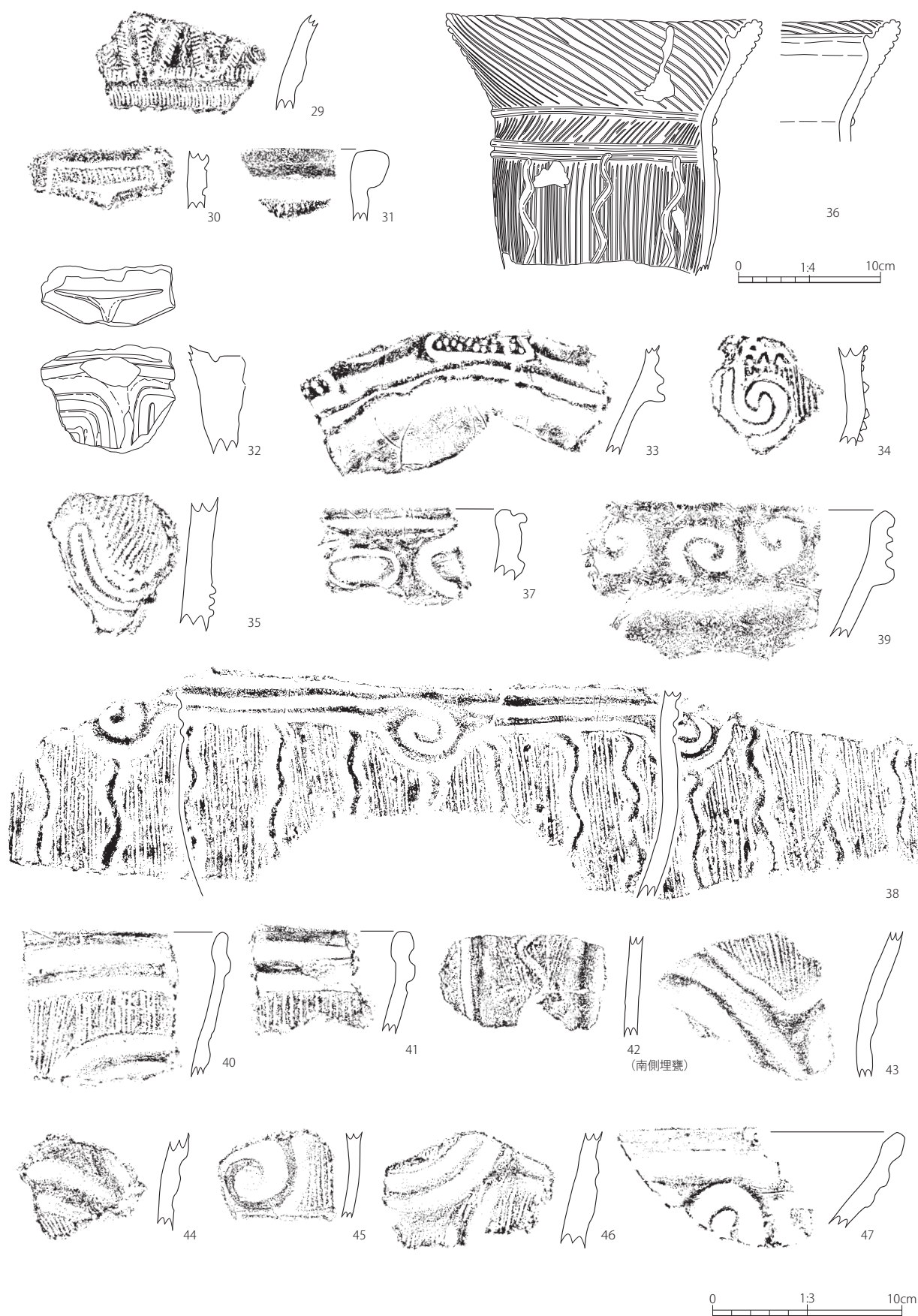


第85図 K地区 SB23出土遺物実測図(3)



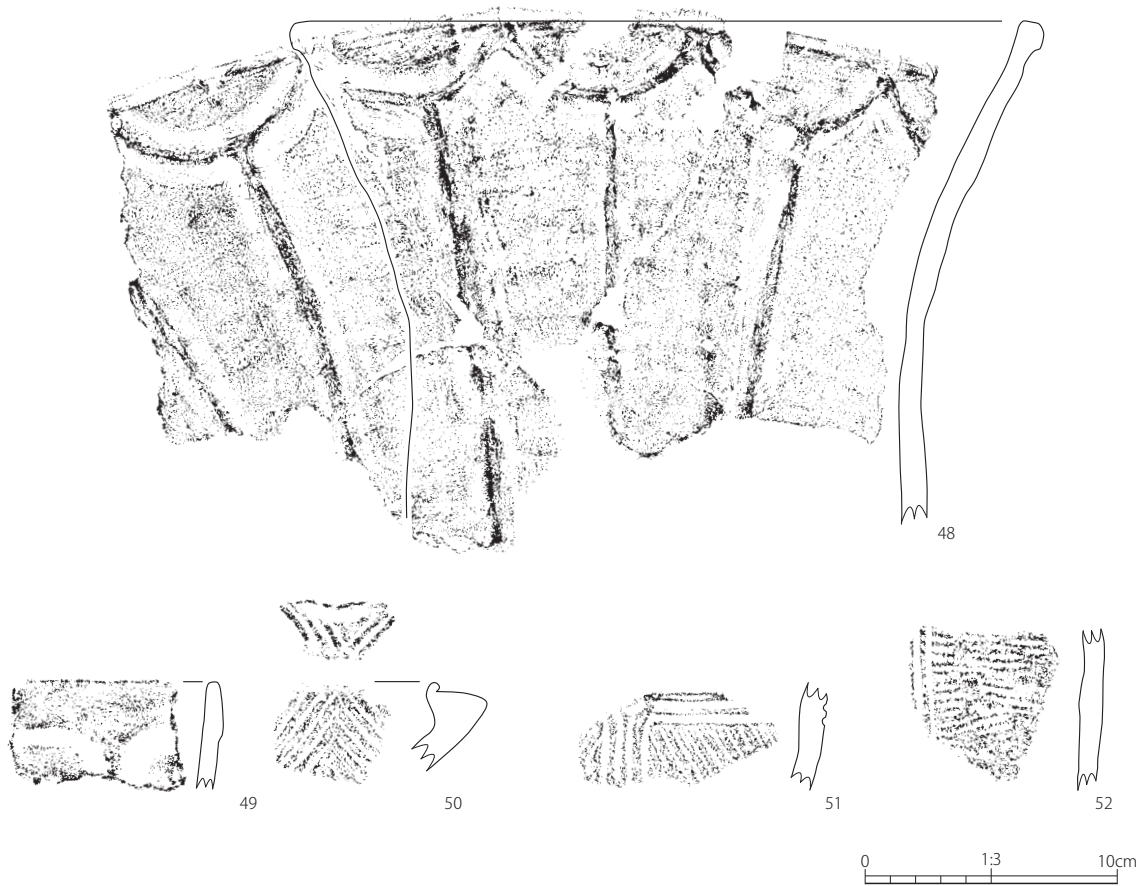
- |         |                     |           |
|---------|---------------------|-----------|
| 1 濁黄褐色土 | 小砂利・赤色粒子・黒色土を少量含む。  | SB24 覆土   |
| 2 暗褐色土  | 小砂利・赤色粒子を少量含む。      | SB24 覆土   |
| 3 暗褐色土  | 赤色粒子・小砂利・カーボンを少量含む。 | SB24 覆土   |
| 4 黒褐色土  | 赤色粒子・小砂利・カーボンを微量含む。 | SB24 覆土   |
| 5 暗褐色土  | 黄褐色土ブロックを含む。        | SB24 掘方埋土 |



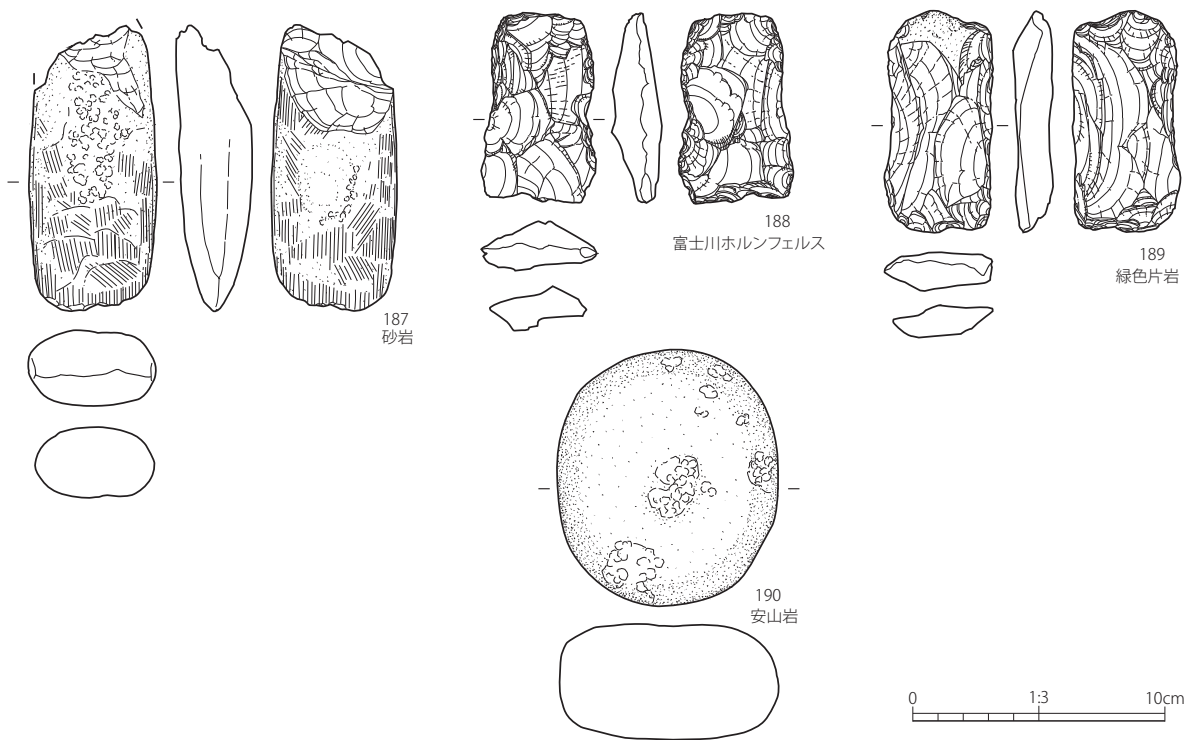


第 87 図 K 地区 SB24 出土遺物実測図 (1)





第88図 K地区 SB24出土遺物実測図（2）



第89図 K地区 SB24出土遺物実測図（3）

## SB24

調査区の南西で円形の建物の2分の1ほどが検出された。西半は調査区外にある。炉は検出されておらず、調査区外に位置するとみられる。径7.5mの建物と復元できる。調査区西壁の土層観察によれば、北側をSB23に切られている。調査区西壁南端で倒れた深鉢の上部が検出され、その部分の調査区を西側に拡張したところ、深鉢を埋納した径47cmの土坑を発見した。柱穴の可能性のあるピットは、北東に長軸50cmの隅丸方形のものが1基、南東に長軸45cmほどの方形と楕円形の2基が切り合って検出されている。

土器は、Ⅲ群A-1類の新道式(29)、藤内式(30・31)、井戸尻3式(32)、Ⅲ群A-2類の曾利Ⅱ式(33～35)、曾利Ⅲ式(36～39)、曾利Ⅳ式(40～47)、曾利Ⅴ式(48)と縄文時代中期中葉から後葉と時期幅はあるが、主体となる時期は曾利Ⅱ・Ⅲ式期なので、SB23との土層図での新旧関係(SB23が新しい)と併せて、曾利Ⅱ～Ⅲ式期の建物と考えたい。しかし、48の大型破片が床面に広がるような出土状況であることから、曾利Ⅴ式期の可能性もある。器形が復元できる36の口径は22.3cm、残存高は18cm、38は推定最大径26.8cm、残存高11.1cm、48は推定口径29.7cm、残存高21.1cmである。

出土石器は、凹石に転用された乳棒状磨製石斧(187)、ゆるい挟りが入り、やや分銅形を呈す短形の短冊形打製石斧(188・189)、磨・凹石(190)が出土している。

## SB25

調査区の南東で円形の建物の2分の1ほどが検出され、径7.5mの建物と復元できる。東半は調査区外にある。炉は検出されておらず、調査区外に位置するとみられる。南東部分でSKGを切っている。

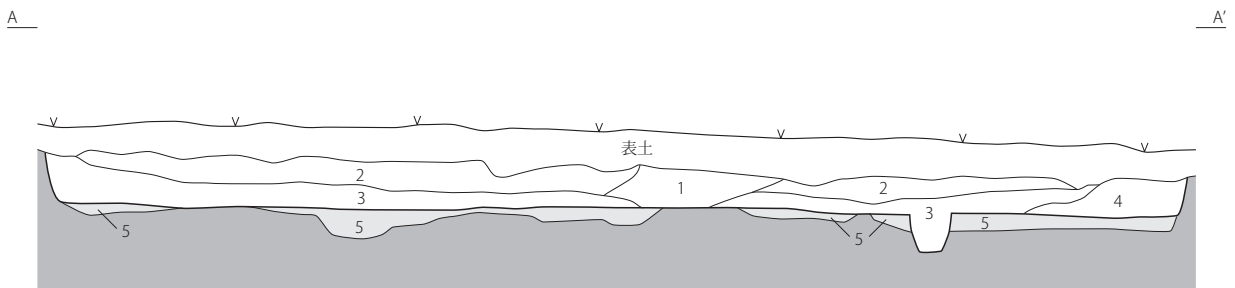
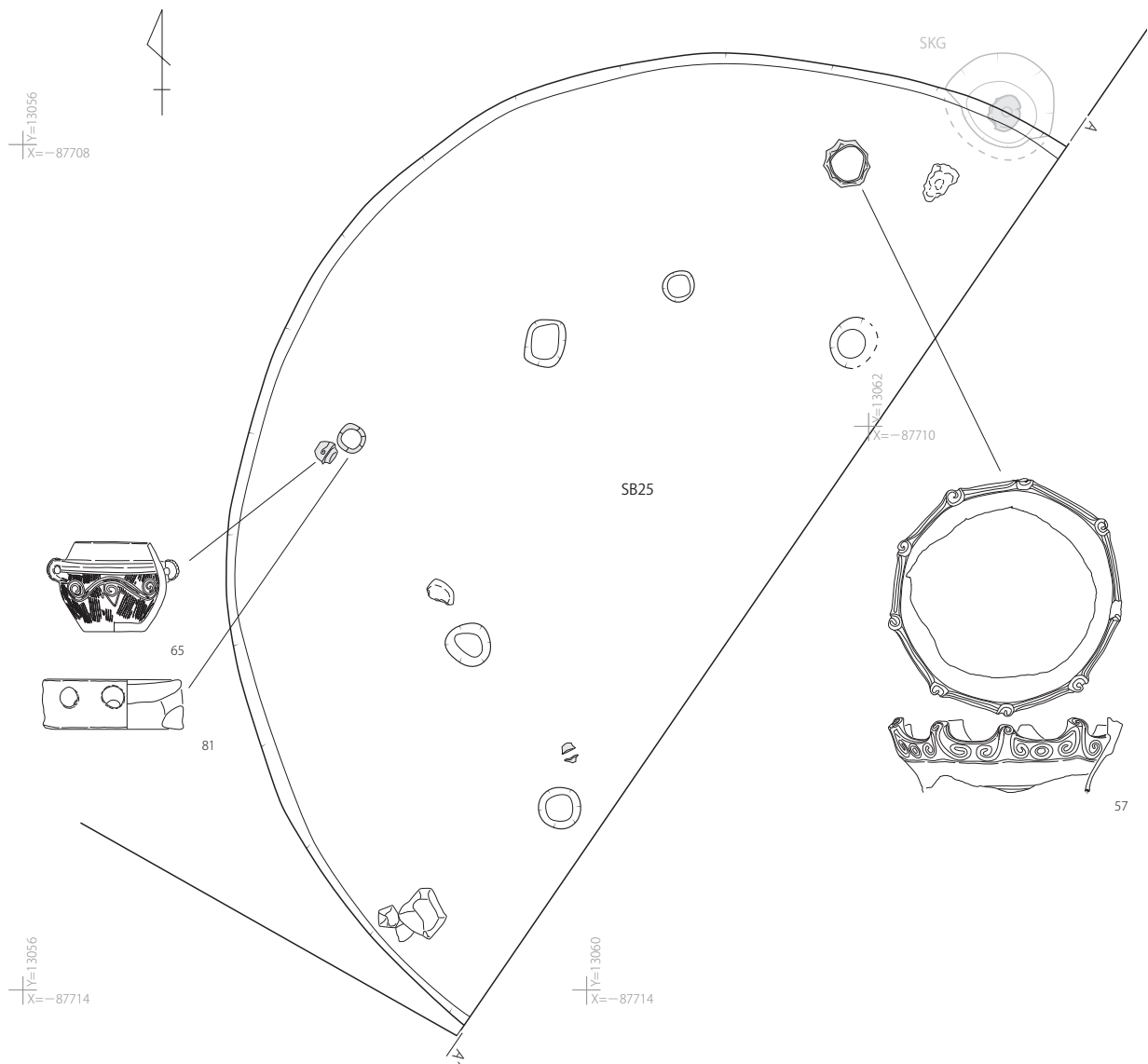
柱穴とみられるピットは5基検出された。そのうち4基は径35cm前後であるが、東から2番目の1基のみ径23cmとひとまわり小さく、位置関係的にも他の4基とは性格が異なる可能性がある。

出土土器は、53のⅢ群A-1類、井戸尻式が最も古く、54がⅢ群A-2類の曾利Ⅰ式、55・56が曾利Ⅱ式、57・58が曾利Ⅲ式、59～66が曾利Ⅳ式、67～69が曾利Ⅴ式に比定したので、縄文時代中期中葉から後葉までの時期差がある。しかし主体を成すのは曾利Ⅲ～Ⅳ式の土器群である。特に9単位の把手をもち、口縁部が全周する57の土器や完形の65の両耳鏝付土器は、床面に据えられたような出土状況であったことから、建物の帰属時期は曾利Ⅲ～Ⅳ式期の縄文時代中期後葉と考えられる。なお81の器台は、65とセットのように近接して出土していることから同時期とみなせるだろう。66の小型の両耳鏝付土器も同時期と考えられるが、内面に黒色有機質のタール状付着物がびっしりと付着している。

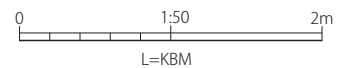
また、1点、籠目文土器片を加工した土製円盤(82)が出土しているが、曾利ⅠかⅡ式と思われるので、建物に伴うものではないと思われる。

器形のわかる土器は、57、61、65、66、81であるが、57は口径40cm、残存高11.5cm、61は推定最大径29.9cm、残存高17.9cm、65は口径9.2cm、底径7.7cm、最大径13.9cm、両耳幅16.9cm、66は最大径11cm、両耳幅12.3cm、底径6.8cm、残存高7.5cmである。また、器台81は径17.6cm、器高6.3cmで、径1.8cmの円孔透しが8単位ある。

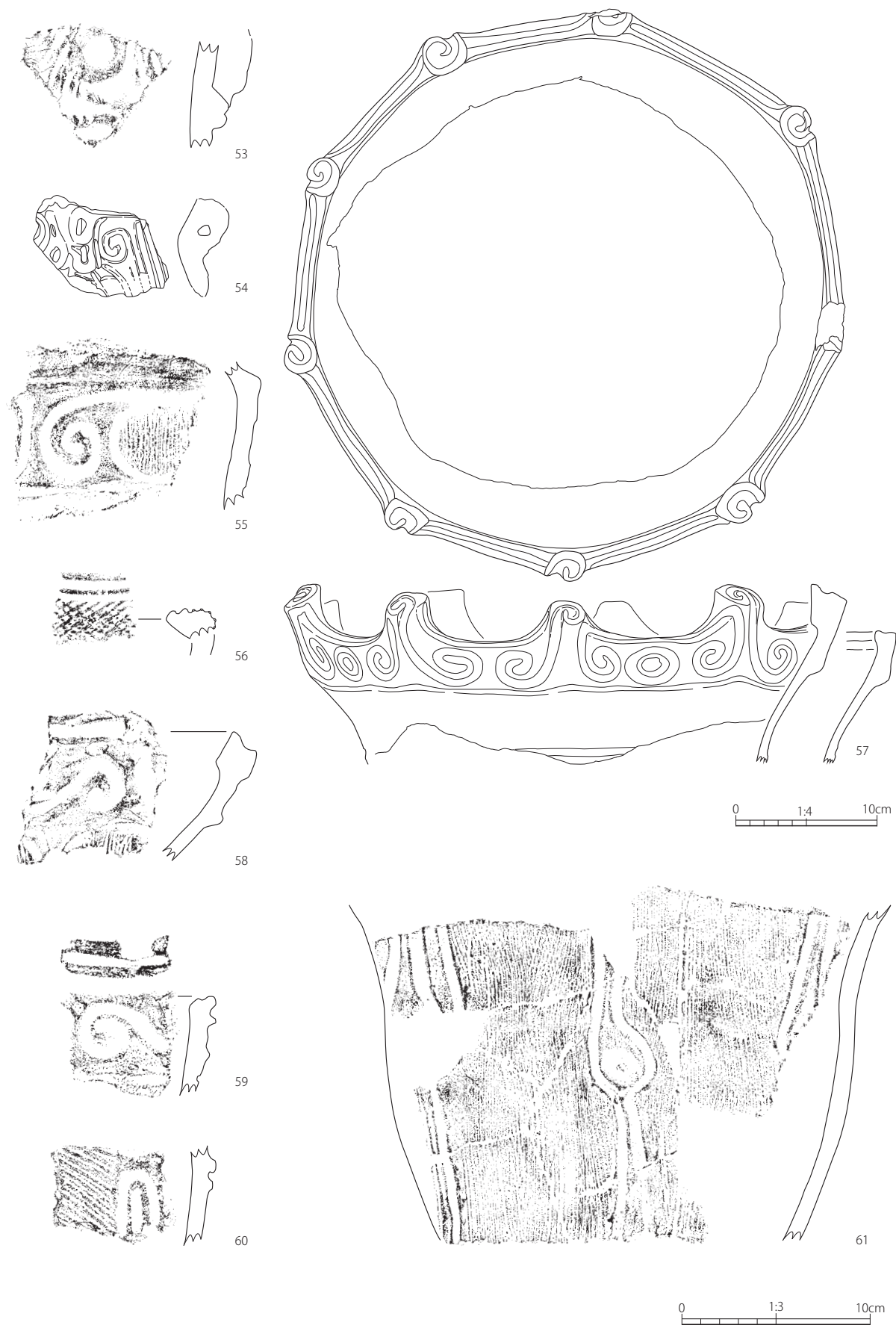
石器は、198(第110図)の黒曜石製の楔形石器が出土している。



- |         |                             |           |
|---------|-----------------------------|-----------|
| 1 暗褐色土  | 溶岩礫を多量に含む。                  | SB25 覆土   |
| 2 暗褐色土  | やや黄色がかる。小砂利・赤色粒子を微量含む。      | SB25 覆土   |
| 3 暗褐色土  | やや黒色がかる。小砂利・カーボン・赤色粒子を少量含む。 | SB25 覆土   |
| 4 暗赤褐色土 | しまり良好、粘性強。赤色粒子・小砂利を含む。      | SB25 覆土   |
| 5 黒褐色土  | 黄褐色土ブロック・砂利を含む。             | SB25 掘方埋土 |



第90図 K地区 SB25



第91図 K地区 SB25出土遺物実測図(1)





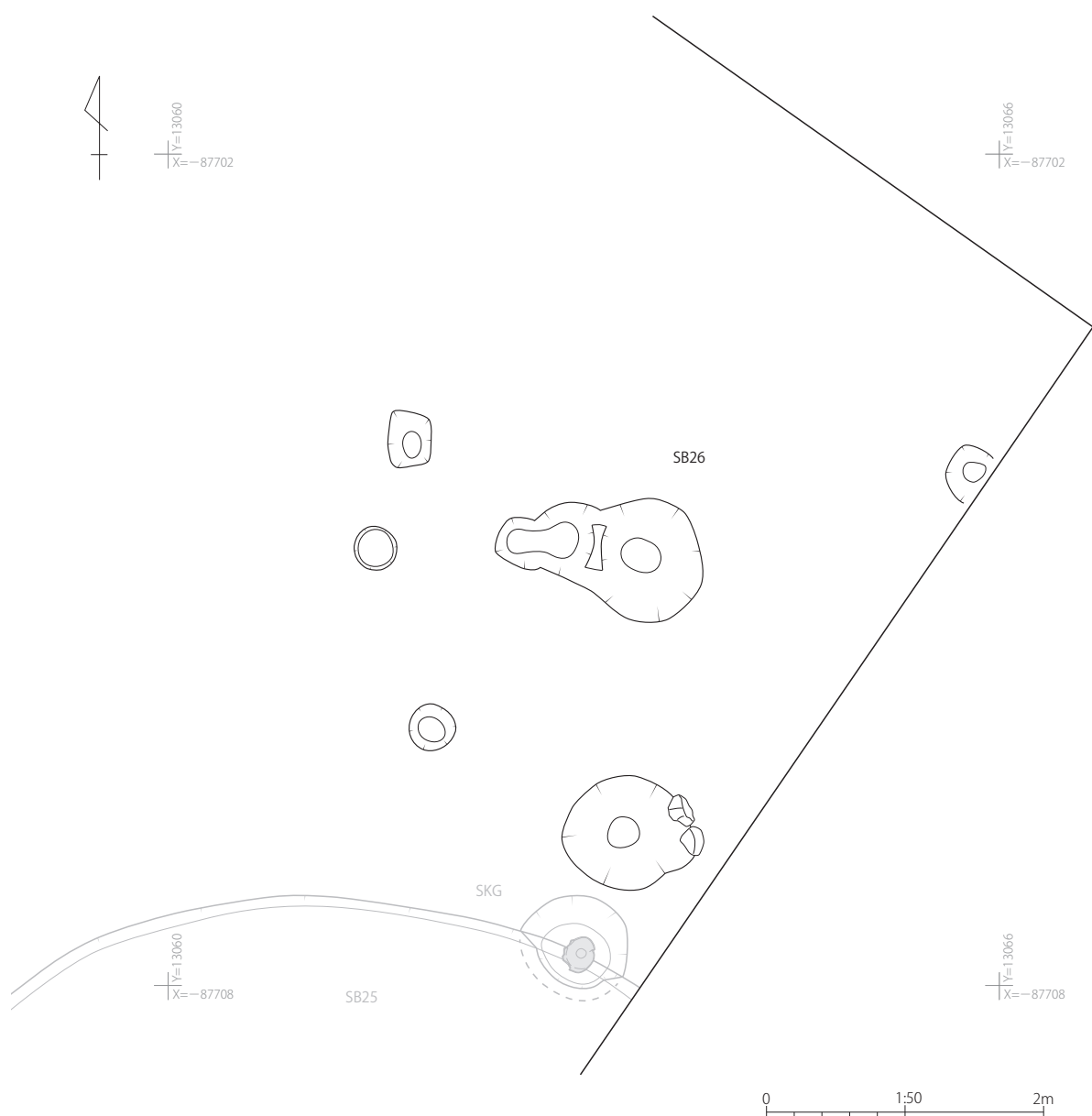
第92図 K地区 SB25出土遺物実測図(2)

## SB26

調査区の北東で4基のピットと2基の土坑を検出し、平面プランは不明なもの、建物と判断した。ピットは径30～40cm、南の円形土坑は径80cm、北の不整形土坑は長軸150cm、短軸90cmを測る。

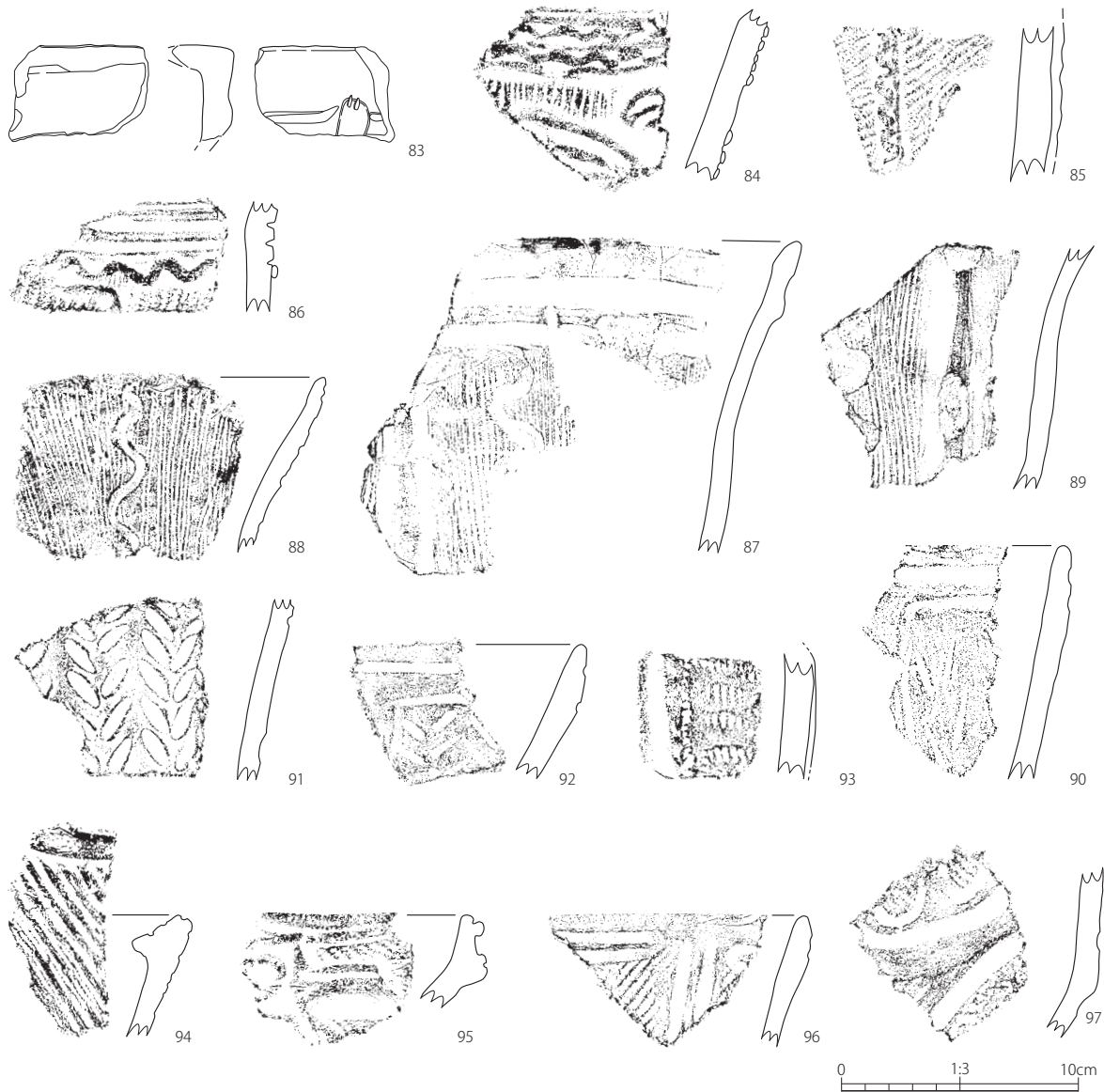
出土した土器は、83のⅢ群A-1類の井戸尻式と思われる口縁部が古い。この土器には、両生類系の前肢を形象した隆帯がみられる。主となるのはⅢ群

A-2類で、84が曽利Ⅰ式、85・86が曽利Ⅱ式、87～89が曽利Ⅳ式、90～93を曽利Ⅴ式に比定した。また、95～97は加曽利E式系と思われる。特に曽利Ⅳ～Ⅴ式が多いので、建物の帰属もこの時期になるとと思われる。石器は、刃部を欠損した、頭部両端に柄付けのためと思われる、抉りのある分銅形に近い短冊形打製石斧が出土している。

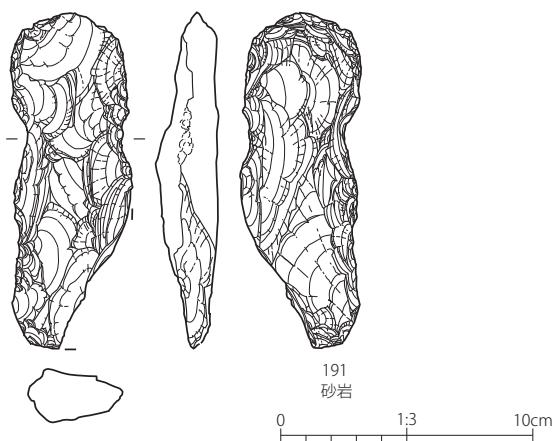


第93図 K地区 SB26





第94図 K地区 SB26出土遺物実測図(1)



第95図 K地区 SB26出土遺物実測図(2)

調査区壁面の土層観察から、SB22はSB23に切られ、SB23はSB24の覆土と分離できていないが、SB24の覆土中に床面が存在する。このことから、竪穴建物の新旧関係はSB22→SB24→SB23になる。SB25と重複するSB26は、明確な切合いを検出することができていないが、SB25から出土する土器が曾利Ⅲ・Ⅳ式主体で、SB26からの出土土器が曾利Ⅳ・Ⅴ式を主体とするので、SB25が古くSB26が新しいと思われる。

なお、SB22内のSKAは、通常、竪穴建物の中央部に設置される石囲いの埋甕炉（曾利Ⅳ式）と考えられるので、確認できなかった建物があった可能性がある。

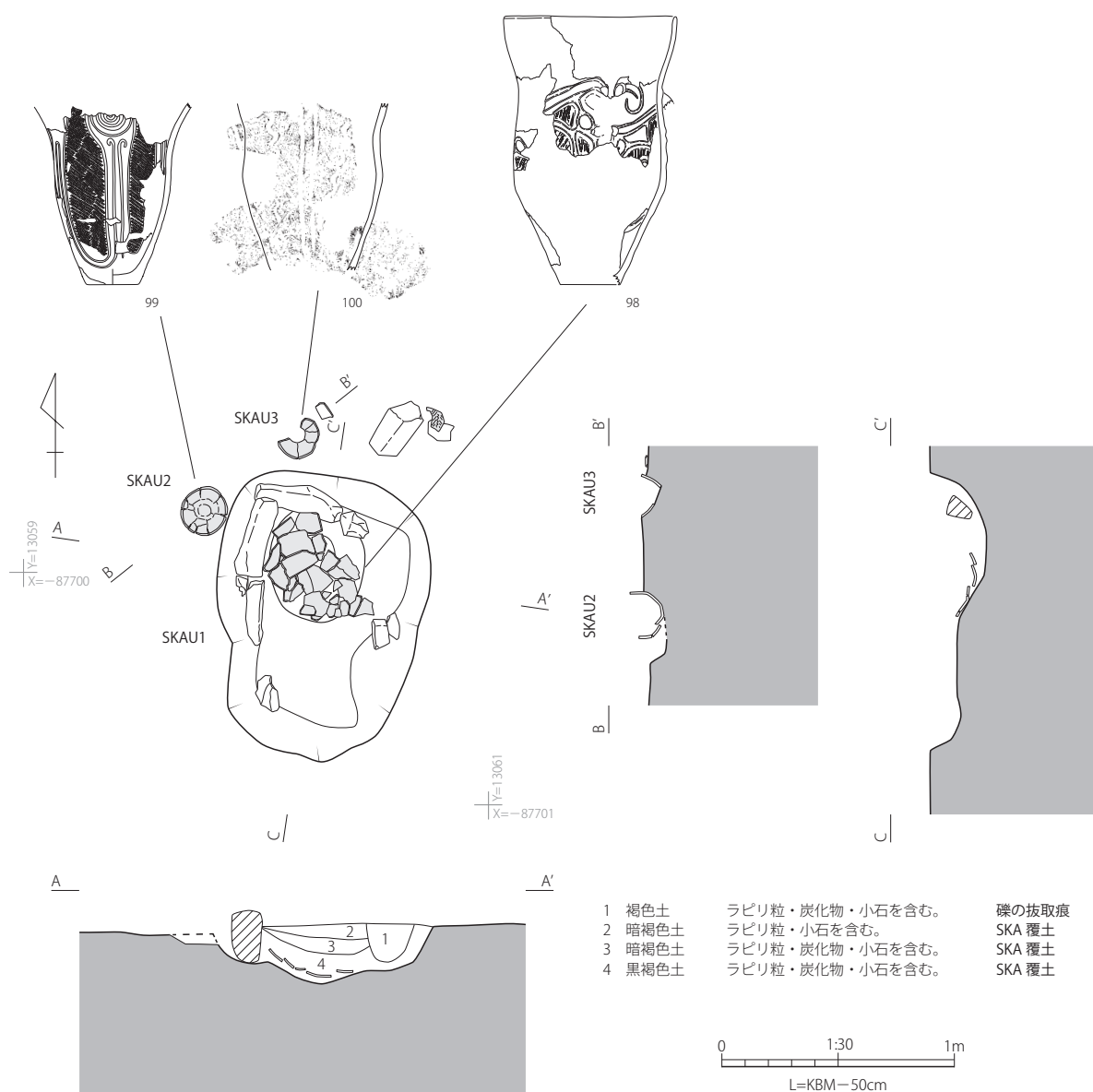
・土坑

SKA

調査区の北西に位置する。調査時には土坑と呼称されているが、石組みの炉であるとみられる。炉の掘方の平面形は長軸 120cm、短軸 89cm を測り、北側がやや広くなる隅丸方形である。断面形は、北側は検出面からの深さ 25cm の丸底、南側は一段高くなって深さ 12cm の平底を呈する。広く深くなる北側に、多数の土器片と石組みに使われた石材が出土しており、炉の本体はこちらにあったものと推定される。SB22 床面より SKA の検出面が高く、SB22 より新しい遺構と判断できる。

土坑底面に敷かれた炉体土器 98 (SKAU1) は、くびれ部に環状把手状の耳をもつ曾利IV式の大型のキャリパー形深鉢である。残存状況は非常に悪いが、全体を復元できるパーツがあり、推定口径（最大径）29.3cm、推定底径 10.2cm、推定器高 46.2cm を測る。さらに石組みの一部と思われる 193 は、台石とされた石棒を再転用したものと考えられる。また 192 の短冊形打製石斧も出土している。

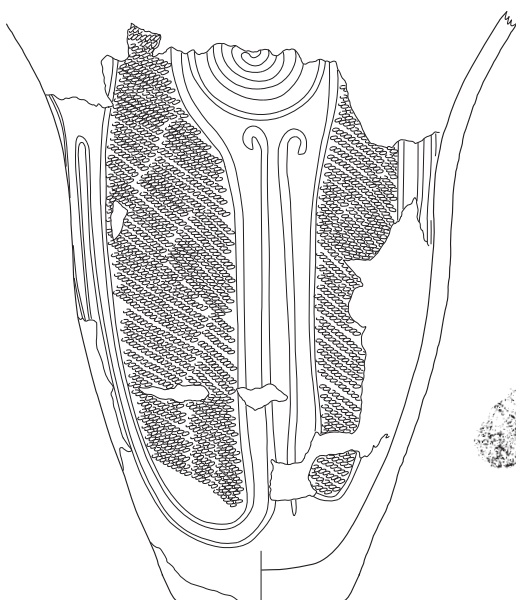
このように SKA は、建物の中央炉と考えられるため、未確認の SKA を中心とした建物が存在したものと考えられる。



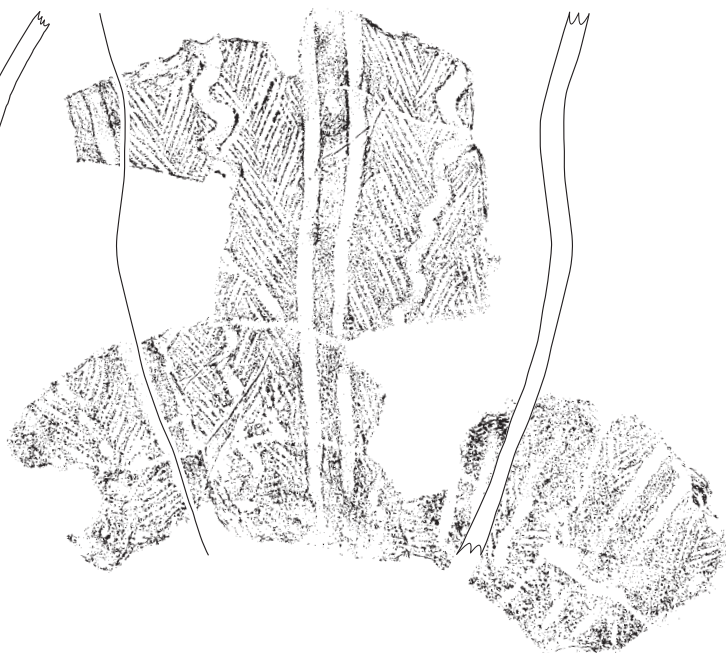
第 96 図 K 地区 SKA



98 (SKAU1)



99 (SKAU2)



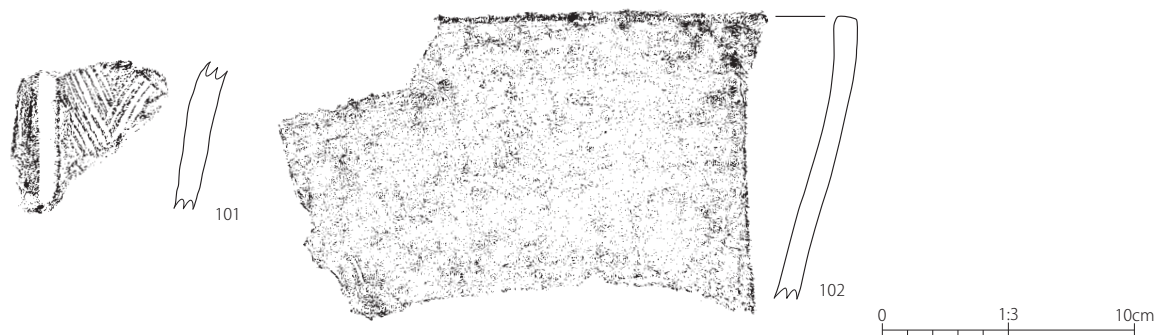
100 (SKAU3)



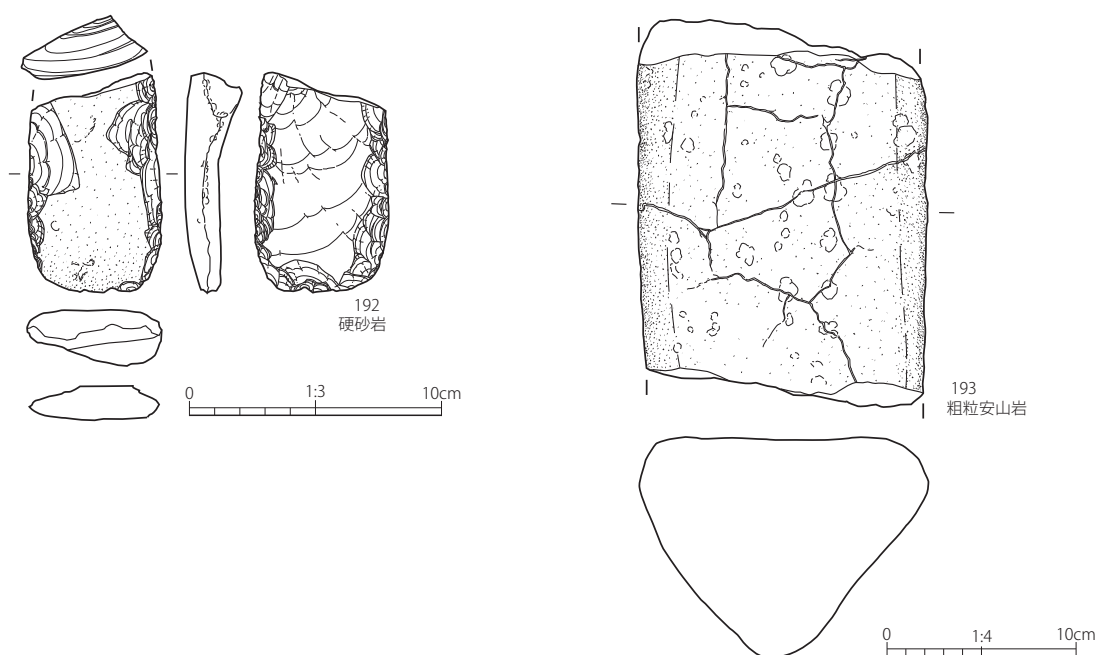
第97図 K地区 SKA出土遺物実測図(1)

## SKAU2・SKAU3

SKA の北西に、2 基並んだ埋甕土坑（SKAU2・SKAU3）である。上部の大半が削平されて明確な土坑の形は検出されず、深鉢が出土したことにより埋甕と確認された。SKA とごく近接して存在するが、その関係は不明である。SKAU2（99）は加曽利E系と思われる縄文施文の深鉢で、SKAU3（100）は曾利IV式のキャリパー形深鉢である。99は残存最大径27cm、底径9cm、残存高31.3cmである。100は推定最大径19.5cm、残存高21.7cmである。



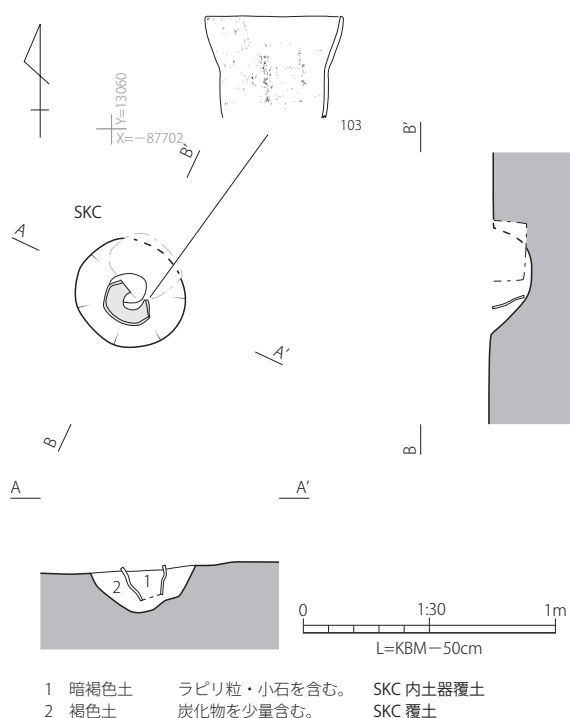
第98図 K地区 SKA出土遺物実測図(2)



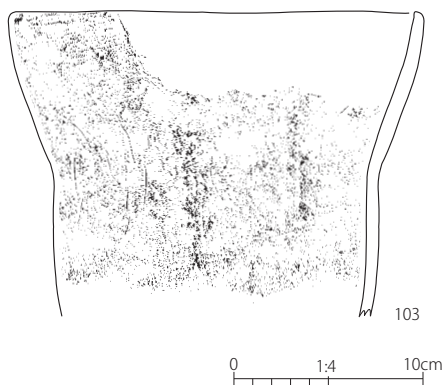
第99図 K地区 SKA出土遺物実測図(3)

## SKC

調査区の北西、SB22・SB23の東に位置する。調査時には土坑と呼称されているが、埋甕土坑であるとみられる。平面形は径45cmの円形を呈し、断面形は丸底で深さ16cmを測る。土坑の中央から曽利式と考えられる無文の底部のない深鉢103が正位置で出土した。法量は、推定口径（最大径）21.3cm、残存高16.1cmである。



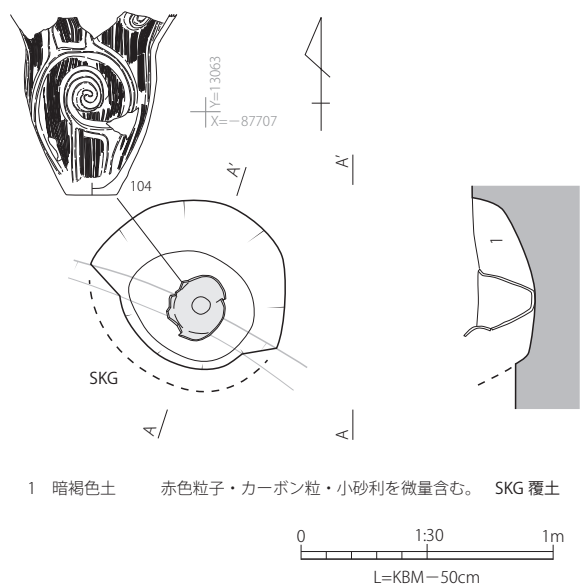
第100図 K地区 SKC



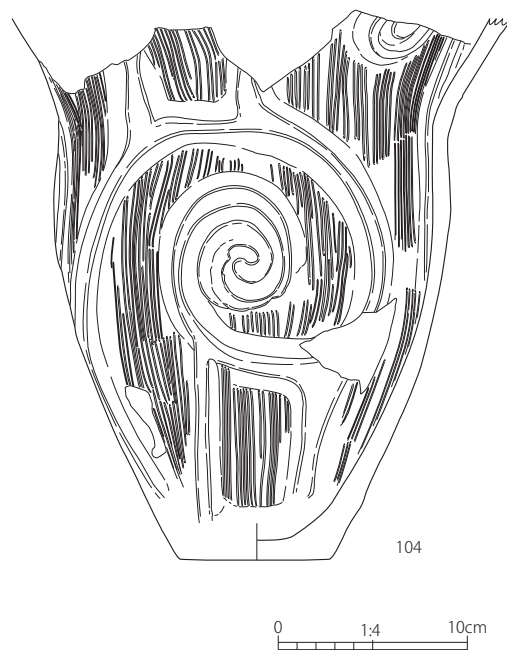
第101図 K地区 SKC 出土遺物実測図

## SKG

調査時には土坑と呼称されているが、埋甕土坑であるとみられる。SB25の北東に、SB25に切られて検出されたことからSB25よりも古いと考えられる。平面形は径80cmの正円形と推定され、検出面からの深さは25cmを測る。曽利IV式の底部のあるキャリパー形深鉢104が正位置で出土した。この土器の法量は残存最大径26.5cm、底径8cm、残存高28.9cmである。



第102図 K地区 SKG



第103図 K地区 SKG 出土遺物実測図



# SKB・SKD・SKE・SKF

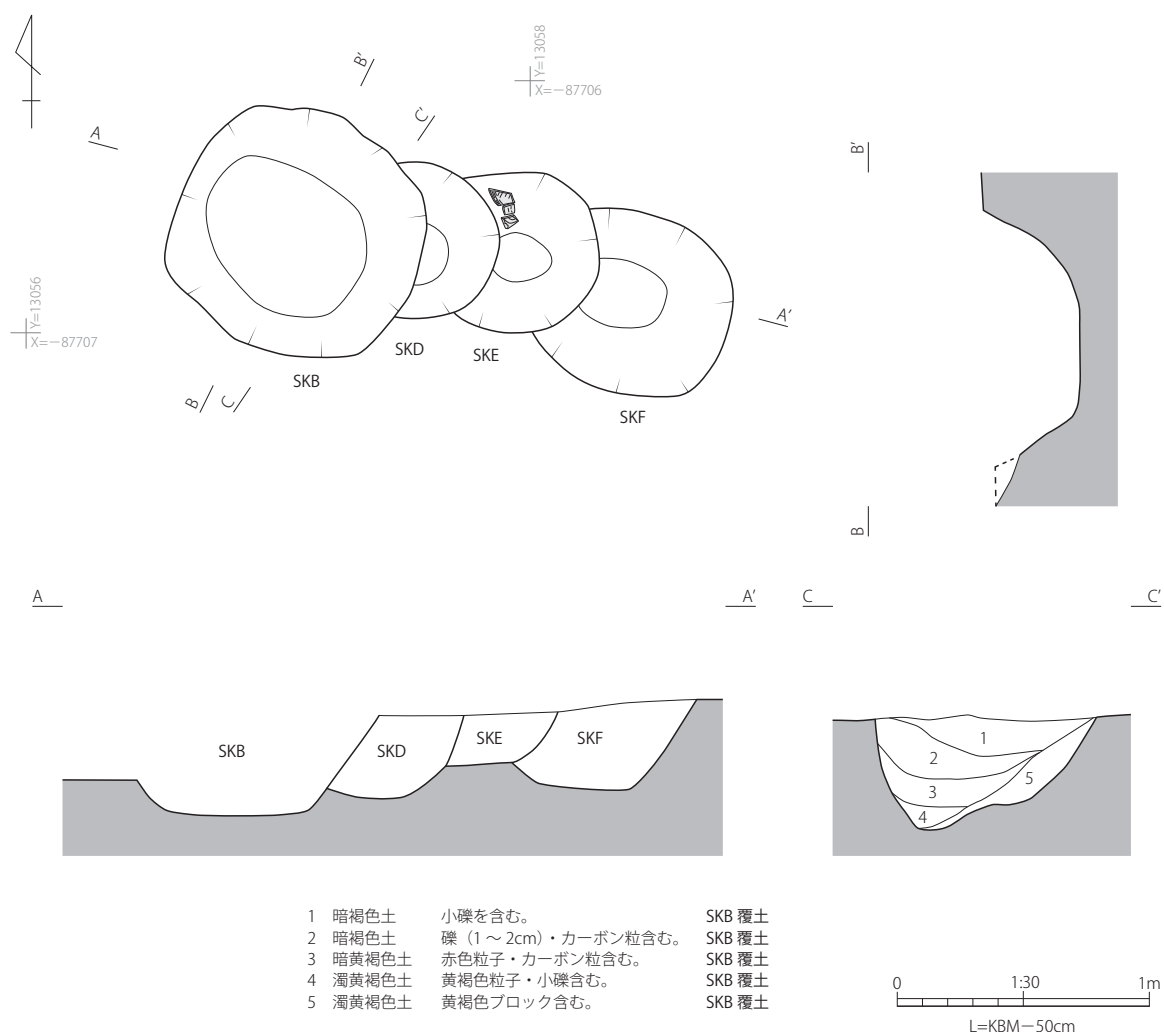
調査区の南西、SB24の東に4基の土坑が切り合って検出された。SKBが最も新しく、SKDを切り、SB24に切られ、径100cm、検出面からの深さは40cmを測る。SKDは、SKEを切りSKBに切られ、径約60cm、検出面からの深さは33cmを測る。SKEは、SKFを切りSKDに切られ、径約70cm、検出面からの深さは20cmを測る。現地実測図をみると曽利Ⅴ式と思われる土器を伴っている。最も古いのはSKFで、長径70cm以上、検出面からの深さ35cmを測る。

## ・遺構に伴わない遺物

土器では、Ⅲ群A-1類の藤内式からⅣ群A-2類の堀之内式までの縄文時代中期中葉から後期前葉まで出土している。105は藤内式のキャリパー形深鉢の環状把手部分になる。106～108が藤内式で、110～113までを井戸尻式に比定した。

114～168を曽利式と認識した。114～119はⅢ群A-2類の曽利Ⅰ式で、ほとんどが籠目文土器の深鉢であると思われる。115の突帯部分は蛇体把手となっている。120～125は曽利Ⅱ式、126～130を曽利Ⅲ式、131～155を曽利Ⅳ式、158・161を曽利Ⅴ式に比定、163～168は曽利式と考えられる口縁部を図示した。169～173は加曽利E4式に比定した。

そのうち器形の推定できる130は、推定口径31.3cm、残存高10.3cm、136は推定口径19.6cm、

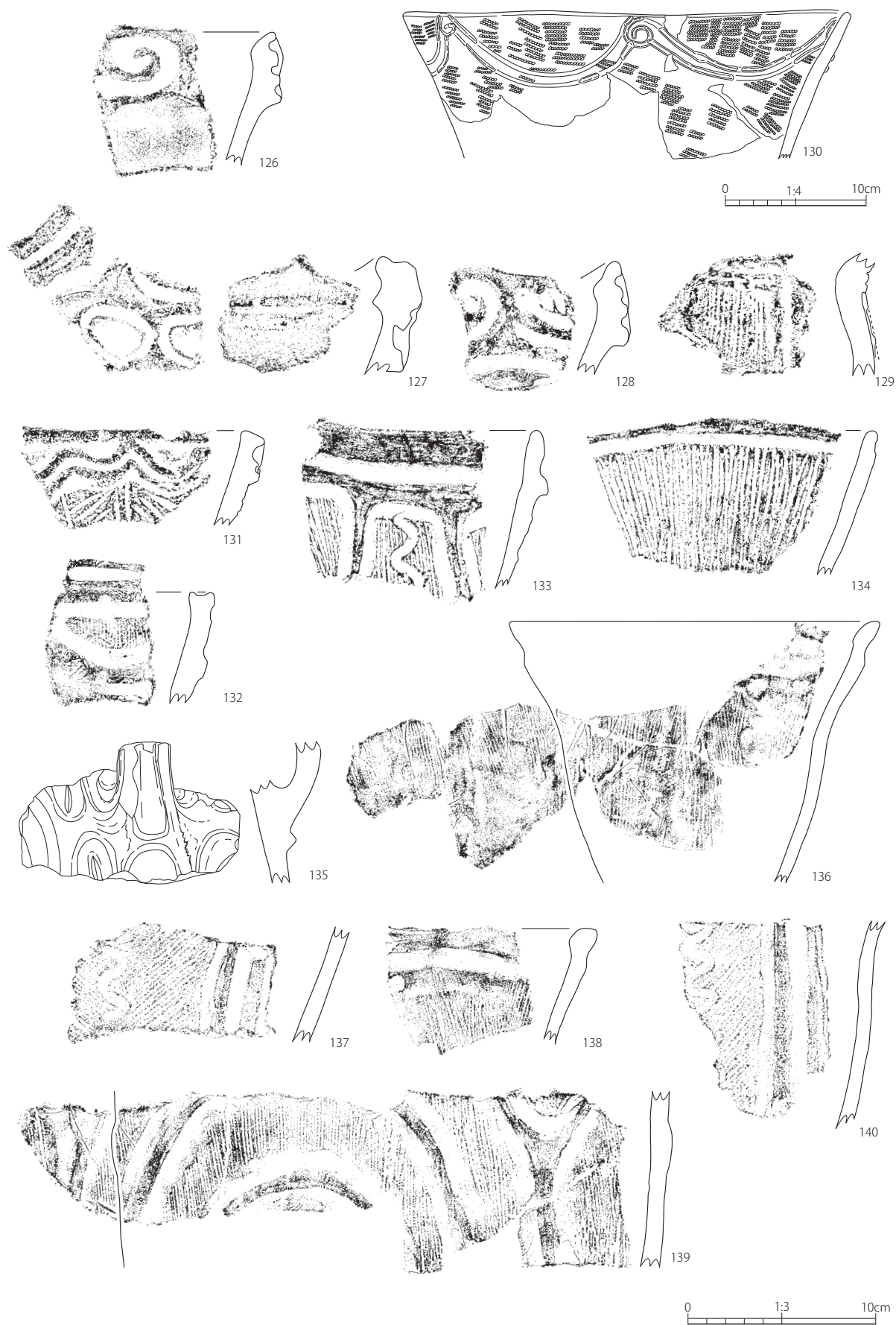


第104図 K地区 SKB・SKD・SKE・SKF





第105図 K地区 出土遺物実測図(1)

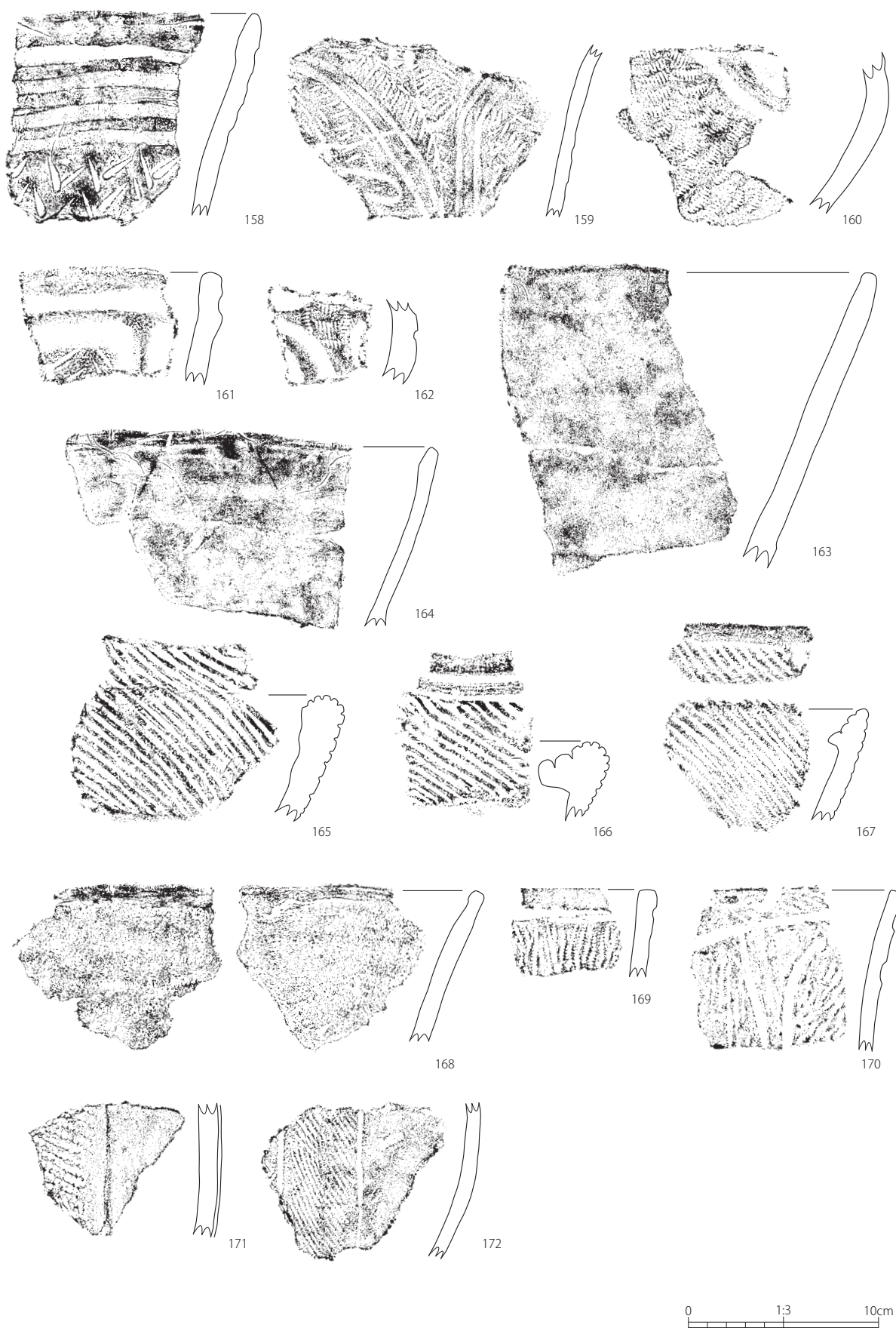


第106図 K地区 出土遺物実測図(2)





第107図 K地区 出土遺物実測図(3)



第108図 K地区 出土遺物実測図(4)

残存高 18.9cm、139 が残存最大径 29.8cm、残存高 9.4cm、141 が推定残存径 25.2cm、残存高 15.3cm、56 の底部は、底径 6cm、残存高 5.7cm である。なお出土位置不明であるが、完形復元された無頸壺形の深鉢土器 173 は、推定口径 15cm、推定底径 9.2cm、推定最大径 28.4cm、推定高 32.5cm になる。

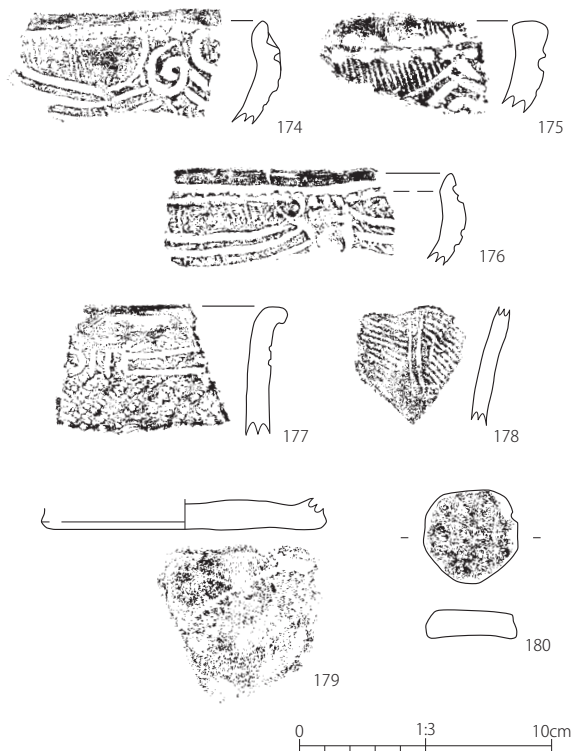
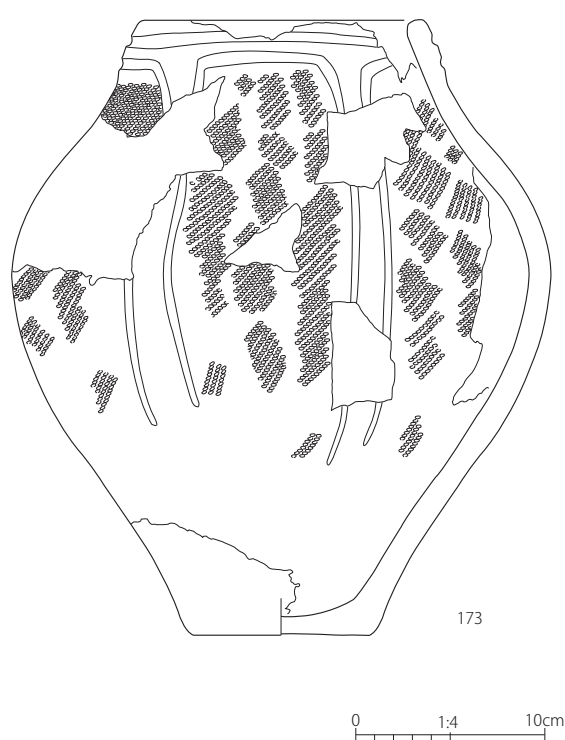
174 ～ 176 は、胎土が灰肌色系で、砂粒を多く含む粗い胎土をもつ西日本系と思われる土器である。咲畑式に比定した。

177 と 178 は、やや器壁が薄く縄文時代後期の堀之内 1 式と思われる。179 は時期不明だが、木葉痕のある底部である。180 は時期不明の土製円盤である。

土器に関して、縄文時代中期中葉から後期前葉まで出土しているが、主体となるのは曾利Ⅳ式期であり、この時期が K 地区を遺跡として最も利用された時期であったと考える。

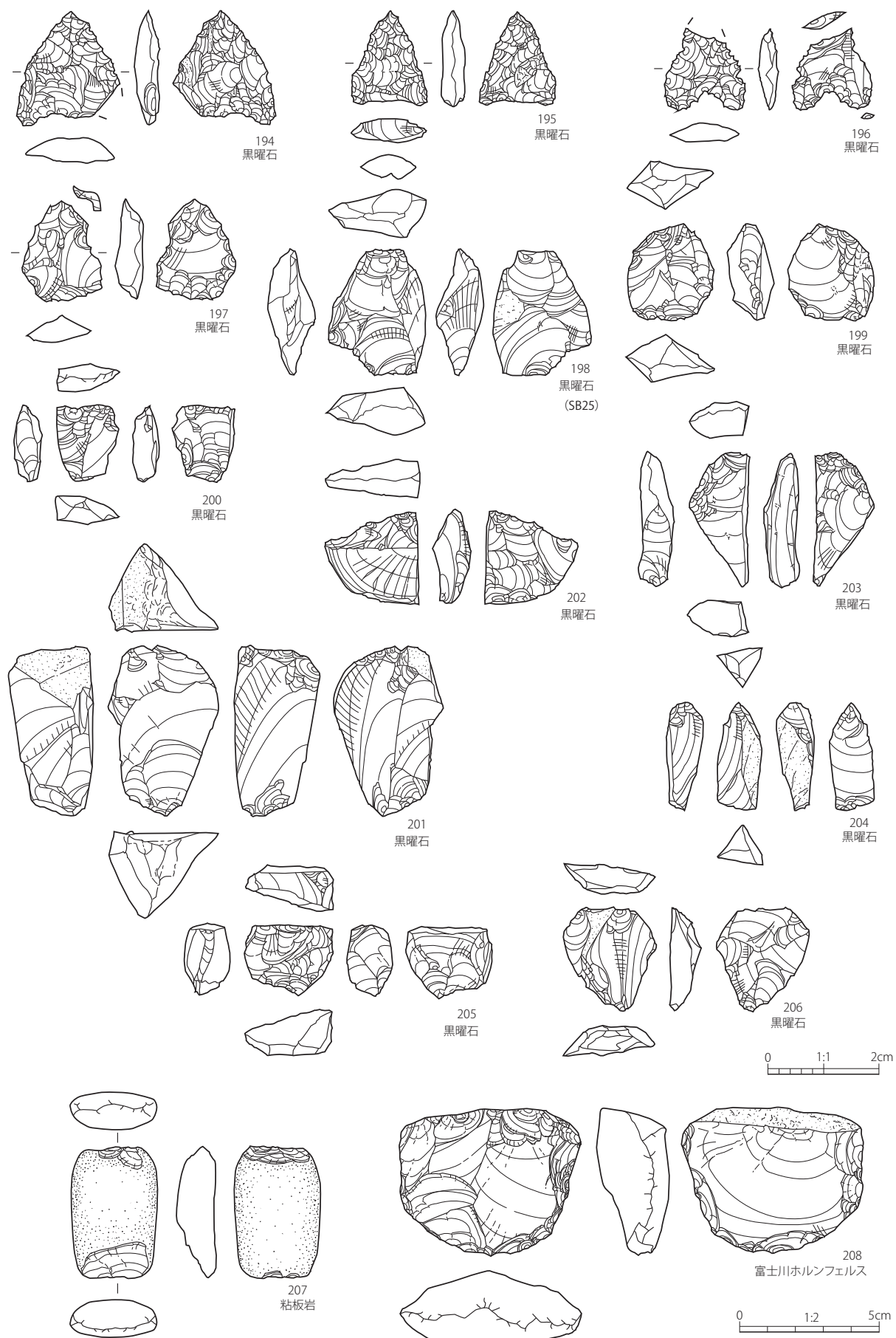
石器は、194 ～ 196 が黒曜石製の無茎凹基の石鏃で、196 がやや両脚的な加工をしている。197 は石鏃の未製品と考えられることから、198 ～ 206 の楔形石器は、石鏃等の素材剥片作出による残核である可能性が高く、K 地区で石鏃製作が行われていたと

思われる。207 は石器素材となるスレート質粘板岩の小円礫を分割しようとした結果の楔形石器と思われる。208 は分厚い富士川ホルンフェルスの剥片の縁辺に刃部を形成した削器であるが、石核の再生品の可能性もある。209 は黒曜石製の石刃状剥片で、旧石器時代の可能性があるが、石刃技法によるものではなく水和層の発達も少ないので、縄文時代の偶発的産物と思われる。210 は、磨製石斧の刃部で、裏面刃部側面からの打撃で欠損している。211 ～ 215 は打製石斧であるが、211 と 215 がバチ形を呈する以外は短冊形である。216 は富士川ホルンフェルの石核で、礫面を打面とし、円周して等幅剥片を作出している。217 と 218 はおそらく神津島産と考えられる黒曜石原石で、217 には試し割りと思われる剥離痕が存在する。219 は石器製作用ハンマーと考えられる敲石で、打撃点からの衝撃で半砕している。220 と 221 は敲・凹・磨石で、221 はとくに深い凹部が形成されている。222 ～ 224 は敲・磨石で、224 は小型だが石皿的な使用がなされたかもしれない。225 はほぼ球形の磨石で、あるいは祭祀的なものかもしれない。



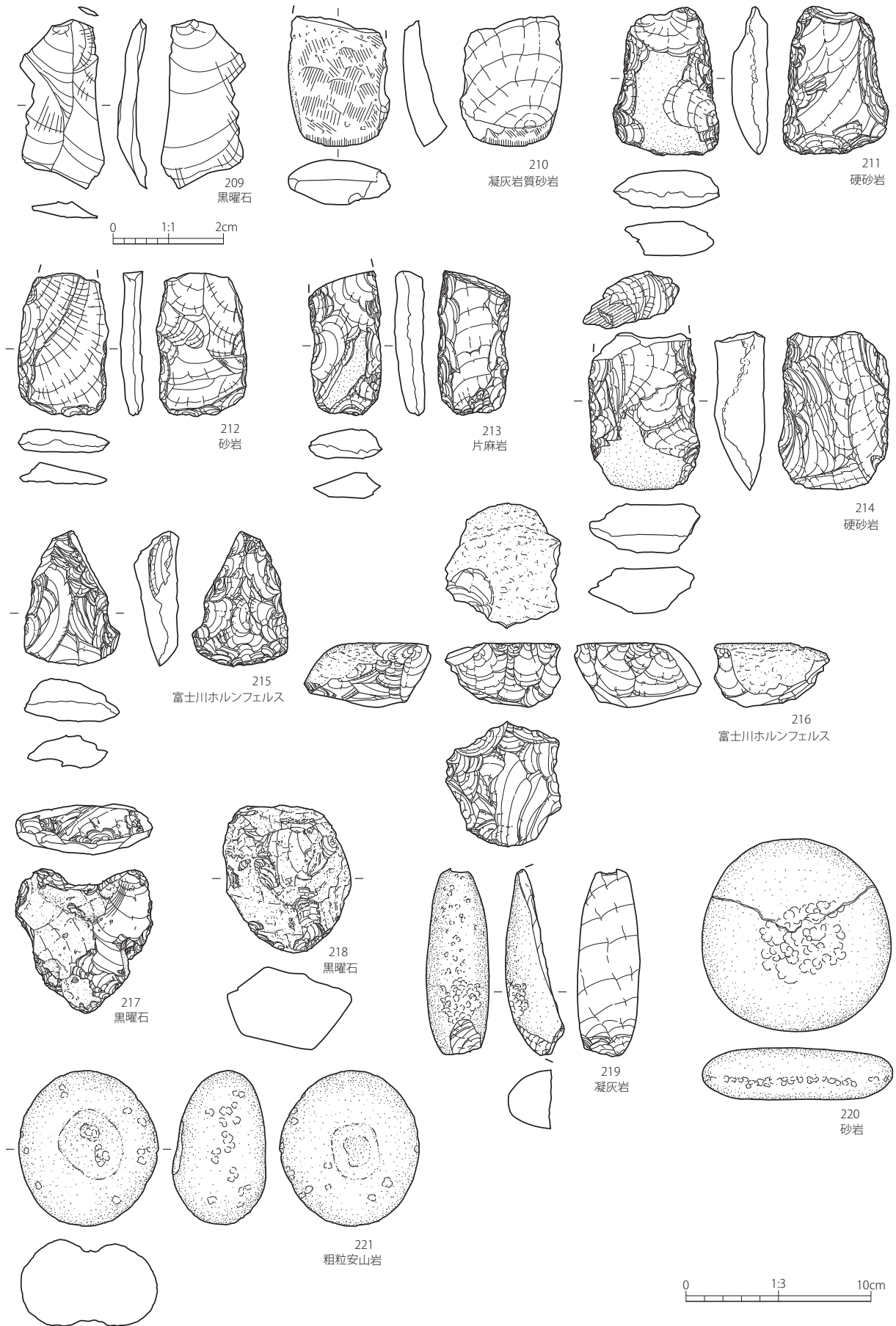
第 109 図 K 地区 出土遺物実測図 (5)



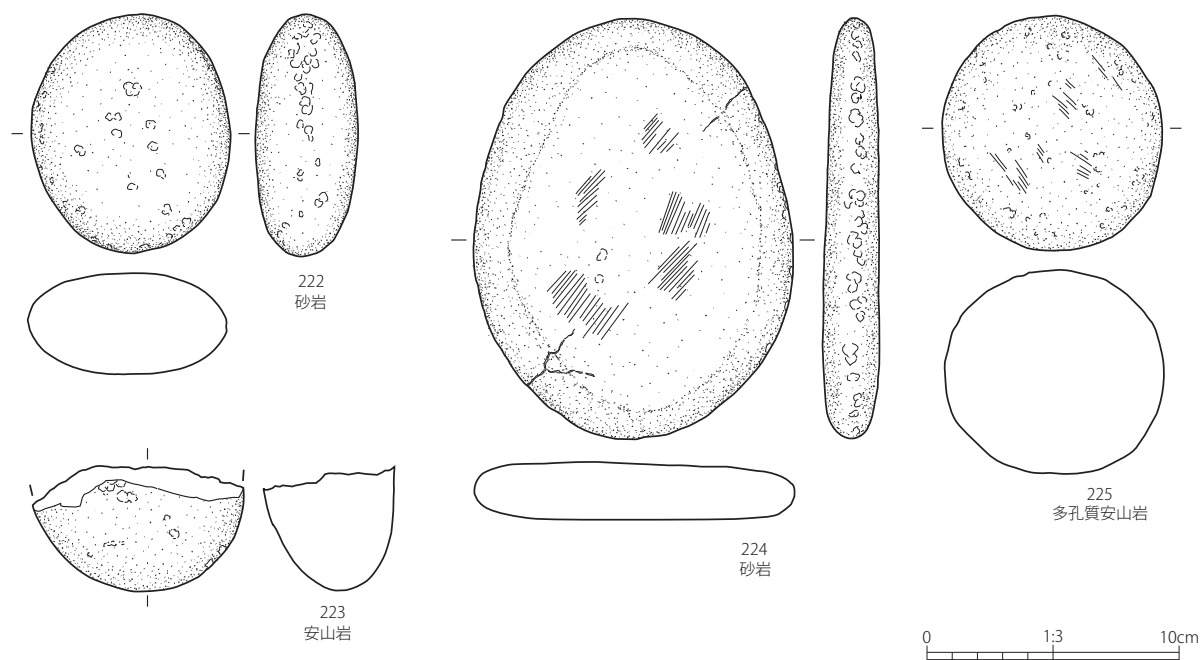


第110図 K地区 出土遺物実測図(6)





第111図 K地区 出土遺物実測図(7)



第 112 図 K 地区 出土遺物実測図 (8)

第 11 表 K 地区 遺構一覧表

遺構種別	報告遺構名	調査時遺構名	位置	時代	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い (古→新)	備考
竪穴建物	SB22	22 号住		縄文	[770]	-	28	円形	平底	SB22 → SB23・SKA	
竪穴建物	SB23	23 号住		縄文	[620]	-	32	円形	平底	SB22・SB24 → SB23	
竪穴建物	SB24	24 号住		縄文	[760]	-	34	円形	平底	SB24 → SB23	
竪穴建物	SB25	25 号住		縄文	[760]	-	37	円形	平底	SB25 → SKG	
竪穴建物	SB26	26 号住		縄文	-	-	-	-	-	-	
土坑	SKA	A 土坑		縄文	120	89	25	隅丸方形	丸底	SB22 → SKA	炉とみられる。
土坑	SKB	B 土坑		縄文	98	95	40	円形	平底	SKD → SKB	
土坑	SKC	C 土坑		縄文	45	45	16	円形	丸底	-	埋甕とみられる。
土坑	SKD	D 土坑		縄文	61	(44)	33	円形	丸底	SKE → SKD → SKB	
土坑	SKE	E 土坑		縄文	64	(57)	20	円形	平底	SKF → SKE → SKD	
土坑	SKF	F 土坑		縄文	(73)	71	35	円形	平底	SKF → SKE	
土坑	SKG	G 土坑		縄文	80	(80)	25	正円形	丸底	SB25 → SKG	埋甕とみられる。
埋甕	SB23U1 ~ 2	23 号住南埋甕		縄文	(93)	47	30	楕円形	平底	-	
埋甕	SKAU2	A 土坑西側埋甕		縄文	-	-	-	-	-	-	
埋甕	SKAU3	A 土坑北側埋甕		縄文	-	-	-	-	-	-	

第12表 K地区 出土土器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第78図 PL.24	3	SB22 床面	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	口縁部把手部分。肥厚した文様帯内に連結した渦巻文を配する。口唇上部には沈線を引き、そのまま把手上面で渦巻文となる。把手裏面は半球状の凹みとなっている。	R6
第78図 PL.24	4	SB22	10YR3/2 黒褐	10YR5/4 にぶい黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	口縁部の把手部分。貼付けられた半円状の把手に↑状の文様を描き、その下から三本の沈線による懸垂文を垂下する。	R6
第78図 PL.24	5	SB22	7.5YR4/3 にぶい褐	7.5YR4/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口縁に沿って沈線とその下に渦巻文を施し、その下に斜め条線を施文する。	R6
第78図 PL.24	6	SB22	10YR3/2 黒褐	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	沈線による区画内を、集合沈線の綾杉文とその中央部に沈線による蛇行文を施文する。	R6
第78図 PL.24	7	SB22	10YR3/1 黒褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	三本の沈線による懸垂線による区画内を、先端の丸い工具の列状刺突文で埋める。	R6
第78図 PL.24	8	SB22	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR5/8 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	頸部のある鉢形土器。口縁部は無文で、肩に大きな環状把手をつけて胴部には大きな渦巻文を描き、文様間には斜め刺突文を充填する。	R5
第78図 PL.24	9	SB22	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR5/8 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	並行する浅い沈線の弧状文による区画内を八の字文で埋める。	R5
第78図 PL.24	10	SB22	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利?	板状の把手部分。円形の透しの周りを細目の沈線で直線状に囲う。	R6
第78図 PL.24	11	SB22	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E	平行沈線による懸垂文で区切られた区画内を、S字状結節をもつLRの縄文に縦位に施文する。	R6
第84図 PL.24	12	SB23 炉	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなラインのキャリバー形深鉢。胴部中央部に、低い幅広の隆帯の両側に指頭による浅い凹線を区画線として大型の渦巻文を描画し、区画内を縦位条線で埋める。その縦区画の中央に指による凹線で蛇行懸垂文を施文する。	R93
第84図 PL.26	13	SB23 炉	10R4/4 赤褐	10R4/4 赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	深鉢底部。二本の薄い断面三角形の隆帯で6単位の懸垂文を施文、区画内を縦斜め条線で埋める。	R89
第84図 PL.25	14	SB23U1・A2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなラインのキャリバー形深鉢。低い幅広の隆帯の両側に指頭による浅い凹線を区画線として、連結した渦巻文を描画し、区画内を縦位条線で埋める。	R100
第84図 PL.25	15	SB23U2・A2Gr	2.5Y4/2 灰赤	2.5Y4/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	低い幅広の隆帯の両側に指頭による浅い凹線を口縁に平行線、懸垂線で長方形の区画をつくり、その中を縦の条線で埋める。その区画の中心に沈線による蛇行懸垂文を施文する。	R88
第84図 PL.26	16	SB23 床面	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、つなげてその下の胴部に大小の渦巻文を描画する。その区画内は縦位の条線で埋める。	R10・R46
第85図 PL.26	17	SB23 床面	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリバー形深鉢。低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、その下に大型の渦巻文を描画する。区画された内部は縦の条線で埋める。	R10
第85図 PL.26	18	SB23	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリバー形深鉢。低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、その下に略長方形の区画をつくり、その中を縦位の条線で埋める。	R10
第85図 PL.26	19	SB23	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	円孔の把手部分。低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線で区画し、その中を斜め条線で埋める。	R10
第85図 PL.26	20	SB23	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	北屋敷式状の角形突起部分。浅い凹線による区画内を縦位の条線で埋める。	R10
第85図 PL.26	21	SB23・A2Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリバー形深鉢。低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、そこから懸垂文を垂下するが、一部の懸垂文は渦巻文と連結する。区画内中央には口縁部に接して、凹線による渦巻文から蛇行懸垂文を垂下し、その両側を綾杉条痕で埋める。	R10・R35・R46
第85図 PL.26	22	SB23	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリバー形深鉢の胴部。両側に浅い凹線を伴う、低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内中央部に、薄い凹線による蛇行懸垂文を引き、その両側を斜め条線で埋め、綾杉状とする。	R3
第85図 PL.27	23	SB23	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯によって複雑な曲線文を描き、その内部を縦位の条線で充填する	R10
第85図 PL.27	24	SB23	7.5YR4/1 褐灰	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い沈線を伴う低い幅広の隆帯の曲線文による区画内を、綾杉状の縦位条線で充填する。	R10
第85図 PL.27	25	SB23	10YR3/2 黒褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い沈線を伴う低い幅広の隆帯の曲線文による区画内を、縦位条線で充填する。	R10
第85図 PL.27	26	SB23	10YR4/1 褐灰	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い沈線を伴う低い幅広の隆帯による区画内を、斜め条線で充填する。	R10

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第85図 PL.27	27	SB23	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	太い沈線による区画内を条線によって埋める。	R9
第85図 PL.27	28	SB23	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群	中期	底部。	R10
第87図 PL.27	29	SB24	2.5Y3/1 黒褐	10R3/6 暗赤	Ⅲ群 A-1 類	新道	両側を爪形押引文によって圧えられた隆帯で、縦に長い三角形区画をつくり、その中を蛇行沈線を垂下する。胎土に雲母片を多く含有する。	R57
第87図 PL.27	30	SB24	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5YR6/8 橙	Ⅲ群 A-1 類	藤内	沈線による区画内に、連続爪形文と三叉文を施文する。	R2
第87図 PL.27	31	SB24	10YR4/1 褐灰	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-1 類	藤内？	肥厚した口唇の下に連続爪形文を施文する。	R2
第87図 PL.27	32	SB24	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 3	口唇が欠損しているが把手状に肥厚した口縁部で、平行沈線による隅丸方形の楕円文が描かれ、把手状の突出部上面には三叉文が施文される。	R2
第87図 PL.27	33	SB24	5YR4/2 灰褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	小型深鉢？の頸部。二重の隆帯の上に刺突文を充填した楕円文と弧線文を配した文様帯を形成する。	R2 ・ R46
第87図 PL.27	34	SB24	5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	龍目文土器の頸部。頸部に並行して波状浮線文を三重に貼付し、その下に半裁竹管による縦位の条線を地文として施文後、断面三角形の浮線に近い隆帯で懸垂文と連結した渦巻文を描く。	R2
第87図 PL.27	35	SB24	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	3 条の LR の縄文を地文とし、三本の隆帯による J 字状懸垂文を施文する。	R46
第87図 PL.28	36	SB24	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	龍目文土器。裏面に大きく内向した口唇に沿う凹線から表、頸部まで、斜行条線を周り込むように施文する。頸部は上に一本、下に二本の粘土紐による浮線文を配し、その内部を口縁部とは逆方向の条線で充填する。胴部は縦位の条線を地文とし、頸部浮線文から浮線による蛇行懸垂文を 11 単位配置する。	R92
第87図 PL.27	37	SB24	5YR5/2 灰褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	口縁の肥厚した文様帯内に連結した楕円文を描き、口唇上面には沈線を引く。	R2
第87図 PL.27	38	SB24 ・ A2Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	龍目文土器胴部。頸部に幅広の浅い沈線を両側とした隆帯を二本引き、縦位の条線を地文とする。6 単位？の渦巻文を配して、頸部から粘土紐の浮線による蛇行懸垂文を垂下する。	R12
第87図 PL.27	39	SB24	7.5YR6/3 にぶい褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	肥厚した口縁部で文様帯を形成し、その中に連続した沈線による渦巻文を配置する。	R46
第87図 PL.27	40	SB24	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、その下に大型の渦巻文を描画する。区画された内部は縦の条線で埋める。口縁部に補修孔あり。	R2
第87図 PL.27	41	SB24	5YR5/3 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	低い幅広の隆帯の両側に凹線を口縁に沿って施文し、地文は縦の条線を施文する。	R2
第87図 PL.27	42	SB24 南埋甕	N21 黒	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯の懸垂文を施文し、その区画内を条線による綾杉文で埋め、その中央部に浅い蛇行沈線を垂下する。	R11
第87図 PL.28	43	SB24	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯で曲線を描き、その区画内を条線で埋める。	R46
第87図 PL.28	44	SB24	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯で曲線を描き、その区画内を条線で埋める。	R2
第87図 PL.28	45	SB24	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯で渦巻文を描き、その外側を縦条線で埋める。	R2
第87図 PL.28	46	SB24	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯で曲線を描き、その区画内を条線で埋める。	R2
第87図 PL.28	47	SB24	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	口縁に平行して凹線状の太い沈線を施文し、その下に同じ工具で渦巻文を描画する。	R46
第88図 PL.28	48	SB24	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ？	ゆるやかなキャリパー形深鉢で、口縁に連弧の隆帯を施文し、その弧の凹部から隆帯を懸垂する。その区画内は無文である。	R90
第88図 PL.28	49	SB24	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	浅く幅広の沈線を口縁に沿って引き、そのまま平行沈線による懸垂文として垂下する。	R2
第88図 PL.28	50	SB24	5YR6/8 橙	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	龍目文土器口縁部。裏面に大きく内向した口唇から表面に、半隆帯に近い斜行条線による綾杉文を、裏面口唇に平行する隆帯まで周り込むように施文する。	R2
第88図 PL.28	51	SB24	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利？	平行沈線あるいはその集合によって区画された中を斜条線で充填する。	R2
第88図 PL.28	52	SB24	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 B-1 類	加曾利 E ？	三本？の沈線による懸垂文による区画内を、LR の縄文を条が水平になるように充填している。	R2



挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第91図 PL.29	53	SB25	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻	環状把手部分。爪形の刻みがある隆帯と連結した環状部に、区画された内部は集合沈線によって充填されている。	R14
第91図 PL.29	54	SB25	7.5YR5/1 褐灰	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-1 類	曾利Ⅰ	半隆帯に近い細い粘土紐による隆帯で渦巻文等の文様を構成する。小型の環状把手をもち、両耳壺形の土器と考えられる。	R17
第91図 PL.29	55	SB25	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	口縁部文様帯。条線が充填された楕円文とそれに挟まれた渦巻文の連結。	R17
第91図 PL.29	56	SB25	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	籠目文土器口縁部。裏面に大きく内向した口唇から表面に、半隆帯と細い浮線で作る繊細な斜行格子目文を、裏面口唇に平行する半隆帯まで周り込むように施文する。	R13
第91図 PL.29	57	SB25	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	キャリパー形深鉢の口縁部。九単位の把手をもつ波状口縁で、肥厚した文様帯を形成する。文様帯には渦巻文に挟まれた同心円文の三単位、あるいは三単位渦巻文の区画と相対する渦巻文の二単位の区画がある。口唇上には凹線が引かれ、把手上面の渦巻文と連結する。25号住出土。	R101
第91図 PL.29	58	SB25	10YR6/3 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	波状口縁の肥厚した文様帯内に端部が蔽手となった弧線文を配し、口唇上面には凹線を引く。	R13
第91図 PL.29	59	SB25	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	肥厚した口唇の上面に沈線を引き、口縁部文様帯には渦巻きと弧線の連結文を描く。文様帯の下には沈線を伴う斜め刻みのある半隆帯が廻る。	R13
第91図 PL.29	60	SB25	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	太い隆帯の懸垂文上に沈線による逆U字と垂下線を組み合わせた文様を描き、区画内は斜条線で埋める。	R17
第91図 PL.29	61	SB25 ・ A2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリパー形深鉢胴部。地文として縦位の条線を施文後、浅い二本の懸垂文を下ろすが、胴部張り出し部のあたりで小型の渦巻文を描き、またその下に沈線を垂下する。	R16 ・ R44
第92図 PL.29	62	SB25	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR3/3 暗褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に沈線を伴う隆帯で渦巻文を描き、その渦巻文から放射状に条線を施文する。	R17
第92図 PL.29	63	SB25	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内を縦条線で埋め、薄い凹線で弧線文を描く。	R15
第92図 PL.29	64	SB25	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内を縦条線で埋め、懸垂文の一部は途中で渦巻文を連結する。	R13
第92図 PL.30	65	SB25	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両耳壺形の鐳付土器。無節Rの捺糸文を縦位施文して地文とし、並行沈線による弧線文の両側を渦巻文とする。凸状の弧線文の中央部には沈線による渦巻文とその下にV字型の逆Ωの文様を描く。No.3耳部分の環状把手には刻み隆帯を施し、その下には渦巻文を片側に配した平行沈線による懸垂文を描く。	
第92図 PL.30	66	SB25	10YR6/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ？	無文小型鐳付き土器。角度のある肩部に、左右二単位のX字状把手をもつ。内面にタール状の付着物がみられる。	R94
第92図 PL.29	67	SB25	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	八の字文を全面に施文。	R14
第92図 PL.29	68	SB25	10YR5/3 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	浅く幅広の沈線の曲線文による区画内を、櫛歯の押引き文を崩れた八の字状に配置する。	R13
第92図 PL.29	69	SB25	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	二単位の爪形文を点状に施文する。	R14
第92図 PL.29	70	SB25	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	深鉢の無文口縁部。頸部に縦位の集合沈線を充填する楕円文？が施文される。	R13
第92図 PL.29	71	SB25	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	籠目文土器の口縁部。裏面に大きく内向した口唇から表面に、半隆帯に近い斜行条線を裏面口唇に平行する半隆帯まで周り込むように施文する。	R17
第92図 PL.29	72	SB25	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	集合沈線による綾杉文の中央に、波状隆帯による懸垂文を貼付している。	R14
第92図 PL.29	73	SB25	5YR6/6 橙	5YR5/3 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	半裁竹管の平行沈線を等間隔に垂下して器面全体に施文して地文とし、その上に波状浮線文を垂下し懸垂文としている。	R13
第92図 PL.30	74	SB25	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	平行する幅広の集合沈線を地文に、頸部に沿って波状浮線文を貼付する。	R14
第92図 PL.30	75	SB25	7.5YR5/2 灰褐	10YR4/2 灰黄褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E2 ？	口縁部文様帯部分。両側に沈線を伴う隆帯で楕円？や曲線を描き、それによる区画内をLRの縄文を縦位で充填する。文様帯下には無文帯が設定されている。	R13
第92図 PL.30	76	SB25	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	口唇部表面に半隆帯を横に引き、RLの縄文を縦密接に施文し、地文としている。	R13



挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第 92 図 PL.30	77	SB25	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曽利 E4	口縁に沿う薄い断面三角形の隆帯の下半以下に LR の縄文を縦位密接で施文する。	R13
第 92 図 PL.30	78	SB25	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 B-1 類	加曽利 E	断面三角形の隆帯による懸垂文で区切られた区画内を、縦位 RL の縄文で充填する。	R14
第 92 図 PL.30	79	SB25	7.5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曽利 E	太い刻みのある隆帯の懸垂文に区画された内部を、RL の縄文を条が垂直になるように斜行施文で充填している。	R14
第 92 図 PL.30	80	SB25	5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6	Ⅲ群	中期?	網代痕のある底部。	R14
第 92 図 PL.30	81	SB25	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群	中期	円形透しをもつ器台。25 号住出土。	No.2 ・ R7
第 92 図 PL.30	82	SB25	5YR4/2 灰褐	5YR4/3 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曽利	土製円盤。太い条線を施文。	R17
第 94 図 PL.31	83	SB26	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻?	肥厚させ、角をもって内向する口縁部。口唇の無文部の下に平行する沈線が引かれるが、その上に両生類の前肢状の浮文を貼付している。	R19
第 94 図 PL.31	84	SB26	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曽利 I	大型のキャリバー形深鉢あるいは龍目文土器の頸部。粘土紐貼付けによる三本の平行する浮線の間を蛇行する浮線で埋め、その下は半隆帯に近い縦の条線を全体に施文して地文とする。体部には粘土紐貼付けの半隆帯で J あるいは U 字状文を描いている。	R19
第 94 図 PL.31	85	SB26	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曽利 II	RL の縄文を密接に縦位施文して地文とし、波状と直線の浮線文を組合わせた粘土紐で懸垂文を施文、懸垂文の一部は渦巻あるいは J 字文となる。	R19
第 94 図 PL.31	86	SB26	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曽利 II	深鉢頸部に平行半隆帯文を施文し、その下に LR の縄文で条が垂直になるように密接施文して地文とし、波状浮線文を平行に施文、さらにその下に浮線文を貼り付けている。	R19
第 94 図 PL.31	87	SB26	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曽利 IV	ゆるやかなキャリバー形深鉢。低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、そこから懸垂文を垂下する。縦長方形の区画は縦の条線で埋め、中心に薄い凹線で蛇行懸垂文を描く。	R18
第 94 図 PL.31	88	SB26	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曽利 IV	ゆるやかなキャリバー形深鉢の口縁部。縦位の条線を地文とし、口唇から直接、沈線の蛇行懸垂文を垂下する。	R19
第 94 図 PL.31	89	SB26	7.5YR4/2 灰褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曽利 IV	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内を縦条線で埋め、その中央部に薄い凹線の蛇行懸垂文を施文する。	R18
第 94 図 PL.31	90	SB26	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	Ⅲ群 A-2 類	曽利 V	口唇に沿って浅い平行沈線を引き、その下線をそのまま平行沈線で懸垂文として垂下する。区画内は条線的な八の字文を施文する。	R19
第 94 図 PL.31	91	SB26	2.5YR6/6 橙	5YR4/2 灰褐	Ⅲ群 A-2 類	曽利 V	八の字文を密接に施文。	R19
第 94 図 PL.31	92	SB26	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/1 褐灰	Ⅲ群 A-2 類	曽利 V	口唇に沿って浅い平行沈線を引き、その下線をそのまま平行沈線で懸垂文として垂下する。区画内は条線的な八の字文を施文する。	R19
第 94 図 PL.31	93	SB26	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/8 橙	Ⅲ群 A-2 類	曽利	両側に浅い沈線を伴う隆帯の懸垂文による区画内を、懸垂文に平行して櫛歯状工具による連続刺突を施文し、さらにその中を櫛歯状工具による押引文で密接平行して充填している。	R19
第 94 図 PL.31	94	SB26	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曽利	龍目文土器の口縁部。裏面に大きく内向した口唇から表面に、半隆帯に近い斜行条線を裏面口唇に平行する半隆帯まで周り込むように施文する。	R18
第 94 図 PL.31	95	SB26	5YR4/3 にぶい赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曽利 E2 ?	口縁部に LR の縄文を縦位密接に施文後、隆帯を貼り付けて渦巻文と連結し文様帯を形成している。	R18
第 94 図 PL.31	96	SB26	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 B-2 類	加曽利 E4	浅い幅広の沈線で口唇に沿って弧状の楕円文を配し、その間から平行沈線による懸垂文を垂下する。区画内は RL の縄文を縦位で充填する。	R19
第 94 図 PL.31	97	SB26	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 B-2 類	加曽利 E4	両側に浅い沈線を伴う、太さの変異する隆帯で曲線文を描き、その内部を RL の縄文で充填する。	R19
第 97 図 PL.32	98	SKAU1	10YR8/4 浅黄橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曽利 IV	無文の口縁部をもつ、ゆるやかなラインのキャリバー形深鉢。頸部には環状の把手が付き、頸部以下には、低い幅広の隆帯の両側に指頭による浅い凹線で複雑な曲線の区画をつくり、その内部を縦位条線で埋める。	R96
第 97 図 PL.32	99	SKAU2	2.5YR4/2 灰赤	10YR5/2 灰黄褐	Ⅲ群 B-2 類	加曽利 E3 ?	口縁部に沈線により同心円文を描き、その両側から四本の懸垂文を垂下、その内側二本は上端が蕨手文となっている。その区画内は、LR の縦位縄文で充填する。	R98
第 97 図 PL.31	100	SKAU3	10YR3/1 黒褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曽利 IV	ゆるやかなキャリバー形深鉢。平行沈線による懸垂文によって区画された中央部に、凹線による蛇行懸垂文を配す。その間を綾杉状の条線で埋める。	R22

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第98図 PL.31	101	SKA	10YR5/2 灰黄褐	10YR3/2 黒褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	平行する浅い沈線の懸垂文による区画内を条線による綾杉文で埋める。	R22
第98図 PL.31	102	SKA	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR6/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型の深鉢の無文口縁部。	R22
第101図 PL.33	103	SKC	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ？	小型で無文のゆるやかなキャリバー形深鉢。	R87
第103図 PL.33	104	SKG	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなラインのキャリバー形深鉢。胴部中央部に、低い幅広の隆帯の両側に指頭による浅い凹線を区画線として大型の渦巻文を描画し、区画内を縦位条線で埋める。	R91
第105図 PL.33	105		7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-1 類	藤内2	角状に発達した環状把手部分。環の周りを三角押引き文で押さえ、下部に集合沈線を施文する。	R47
第105図 PL.33	106	A1Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-1 類	藤内2	連続爪形文が施された隆帯によって口縁部近くに文様帯がつくられ、その内部に交互刺突と爪形文が施された隆帯による楕円文を配置する。楕円文内は横位の集合沈線で埋める。	R24
第105図 PL.33	107	A1Gr	2.5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-1 類	藤内2	両側を連続爪形文とした隆帯による三角文の辺に平行して、三角押文を施文。	R24
第105図 PL.33	108	A1Gr	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-1 類	藤内2	くの字形に突出する口縁部分。連続爪形文を口唇に平行、その下に斜平行して施文し、その間に半裁竹管による連続刺突文を施している。	R27
第105図 PL.33	109	A1Gr	10YR5/2 灰黄褐	5YR7/8 橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻	沈線による渦巻文の間を交互の刺突によってクランク状の波状文としている。	R86
第105図 PL.33	110	A2Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻	ピラミッド状の突起部に、沈線による曲線と切込みで文様を構成する。	R36
第105図 PL.33	111	A1Gr	10YR5/1 褐灰	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻3	深鉢の頸部に沿って平行する隆帯の間を、交互に沈線状の刺突で波状とし、その下に縦位集合沈線を施文する。	R24
第105図 PL.33	112	A1・2Gr	5YR5/3 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻Ⅲ	坏状の突起の表面に沈線による渦巻文を描き、口唇上の沈線を上面の渦巻文と連結させる。	R32
第105図 PL.33	113	A1・2Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻	沈線による渦巻文と弧線で立体的表現をした把手部分。	R31
第105図 PL.34	114	A2Gr	10YR6/3 にぶい黄	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	籠目文土器頸部。浮線状の隆帯で横U字状の文様を形成し、その接点部の上に円形浮点文を貼付する。口縁部には浮線による斜め格子文を施す。	R37
第105図 PL.34	115	A1Gr	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	深鉢頸部の蛇頭形突起部分。荒い縦位の条線を地文に、粘土紐の浮線で蛇頭を表現し、そこから懸垂線と連結する渦巻文を施文する。	R25
第105図 PL.34	116	A1Gr	7.5YR5/2 灰褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	半隆帯の縦条線を地文とし、半裁竹管による押引きの刻みを施した浮線による平行懸垂文（途中で横U字状の張出し）を施文する。	R25
第105図 PL.34	117	A1Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	集合沈線を地文として、爪形の刻みをもつ平行する隆帯の懸垂文を垂下し、その上から上面に沈線を施す浮線文を水平に貼付する。	R23
第105図 PL.34	118	B2Gr	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	内湾した口縁をもつ深鉢の口縁部。浮線に近い隆帯を、湾曲した口縁を包むように並行する弧状集合線として貼付し、その中心部にキ状の浮線文を施文する。	R43
第105図 PL.34	119	C3Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	内湾した口縁をもつ深鉢の口縁部。浮線に近い隆帯を、湾曲した口縁を包むように並行する弧状集合線として貼付する。	R39
第105図 PL.34	120	A2Gr	10YR6/6 赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	肥厚した口縁部の文様帯に、渦巻文と連結した楕円文を配置し、楕円文内には縦位の集合沈線が充填される。	R36
第105図 PL.34	121	B1Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	縦条線を地文とした深鉢頸部の屈曲部に、平行する蛇行浮線文を貼付し、そこから2本の蛇行浮線文で懸垂文を施文、その交点の一部に瘤状の突起を付加している。	R38
第105図 PL.34	122	B2Gr	10YR4/1 褐灰	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ？	粘土紐による貼付けで浮線に近い隆帯を口唇に沿って施文し、突起部で丸める。その下に平行して隆帯を施文し、その間を間隔の広い条線で埋める。口唇内側には受口状の突帯がめぐる。	R42
第105図 PL.34	123	A2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	深鉢頸部に平行する集合沈線を施文し、その下に地文として縦条線を密接施文した後、蛇行浮線文を水平に貼付、そこから同じ蛇行浮線文の懸垂文を垂下する。	R37
第105図 PL.34	124	A1・2Gr	7.5YR5/2 灰褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	LRの縄文を横位密接に施文して地文とし、並行する浮線によるJ字懸垂文を貼付する。	R31
第105図 PL.34	125	B2Gr 区外	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ？	頸部に沿って、半裁竹管のU字形先端による連続刺突が施された平行浮線文を施文し、その下に縦位条線を施文する。	R41
第106図 PL.34	126	A1Gr	10YR6/3 にぶい黄	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	肥厚した口縁部で文様帯を形成し、その中に連続した沈線による渦巻文を配置する。	R46

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第 106 図 PL.34	127	A2Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	波状口縁部の文様帯部分。粘土帯を貼り付けて肥厚した文様帯に透し状の楕円文を連続して施文し、口唇上面に沈線を施す。	R35
第 106 図 PL.34	128	A1Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	波状口縁の文様帯部分。渦巻文を交点としたつなぎ弧文を描き、弧文の内部を太い集合沈線で充填する。	R26
第 106 図 PL.34	129	B2Gr	2.5YR6/8 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	頸部に、半裁竹管による押引き爪形文の刻みを施した平行隆帯を横位に施文し、縦位条線を地文とした胴部に平行した隆帯による懸垂文と蛇行浮線文による懸垂文を施文する。	R43
第 106 図 PL.34	130	A1Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ・Ⅲ?	地文に LR の縄文を縦位に施文、粘土紐による浮線でつなぎ弧文を描き、弧の交点には渦巻文を配置する。	R28
第 106 図 PL.34	131	C3Gr	7.5YR4/1 褐灰	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口縁に沿って、粘土紐上面に沈線を引き、並行な連弧状の波状文とする。その下に平行沈線による懸垂文を垂下し、両側に綾杉になる形で集合沈線で区画を埋める。	R39
第 106 図	132	B1Gr	10YR6/2 灰黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口縁に沿って、両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯によって連弧状の文様を施文し、区画内を縦位の条線で埋める。	R38
第 106 図 PL.34	133	B2Gr	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に凹線で押さえた隆帯を口縁に沿って施文し、そこから懸垂文を垂下してできる縦長方形の区画内を縦位の条線で埋め、中央部に浅い凹線の蛇行懸垂文を施文する。	R42
第 106 図 PL.34	134	B2Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口唇に沿う凹線の下に縦の条線を密接に施文する。	R42
第 106 図 PL.34	135	A1・2Gr	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	環状把手部分。凹線的な沈線で複雑な曲線を描画している。	R30
第 106 図 PL.34	136	A1Gr	10YR3/2 黒褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリパー形小型深鉢の胴部。両側に浅い凹線を伴う、低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内を縦位の条線で埋め、中央部に薄い凹線による蛇行懸垂文を垂下する。	R27
第 106 図	137	A1Gr	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の平行隆帯による懸垂文の区画内を条線による綾杉文で埋め、その中央部に薄い凹線の蛇行懸垂文を施文する。	R86
第 106 図	138	A1Gr	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/3 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	肥厚した口縁部の口唇に沿ってゆるい凹線を引き、その下にやや雑な縦条線を施文する。	R86
第 106 図 PL.34	139	A1Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	深鉢胴部に、両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯によって懸垂文と大小の渦巻文を連結した文様を描く。文様間には縦位の条線が施文される。	R26
第 106 図	140	A1Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の平行隆帯による懸垂文の区画内を条線による綾杉文で埋め、その中央部に薄い凹線の蛇行懸垂文を施文する。	R46
第 107 図 PL.35	141	B1・B2Gr	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	深鉢胴部に、両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯によって、大小の渦巻文を連結した文様を描く。	R44 ・R45
第 107 図	142	A1Gr	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内を条線による綾杉文で埋め、その中央部に薄い凹線の蛇行懸垂文を施文する。	R46
第 107 図 PL.35	143	A1Gr	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	沈線による曲線文を描き、その区画内を放射状の条線で埋める。	R25
第 107 図	144	A2Gr	10YR5/3 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	浅い沈線による渦文と曲線文の連結により、複雑な文様を描画し、区画された内部は条線によって充填される。	R35
第 107 図	145	A2Gr	7.5YR7/6 橙	10YR6/3 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	キャリパー形深鉢胴部くびれ部。両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内を、縦位条線で埋め、その中央部に浅い沈線による蛇行懸垂文を施文する。	R36
第 107 図 PL.35	146	A2Gr	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の並行隆帯による曲線文の内部を、凹線的な集合沈線による綾杉文で充填する。	R36
第 107 図 PL.35	147	A1Gr	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	平行沈線による曲線文の区画内を、放射状の条線で充填する。	R24
第 107 図	148	A1・2Gr	7.5YR4/3 褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口唇に平行して凹線状の沈線を引き、その下に沈線を両側にもつ隆帯で渦巻文や弧線文を描き、その区画内を縦位条線で埋める。	R31
第 107 図	149	A1Gr	5YR4/2 灰褐	5YR4/3 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口縁に平行して、凹線状の幅広沈線を引き、その下を斜条線で埋める。	R23
第 107 図 PL.35	150	B1Gr	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う、低い幅広の並行隆帯による曲線文と渦巻文の内部を条線で埋める。	R38
第 107 図 PL.35	151	A2Gr	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	沈線による渦巻文と弧状文を施文し、それによる区画内を縦位条線で埋める。	R37

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第107図 PL.35	152	A2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	波状口縁の突起部分。口唇上面に渦巻文を基点とした連結弧文を施し、その突起表面に渦巻き文を施文する。	R37
第107図	153	A3Gr	10YR4/2 灰黄褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	沈線による渦巻文を端部とする連結弧文が施文されている。	R33
第107図	154	B2Gr	7.5YR3/3 暗褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	縦位条線を地文とするキャリパー形深鉢の口縁部。	R42
第107図	155	A1・2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/8 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	網代痕のある底部。両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による、6単位?の懸垂文の区画内を縦位の条線で埋める。	R32
第107図 PL.35	156	A2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	隆帯による長方形区画の内部をへら状工具による連続刺突文で平行および斜平行に施文する。	R37
第107図 PL.35	157	B2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	短いへら状工具の先端による連続刺突文を、略的に密接平行して施文している。	R43
第108図 PL.35	158	C3Gr	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	口縁に沿って四本の凹線を平行に施文し、その下を八の字文で埋める。	R39
第108図 PL.35	159	A2Gr	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	ゆるやかなキャリパー形深鉢の突起の痕跡がある口縁部。突起?部を基準にして凹字状の楕円文を連弧状に配置し、さらに突起?から平行沈線で二方向に放射状に弧状文を描き、それによる区画内を八の字状文で充填する。	R37
第108図 PL.35	160	A1・2Gr	2.5YR3/1 黒褐	10YR3/1 黒褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯の曲線文による区画内を、櫛歯状工具による凹形の押引文で八の字状に施文し充填する。	R29
第108図	161	A1・2Gr	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	口縁部に沿って凹線状の幅広沈線を引き、その下に平行して低く太い隆帯と懸垂文を施文、区画内をへら描きによる綾杉文を施文する。	R29
第108図	162	A1・2Gr	10YR5/2 灰黄褐	5YR4/3 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	両側に浅い沈線を伴う低い幅広の隆帯の曲線文による区画内を、櫛歯状工具による凹形の押引文で日の字形に施文する。	R29
第108図	163	A2Gr	10YR6/2 灰黄褐	10YR3/2 黒褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型深鉢の無文口縁部。	R36
第108図	164	B1・B2Gr	5YR4/1 褐灰	10YR5/2 灰黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型の深鉢の無文口縁部。	R42
第108図 PL.35	165	A1・2Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/6 浅黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型の籠目文土器口縁部。口唇内湾部が欠落している。口唇を含めた全体を斜行の条線を密接して施文する。	R31
第108図 PL.35	166	A1・2Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型の籠目文土器の口縁部。裏面に大きく内向した口唇から表面に、半隆帯に近い斜行条線を裏面口唇に平行する半隆帯まで周り込むように施文する。	R29
第108図 PL.35	167	A1Gr	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/8 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	籠目文土器の口縁部。裏面に大きく内向した口唇から表面に、半隆帯に近い斜行条線を裏面口唇まで周り込むように施文する。	R25
第108図	168	A1・2Gr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型の深鉢の無文口縁部。	R31
第108図 PL.35	169	A1Gr	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口縁部に沿って擦痕のような沈線を引き、その下に平行沈線の懸垂文を施文後、その区画内を RL の縄文で縦の条が密接になるように充填する。	R46
第108図 PL.35	170	B2Gr	7.5YR4/1 褐灰	5YR6/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口縁に平行して沈線を引き、その下に直線と弧線による懸垂文を施文、その区画内を多方向に施文された RL の縄文で埋める。	R43
第108図	171	A2Gr	2.5Y8/2 灰白	10YR1/3 にぶい黄橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E	薄い断面三角形の隆帯による懸垂文の区画内を縦位の LR の縄文で埋める。	R35
第108図	172	A2Gr	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E	沈線による懸垂文の区画内を単節 L の縄文を縦位密接で充填する。	R37
第109図 PL.36	173		5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	広口壺形の深鉢。口唇近くに浅い平行沈線を引き、そこから8単位?の平行沈線による懸垂文を施文する。その区画内はための単節 R の縄文を縦位で充填する。	R97
第109図 PL.36	174	A1Gr	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 C-2 類	咲畑 (中富・神明式2期?)	内湾する口縁部の口唇に沿って沈線と刺突を施文し、その下に渦巻文を起点とした三本の並行沈線によるつなぎ弧文で文様帯を形成する。文様は、L の燃糸文を縦位で地文的に全体に施文した後に引かれている。胎土は白肌色で薄い。	R24
第109図 PL.36	175	A1Gr	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	Ⅲ群 C-2 類	咲畑 (中富・神明式2期?)	R の燃糸をやや斜め縦位に施文し地文とし、口縁に沿って、小型巻貝の底部を工具とした連続刺突文を上下交互に施文、その下に浅い三本の並行沈線で連結した連弧を描く。胎土は灰白色の色調を呈す。	R24
第109図 PL.36	176	A1Gr	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	Ⅲ群 C-2 類	咲畑 (中富・神明式2期?)	内湾する口縁部の口唇に沿って沈線と刺突を施文し、その下に渦巻文を起点とした三本の並行沈線によるつなぎ弧文で文様帯を形成する。文様は、L の燃糸文を縦位で地文的に全体に施文した後に引かれている。胎土は白肌色で薄い。	R18・R24



挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第 109 図 PL.36	177	A1Gr	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい 橙	IV群 A-2 類	堀之内 1 ？	外反する口唇をもち、縦位 RL の縄文を地文として、口縁に沿って平行沈線を施文する。平行沈線は角をもって閉じ、その終端部分には円文？の両側に縦平行の短い沈線で区切る。	R24
第 109 図 PL.36	178	A1・2Gr	7.5YR5/3 にぶい 褐	7.5YR5/3 にぶい 褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	平行沈線の懸垂文による区画内を単節 L の縄文で充填する。	R31
第 109 図 PL.36	179	C3Gr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群	中期？	広葉樹の木葉痕をもつ底部。	R40
第 109 図 PL.36	180	B1Gr	7.5Y2/1 黒	2.5YR6/8 橙	Ⅲ群	中期？	土製円盤。無文。	R38

第 13 表 K 地区 出土石器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第 75 図 PL.24	1	A1Gr	ナイフ形石器	黒曜石	2.33	1.65	0.58	1.89	一側縁加工で、右刃部に使用痕と思われる細かい剥離が顕著。	R67
第 75 図 PL.24	2	A2Gr	ナイフ形石器	黒曜石	(3.41)	1.7	0.45	2.18	先端部欠損。横長剥片素材の一側縁加工。	R73
第 79 図 PL.36	181	SB22 床	磨製石斧	緑色凝灰岩	14.73	4.72	3.81	408.84	敲打整形の後、全体を研磨した乳棒状石斧。22 号住出土。	R54
第 79 図 PL.36	182	SB22 床面	打製石斧	硬砂岩	9.06	6.11	1.1	79.47	22 号住の床出土。	R58
第 79 図 PL.36	183	SB22	打製石斧	硬砂岩	(10.15)	6.11	3.31	309.41	分銅形に近い短冊形。刃部欠損。22 号住出土。	R56
第 79 図 PL.36	184	SB22 床面	磨・凹石	輝石安山岩	11.33	9.84	5.42	793.13	22 号住床面出土。	R58
第 79 図 PL.36	185	SB22	石皿	多孔質安山岩	(17.32)	(11.1)	(5.6)	1204.44	22 号住出土。	R56
第 83 図 PL.36	186	SB23	打製石斧	砂岩	(6.29)	4.11	1.45	52.01	短冊形。刃部と頭部欠損。23 号住出土。	R1
第 89 図 PL.36	187	SB24	磨製石斧	砂岩	(11.31)	5.11	2.93	242.86	乳棒状石斧。頭部欠損しており、凹石に転用されている。24 号住出土。	R60
第 89 図 PL.36	188	SB24	打製石斧	富士川ホルンフェルス	7.47	4.53	1.91	67.33	小型の短冊形。24 号住出土。	R53
第 89 図 PL.36	189	SB24	打製石斧	緑色片岩	8.29	4.31	1.61	76.96	刃部再生の進んだ短冊形。24 号住出土。	R60
第 89 図 PL.36	190	SB24	磨・凹石	安山岩	10.19	8.73	4.55	652.3	24 号住出土。	R80
第 95 図 PL.37	191	SB26	打製石斧	砂岩	13.29	4.82	2.32	157.83	刃部欠損。挟りのある短冊形。26 号住出土。	R48
第 99 図 PL.37	192	SKA	打製石斧	硬砂岩	(8.71)	5.27	1.37	111.9	上半部欠損。短冊形。A 土坑出土。	R71
第 99 図 PL.37	193	SKA	石棒	粗粒安山岩	(20.13)	15.71	11.88	4980	断面が隅丸正三角形で各面を磨いて整形している。A 土坑出土。	R63
第 110 図 PL.37	194	C3Gr	石鏃	黒曜石	2.02	1.78	0.42	1.21	右脚部欠損の凹基無茎鏃。	R102
第 110 図 PL.37	195		石鏃	黒曜石	1.65	1.32	0.41	0.76	基部欠損。	R103
第 110 図 PL.37	196		石鏃	黒曜石	(1.39)	1.45	0.32	0.5	先端部欠損の凹基無茎鏃。	R104
第 110 図 PL.37	197	A1Gr	石鏃未製品	黒曜石	1.73	1.39	0.49	0.95	剥片の打瘤部が除去できずに廃棄か。	R66
第 110 図 PL.37	198	SB25	楔形石器	黒曜石	2.24	1.74	0.75	2.07	25 号住出土。	R61
第 110 図 PL.37	199	A1Gr	楔形石器	黒曜石	1.66	1.52	0.7	1.6		R66
第 110 図 PL.37	200	C3Gr	楔形石器	黒曜石	1.33	1.12	0.43	0.68		R75
第 110 図 PL.37	201	A1Gr	楔形石器	黒曜石	3.01	1.94	1.53	6.5	両極石核の可能性あり。	R67
第 110 図 PL.37	202	A1Gr	楔形石器	黒曜石	1.64	1.65	0.63	1.39		R65
第 110 図 PL.37	203	A1Gr	楔形石器	黒曜石	2.39	1.02	0.55	1.35		R65
第 110 図 PL.37	204	C3Gr	楔形石器	黒曜石	1.92	0.76	0.55	0.82		R75
第 110 図 PL.37	205	A1Gr	楔形石器	黒曜石	1.24	1.55	0.76	1.52		R65
第 110 図 PL.37	206	A1Gr	楔形石器	黒曜石	1.79	1.62	0.54	1.19		R65
第 110 図	207	A1Gr	楔形石器	粘板岩	4.74	3.08	0.82	27.87	円礫素材。両極剥片剥離を目的としているかもしれない。	R81



挿図 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第110 図 PL.37	208	A1Gr	削器	富士川ホルン フェルス	5.28	6.51	2.57	99.8	打製石斧の刃部のような加工がされる。	R49
第111 図 PL.37	209	A1Gr	石刃状剥片	黒曜石	3.13	1.65	0.45	1.22	連続剥離されたものではなく、偶発的な石刃状剥片と考えられる。	R70
第111 図 PL.37	210	B2Gr	磨製石斧	凝灰岩質砂岩	(7.1)	(5.51)	(2.35)	92.38	刃部のみ。	R84
第111 図 PL.37	211	A1・2Gr	打製石斧	硬砂岩	8.03	5.67	1.96	109.92	バチ形に近い短冊形。	R50
第111 図 PL.37	212	A1Gr	打製石斧	砂岩	(7.71)	4.91	1.08	55.29	頭部欠損。短冊形。	R49
第111 図 PL.37	213	A1Gr	打製石斧	片麻岩	(7.79)	3.88	1.54	63.34	頭部欠損。短冊形。	R49
第111 図 PL.37	214	A2Gr	打製石斧	硬砂岩	(8.58)	5.96	2.66	171.7	上半部欠損。短冊形。	R51
第111 図 PL.37	215	B2Gr	打製石斧	富士川ホルン フェルス	7.31	5.17	2.26	79.84	バチ形に近い小型短冊形。	R52
第111 図 PL.37	216	A1Gr	石核	富士川ホルン フェルス	6.68	6.12	3.38	177.73	礫面を打面として、打点が円周する剥離を行う。	R49
第111 図 PL.37	217		原石	黒曜石	7.99	7.4	2.71	150.36	試し割りと思われる剥離痕あり。	R55
第111 図 PL.37	218		原石	黒曜石	7.9	6.89	5.04	272.95		R55
第111 図	219	B1Gr	敲石	凝灰岩	(10.32)	(2.18)	(3.23)	115.72	打撃による破砕時の剥片。	R83
第111 図	220	B2Gr	磨・敲石	砂岩	10.42	10.25	2.81	386.66		R84
第111 図 PL.37	221	A1Gr	磨・凹石	粗粒安山岩	8.34	7.52	5.1	340.12		R81
第112 図	222	B2Gr	磨・敲石	砂岩	9.42	7.83	4.1	451.96		R84
第112 図	223		磨石	安山岩	(8.35)	(4.92)	(5.01)	300.36		R85
第112 図	224	B2Gr	磨石	砂岩	16.61	12.63	2.24	749.71	両面とも磨痕が顕著で、石皿的に使用されたと考えられる。	R76
第112 図	225		磨石	多孔質安山岩	9.32	8.71	8.1	737.42	球状の磨石。	R85

## 第9章 天間沢遺跡L地区（第12地区）

### 第1節 調査に至る経緯と経過

#### 調査に至る経緯

昭和61年、事業者（個人）は、富士市天間1061-1外（約750㎡）において、宅地造成工事を計画した。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置するため、昭和61年9月3日、事業者から文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。富士市教育委員会はこれを静岡県教育委員会に進達し（昭和61年10月20日付け、富教文体第183号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった（昭和61年10月28日付け、教文第1743号）。

昭和61年8月25日、事業者から富士市教育委員会へ「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」が提出された。これを受けて富士市教育委員会は、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出した（昭和61年9月5日付け、富教文体第145号）。当該地の北側では、昭和46年、市立幼稚園建設に伴って発掘調査が実施され（第2地区、旧：第3次B地区）、縄文時代中期の配石遺構、竪穴建物1軒、土坑6基が検出されている。当該地においてもこれに連続する遺構が存在する可能性があるため、富士市教育委員会文化体育課による確認調査を実施することとなった。

#### 発掘調査の経過

調査は昭和61年9月5日から9月10日にかけて実施した。調査開始時、敷地の南側では道路および側溝の敷設工事が進んでおり、西側の斜面地については盛土工事が終了していたため、敷地北東部分を中心に調査することとなった。

南北方向のトレンチ（1Tr）を設定し、重機により表土を掘削、人力により遺構確認のための精査を



第113図 L地区 位置図

行ったところ、溝状遺構・土坑を検出したため、北側に東西方向のトレンチ（2Tr）と拡張区を設定し、遺構・遺物の検出、掘削、記録作業を行った。

#### 調査の体制

調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会 事務局	教育長	小川 清
		教育次長	秋山 武雄
調査担当		文化体育課 課長	深澤 清一
		課長補佐	鈴木 政俊
		文化振興係 係長	山本 宣親
		主事	平林 將信
		主事	渡井 義彦

## 第2節 発掘調査の成果

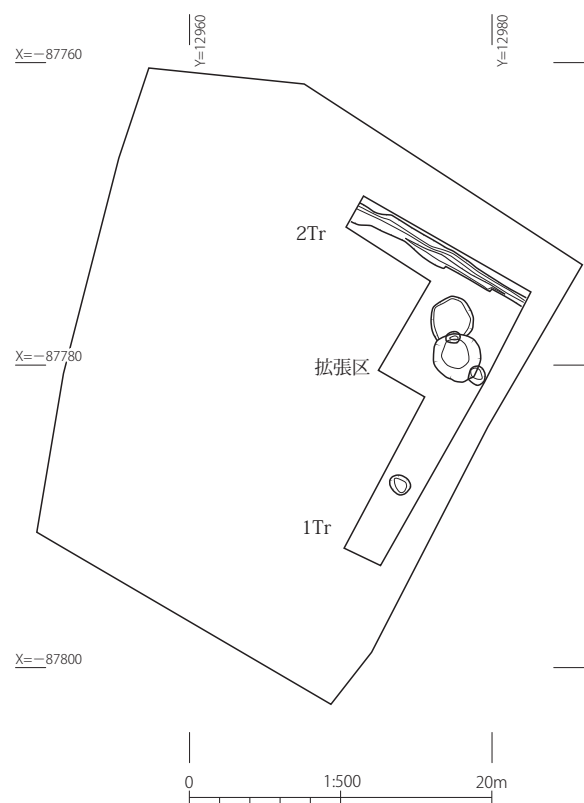
### 調査の成果

溝状遺構1条（SD01）と土坑5基（SK63～67）を検出し、完掘した。

#### ・溝状遺構

##### SD01

敷地北側で検出された東西方向に延びる溝状遺構である。東端はトレンチ外にあり、西端は攪乱により失われており、全長は不明であるが、検出部分で12.68 mを測る。幅は東側で63cm、西側で136cmを測る。断面形は浅いU字形で、東から西に向けて下る傾斜をもち、その落差は60cmほどである。西端には大小の礫の集石が認められた。覆土中から縄文土器片が数点出土したが、遺構覆土が明らかに古墳時代以降のものであることから、流れ込みによるものと判断される。



第114図 L地区 トレンチ配置図

#### ・土坑

##### SK63

1Trの南側で検出された。平面形は長径140cm、短径120cmの楕円形を呈する。底部は平底で、検出面からの深さは39cmを測る。出土遺物はない。

##### SK64

1Tr北側の拡張区で検出された。SK65・66・67を切っている。平面形は長径340cm、短径315cmの楕円形を呈する。底部は平底で、壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは50cmを測る。

##### SK65

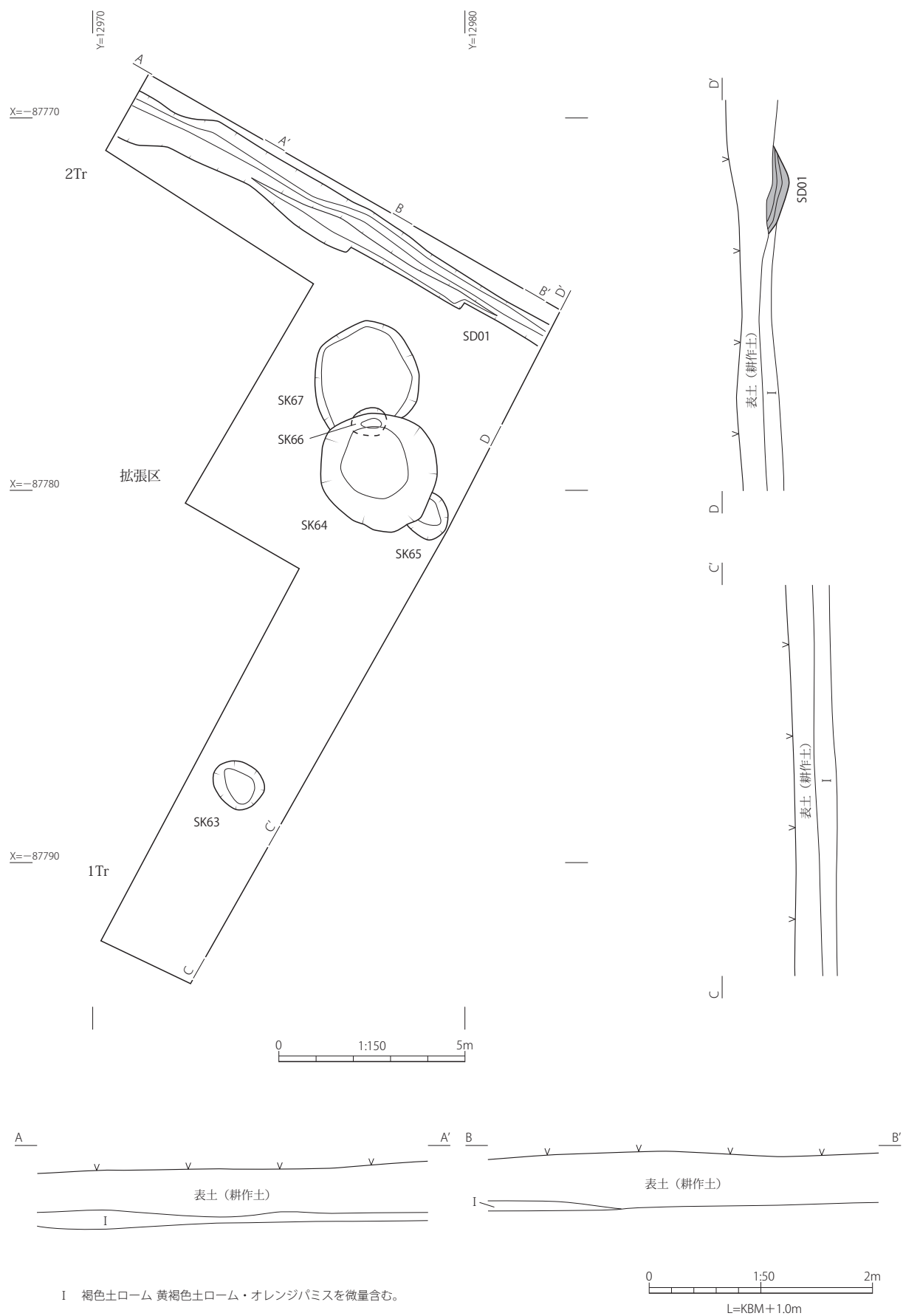
1Tr北側で検出された。西側をSK64に切られている。平面形は楕円形を呈するとみられ、残存最大幅で125cmを測る。底部は平底で、検出面からの深さは40cmを測る。

##### SK66

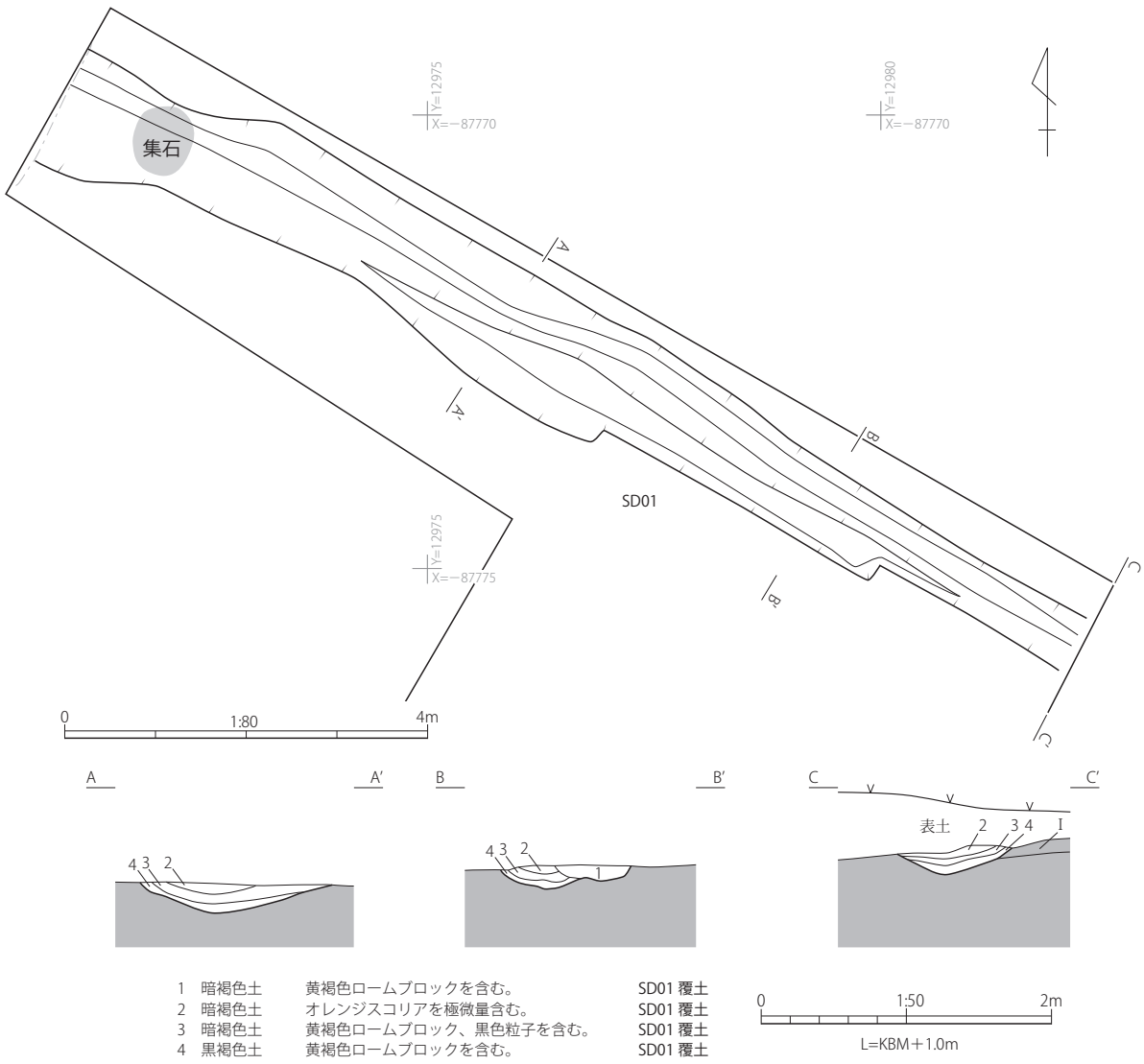
1Tr北側の拡張区で検出された。SK64に切られ、SK67を切っている。平面形は楕円形を呈するとみられ、残存最大幅で95cmを測る。底部は平底で、検出面からの深さは63cmを測る。

##### SK67

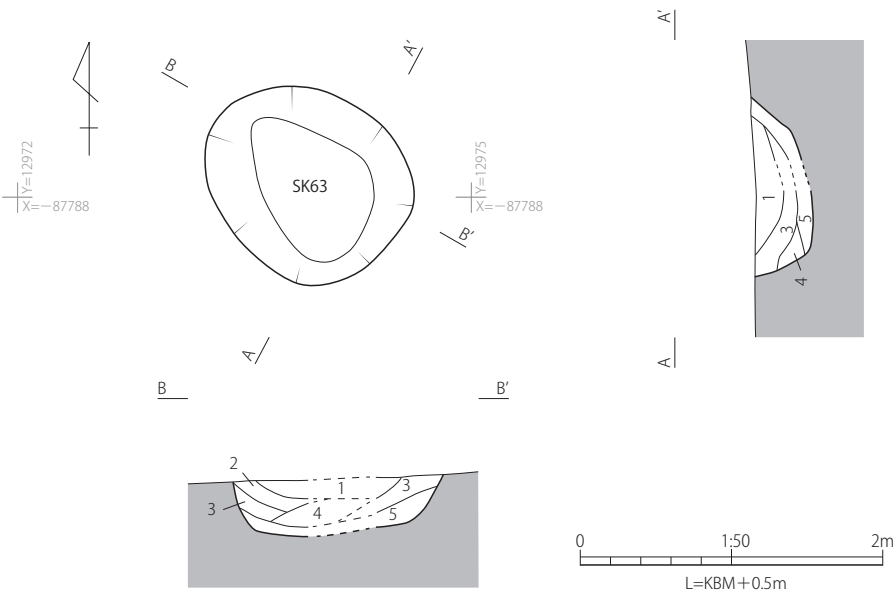
1Tr北側の拡張区で検出された。SK64・66に切られる。平面形は楕円形を呈するとみられ、長径は285cm以上、短径は280cmを測る。底部は平底で、検出面からの深さは35cmを測る。



第115図 L地区 トレンチ全体図、セクション図

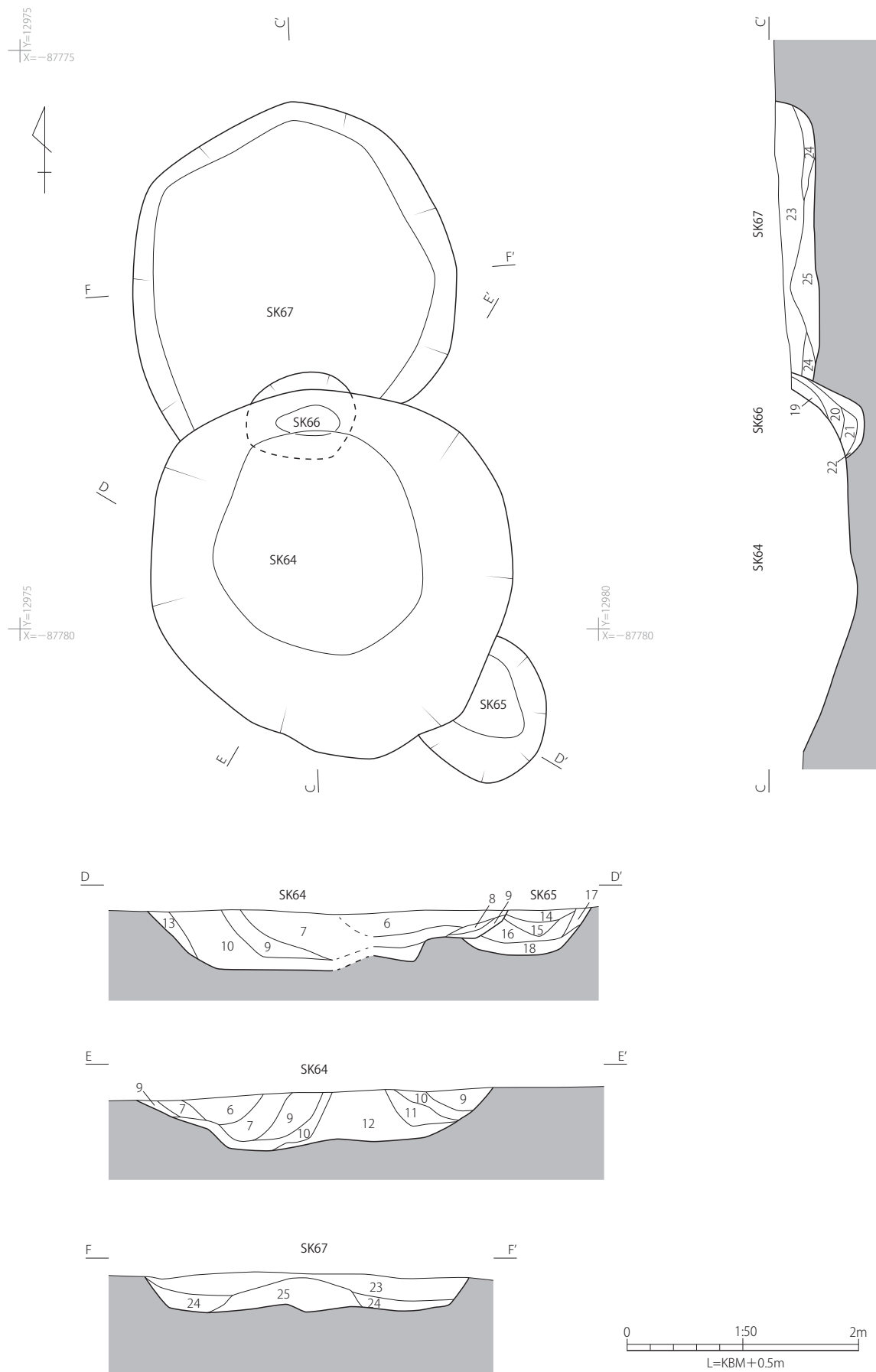


第116図 L地区 SD01



第117図 L地区 SK63

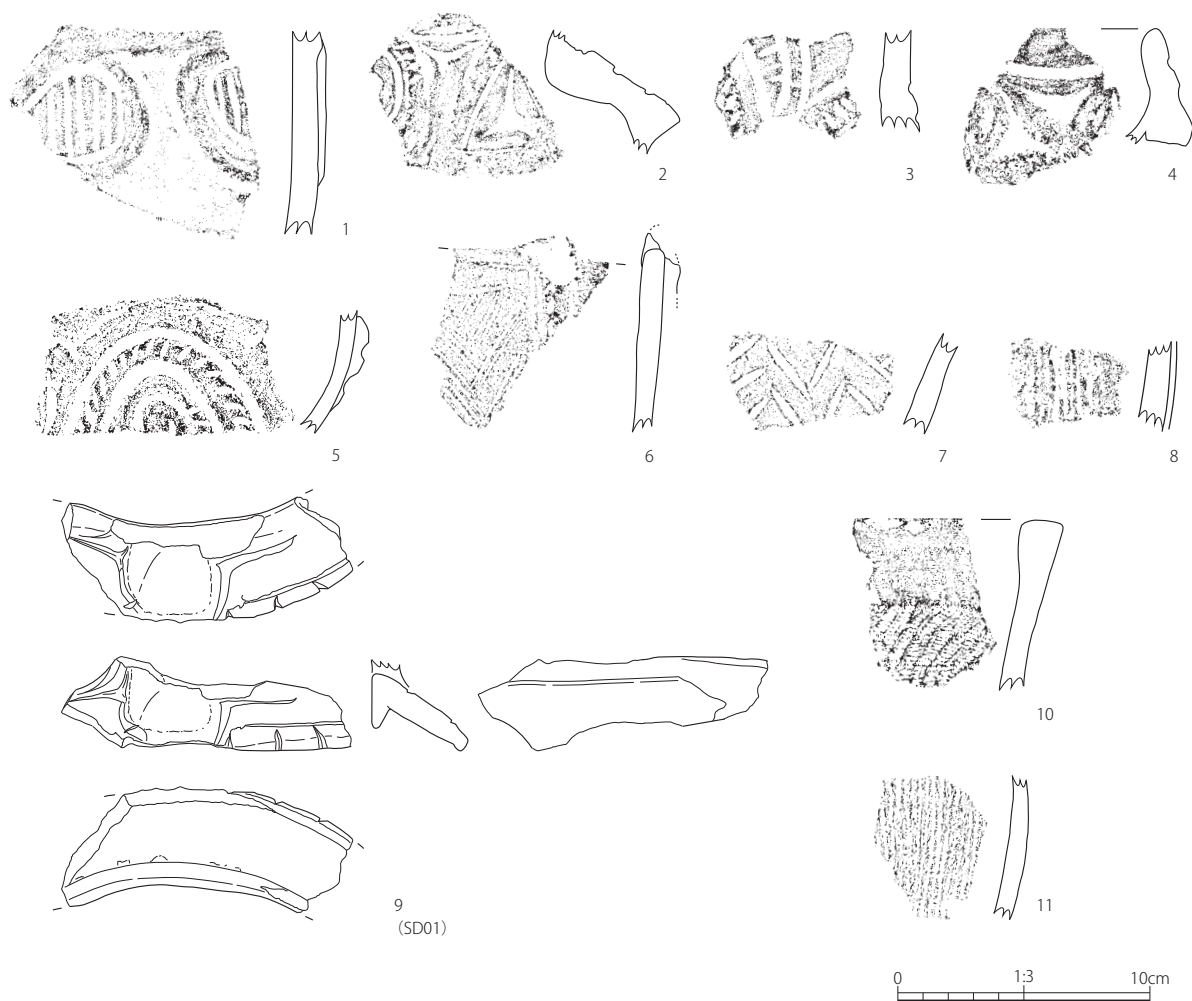




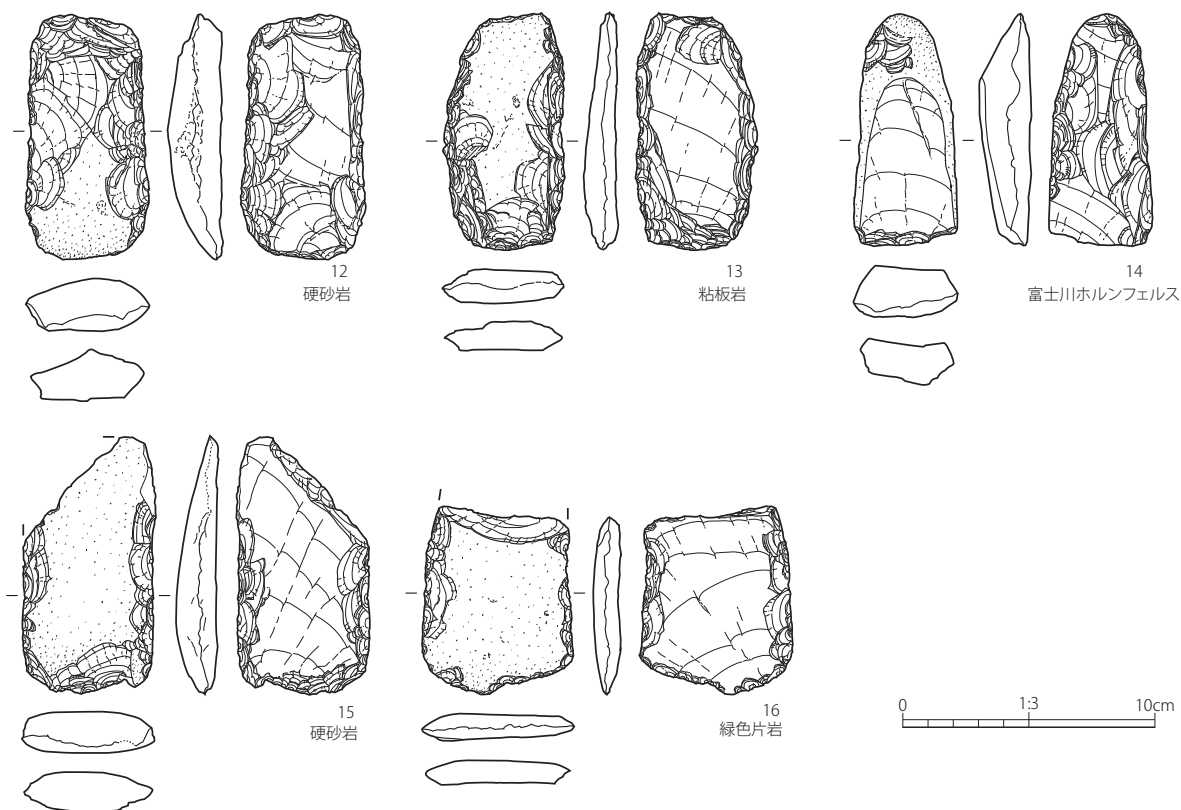
第118図 L地区 SK64～67

1 褐色土	黄褐色ロームブロック、オレンジスコリア粒を含む。	SK63 覆土
2 褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK63 覆土
3 暗褐色土	黒色土、スコリア粒を含む。	SK63 覆土
4 明褐色土	黄褐色ロームオレンジスコリア粒を含む。	SK63 覆土
5 明褐色土	黄褐色ロームブロックを多量、オレンジスコリア、炭粒を含む。	SK63 覆土
6 暗褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK64 覆土
7 黒褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK64 覆土
8 黄褐色ローム	ブロック状。	SK64 覆土
9 褐色土	黄褐色土、黒色土、オレンジスコリア粒を含む。	SK64 覆土
10 暗褐色土	黄褐色ロームブロック、黒色土を含む。	SK64 覆土
11 暗黄褐色土	黄褐色ロームブロック、黒色土を含む。	SK64 覆土
12 黄褐色ローム	オレンジスコリア粒を含む。	SK64 覆土
13 褐色土	黄褐色土、オレンジスコリア粒を含む。	SK64 覆土
14 暗褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK65 覆土
15 褐色土	黄褐色ロームを含む。	SK65 覆土
16 暗褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK65 覆土
17 明褐色土	黄褐色ロームを含む。	SK65 覆土
18 明褐色土	黄褐色ロームブロック、オレンジスコリア粒、炭粒を含む。	SK65 覆土
19 明褐色土	黄褐色土を含む。	SK66 覆土
20 褐色土	黄褐色ローム、オレンジスコリア粒を含む。	SK66 覆土
21 暗褐色土		SK66 覆土
22 褐色土	黄褐色ロームを含む。	SK66 覆土
23 暗褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK67 覆土
24 褐色土	黄褐色土、オレンジスコリア、炭粒を含む。	SK67 覆土
25 明褐色土	黄褐色ロームを多量、黒色土を少量含む。	SK67 覆土

第119図 L地区 SK63～67 土層注記



第120図 L地区 出土遺物実測図（縄文時代）（1）

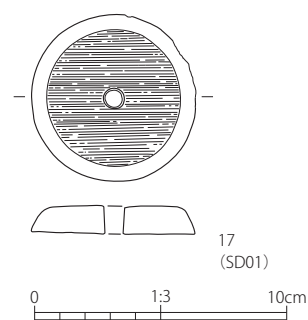


第121図 L地区 出土遺物実測図（縄文時代）（2）

#### ・出土遺物

出土遺物は、土器では、1～5のⅢ群A-1類の井戸尻1・2式の縄文時代中期中葉と、6～8のⅢ群A-2類の曾利Ⅳ・Ⅴ式、10・11のⅢ群B-2類の加曾利E式中期後葉の大きく二時期に分けられる。9は井戸尻式か曾利式の時期と思われるが、復元すると鍔付き環状の土製品となるようで、用途不明である。石器は、全て短冊形の打製石斧で、どの土器型式に帰属するかは判別できないが、縄文時代中期のものだろう。

SD01は現地調査で古墳時代以降の遺構であると判断されているが、SD01からは17の土製紡錘車が出土している。この紡錘車は、凸面部上面に非常に細かい条線が観察され、その反対面には製作時に平坦面に貼付けたバリ状の痕跡が見られる。



第122図 L地区 出土遺物実測図（古墳時代）

第14表 L地区 遺構一覧表

遺構種別	報告遺構名	調査時遺構名	位置	時代	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	平面形	断面形	切り合い（古→新）	備考
溝状遺構	SD01	溝状遺構	2Tr		(1260)	64～134	33	直行	丸底	-	
土坑	SK63	A（63号）土坑	1Tr		140	120	39	楕円形	平底	-	
土坑	SK64	B（64号）土坑	1Tr		340	315	50	楕円形	平底	SK64→SK65～67	
土坑	SK65	C（65号）土坑	1Tr		(125)	118	40	楕円形	平底	SK64→SK65	
土坑	SK66	D（66号）土坑	1Tr		(95)	(75)	63	楕円形	平底	SK64・SK67→SK66	
土坑	SK67	E（67号）土坑	1Tr		(285)	280	35	楕円形	平底	SK64→SK67→SK66	

第15表 L地区 出土土器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第120図 PL.39	1	Tr	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 1・2	口縁部近くに太い隆帯で連結した楕円文を描く。楕円区画内は縦位の集合沈線で充填する。	R2
第120図 PL.39	2	Tr	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/3 にぶい褐	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 1・2	重三角区画文と渦巻文の区画内は三叉文が描かれる。	R2
第120図 PL.39	3	Tr	5YR6/6 橙	7.5YR4/2 灰褐	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 1・2	斜め刺突や爪形の刻みを施した隆帯文の区画内に、沈線で弧線を引く。	R2
第120図 PL.39	4	Tr	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 1・2	ピラミッド状に突出した把手の面に、三叉文を内部にもつ三角文を施文。	R2
第120図 PL.39	5	Tr	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 3	内湾する口縁部の張出し部。一部に斜め刻みを施した隆帯で、大きな渦巻文を描く。	R2
第120図 PL.39	6	西拡張区	10YR7/3 にぶい黄橙	N3/ 暗灰	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口唇を包むように突起を貼付け、そのまま左側面のみに刻みをつけた隆帯として懸垂文とし、区画内を綾杉状の条線で埋める。胎土は白肌色を呈す。	R3
第120図	7	Tr	10YR6/3 にぶい黄褐	10YR5/2 灰黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	八の字文を全体に施文。	R2
第120図	8	Tr	5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	三本の平行沈線を引いた隆帯二本の懸垂文。	R2
第120図 PL.39	9	溝状遺構	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利？	環状で返しの縁を持つ土製品。把手状の突起物の痕跡があり、沈線で文様を描画している。	R4
第120図 PL.39	10	Tr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口縁部に無文帯を設け、3条の LR の縄文をやや横斜めに施文している。	R2
第120図	11	土坑	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR3/2 黒褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E？	縦位に施文された L の燃糸文。	R1
第122図 PL.39	17		7.5YR7/4 にぶい橙	5YR6/6 橙		古墳？	土製紡錘車。	R4

第16表 L地区 出土石器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第121図 PL.39	12	溝状遺構	打製石斧	硬砂岩	9.74	4.83	2.09	130.96	短冊形。	R4
第121図 PL.39	13	西拡張区	打製石斧	粘板岩	9.38	4.88	1.21	76.48	短冊形。	R3
第121図 PL.39	14	西拡張区	打製石斧	富士川ホルンフェルス	9.2	4.1	1.96	93.32	刃部再生が著しく進行している。短冊形。	R3
第121図 PL.39	15	西拡張区	打製石斧	硬砂岩	10.25	5.06	1.53	104.87	短冊形。	R3
第121図 PL.39	16	トレンチ内	打製石斧	緑色片岩	7.49	6.01	0.85	57.68	上半部欠損。短冊形。	R2

## 第 10 章 天間沢遺跡 M 地区（第 13 地区）

### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

#### 調査に至る経緯

昭和 62 年 4 月、株式会社 富士総合開発センター（以下、事業者）は富士市天間 1312 番地の 1 外（2579.49 m<sup>2</sup>）において宅地分譲地造成工事を計画した。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置するため、昭和 62 年 4 月 15 日、事業者から文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。富士市教育委員会はこれを静岡県教育委員会に進達し（昭和 62 年 4 月 23 日付け、富教文体第 17 号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった。

昭和 62 年 4 月 22 日、土地所有者から発掘調査承諾書が提出され、富士市教育委員会は、文化財保護法第 98 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出し（昭和 62 年 4 月 28 日付け、富教文体第 23 号）、文化体育課職員による発掘調査を実施することになった。

#### 発掘調査の経過

調査は昭和 62 年 5 月 11 日から 5 月 15 日にかけて実施した。敷地の中央に南北方向のトレンチを 1 本設定し（1Tr）、重機による表土掘削後、人力で精査を行い、遺構・遺物の検出につとめた。敷地は工場跡地であり、工場建設時の整地のため上部は削平されており、北側部分では遺物包含層は完全に失われていた。南側部分においても縄文時代中期の栗色土層を一部で確認できたのみであった。

1Tr 南寄りで 2 基の土坑（SK68～69）を検出したが、遺構からもトレンチ内からも遺物は出土しなかった。



第 123 図 M 地区 位置図

#### 調査の体制

調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	小川 清
		教育次長	伊達 喬一
事務局	文化体育課	課長	深澤 清一
		課長補佐	渡邊 誠
調査担当	文化振興係	係長	杉本 篤
		主事	平林 将信
		主事	渡井 義彦



## 第2節 発掘調査の成果

1Tr 南寄りで切り合う2基の土坑（SK68～69）を検出し、完掘した。

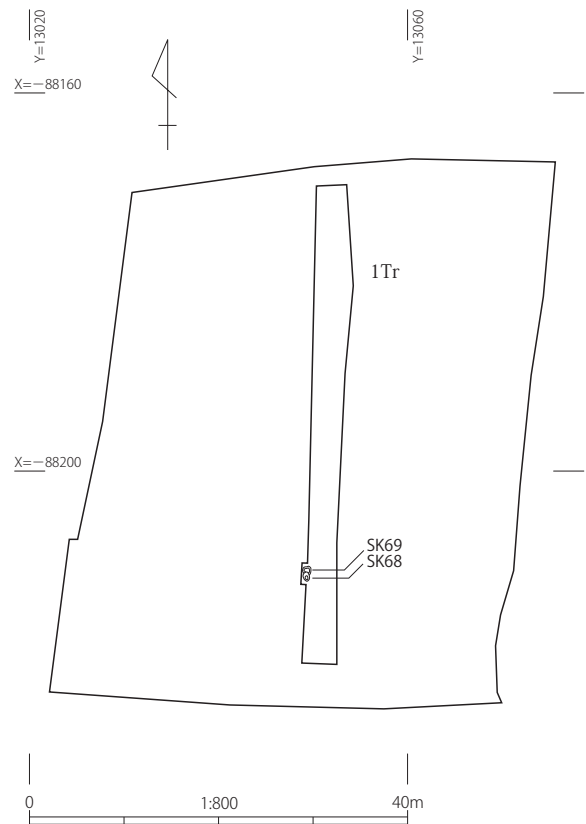
### SK68

SK69の南側を切っている。平面形は楕円形を呈し、長径98cm、短径66cmを測る。底部は平底で、検出面からの深さは40cmを測る。遺物は出土しなかった。

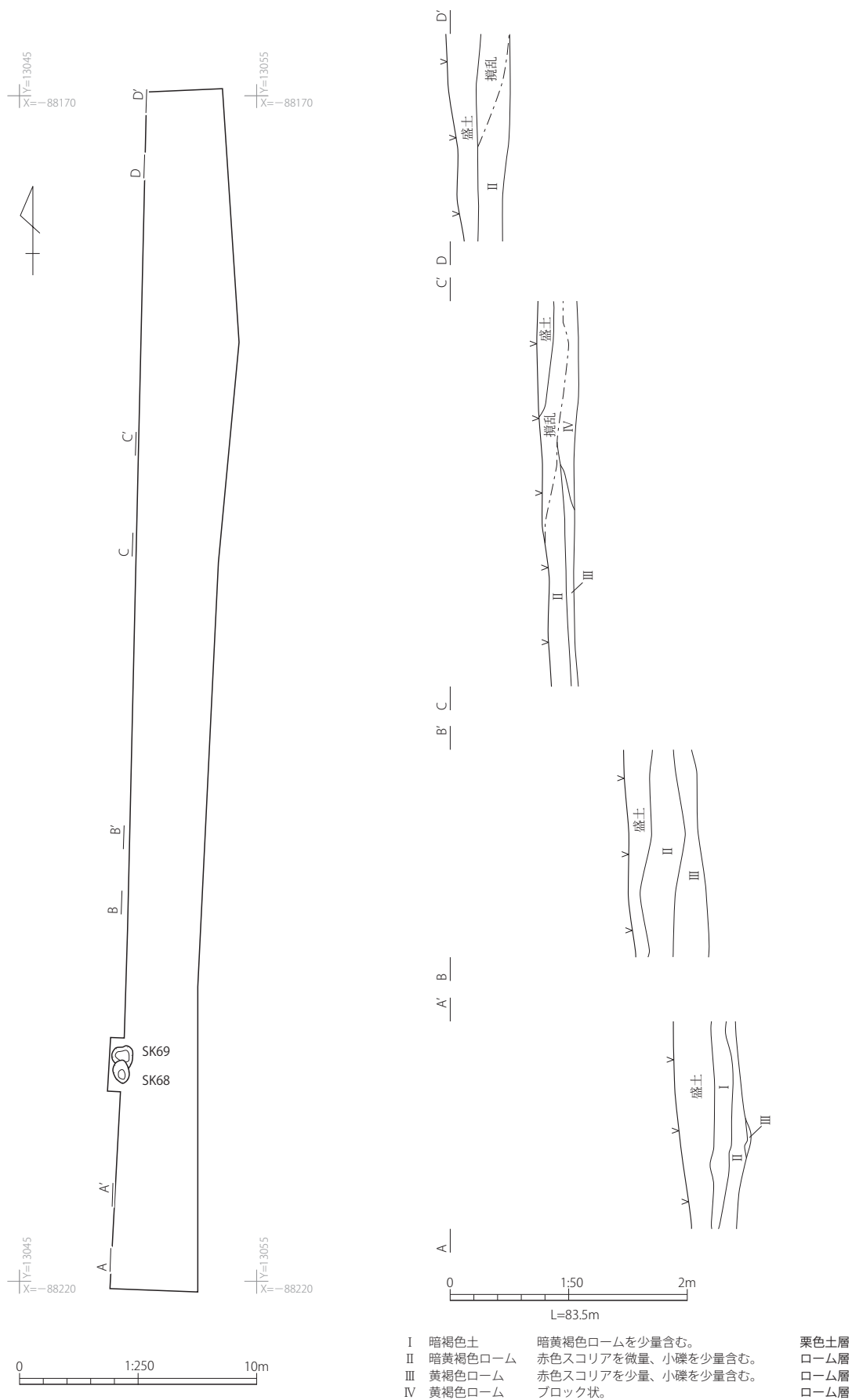
### SK69

南側をSK68に切られている。平面形は不整形で、長径95cm以上、短径88cmを測る。底部は平底で、検出面からの深さは40cmを測る。遺物は出土しなかった。

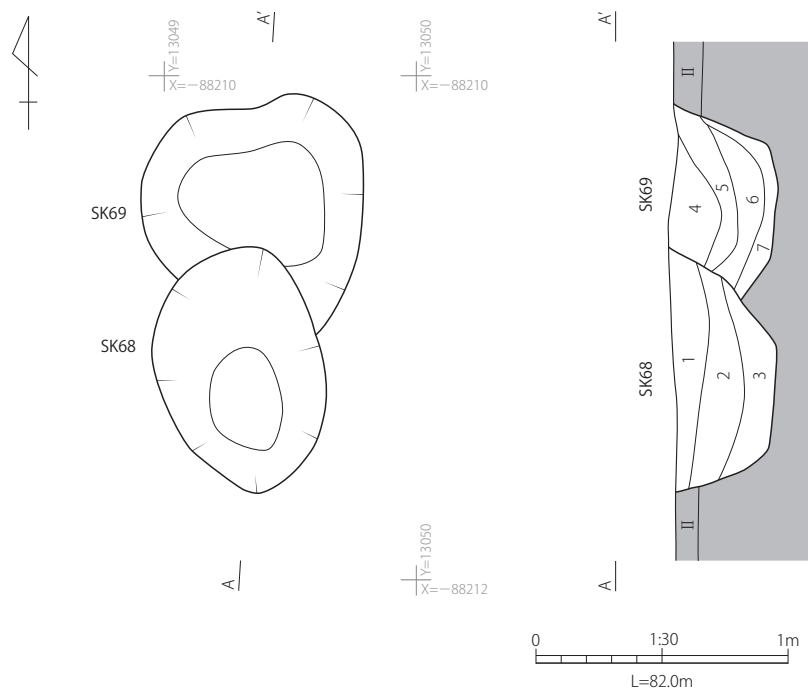
どちらの土坑も覆土が栗色土層（Ku）あるいは富士黒土層（FB）相当と考えられるので、縄文時代の遺構と考えられる。



第124図 M地区 トレンチ配置図



第125図 M地区 トレンチ全体図、セクション図



- |        |                            |         |
|--------|----------------------------|---------|
| 1 暗褐色土 | オレンジスコリア粒を微量含む。            | SK68 覆土 |
| 2 褐色土  | オレンジスコリア粒を少量含む。            | SK68 覆土 |
| 3 黒褐色土 | 黄褐色ロームを少量、オレンジスコリア粒を微量含む。  | SK68 覆土 |
| 4 黒褐色土 | オレンジスコリア粒・黄褐色ローム粒を微量含む。    | SK69 覆土 |
| 5 暗褐色土 | オレンジスコリア粒を少量、黄褐色ローム粒を微量含む。 | SK69 覆土 |
| 6 黒褐色土 | 炭化物・オレンジスコリア粒・黄褐色ロームを微量含む。 | SK69 覆土 |
| 7 暗褐色土 | 黄褐色ロームを少量、黒色土を微量含む。        | SK69 覆土 |

第 126 図 M 地区 SK68 ～ 69

第 17 表 M 地区 遺構一覧表

遺構種別	報告遺構名	調査時遺構名	位置	時代	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	平面形	断面形	切り合い（古→新）	備考
土坑	SK68	A 土坑	I Tr		98	66	40	楕円形	平底	SK69 → SK68	
土坑	SK69	B 土坑	I Tr		(95)	88	40	不整形	平底	SK69 → SK68	

# 第 11 章 天間沢遺跡 N 地区（第 14 地区）

## 第 1 節 調査に至る経緯と経過

### 調査に至る経緯

平成元年、事業者（個人）は、富士市天間 1061-1 外（968 m<sup>2</sup>）において宅地造成工事を計画した。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置するため、平成元年 2 月 10 日、事業者から文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。富士市教育委員会はこれを静岡県教育委員会に進達し（平成元年 2 月 14 日付け、富教文体第 205 号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった（平成元年 2 月 23 日付け、教文第 3-100 号）。

平成元年 6 月 2 日、土地所有者から発掘調査承諾書が提出された。これを受けて富士市教育委員会は、文化財保護法第 98 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出し（平成元年 6 月 5 日付け、富教文体第 33 号）、文化体育課職員による発掘調査を実施することとなった。

### 調査の経過

調査は平成元年 6 月 5 日から 6 月 22 日にかけて実施した。

調査地に東西方向のトレンチを 3 本設定し（1～3Tr）、重機により掘削し、遺構・遺物の検出につとめた。遺構・遺物が検出されたところについては、トレンチを拡張して調査を行った。掘削は 3 段階に分けて行い、1 段階目ではⅠ層またはⅡ層上層まで、2 段階目でⅡ層下層まで、3 段階目はⅤ層上層まで、順に掘り下げて精査を行った。

1Tr の南壁土層断面観察により建物（SB01）の存在が確認されたため、1Tr と 2Tr の間を拡張して、SB01 の全面を検出し、完掘した。



第 127 図 N 地区 位置図

遺物は SB01 から土師器の高坏・甕が出土したほか、縄文土器破片や石器が出土した。遺物については、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」（平成元年 7 月 3 日付け、富教文体第 72 号）を、静岡県教育委員会宛に「埋蔵文化財保管証」（平成元年 7 月 3 日付け、富教文体第 71 号）を提出し、静岡県教育委員会から埋蔵物の文化財認定を受けている（平成元年 8 月 2 日付け、教文第 2-48 号）。

調査の結果について、「発掘調査終了報告書」を静岡県教育委員会に提出した（平成元年 7 月 3 日付け、富教文体第 73 号）。

### 調査の体制

調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会		教育長	山本 厚
			教育次長	伊藤 輝英
	文化体育課		課長	小長谷秀夫
			課長補佐	渡邊 誠
	文化振興係		係長	杉本 篤
			主事	渡井 義彦
調査担当			主事	久松 義昭

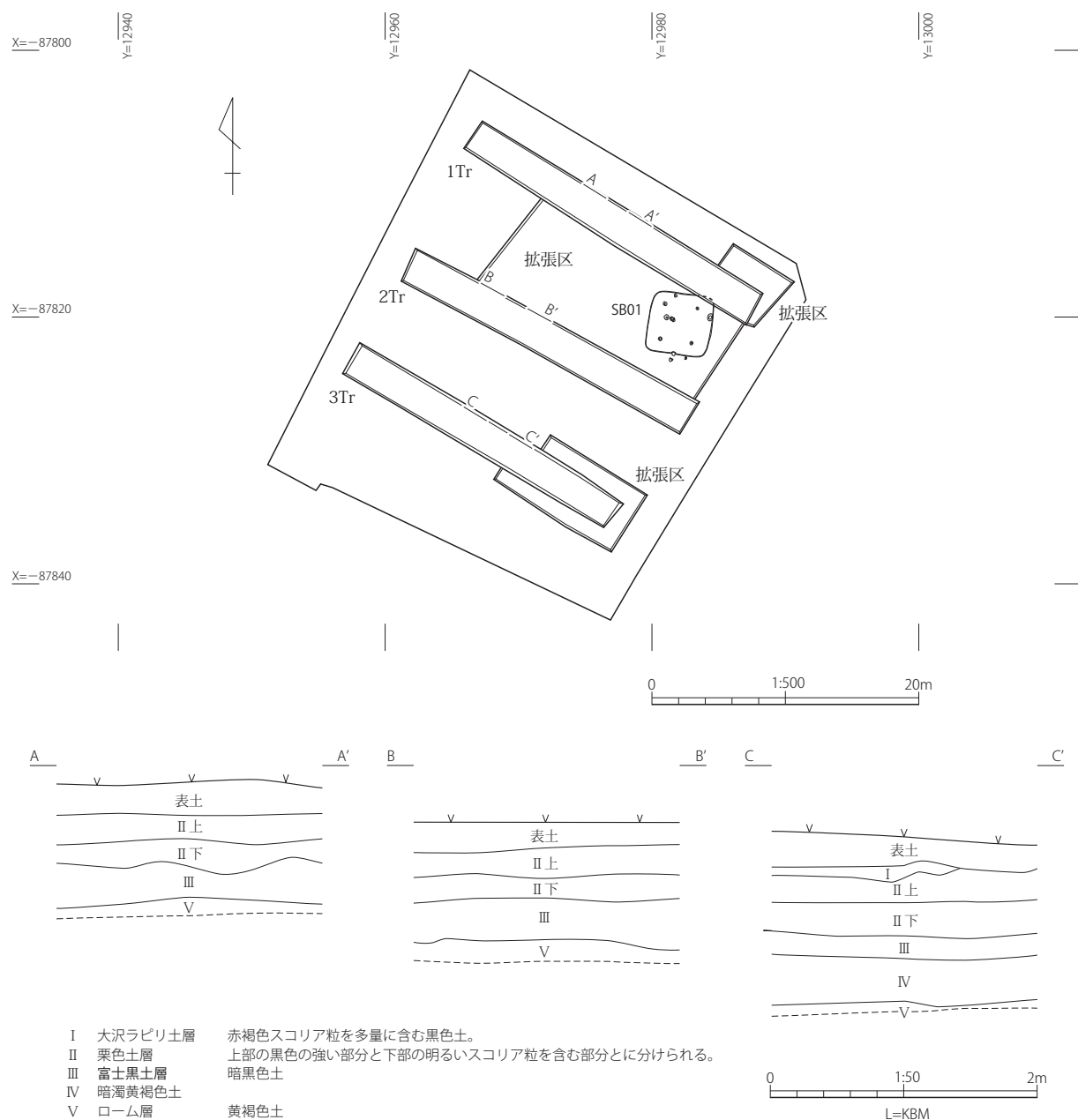
## 第2節 発掘調査の成果

### ・ 竪穴建物

#### SB01

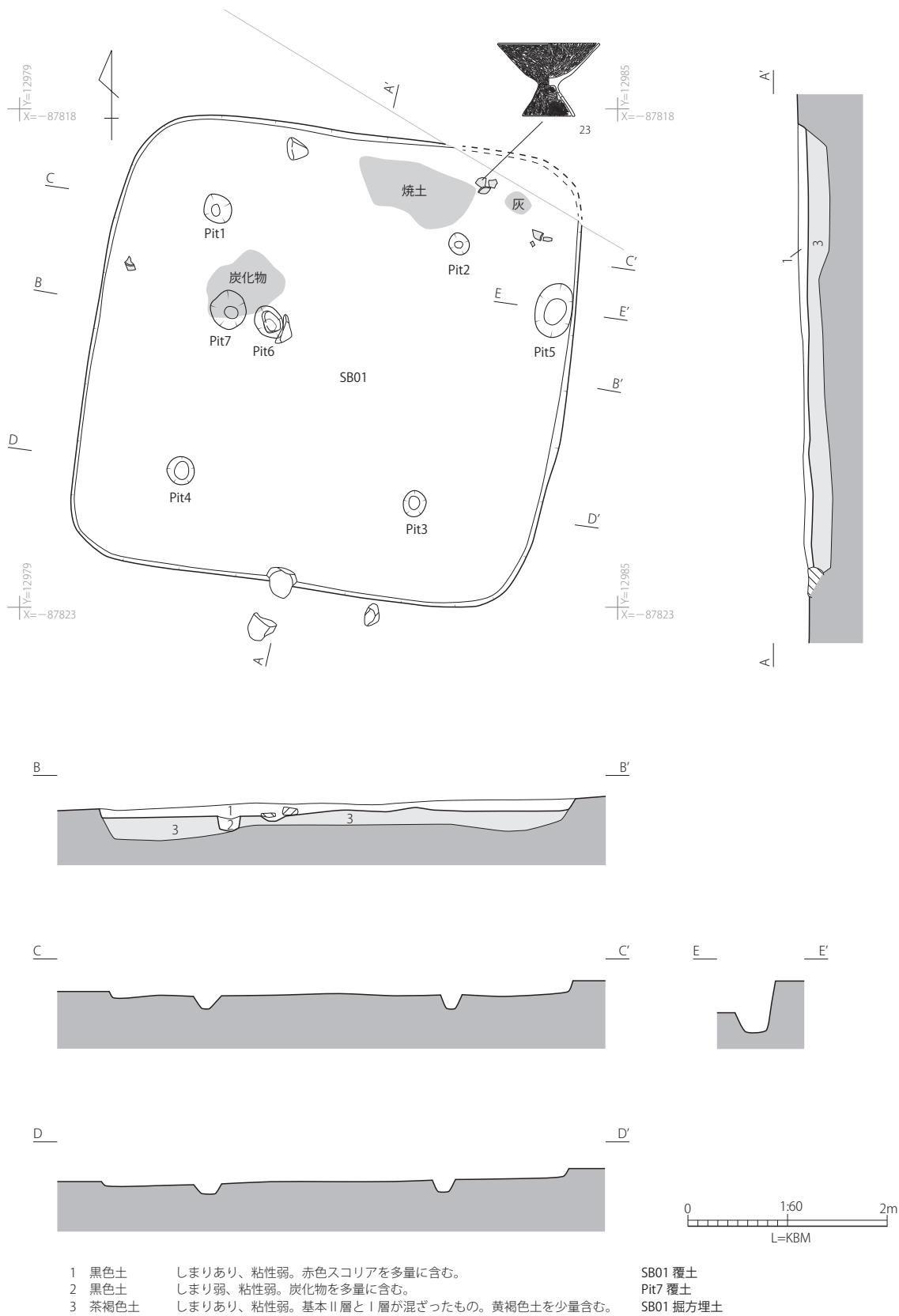
1Tr 南壁土層観察で確認され、1Tr と 2Tr の間の拡張区で全面検出された。平面形は隅丸方形を呈し、主軸（南北）幅 4.62m、直交（東西）幅 4.74m を測る。主軸方位は N-8.3° -E である。カマドは確認されず、建物内に検出された 7 基のピット (Pit1 ~ 7) のうち、Pit6 が炉であると考えられる。Pit1 ~ 4 は柱穴とみ

られ、柱間寸法は芯々で南北約 2.60 m、東西約 2.40 m を測る。東壁際に掘られた Pit5 は貯蔵穴の可能性が想定され、Pit7 は性格不明であるが、覆土下部から多量の炭化物が検出されている。本建物からは土師器の高坏・甕などが出土しており、古墳時代前期の遺構とみられる。



第 128 図 N 地区 トレンチ配置図、セクション図





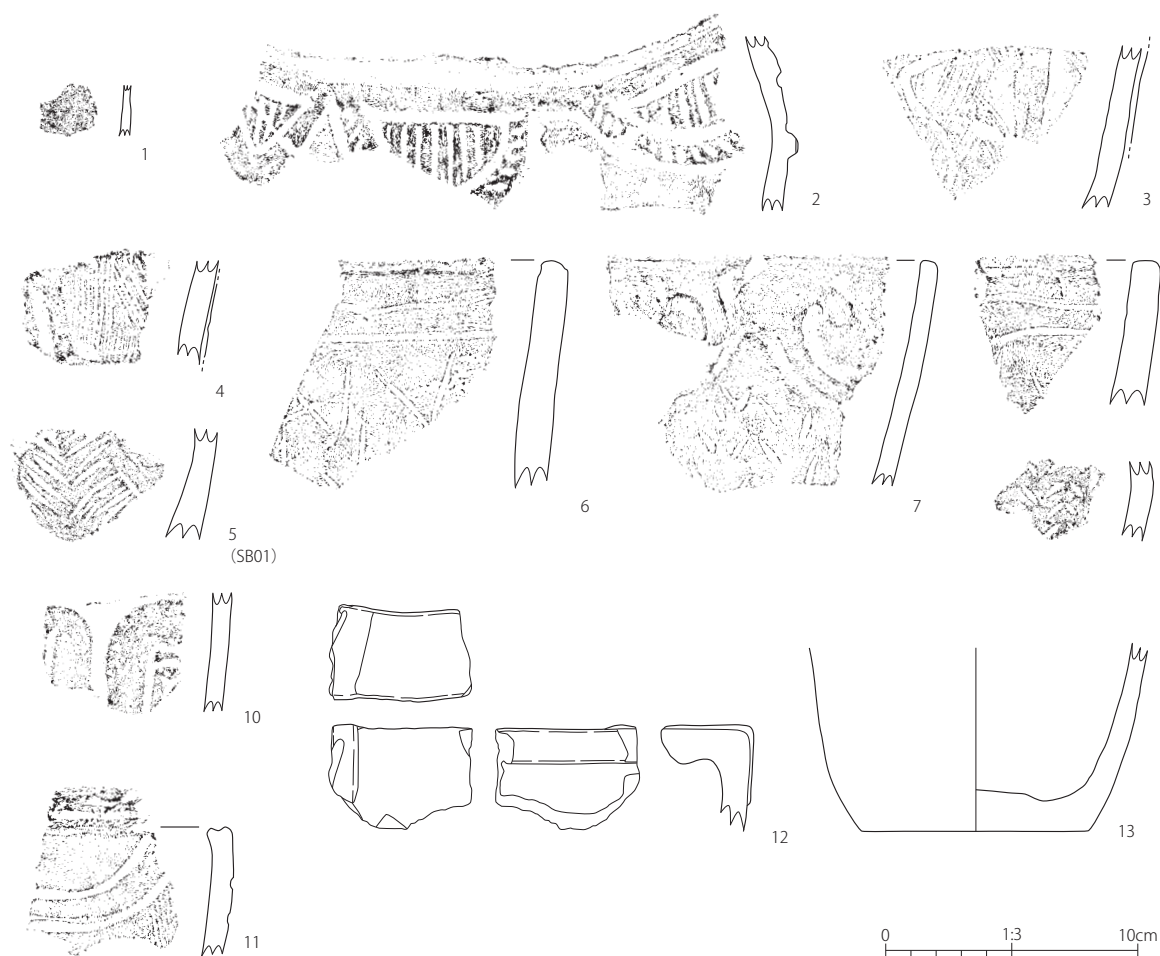
第129図 N地区 SB01

・遺物

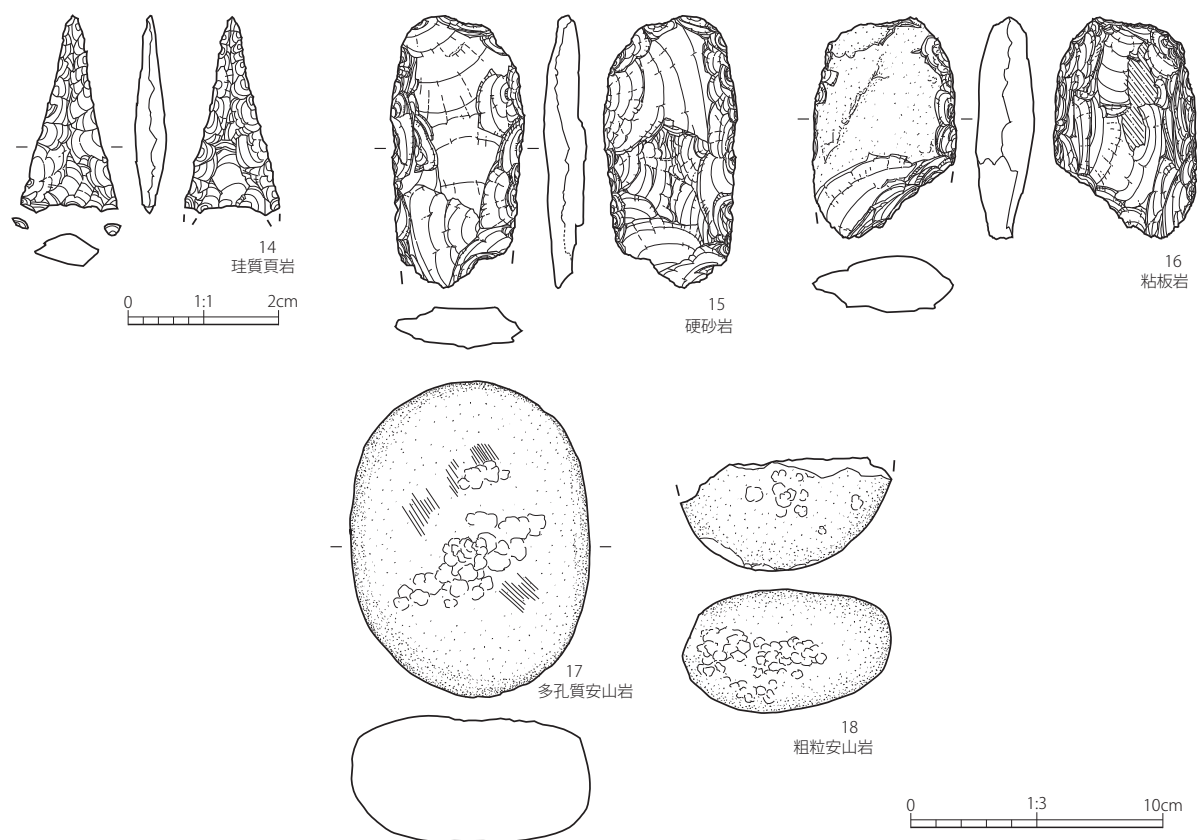
縄文時代の遺物は、包含層および古墳時代のSB01覆土内から出土しており、遺構に伴うものではない。その中には1の縄文時代前期初頭のⅡ群A類、木島式土器と思われる土器片がみられた。粗い胎土と細線文が観察されるので、木島式と判断したが、古墳時代前期のS字状口縁甕の可能性もある。2は縄文時代中期中葉のⅢ群A-1類、井戸尻3式の頸部の櫛形文部分になる。3～9はⅢ群A-2類で、3・4は曽利Ⅳ式、6～9は曽利Ⅴ式の深鉢形土器である。10・12はⅢ群A-1類に属すると思われる。11は縄文時代後期Ⅳ群A-2類の堀之内式の深鉢形土器と思われる。13の深鉢底部は、無文であり時期は不明確だが、縄文時代中期の土器と思われる。

出土した石器は、14のやや細身の無茎凹基形の石鏃、15・16は短形の短冊形打製石斧、17・18は磨・敲・凹石である。

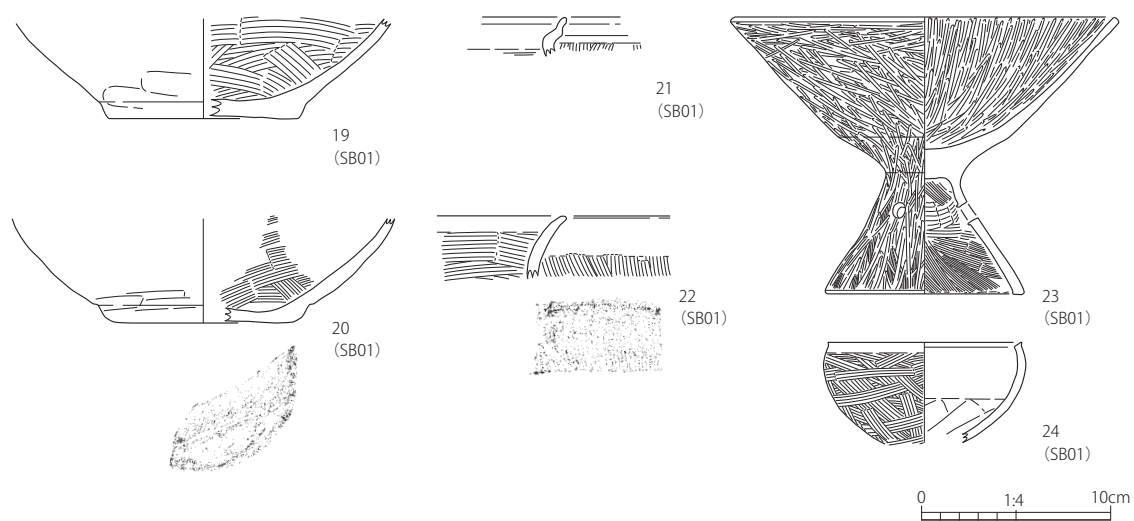
古墳時代前期の遺物は、19・20の壺、21のS字状口縁甕、22の在地系台付甕、23の脚部に3単位の円形透しのある有段高坏、24の椀が出土している。そのため、検出されたSB01の年代も古墳時代前期と考えられる。



第130図 N地区 出土遺物（縄文時代）（1）



第 131 図 N 地区 出土遺物（縄文時代）（2）



第 132 図 N 地区 出土遺物（古墳時代）

第 18 表 N 地区 出土土器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第 130 図 PL.42	1	SB01	10YR8/3 浅黄橙	10YR5/1 褐灰	Ⅱ群 A 類	木島？	薄く黒灰色の胎土で、薄い細線文が施文される。1号住張床内	R30
第 130 図 PL.42	2	3Tr 東側	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 3	小型深鉢頸部。水平の隆帯に刻みのある凹状の弧文を連結し、弧文の内部を縦位の集合沈線を充填する。	R8 ・ R35
第 130 図 PL.42	3	2Tr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う、低い幅広の隆帯による懸垂文を施文後、条線によるラフな綾杉文で区画内を埋める。	R1
第 130 図 PL.42	4	1・2Tr 中間 拡張区中央	5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う、低い幅広の隆帯による懸垂文を施文後、条線による綾杉文で区画内を埋める。	R32
第 130 図 PL.42	5	SB01	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/6 黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	間隔が粗い条線による綾杉文。1号住出土。	R17
第 130 図 PL.42	6	SB01 南側	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	口縁に沿って薄い二本の平行沈線を施文し、その下を八の字文で埋める。8と同一個体？	R31
第 130 図 PL.42	7	3Tr 東側	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR3/2 黒褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	口縁部に、両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯によって、連結する渦巻文を施文し、その下を八の字文で埋める。	R3
第 130 図 PL.42	8	2Tr 東側	5YR6/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	口縁に沿って薄い二本の平行沈線を施文し、その下を八の字文で埋める。6と同一個体？	R11
第 130 図 PL.42	9	2Tr	5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	沈線による懸垂文の区画内を八の字文で埋める。	R12
第 130 図 PL.42	10	3Tr 東側	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR4/2 灰黄褐	Ⅲ群	中期？	削出し陽刻のような隆帯による楕円文の内部を、縦横の沈線で充填する。	R3
第 130 図 PL.42	11	1・2Tr 中間 拡張区中央	7.5YR5/6 明褐	5YR6/6 橙	Ⅳ群	後期？	口縁に沿って並行沈線による凹状の弧状文を施文し、その下に細かいRLの縄文を密接施文する。口唇上面に一本の沈線を引く。	R32
第 130 図 PL.42	12	2Tr 東側	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅲ群	中期	器台の部分？。薄い角をもつ隆帯を貼り付けている。	R6
第 130 図	13	3Tr 東側	10YR6/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群	中期	底部。	R35
第 132 図	19	SB01	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	土師器		壺の底部。1号住床直。	R20 ・ R21
第 132 図	20	SB01	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	土師器		壺底部。ヘラ状工具による沈線で直線の放射線？を引く。	R15
第 132 図 PL.42	21	SB01	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	土師器		小型のS字口縁甕の口縁部。	R17
第 132 図 PL.42	22	SB01	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	土師器		台付甕の口縁部。1号住床直。	R20 ・ R21
第 132 図 PL.42	23	SB01	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	土師器		脚部に3単位の円形透しのある高坏。	R37
第 132 図 PL.42	24	SB01	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	土師器		小型台付甕の胴部。土坑内出土。	R16 ・ R21 ・ R26 ・ R28

第 19 表 N 地区 出土石器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第 131 図 PL.42	14	SB01	石鏃	珪質頁岩	2.59	1.27	0.38	0.87	両脚とも欠損。1号建物床埋め土から出土。	R27
第 131 図 PL.42	15	1Tr と 2Tr 間	打製石斧	硬砂岩	(10.8)	5.3	1.58	102.42	刃部欠損。	R18
第 131 図 PL.42	16	3Tr	打製石斧	粘板岩	(8.8)	5.65	2.31	126.48	刃部側下半欠損。	R28
第 131 図	17	2Tr	磨・凹石	多孔質安山岩	12.48	9.48	5.01	885.29	敲石としても使用。2トレンチ出土。	R7
第 131 図	18	3Tr	敲・磨石	粗粒安山岩	(4.61)	(8.25)	(4.89)	234.66	比熱を受け赤化している。3トレンチ出土。	R2

## 第12章 天間沢遺跡O地区（第15地区）

### 第1節 調査に至る経緯と経過

#### 調査に至る経緯

事業者（個人）は、富士市天間 1896-2 外（4,758.28 m<sup>2</sup>）において、農産物集出荷場および農家住宅の建設工事を計画した。平成元年 8 月 23 日、富士市教育委員会文化体育課に当該地の埋蔵文化財の所在の有無について問い合わせがあり、8 月 25 日に埋蔵文化財分布確認調査依頼書が提出された。これを受けて、8 月 26 日、事業者・設計者の立ち会いのもと、文化体育課職員による表面観察調査を実施した。当該地の現状は原野であり、遺物等の散布は認められなかったが、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置することから、確認調査を実施する必要があると判断された。

平成元年 8 月 28 日、事業者から文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。8 月 31 日、富士市教育委員会は届出を静岡県教育委員会に進達し（富教文体第 102 号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった（平成元年 9 月 5 日付け、教文第 3-67 号）。富士市教育委員会は文化財保護法第 98 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出し、富士市教育委員会文化体育課職員による確認調査を実施することとなった。

#### 調査の経過

調査は平成元年 9 月 5 日から 9 月 13 日にかけて実施した。地形に合わせて 5 本のトレンチ（1～5Tr）を設定し、重機により掘削を行い、遺構・遺物の検出につとめた。掘削は 3 段階に分けて行い、1 段階目ではⅠ層上面まで、2 段階目でⅡ層上層まで、3 段階目はⅣ層上層まで、順に掘り下げて精査を行った。



第133図 O地区 位置図

4・5Tr で中世～近現代とみられる土坑 2 基（SK01～02）を検出した。

遺物は縄文土器と思われる土器片 1 点が出土したが、流れ込みとみられる。遺物については、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」（平成元年 9 月 25 日付け、富教文体第 116 号）を、静岡県教育委員会宛に「埋蔵文化財保管証」（平成元年 9 月 25 日付け、富教文体第 115 号）を提出し、静岡県教育委員会から埋蔵物の文化財認定を受けている（平成元年 11 月 10 日付け、教文第 2-134 号）。

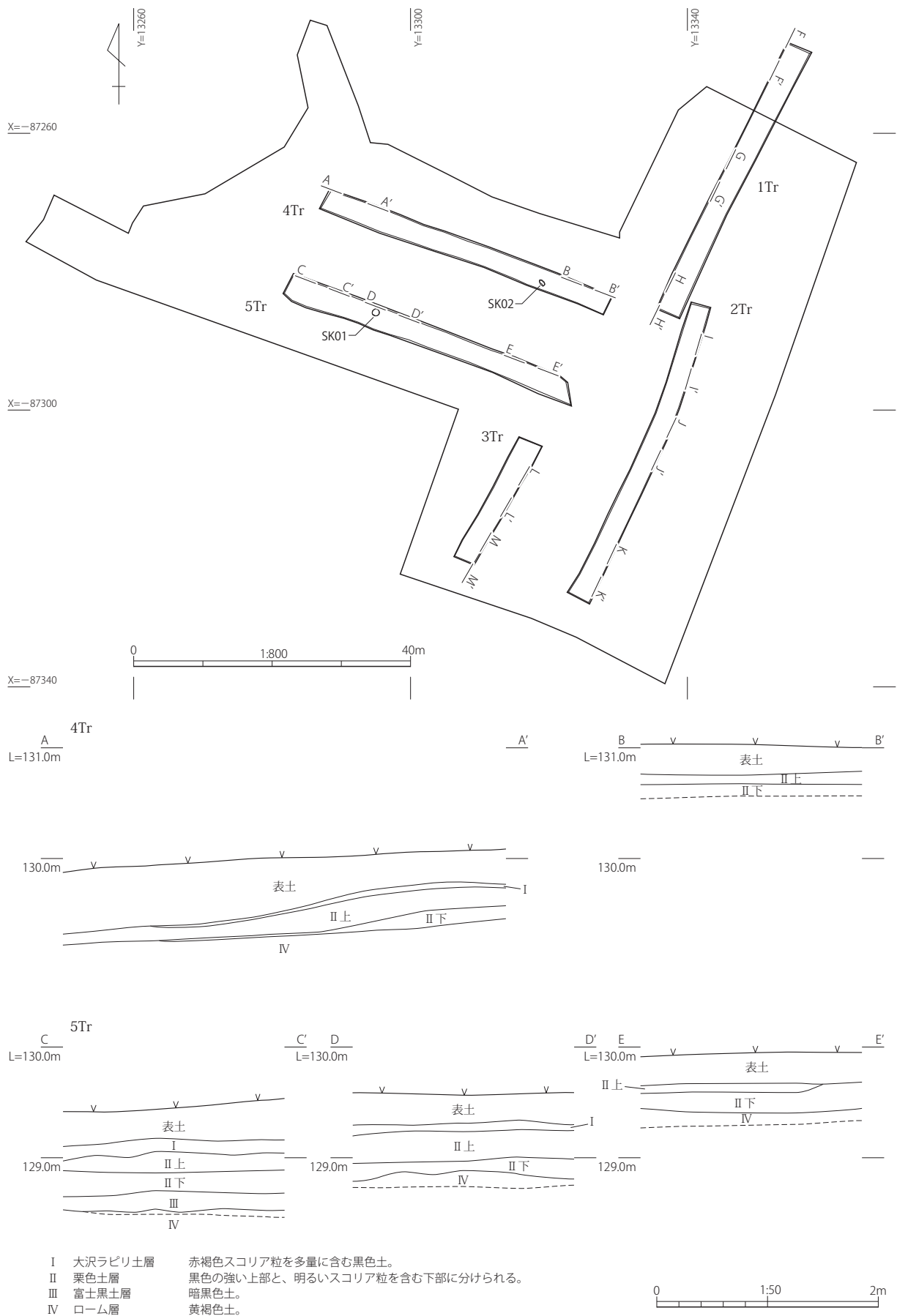
調査の結果について、「発掘調査終了報告書」を静岡県教育委員会に提出した（平成元年 9 月 25 日付け、富教文体第 114 号）。

#### 調査の体制

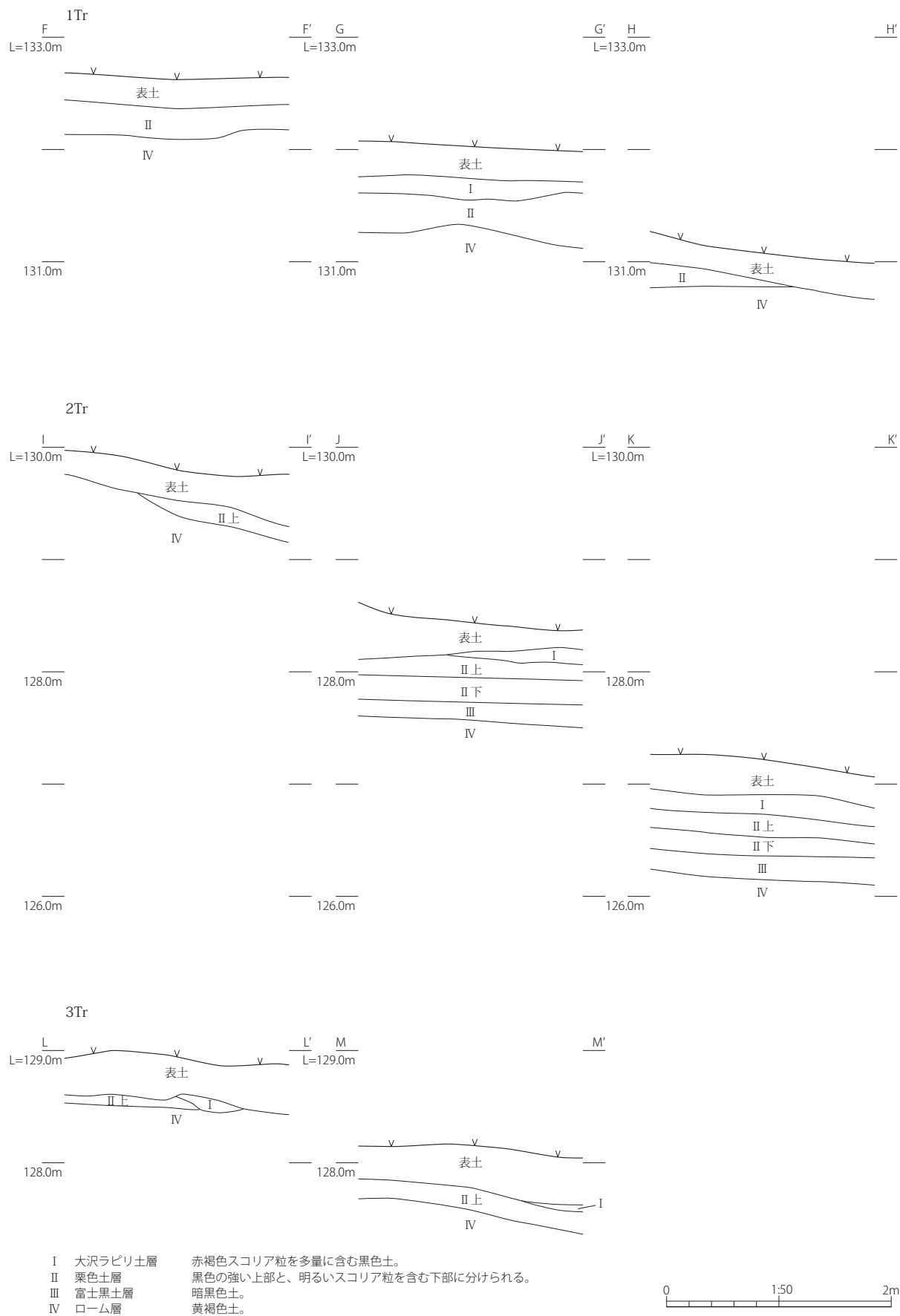
調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	山本 厚
		教育次長	伊藤 輝英
	文化体育課	課長	小長谷秀夫
		課長補佐	渡邊 誠
調査担当	文化振興係	係長	杉本 篤
		主事	渡井 義彦
		主事	久松 義昭





第134図 O地区 トレンチ配置図、セクション図

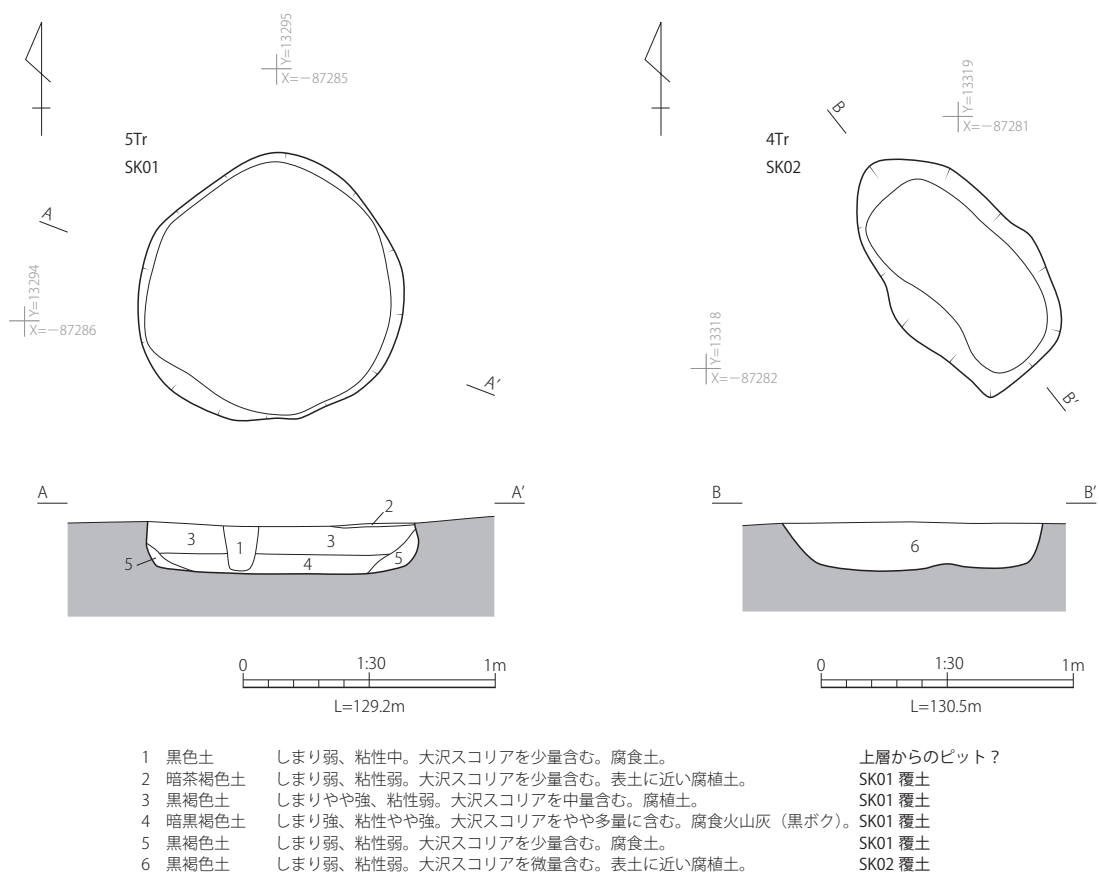


第135図 O地区 セクション図

## 第2節 発掘調査の成果

4・5Tr で、遺物等は検出されなかったが、覆土の土質から中世から近現代のものとみられる土坑2基（SK01～02）を検出した。

5Tr のSK01 は長径 106cm、短径 103cm、検出面からの深さ 21cm を測る円形土坑でⅡ層を切りこんでいる。4Tr のSK02 は、長径 103cm、短径 62cm、検出面からの深さ 19cm を測る不整形土坑で、Ⅲ層を切りこむ状況で検出されたが、本来はSK01と同様にⅡ層から切り込まれていたとみられる。



第136図 O地区 SK01～02

## 第 13 章 天間沢遺跡 P 地区（第 16 地区）

### 第 1 節 調査に至る経緯と経過

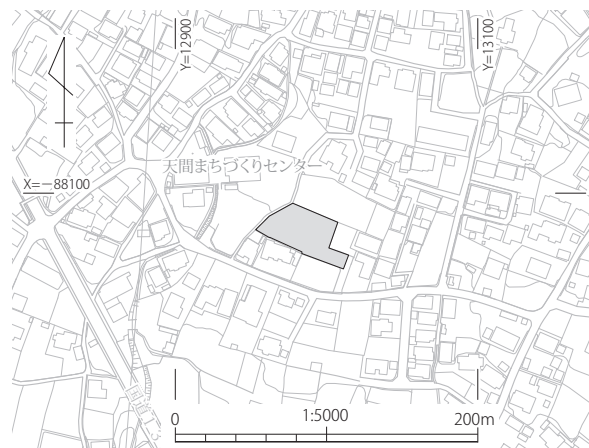
#### 調査に至る経緯

平成 3 年、富士市役所都市整備部みどりの課では平成 4 年度事業として、天間地区に地域の特色である天間沢遺跡を活かした遺跡公園の造成を計画した。造成予定地（富士市天間 1120-14、1,329 m<sup>2</sup>）が周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置することから、文化財保護法第 57 条の 3 第 1 項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」（平成 3 年 11 月 20 日付け、富都み第 111 号）を提出するとともに、富士市教育委員会に「埋蔵文化財確認調査依頼書」を提出した。11 月 22 日、富士市教育委員会は通知を静岡県教育委員会に進達し（富教文第 154 号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった。富士市教育委員会は文化財保護法第 98 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出し、富士市教育委員会文化振興課職員による確認調査を実施することとなった。

#### 調査の経過

調査は平成 3 年 12 月 2 日から 12 月 12 日にかけて実施した。調査地に東西方向に 3 本、南北方向に 1 本、合計 4 本のトレンチ（1 ～ 4Tr）を設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の検出につとめた。敷地の南西、2Tr と 3Tr が接する部分で竪穴状遺構が確認されたため、可能な限り調査範囲を拡張し、検出部分を完掘した。

遺物は縄文時代早期後葉と中期後葉の土器片、古墳時代前期の土師器片がコンテナ 2 分の 1 箱出土した。遺物については、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」（平成 3 年 12 月 13 日付け、富教文第 168 号）を、静岡県教育委員会宛に「埋蔵文化財保管証」（平成 3 年 12 月 13 日付け、富教文体第 169 号）を提出し、静岡県教育委員会から埋蔵物の文化財認定を受



第 137 図 P 地区 位置図

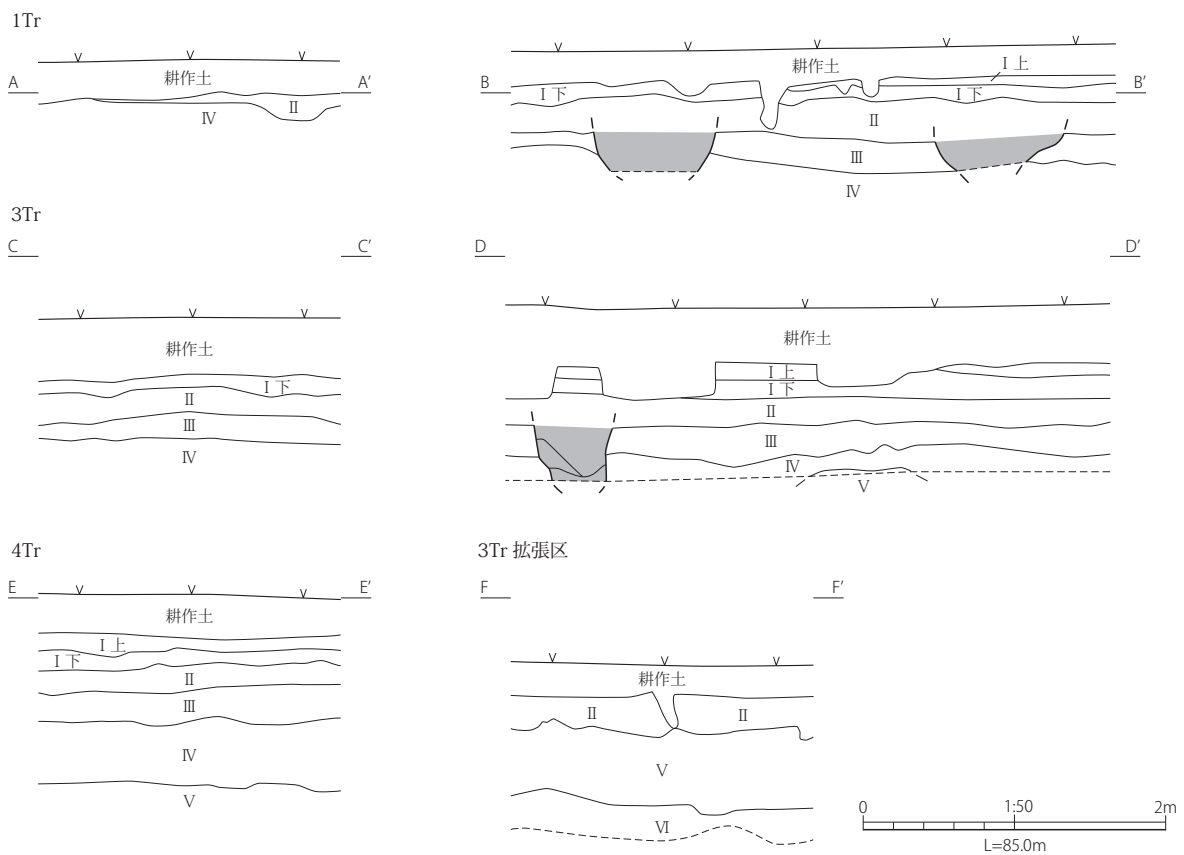
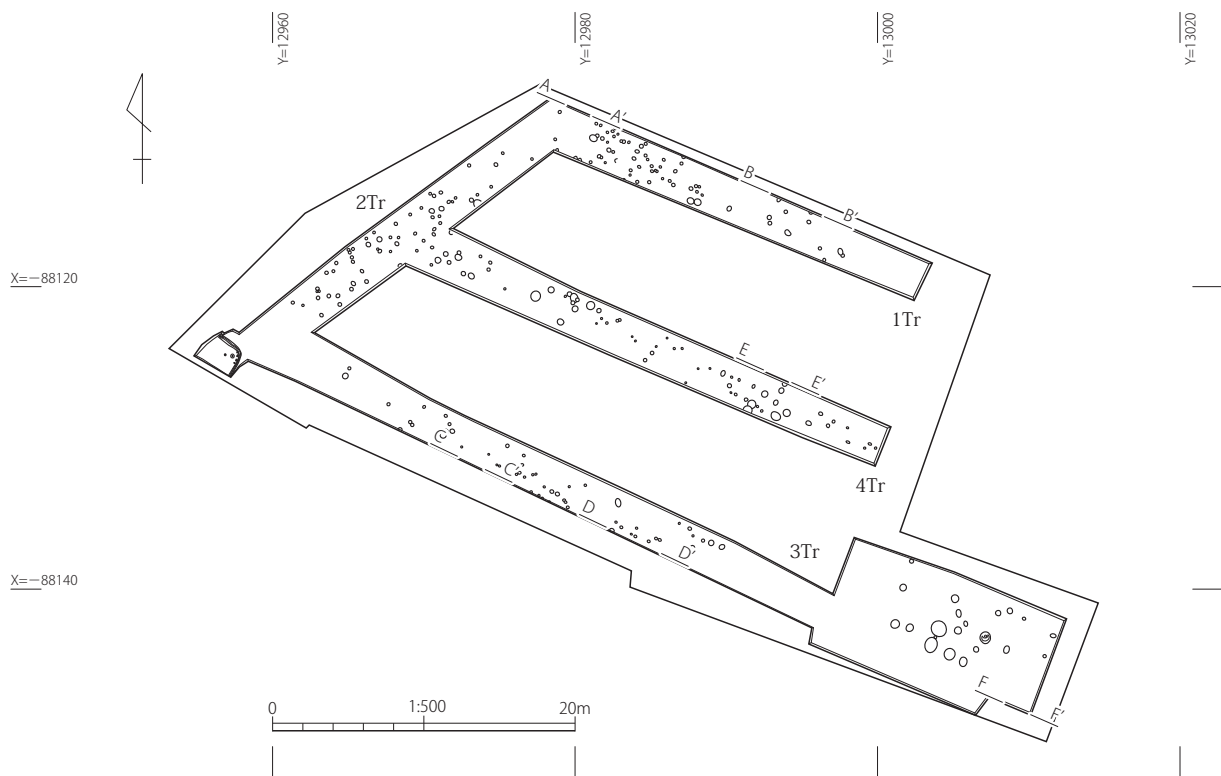
けている（平成 4 年 2 月 25 日付け、教文第 2-259 号）。

調査の結果について、「発掘調査終了報告書」を静岡県教育委員会に提出した（平成 3 年 12 月 21 日付け、富教文第 175 号）。

#### 調査の体制

調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	山本 厚
		教育次長	伊藤 輝英
		文化振興課 課長	小長谷秀夫
		課長補佐	小出 禮節
調査担当	文化財係	係長	佐野 誠一
		主事	久松 義昭



- |              |   |
|--------------|---|
| I 大沢スコリア層    | 黒色土。しまりやや強、粘性弱。明橙色スコリア粒を密に含む。白色粒子を微量含む。上層・下層に分けられる。 |
| II 栗色土層      | 暗褐色土。   |
| III 富士黒土層    | 黒褐色土。しまりやや強、粘性やや強。径2～3cmの礫を少量、橙色粒子を微量含む。            |
| IV 漸移層       | にぶい黄褐色土。にぶい橙色の軟らかいスコリアを微量含む。                        |
| V 休場層        | 黄褐色土。橙色スコリア（2～3mm）をやや多量に含む。礫（3cm位）が目立つ。             |
| VI 古富士泥流層上層か | 岩が多い。   |

第138図 P地区 トレンチ配置図、セクション図



## 第2節 発掘調査の成果

### 遺構

調査時に多数のピット状の落ち込みが検出され図化したが、人工的なものか判断がつかなかった。調査区全体で縄文時代早期後葉と中期後葉の土器および石器が出土している。

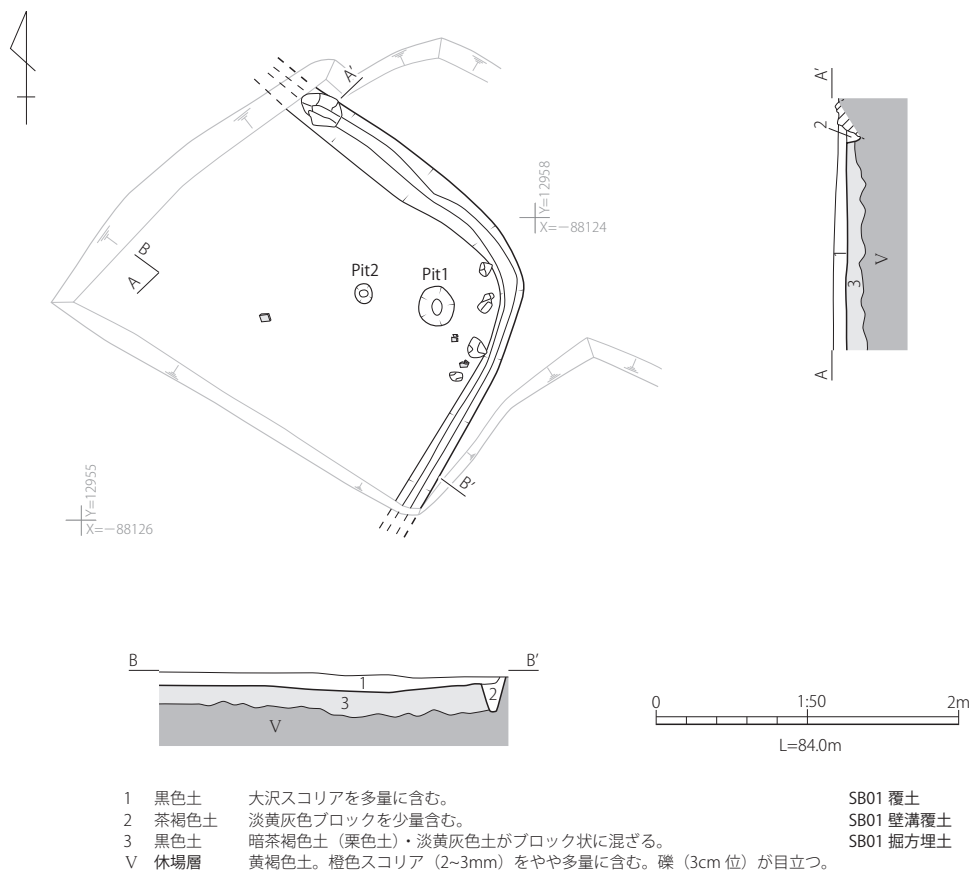
調査地の南西、2Trと3Trが接する部分で竪穴建物（SB01）の北東部分を検出した。検出部分で南北幅2.00m、東西幅2.60mを測り、傾きはN-32°-Eほどである。掘方に12～18cmほどの埋土を入れ、床面をつくっている。検出された壁には幅15～30cm、深さ18cmほどの壁溝が認められる。北東角寄りに2基のピット（Pit1～2）が検出されたが、調査時所見によれば、壁寄りのPit1は配置的に柱穴とは考えられず、Pit2は配置は良いが浅い。遺構覆土および少量の出土土器から古墳時代前期の建物と考えられる。

### 遺物

遺物は、縄文土器と古墳時代前期と考えられる土師器、平安時代の灰釉陶器が出土しているが、土師器に関しては図示できるものがなかった。

1～5は、縄文時代早期後葉、Ⅰ群A類のハッ崎式の深鉢形土器である。6は縄文時代中期後葉、Ⅲ群A-2類の曾利式土器の把手部分で、7～11まではⅢ群B-2類の加曾利E4式の深鉢形土器と考えられる。12は肌色系の胎土で粗い粒子を含んでおり、西日本系の土器と思われる。Ⅲ群D-2類の北白川C式に比定した。13・14は無文の口縁部であるが、縄文時代中期後葉の深鉢形土器と考えられる。

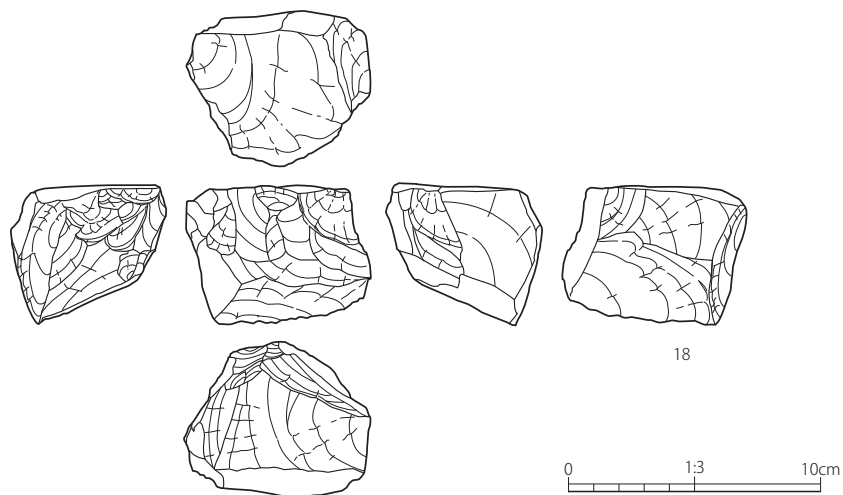
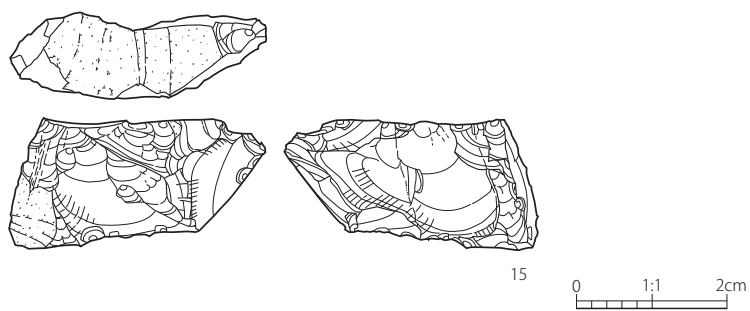
石器は、15と18が石器素材の作出用の石核で、16・17は機能的に打製石斧としたが、削器としても良い成形となっている。19は軟石材の敲石、20は硬質な石材の磨石である。



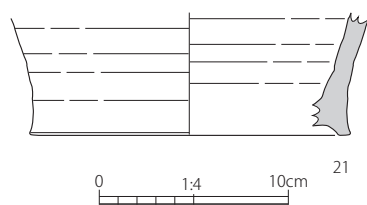
第139図 P地区 SB01



第140図 P地区 出土遺物実測図（縄文時代）（1）



第 141 図 P 地区 出土遺物実測図（縄文時代）（2）



第 142 図 P 地区 出土遺物実測図（平安時代）

第 20 表 P 地区 出土土器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第 140 図 PL.46	1	1・2・3Tr	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	I 群 A 類	ハッ崎 I	斜めの爪形文を横位に施文し、その下に斜め平行に施文し、文様帯を構成する。裏面に薄い貝殻条痕を横位に施す。灰白色の胎土で多量の繊維を含有する。	R1
第 140 図 PL.46	2	2Tr	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	I 群 A 類	ハッ崎 I	斜めの爪形文を横位に施文。多量の繊維を胎土に含有する。	R7
第 140 図 PL.46	3	2Tr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	I 群 A 類	ハッ崎 I	段の部分に、斜めの爪形文を横位に施文。多量の繊維を胎土に含有する。	R7
第 140 図 PL.46	4	1・2・3Tr	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	I 群 A 類	ハッ崎 I	横位に、斜め爪形の連続刺突と口唇に同じ工具による刻みを施す。胎土に繊維を多く含有する。	R1
第 140 図 PL.46	5	4Tr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	I 群 A 類	ハッ崎 I ？	横位の斜め刺突文を施文。裏面に薄く貝殻条痕を施す。胎土は灰肌色に近く、繊維を含む。	R3
第 140 図 PL.46	6	2Tr	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	頂点が丸い板状三角形の把手部分。中央部と口唇に沿って隆帯を施文する。	R7
第 140 図 PL.46	7	3Tr 拡張区	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	平行沈線による懸垂文に区画された中を、縦位 LR の縄文で埋める。	R5
第 140 図 PL.46	8	3Tr	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	両側に浅い凹線を伴う低い断面三角形の隆帯を口縁に沿って施文し、底部に向かってやや収束する懸垂文を垂下する。区画内には、RL の縄文を縦位に密接施文する。	R6
第 140 図 PL.46	9	3Tr	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	肥厚した口唇をもつ波状口縁部。地文に LR の縄文を多方向に施文し、浅い並行沈線による曲線で文様を描いている。	R6
第 140 図 PL.46	10	4Tr	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E	LR の縄文を縦位に施文し、ナデによる懸垂線で磨消して区画としている。	R2
第 140 図 PL.46	11	4Tr	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E	両側に二本の沈線を伴う刻みのある隆帯の懸垂文による区画内を、多条 (3 条) の RL の縄文で、節が縦になるように密接施文する。	R3
第 140 図 PL.46	12	3Tr	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 D-2 類	北白川 C	口縁部に段を設け文様帯とし、地文として薄い RL の縄文を施文後、平行沈線で隅丸長方形の文様を描く。	R6
第 140 図 PL.46	13	3Tr	7.5YR4/2 灰褐	10YR3/2 黒褐	Ⅲ群	中期？	角ばった口唇をもち、外反する無文口縁部。	R6
第 140 図 PL.46	14	2Tr	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群	中期	無文口縁部。	R7
第 142 図 PL.46	21	4Tr	2.5YR6/2 灰黄	10YR5/2 灰黄褐	灰釉陶器	平安	10 世紀代、渥美・湖西系 (二川窯?) 灰釉陶器の大型瓶? の高台部。	R2

第 21 表 P 地区 出土石器観察表

挿図 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第 141 図 PL.46	15	1・2・3Tr	石核	黒曜石	1.67	3.39	0.84	5.92	両極石核。上下左右に打撃痕が多数残存している。	R1
第 140 図 PL.46	16	4Tr	打製石斧	ホルンフェルス	(8.35)	(7.98)	2.45	66.8	円形に近い形状で、削器に分類しても良い。	R11
第 140 図 PL.46	17	4Tr	打製石斧	火山礫凝灰岩	12.38	9.98	2.21	373.15	ラフなバチ形を呈す。	R11
第 141 図 PL.46	18	4Tr	石核	富士川ホルンフェルス	7.21	5.58	6.16	310.97	打面転移を頻繁に行い、等比剥片を剥離。	R11
第 140 図	19	4Tr	敲石	安山岩	8.41	6.42	5.48	375.68	上下に敲き痕多数。	R11
第 140 図	20	4Tr	磨石	石英閃緑岩	(5.62)	8.42	4.3	316.43	硬質な石材で表裏に擦痕が顕著に観察される。	R10

## 第 14 章 総括

### 各地区の様相

登録されている天間沢遺跡の範囲は約 70 万平方メートルを越え、当然ひとつの遺跡というよりも遺跡群として捉えるべきものである。それゆえ、各地区ごとに様相は異なり、時代も大きく異なっていることが多いので、各地区ごとに概観する。

遺物が無いか、ほとんど出土しなかった D、I、J、M、O 地区については遺跡の性格を述べることはできないが、E、G、K、L、N、P 地区について、その特徴を考察する。

### E 地区

E 地区は、天間沢遺跡のほぼ中央部の西寄りに位置し、隣接するジンゲン沢遺跡とを隔てる谷部を望む立地になる。天間沢遺跡の最盛期である縄文時代中期の遺物も多く出土しているが、主体を成すのは縄文時代後期前葉の堀之内式土器になる。静岡県東部地域は堀之内 1 式土器の出土が多い傾向にあるが、E 地区では堀之内 2 式が主体的に出土した。特に完形になるものはなかったが、器形が推定できる注口土器の大型破片が多く出土していることが注目される。この注口土器が F-2 グリッド中心に多く出土していることと、同じグリッドから非常に小型の緑色軟玉製玉斧が出土していることは、E 地区が通常の生活空間ではなく祭祀のような特殊な活動空間であったことが推察される。

また、静岡県東部地域の特徴的な堀之内式期の粗製土器として注目されていた、付加条縄文を施文する深鉢形土器が多く出土した点も重要である。同時伴出の証拠はないが、ほぼ堀之内 2 式主体の土器群とともに出土したことから、土器組成に含まれるものと思われ、型式編年を考えるうえで良好な資料といえるだろう。

少量であるが古墳時代前期の遺構、遺物も確認されている。遺構では何らかの区画の一部と思われる溝状遺構が検出されており、天間沢遺跡全体で確認できる古墳時代前期集落に関わる遺構だろう。

### G 地区

G 地区の調査は、調査面積 50 m<sup>2</sup> の非常に狭い調査区であるが、縄文時代中期末の埋甕や配石土坑など墓域と思われる遺構が検出されている。縄文時代中期集落の中心と考えられる A・B・C・F・K 地区に接していながら建物を確認できていないことから、環状あるいは馬蹄形集落であった場合には外周部にあたる領域の可能性はある。

### K 地区

200 m<sup>2</sup> の狭い調査区であったが、5 軒以上の建物が確認された。遺構の時期は、ほぼ縄文時代中期後葉の曾利式期内で収まっており、A～C・F 地区で確認された集落の一部であると考えられる。この集落は少なくとも中期中葉の井戸尻式期から始まり、中期後葉の曾利式の終わりごろまで営まれたことが確認できるが、K 地区部分は曾利Ⅲ～Ⅴ式までの中期後葉の時期に限定される。SB25 では、小型壺形鍔付土器（65）とそのセットのような出土状況で器台（81）が出土しており、有孔鍔付土器と器台のセット関係を示唆する事例かもしれない。さらにもう一つ、SB25 には内部にタール状の付着物が残存した、より小型の壺形鍔付土器（66）も出土していて、何か特別な性格をもつ建物なのかもしれない。

なお、K 地区で 2 点のナイフ形石器が検出され、天間沢遺跡で確認されていなかった旧石器時代の証拠が見出された。これによって富士宮市の下高原遺跡とあわせて、古富士火山活動期の約 2 万年前頃には富士山麓において人類活動が行われていたことが確認された。

### L 地区

主な出土遺物は縄文時代中期の土器であるが、遺構の時期は不明確である。溝状遺構 SD1 は、覆土の土質から古墳時代以降と判断され、土製紡錘車が出土しているが、時期の判る遺物は伴出していない。隣接する N 地区では古墳時代前期の建物が確認されているので、これに関係する遺構の可能性はある。



## N 地区

遺構では古墳時代前期の建物を検出している。脚部三単位円孔透しの段付き坏部をもつ高坏（23）やS字甕を伴出していることから、4世紀代の建物と考えられ、横道下（23）地区など天間沢遺跡全体に広がる古墳時代前期集落の一部と考えられる。

## P 地区

縄文時代早期後葉と中期末の縄文土器、平安時代の灰釉陶器が出土している。量的に縄文時代早期後葉のハッ崎Ⅰ式の比率が高いので、当期の中心となるQ地区の端部といえよう。また、調査区の西端で古墳時代前期と考えられる建物の一部が確認され、古墳時代前期の集落が天間沢遺跡全体に広がっていることが想定される。

## 縄文時代中期集落について

天間沢遺跡の各地区ほぼすべてにおいて縄文時代中期の遺物が出土し、特に中期後葉の曽利、加曽利式系の土器の出土量が多い。多数の建物が確認されたA・B・C・F・K地区の建物群が拠点集落として中心となり、縄文時代中期の天間沢遺跡群を構成すると思われる。

この中心部の集落は、植松章八氏により「第2章 第2節 縄文期の集落と配石遺構をめぐって」『天間沢遺跡Ⅱ』にて、A・B・F地区の配石および土坑群を中央広場と墓壇域ととらえ、その外周域に堅穴建物群が配置される環状集落が想定されている。ただしその場合には、通常、径約150mを最大とする大型環状集落の規模を大きく越えて、堅穴建物群の範囲のみで径200mを越える規模となり、谷部分を越えてジゲン沢遺跡まで集落範囲となることから、現実的ではないだろう。また、集落形成においても、より古い建物はF地区の配石・土坑群に隣接し、新しくなるにつれ北へ徐々に離れていく傾向がみられる。これは関東・中央高地における環状集落の建物配置が、時間の経過とともに中央にむかって収縮するという一般的傾向とは逆になる（谷口2005）。



※ 等高線は現在

第143図 縄文時代中期集落全体図

現状の調査状況から鑑みれば、谷に沿う列状の建物群になるか、C地区の空間部分を中央広場とみなし、集落（C・K地区）外周部に墓域あるいは廃棄場（A・B・F・G地区）をもつ、谷部に開いた径100m程度の馬蹄形集落を想定すべきかもしれない。

## 参考文献

- 谷口康浩 2005『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 富士市教育委員会 1984『天間沢遺跡Ⅰ 遺構編』
- 富士市教育委員会 1985『天間沢遺跡Ⅱ 遺物・考察編』
- 富士市教育委員会 2016『天間沢遺跡』富士市埋蔵文化財調査報告第58集
- 富士市教育委員会 2019『天間沢遺跡 第45地区』富士市埋蔵文化財調査報告第65集
- 富士市史編纂委員会 1984『鷹岡町史』富士市



# 写真図版

PLATE



天間沢遺跡 K 地区 SB25 出土遺物 (65・81)







1. E 地区 (3 次) 本調査区全景 (古墳時代以降、北から)



2. E 地区 (3 次) 本調査区全景 (縄文時代、北から)



PL.2 E 地区



1. E 地区 (2 次) 2Tr 全景 (北西から)



2. E 地区 (2 次) 2Tr SU01 (268)



3. E 地区 (2 次) 2Tr SU02 (269)



4. E 地区 (2 次) 3Tr SK01



5. E 地区 (3 次) SD01 全景 (南西から)





1. E 地区 (3 次) SD02 全景 (北から)



2. E 地区 (3 次) SD01 北端 (南から)



3. E 地区 (3 次) SD01 南端 (北東から)



4. E 地区 (3 次) SK02 (南西から)



5. E 地区 (3 次) Pit01・Pit02 (南西から)



PL.4 E 地区



1. E 地区 (3 次) 縄文時代遺構全体 (E Gr 以北、南から)



2. E 地区 (3 次) 縄文時代遺構全体 (D Gr 以南、東から)





1. E 地区 (3 次) 縄文時代全体 (E Gr 以南、南東から)



2. E 地区 (3 次) FP01 (南から)



PL.6 E 地区



1. E 地区 (3 次) SU03 (北から)



2. E 地区 (3 次) FP01 セクション (南西から)



3. E 地区 (3 次) FP03 セクション (南から)



4. E 地区 (3 次) FP03 (南西から)



5. E 地区 (3 次) FP04 セクション (西から)



6. E 地区 (3 次) FP04 (南西から)



7. E 地区 (3 次) FP05 セクション (東から)



8. E 地区 (3 次) FP05 (東から)





1. E 地区 (3 次) 縄文時代全体 (G Gr、東から)



2. E 地区 (3 次) G-4 Gr 遺物出土状況 (北西から)



3. E 地区 (3 次) F-2 Gr 遺物 (200) 出土状況



4. E 地区 (3 次) F-2 Gr 遺物出土状況



5. E 地区 (3 次) 作業の様子 (北から)





















1. G 地区 1Tr 全景 (南西から)



2. G 地区 SU01 遺物出土状況



1  
(SU01)



1 (展開)









1. H地区 1Tr SB01 (南東から)



2. H地区 1Tr 全景 (南から)



3. H地区 1Tr 東壁セクション BB' (西から)



4. I地区 調査地全景 (南から)



5. I地区 1Tr 全景 (南から)



PL.16 H地区・J地区



H地区 出土遺物



1. J地区 調査地全景（南から）



2. J地区 1Tr 全景（南から）





1. K 地区 調査区全景（南西から）



2. K 地区 調査区南半（東から）





1. K 地区 調査区北半（東から）



2. K 地区 SB22 全景（南東から）





1. K 地区 SB22 炉 (南から)



2. K 地区 SB22 石器 (181・182・184) 出土状況



3. K 地区 SB23 全景 (東から)



4. K 地区 SB23 炉 セクション (東から)



5. K 地区 SB23 炉 (12・13・22) (東から)





1. K 地区 SB23U1 (14)・SB23U2 (15) (北東から)



2. K 地区 SB24 全景 (東から)





1. K 地区 SB24 遺物 (36・38) 出土状況 (東から)



2. K 地区 SB24 遺物 (48) 出土状況 (南西から)



3. K 地区 SB25 全景 (西から)



4. K 地区 SB25 遺物 (57) 出土状況



5. K 地区 SB25 遺物 (65・81) 出土状況





1. K 地区 SB26 全景 (西から)



2. K 地区 SKC (103)



3. K 地区 SKA セクション (南から)



4. K 地区 SKA (東から)



5. K 地区 SKAU2 (99) (南西から)



6. K 地区 SKAU3 (100) (西から)



7. K 地区 SKG (104) (北から)



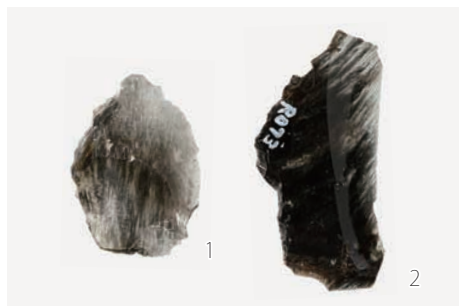
8. K 地区 調査地遠景 (南西から)







PL.24 K 地区



K 地区 出土旧石器



K 地区 SB22 出土土器



K 地区 SB23 出土土器











K 地区 SB23 出土土器



K 地区 SB24 出土土器





36 (展開)











K 地区 SB26 出土土器

K 地区 SKA 出土土器







K 地区 SKC 出土土器



K 地区 出土土器



K 地区 SKG 出土土器













K 地区 出土土器



K 地区 SB22 出土石器



K 地区 SB23 出土石器



K 地区 SB24 出土石器



191



192



193

K 地区 SB26 出土石器

K 地区 SKA 出土石器



208



221

K 地区 出土石器





1. L 地区 1Tr・拡張区全景（北東から）



2. L 地区 2Tr SD01 全景（南東から）



3. L 地区 SK63 南北セクション（西から）



4. L 地区 SK63（西から）









1. M地区 1Tr 全景（南から）



2. M地区 SK68・69 南北セクション西壁（東から）



3. M地区 SK68・69（東から）



4. N地区 調査の様子（東から）



5. N地区 3Tr 東西セクション北壁（南から）





1. N地区 SB01 (東から)



2. N地区 SB01 セクション (南東から)



3. N地区 SB01 掘り方 (東から)



4. N地区 SB01Pit6 (炉?) (南から)



5. N地区 SB01 高環 (23) 出土状況









1. O 地区 1Tr 全景 (南から)



2. O 地区 2Tr 全景 (南から)



3. O 地区 5Tr 全景 (東から)



4. O 地区 2Tr 南北セクション東壁 (西から)



5. O 地区 5Tr 東西セクション北壁 (南から)





1. P 地区 調査地全景（西から）



2. P 地区 SB01（北東から）





1. P 地区 SB01 セクション (東から)



2. P 地区 SB01 完掘 (北東から)



3. P 地区 1Tr 全景 (北西から)



4. P 地区 1Tr 東西セクション北壁 (南から)



5. P 地区 2Tr 全景 (北東から)



6. P 地区 3Tr 全景 (南東から)



7. P 地区 4Tr 全景 (北西から)



8. P 地区 4Tr 東西セクション北壁 (西から)





# 報告書抄録

ふりがな	てんまざわいせき
書名	天間沢遺跡
副書名	D・E・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P 地区 (4・5・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16 地区)
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 80 集
編著者名	笹原芳郎・若林美希
編集機関	富士市教育委員会 (担当課：文化財課)
所在地	〒 417-0061 静岡県富士市伝法 66 番地の 2 TEL 0545-30-7850
発行年月日	令和 6 年 3 月 29 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯 東経	地区名	調査期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
てんまざわ いせき	しずおかけん ふじし てんま	22210	7	35 12' 18.61" 138 38' 26.29"	D 地区 (第 4 地区)	19730325 ～ 19730329	100	試掘調査
				35 12' 38.84" 138 38' 39.85"	E 地区 (第 5 地区)	19721224 ～ 19721229	50	試掘調査
						19930420 ～ 19930428	170	試掘調査
						19930524 ～ 19930705	300	本発掘調査
				35 12' 34.50" 138 38' 36.60"	G 地区 (第 7 地区)	19831024 ～ 19831028	50	試掘調査
				35 12' 25.25" 138 38' 36.42"	H 地区 (第 8 地区)	19831107 ～ 19831112	50	試掘調査
				35 12' 20.71" 138 38' 34.08"	I 地区 (第 9 地区)	19831114 ～ 19831117	50	試掘調査
天間沢 遺跡	静岡県 富士市 天間			35 12' 12.83" 138 38' 26.12"	J 地区 (第 10 地区)	19831118 ～ 19831122	50	試掘調査
				35 12' 33.72" 138 38' 36.40"	K 地区 (第 11 地区)	19841015 ～ 19841031	200	試掘調査
				35 12' 31.26" 138 38' 32.56"	L 地区 (第 12 地区)	19860905 ～ 19860910	300	試掘調査
				35 12' 17.78" 138 38' 36.01"	M 地区 (第 13 地区)	19870511 ～ 19870515	150	試掘調査
				35 12' 29.86" 138 38' 32.83"	N 地区 (第 14 地区)	19890605 ～ 19890622	367	試掘調査
				35 12' 47.34" 138 38' 46.31"	O 地区 (第 15 地区)	19890905 ～ 19890913	660	試掘調査
				35 12' 20.19" 138 38' 33.25"	P 地区 (第 16 地区)	19911202 ～ 19911211	495	試掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
天間沢遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 古墳時代	建物跡（縄文） 5 炉跡（縄文） 7 埋甕土坑（縄文） 10 建物跡（古墳） 3	ナイフ形石器（旧石器） 縄文土器 （縄文早期～後期） 石器（縄文） 土師器（古墳前期）	小型鏝付土器 軟玉製玉斧			
要 約	本書は昭和 47 年以降に調査され、天間沢遺跡の未報告であった地区を報告する。 本書で報告する D ～ P（4 ～ 16）地区は、広大な天間沢遺跡のほぼ中央部に位置し、天間沢遺跡の最盛期となる縄文時代中期の遺構・遺物を主体とする。特に K 地区は縄文時代中期集落の中心部分にあたりと考えられ、曽利Ⅲ～Ⅴ式期の 5 軒以上の建物が重複して検出された。A ～ F 地区と K 地区の調査を合わせると、天間沢遺跡の縄文時代中期集落の構成を知る重要な資料となった。また、E 地区は堀之内式期の注口土器が多く出土し、玉斧なども伴出するなど、祭祀的な場であることが想定される。							



富士市埋蔵文化財調査報告 第 80 集

## 天間沢遺跡

D・E・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P 地区  
(4・5・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16 地区)

発行年月日 令和 6 年 3 月 29 日

編集・発行 富士市教育委員会

〒 417-0061 静岡県富士市伝法 66 番地の 2

TEL 0545-30-7850 FAX 0545-30-6210

E-mail:ky-bunkazai@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本 株式会社文光堂

〒 417-0041 静岡県富士市御幸町 3-18

(富士市行政資料登録番号 R5-67)